

平成三十年（二〇一八年）度

国際仏教学大学院大学

博士学位論文

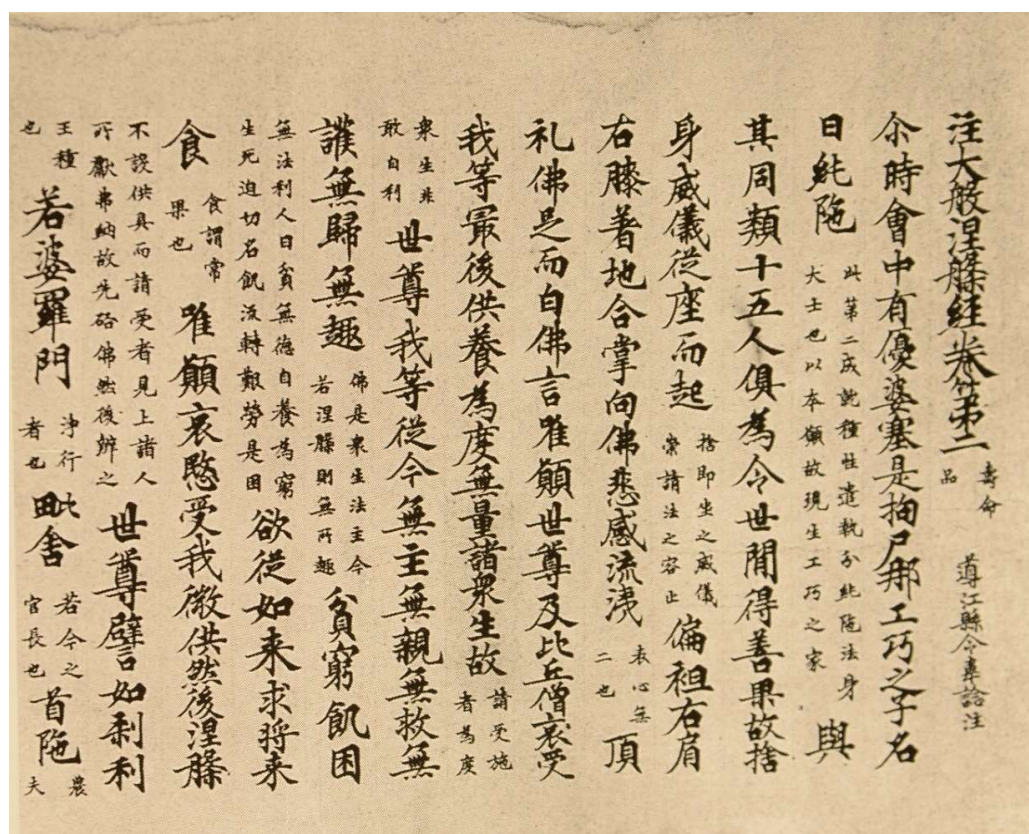
唐導江県令韋諗撰『注大般涅槃經』卷二・卷十二の研究

指導教員 落合 俊典 教授

仏教学研究科 博士課程

学籍番号 16211 青木 佳伶

唐導江県令韋諗撰『注大般涅槃經』卷二・卷十二の研究



注大般涅槃經卷第二 壽命 導江縣令韋諗注
爾時、會中有優婆塞、是拘尸那工巧之子、名
日純陀 此第二成就種性遣執分純陀法身 與 大士也。以本願故、現生工巧之家。
其同類十五人俱、爲令世間得善果故、捨
身威儀從座而起 捨、即坐之威儀。 崇、請法之容止。 偏袒右肩
右膝著地、合掌向佛、悲感流洩 表心無 二也。 頂
禮佛足而白佛言、唯願世尊及比丘僧、哀受
我等最後供養爲度無量諸衆生故 請受施 者、爲度 衆生、非 敢自利。
世尊、我等從今無主無親、無救無
護、無歸無趣 佛是衆生法主、今 若涅槃、則無所趣。、貧窮飢困
無法利人、日貧。無德自養、爲窮。 欲從如來求將來 生死迫切、名飢。 流轉艱勞、是因。
食 食謂常 果也。 唯願哀愍、受我微供然後涅槃
不設供具、而請受者、見上諸人、世尊、譬如剎利
所獻弗納。故先啓佛、然後辨之。
王種 淨行 若今之 首陀 農 也。 若婆羅門 者也。 官長也。 夫

注大般涅槃經卷第八

如來性品

導江縣令韋諗注

爾時佛告迦葉菩薩善男子汝今不應如諸

聲聞凡夫之人分別三寶

勸捨凡夫二乘之見

於此大

乘不生分別三歸之相

教依大乘同一相也

所以者何

於佛性中即有法僧

此之三性體同而義異也覺義名佛持義名法和

義名

為欲化度聲聞凡夫故說三歸異相

凡夫

二乘薄福少智不能信同故說三寶同性

善男子若

欲隨順世間法者則應分別有三歸依善男

子菩薩應作如是思惟我今此身歸依於佛

謂歸自身之中法身佛也若即此身得成佛道既成佛已

注大般涅槃經卷第八

如來性品

導江縣令韋諗注

爾時佛告迦葉菩薩、善男子、汝今不應如諸

聲聞凡夫之人分別三寶

勸捨凡夫二乘之見

於此大

乘不生分別三歸之相

教依大乘同一相也

所以者何

於佛性中即有法僧

此之三性、體同而義異也。覺義名佛、持義名法、和

義名

為欲化度聲聞凡夫故說三歸異相

凡夫

二乘、薄福少智、不能信同。故說三寶同性。

善男子若

欲隨順世間法者、則應分別有三歸依。善男

子、菩薩應作如是思惟。我今此身歸依於佛

謂歸自身之中法身佛也。

若即此身、得成佛道、既成佛已

注大般涅槃經卷第十

如來性品

導江縣令韋論注

復次善男子如波羅奢樹迦尼迦樹阿叔迦

樹值天亢旱不生花實

此喻法僧衰相謂不生三乘之因不獲三

乘之及餘水陸所生之物皆悉枯槁

況人天善根不增長

無有潤澤不能增長一切諸藥無復勢力

也

諸藥譬善男子是大乘典大涅槃經亦復如

是於我滅後有諸衆生不能恭敬無有威德

何以故是諸衆生不知如來微密藏故所以

者何以是衆生薄福德故復次善男子如來

正法將欲滅盡爾時多有行惡比丘不知如

來微密之藏癡墮懈怠不能讀誦宣揚分別

如來正法譬如癡賊棄捨真寶擔負草木不

解如來微密藏故於是經中懈怠不勤哀哉

大險當來之世甚可怖畏苦哉衆生不勤聽

受是大乘典大涅槃經唯諸菩薩摩訶薩等

能於是經取真實義不著文字

謂不執有而捨無執無而

隨順不逆為衆生故

復次善男子如牧牛女

牛譬正教女況傳法之人

為欲

注大般涅槃經卷第十

如來性品

導江縣令韋論注

復次善男子、如波羅奢樹、迦尼迦樹、阿叔迦

樹、值天亢旱、不生花實

此喻法僧衰相、謂不生三乘之因不獲三

乘之及餘水陸所生之物、皆悉枯槁

況人天善根不增長

也。無有潤澤、不能增長、一切諸藥無復勢力。

諸藥譬

五乘也。善男子、是大乘典大涅槃經亦復如

是、於我滅後有諸衆生不能恭敬、無有威德。

何以故、是諸衆生不知如來微密藏故。所以

者何、以是衆生薄福德故。復次善男子、如來

正法將欲滅盡、爾時多有行惡比丘、不知如

來微密之藏、癡墮懈怠、不能讀誦宣揚、分別

如來正法、譬如癡賊棄捨真寶、擔負草木、不

解如來微密藏故、於是經中懈怠不勤。哀哉

大險當來之世、甚可怖畏。苦哉衆生、不勤聽

受是大乘典大涅槃經。唯諸菩薩摩訶薩等、

謂不執有而捨無執無而

能於是經取真實義、不著文字

隨順不逆、為衆生故。

牛譬正教女況傳法之人

為欲

注大般涅槃經卷第十二

聖行 導江縣令韋諗注

復次善男子菩薩摩訶薩聖行者觀察是

身自首至足其中唯有髮毛爪齒皮肉筋骨

脾腎心肺肝膽腸胃生熟二藏大小便利

汗淚涕唾肪膏髓腦膿血涎淡胞胘垢等

腦極於上肢極於下即足拇指生三毛處也

自頂至足所有諸脈皆悉觀之骸音古才反

菩薩如是專念觀時誰有是我

我為屬誰

誰屬於我

離骨是乎

時除去皮肉唯觀白骨

色鵠色如是骨相亦復非我

鵠色

得斷除一切色欲

至骨色亦無有我

注大般涅槃經卷第十二 壽命品 導江縣令韋諗注

復次善男子、菩薩摩訶薩聖行者、觀察是

身、自首至足、其中唯有髮毛、爪齒、皮肉筋骨、

脾腎心肺、肝膽腸胃、生熟二藏、大小便利、

汗淚涕唾、肪膏髓腦、膿血涎淡、胞胘垢等。

腦極於上、肢極於下。即足拇指、生三毛處也。

自頂至足、所有諸脈、皆悉觀之。骸音古才反。

菩薩如是專念觀時、誰有是我。

我為屬誰。

誰屬於我。

離骨是乎。

時除去皮肉、唯觀白骨、

色鵠色如是骨相亦復非我、

鵠色。

得斷除一切色欲。

至骨色亦無有我。

無我。

何故。

我者亦非青黃白及以

菩薩繫心作是觀時、即

得斷除一切色欲。

至骨色亦無有我。

無我。

鼻地獄四方有門一一門外各有猛火東西
南北交過通徹八萬由延周匝鐵牆鐵網彌
覆其地亦鐵上火徹下下火徹上大若魚
在鐵脂膏焦然。是中罪人亦復如是。大王作
一逆者則便具受如是一罪。若造二逆罪則
二倍。五逆具者罪亦五倍。若具造者則於一劫之中受五倍苦
大王我今定知王之惡業必不得免。唯願大
王速往佛所。自捨如來。餘無能救。我今慙汝
故相勸導。爾時大王聞是語已。心懷怖懼。舉
身戰慄。五體掉震。如芭蕉樹。仰而答曰。汝為
是誰。不現色像。而但有聲。大王吾是汝父頻
婆娑羅。汝今當隨耆婆所說。莫隨邪見六
臣之言。時王聞已。悶絕躡地。身瘡增劇。臭
穢倍前。雖以冷藥塗之。其瘡益毒。但增無
損。

鼻地獄四方有門、一一門外各有猛火、東西
南北交過通徹八萬由延、周匝鐵牆、鐵網彌
覆、其地亦鐵上火徹下、下火徹上。大王若魚
在鐵、脂膏焦然、是中罪人、亦復如是。大王作
一逆者、則便具受如是一罪、若造二逆罪則
二倍、五逆具者罪亦五倍。若具造者則於一劫之中受五倍苦
大王、我今定知王之惡業必不得免。唯願大
王速往佛所、自捨如來、餘無能救。我今慙汝
故相勸導。爾時大王聞是語已、心懷怖懼、舉
身戰慄、五體掉震、如芭蕉樹、仰而答曰、汝為
是誰、不現色像、而但有聲。大王、吾是汝父頻
婆娑羅。汝今當隨耆婆所說、莫隨邪見六
臣之言。時王聞已、悶絕躡地、身瘡增劇、臭
穢倍前、雖以冷藥塗而治之、瘡益毒熱、但增無損。

■凡 例■

一、本論攷が取り扱っているテキストは、三重県津市にある天台真盛宗西来寺所蔵（京都国立博物館寄託）韋諗撰『注大般涅槃經』卷二及び卷十二である。

一、本文中に引用された原文は、二字下げにて表示する。それに附ずる訓読文については、同じく二字下がって《》内で示した。現代語訳のある場合は、（ ）内に示した。

一、引用原文については、可能な限り正字とし、できない場合は常用字で代替した。フォントなどで一文字で表示できない場合は、二文字以上を用いて造字した。

一、訓読文は、常用字にて記した。

一、原文翻刻の際、判読不能文字は、■で記した。

一、『大正新脩大藏經』の出典注記について、『大正藏』巻数、頁数の順番で示し、上中下は段を意味する（例、『大正藏』五五、六中）。

一、第四章における注釈文の翻刻部分について、別途凡例を記した。

一、資料篇にある卷二の翻刻部分について、別途凡例を記した。

一、引用文献において、書名、題名や著者名などについて、正字や繁体字が使用されている場合は、常用字に変換せずにそのままの表示とする。

目次

■研究篇■	4
第一章 本研究の目的・意義・手法について	4
第一節 はじめに	4
第二節 研究目的	6
第三節 研究意義	7
第四節 研究手法	8
第二章 中国における『涅槃経』の伝訳について	9
第一節 はじめに	9
第二節 小乗『涅槃経』と大乘『涅槃経』	9
第三節 現存する『涅槃経』関連経典	10
第四節 『涅槃経』の伝訳	13
第一項 小本『涅槃経』の伝訳	14
第二項 大本『涅槃経』の伝訳	15
第五節 『涅槃経』現存諸本	19
第一項 小乗『涅槃経』の現存諸本	19
第二項 大乘『涅槃経』の現存諸本	20
第六節 『涅槃経』の成立についての諸研究	22
第七節 『涅槃経』注釈書について	24
第八節 『涅槃経』「寿命品」の概要	29
第三章 『注大般涅槃経』について	30

第一節	現存状況	30
第二節	書誌情報	31
第一項	経軸―校了者の手がかり	33
第三節	所蔵寺院	34
第四節	撰者について	35
第一項	韋諲の出自	35
第二項	唐代の県	36
第三項	韋諲の著作	39
第三章	『注大般涅槃経』の成立問題	43
第一節	正倉院文書	43
第二節	遣唐使	45
第三節	慧琳『一切経音義』所収釈雲公「涅槃経音義」	46
第四章	『注大般涅槃経』の文献的特徴	60
第一節	注釈文の翻刻	60
第二節	韋諲注釈の特徴	110
第一項	引用文献の不開示	110
第二項	語彙の部分改変	113
第三項	同語反復の忌避	117
第五章	韋諲の思想的特徴	120
第一節	はじめに	120
第二節	引用文献の推定	122
第一項	梁・宝亮『涅槃経集解』	123
第二項	『大般涅槃経義記』	129

第三項	諸書籍より混合引用の場合	132
第四項	『涅槃經』以外の注釈書	136
第五項	まとめ	138
第六章	『注大般涅槃經』の「北本」「南本」依拠問題	140
第一節	韋諡が依拠した本について	140
第二節	韋諡の文字採択の傾向	142
結論		144
参考文献		147
一、『注大般涅槃經』卷二 翻刻校訂		152
二、『注大般涅槃經』卷二 訓読訳注		152

■ 研究篇 ■

第一章 本研究の目的・意義・手法について

第一節 はじめに

日本には、現在奈良時代に書写された古写経が凡そ二千数百巻が残されていると言われる。これらの奈良写経を基にして、さらに転写されたとされる平安から鎌倉にかけての古写経を含めると軽く一万巻を超える。この数は、世界にも類を見ない誇れる一大コレクションである。最近の調査報告において、日本古写経の一部が中国・台湾・アメリカなどの国の博物館等で所蔵されていることがわかった。中には中国の敦煌写経として誤認され、オークションに出品されてしまうケースもあったという¹⁾。日本の貴重な文化財である古写経の価値を世界に発信すると共に、貴重な文化資源の保護・保存のために、古写経の研究は急務であると考ええる。

日本古写経研究の始まりは、平成二年の七寺一切経における古逸経典の発見からであるという。その調査研究結果が『七寺古逸経典研究叢書』全六巻（大東出版社）という形で出版された。その後、七寺一切経の中の『馬鳴菩薩伝』の『大正新脩大藏経』本との相違を、落合俊典氏が指摘し、長安仏教のテキストであることを証明され、それまで一切経の基準として考えられてきた『大正新脩大藏経』の底本である高麗再雕版への疑義を提示した²⁾。そして比較検討した後に、日本古写経本の系統というものが存在することがわかり、刊本大藏経との比較検討によって、日本古写経の性格や系統が少しずつ明らかになり、日本古写経文献学研究の重要性が見直されることとなった。

しかしながら、日本古写経の性格上、調査研究することが大変難しい。多くのコレクションは、寺院の所蔵であるなど、寄託されて日本の博物館などで保存管理していることによって、実物へのアクセスが容易ではない。また、運よく実物が見られることになったとしても、保存状態が悪いものは、開くだけで一苦勞、細心の注意を払わなければ、紙片の欠片が剥がれたりして、重要な文化財を傷つけてしまう恐れもある。湿気や虫食いで痛んでしまつて、内容が確認できない場合もある。何よりも、デジタル保存するための撮影は、時間がかかる上、慎重に

¹⁾ 上海師範大学副教授、定源（王招国）氏による講演「中国に現存する奈良写経」（仮題）（平成三〇年九月二十七日、国際仏教学大学院大学日本古写経研究所開催研究会）。

²⁾ 落合俊典「興聖寺本『馬鳴菩薩伝』について」『印仏研』第四十一巻第一号、一九九二年。

文化財を扱うために、どうしても調査点数の量をこなすことが難しい。また活動資金の確保や古写経を取扱うことができる人材の育成など多くの難題が存在する。

このような状況の中に於いて、国際仏教学大学院大学の日本古写経研究所では、落合俊典氏のご指導の下で、日本や世界に現存するこれらの一大コレクションの調査・研究・デジタル撮影による保存プロジェクトが進められている。その先には、日本古写経のデータベース構築という計画が見据えられている。

古写経の研究が進められてきている中で、日本にしか存在しない注釈書類の写本が目される。奈良期に日本に請来、書写されたと思われるが、中国にはその存在が知られていない注釈書である。その中の一つが、本論攷が取り扱う対象としている『注大般涅槃經』（以下、『涅槃經』とする）である。

『涅槃經』は、大乘『大般涅槃經』の注釈書である。奈良時代の天平写経であると言われ、一部を除き、国から重要文化財の指定を受けている。全三十巻のうち、わずかに六巻のみが現存を確認されている。思うに、八世紀初頭に成立し、その後日本にもたらされ、天平写経の一部として書写されたのではないかと推測される。その著者は、一士大夫である。史料には、その形跡がほとんど残されていない。どの生まれであったか、仏教とどのように関わり、だれを師として仰いだのか、全く見当がつかない。また、『涅槃經』が後代の注釈書に引用された例もごくわずかしかない。それによつて後代に与えた影響も限られたものであろう。しかしながら、この無名な士大夫によつて作成された注釈書が、死と隣り合わせであった遣唐使らによつて日本にもたらされた。その理由は何にあるのか。撰者の出自が、唐代の朝廷と何かしらの親戚関係にあって、朝廷に出入りしていたからだろうか。あるいは、撰者が書の名人として評価されたからだろうか。『涅槃經』は、何が評価されて日本にもたらされ、そして天平写経の一部として書写されたのだろうか。現代の我々が無名だと思っているのは、ただ史料が残されていないからなのかもしれない。史料の不足によつてどこまでその理由を解明できるかわからないが、今は、ひとまずパズルのピースを一つ一つ嵌め込んでいくつもりで、まずは、この『涅槃經』の内容を分析し、撰者韋諲の思想的背景、その系譜に辿れるような手がかりを探すほかない。

さて、唐代導江県令であった韋諲という人物によつて撰述された『涅槃經』は、前述したように、現存する六巻のほとんどが国指定重要文化財であるために博物館及び美術館に寄託されているので、簡単にその内容を伺い知ることもできない。わずかに重要文化財の図録などに掲載されるその六巻の巻首及び巻末の一部分の写真によつて、その内容を確認することができるのみである。

二〇一七年の七月に三重県津市にある天台真盛宗派寺院である西来寺が所蔵する巻二及び十二を寄託先である京都国立博物館において調査することができた。保存状態は良好である。紫檀及び黒檀の軸、嵌め込み装飾があしらわれた軸端、装丁、用紙及び一流写経生による端麗な字、どれをとっても一級品であることが一目瞭然であった。

『注涅槃經』が国によって重要文化財に指定されているのは、奈良写経においても、その格式高い佇まい及びその字の素晴らしさに違いない。その気高さは、ほかの奈良写経と比較しても、その差は歴然である。それにもかかわらず、その内容については、今までほとんど研究・言及されることがなかった。

様々な状況から判断するに、本注釈書の重要性は、その文化財的価値にのみあるのではないと考える。では、その文献的価値はどこにあるか。それについては、『注涅槃經』を紐解くほかないのである。『注涅槃經』は、現存する数少ない『涅槃經』「北本」に依拠する注釈書であるから、その文献的な価値は存在する。そのことを鑑みて、今まで調査されて来なかった本資料を翻刻し紹介したい。それによって、『涅槃經』研究に新たな一石を投じることができれば幸いである。

第二節 研究目的

本論攷の目的は、『涅槃經』研究に新たな一資料を提供することである。今まで総合的な研究がなされて来なかった『注涅槃經』について基礎的な研究をするのが目的である。まず、現存する六巻において、実地調査できた巻二及び十二のうち、巻二の翻刻資料を提供する。これによって、『注涅槃經』研究の礎となることを期待する。次に、『注涅槃經』の成立年代について考察し明らかにする。第三に、巻二及び巻十二の内容を考察し、撰者韋諲の注釈文からその特徴を抽出する。これによって、韋諲の思想の片鱗を垣間見ることが可能になることを期待する。これらの事柄について調査研究し、今後の『涅槃經』研究において一助となることを期待する。

近代における漢訳大乘經の『大般涅槃經』（以下『涅槃經』とする）の研究は、布施浩岳氏の『涅槃經の研究』（前篇・後篇）³にはじまる。『涅槃經』の研究成果は、下田正弘氏の『涅槃經の研究―大乘經典の研究―方法試論』⁴及び望月良晃氏の『大乘涅槃經の研究―教団史的考察』⁵などがあるが、下田氏の研究は、チベット語訳『涅槃經』をベースとしたものであり、また望月氏は教団という視点から『涅槃經』の一闡提問題を中心に考察したものであるから、布施氏以降、漢訳『涅槃經』についての文献的な研究は停滞したままと言えよう。その原因として考えられるのは、布施氏の研究成果を以て一応研究が一段落したと思われることにある。

しかしながら、布施氏の研究以降、各種大藏經のデータベースが構築され、正倉院文書及び日本古写經の研究も先学の開墾時代を終え、いま結実の時期を迎えて、多様な様相がわかるようになってきた。また、古写經による經文の校訂という新しい手法による見解が提示されるようになってきた。今こそ漢訳『涅槃經』について再考する時期にきているのではないか。このような状況の中において、『涅槃經』研究の新たな一資料として、唐代導江県令であった韋諲が書いた『注涅槃經』の研究は、まさに漢訳『涅槃經』研究に資するものと考ええる。

今日まで『注涅槃經』に関する研究論文は、管見の限り坂本廣博氏による一篇のみである。その理由として主に三つの事柄が考えられる。まず、『注涅槃經』が重要文化財に指定されているため調査することが困難であったこと。二に、著者の韋諲についての史料が見当たらないこと。三は、『注涅槃經』の内容が後代の注釈書に引用される例がほとんどなく、後代への影響はないものとして考えられてきたことなどによるものだと考える。

このように、調査が困難であることからその本文内容を見ることができず、作者のことは史料にも上らず、また内容を確認できたとしても、引用の形跡がないとされていたため、その重要性が見えてこなかったのではないかと考えられる。とはいえ、『注涅槃經』を紐解いてみると

³ 布施浩岳『涅槃經の研究』（前篇・後篇）（国書刊行会、初一九四二年・再一九七三年）。

⁴ 下田正弘『涅槃經の研究―大乘經典の研究―方法試論』（春秋社、一九九七年）。

⁵ 望月良晃『大乘涅槃經の研究―教団史的考察』（春秋社、一九八八年）。このほかに、横超慧日『涅槃經―如来常住と悉有仏性―』（平樂寺書店、一九八一年）がある。この中で、横超氏は、『涅槃經』の段階的成立説を立て、『涅槃經』は、七から八段階の成立段階を経ているとしている（四十頁）。また、田上太秀氏『ブツダ臨終の説法（一）―（四）―完訳大般涅槃經』（大蔵出版、一九九六―七七年）などがある。こちらは、「北本」『涅槃經』を完全に現代語訳したものである。

。坂本廣博「重要文化財・毘沙門堂蔵本『注大般涅槃經』卷十四・聖行品について」『叡山学院研究紀要』通号三、一九八〇年。

想像以上に興味深いものがあつた。『涅槃經』の研究史上において、韋諡撰『注涅槃經』は諸々の理由から研究対象として扱われてこなかった。唐代における当該研究書の一つである『注涅槃經』の包括的研究を行うことが重要であると考え研究対象とした。『注涅槃經』を文献学的に分析することによって、『涅槃經』研究に寄与するのではないかと考える。

第四節 研究手法

本研究では、現存する六巻の『注涅槃經』のうち、実際に調査できた巻二・十二について以下の手順で研究をしていく。ただし、本博士論文においては、内容的に巻二及び巻十二の検討をするも、翻刻及び校注に関しては、巻二のみに施し、巻十二については、次の課題にしたい。ただし、韋諡の注釈文部分に関しては、集成して訓読文を施している。

一、本文についての研究

(ア)『注涅槃經』巻二を翻刻し、訓読文・注釈を施す。

(イ)翻刻した『涅槃經』の本文部分と、現存する『大正蔵』『北本』及び『南本』との校訂を行い、その異同を分析する。なお、現時点において、品名の分け方から、韋諡の『注涅槃經』は、『北本』であることがわかっている。

(ウ)次に、韋諡の注釈部分に着眼し、その引用典拠を分析し、韋諡が、何に依って研究をしてきたのか、その思想の足跡を明らかにする。

(エ)韋諡の注釈部分が、どのように後代に引用され、どのような影響を与えたかについて考察する。

二、成立問題についての研究

(ア)撰者韋諡の生没年及び伝記について研究する。

(イ)撰者号である導江県及び県令について調べる。

(ウ)『注涅槃經』の表装について調査する。

(エ)『注涅槃經』の成立問題について考察する。

第二章 中国における『涅槃經』の伝訳について

第一節 はじめに

中国仏教における一つの大きな転換点は、大乘『涅槃經』の訳出である。仏教經典が時系列で成立していった印度と違って、成立時期に関係なく伝播・訳出される漢訳仏典は、經典間において説かれる内容が相矛盾するものも少なくない。中国の人々にとっては、その教説を整理する必要があった。『涅槃經』は、釈尊の臨終に際して最後の説法にあたるため、最後の最も貴重な説法という位置づけが成り立った。また、最後の説法ということで、今までに説かれることがなかった秘密藏について説かれた。それが、「一切衆生皆有仏性」・「法身常住」・「一闍提成仏」である。このことによって、『涅槃經』は中国仏教において確固たる位置を確立したわけである。『涅槃經』によって、中国仏教は仏性論・修行論などについての論争が活発化し、頓悟・漸悟の主張の対抗、また一闍提の問題など、仏の教えの真意への追求が盛んに議論された。『涅槃經』研究が隆盛し、『涅槃經』を専らに研究する人々も現れ「涅槃宗」が成立した。さらには、中国仏教における南北朝の義学、隋唐の仏教宗派の成立など、中国仏教の発展に、そして後に日本仏教にも大きく関わった。『涅槃經』の出現によって、中国仏教の流れが大きく変わり、仏性論争が落ち着いた後でも、「一切皆有仏性」は、その後発達した各宗派に於いても基本的な骨格、大事な根幹となり、表立っては主張しなくても、当たり前前のテーゼとして深く根差していった。

第二節 小乗『涅槃經』と大乘『涅槃經』

『大般涅槃經』〔(Skt.) Mahāparinirvāṇa-sūtra (Pali) Mahāparinibbāna-suttanta〕は、その名の通り、仏陀の「大いなる涅槃」について記した經典類である。大きく分けて上座部系に伝承された小乗經のものと、それをベースに後の大乘的な思想が取り込まれ発展した大乘經のものがある。

所謂小乗『涅槃經』は、釈尊入滅を主題とする經典群であり、中村元氏の『ブッダ最後の旅』¹⁾に代表されるようなものである。その内容

¹⁾ 中村元『ブッダ最後の旅』(岩波書店、一九八〇年)。

は、死を予感した釈尊が故郷であるカピラで死を迎えるために、弟子の阿難のみを連れて旅立つ。途中、鍛冶屋の純陀が供養した食べ物によって体を壊し亡くなるまでの最後の旅の様子が、歴史事実に近い内容を伝えている。教理よりも、釈尊の最後を史実として、一人の人間としての最後を描写する内容が中心である。

一方、大乘『涅槃經』の始まりは、今まさに釈尊が涅槃に入ろうとするところから始まる。多くの菩薩や衆生がその最後を見届けようと、釈尊のもとに駆け付ける場面が描かれる。涅槃に際して、最後の質問をする者や供養を捧げるところが描写され、そこから釈尊が最後の説法をする場面へと展開し、「一切衆生悉有仏性」などの命題が説かれることになる。大乘『涅槃經』の現代語訳には、田上太秀氏の『涅槃經』四〇巻本に基づいた完訳本がある⁸。

第三節 現存する『涅槃經』関連經典

『大正蔵』に収められている『涅槃經』関係の經典には、小乗『涅槃經』、大乘『涅槃經』そして、涅槃に関連するその他の經典と三つに区分することができる⁹。『涅槃經』関係の經典を『大正蔵』で見した場合、全部で二十七經存在する。その内訳は、『大正蔵』涅槃部に所収されているのが、二十四經。『大正蔵』阿含部に入っているのが次の四經である。

『遊行經』	三卷	後秦 仏陀耶舎共竺二仏念訳	現存 (『大正蔵』卷一、No.1) (『長阿含經』に含まれる)
『仏般泥洹經』	二卷	西晋 白法祖訳	現存 (『大正蔵』卷一、No.5)
『般泥洹經』	二卷	失訳	現存 (『大正蔵』卷一、No.6)
『大般涅槃經』	三卷	東晋 法顕訳	現存 (『大正蔵』卷一、No.7)

⁸ 田上太秀「一九九六―七」。

⁹ ここでの『涅槃經』の分類の仕方は、横超慧日氏に随ったものである(横超慧日「一九八二」、二十三―三十七頁)。

一方で、涅槃部に所収される残りの二十三部の『涅槃經』は、大きく分けて大乘『大般涅槃經』の四經とそれ以外とすることができる。大乘『大般涅槃經』四經は、次の通りである。

『仏說大般泥洹經』	六卷	東晋	法顯共仏跋陀訳	現存(『大正蔵』卷十二、No.376)	(通称、「六卷本」又は、「法顯本」)
『大般涅槃經』	四〇卷	北凉	曇無讖訳	現存(『大正蔵』卷十二、No.374)	(通称、「四〇卷本」又は、「北本」)
『大般涅槃經』	三十六卷	宋	慧嚴等 <small>依泥洹經加之</small>	現存(『大正蔵』卷十二、No.375)	(通称、「三十六卷本」又は、「南本」)
『大般涅槃經後分』	二卷	唐	若那跋陀羅訳	現存(『大正蔵』卷十二、No.377)	

これ以外に、『大正蔵』涅槃部には、涅槃に係する經典が二十部存在する。いくつか同本異訳があるものがあり、注記した。

『仏說方等般泥洹經』	二卷	西晋竺法護訳	現存(『大正蔵』卷十二、No.378)	『四童子三昧經』と同本異訳
『四童子三昧經』	三卷	隋闍那崛多訳	現存(『大正蔵』卷十二、No.379)	『仏說方等般泥洹經』と同本異訳
『大悲經』	五卷	高齐那連提耶舎訳	現存(『大正蔵』卷十二、No.380)	
『等集衆徳三昧經』	三卷	西晋竺法護訳	現存(『大正蔵』卷十二、No.381)	『集一切福徳三昧經』と同本異訳
『集一切福徳三昧經』	三卷	姚秦鳩摩羅什訳	現存(『大正蔵』卷十二、No.382)	『等集衆徳三昧經』と同本異訳
『摩訶摩耶經』	二卷	蕭齐曇景訳	現存(『大正蔵』卷十二、No.383)	
『菩薩從兜術天降神母胎説広普經』	七卷	姚秦竺仏念訳	現存(『大正蔵』卷十二、No.384)	
『中陰經』	二卷	姚秦竺仏念訳	現存(『大正蔵』卷十二、No.385)	
『蓮華面經』	二卷	隋那連提耶舎訳	現存(『大正蔵』卷十二、No.386)	
『大方等無想經』	六卷	北凉曇無讖訳	現存(『大正蔵』卷十二、No.387)	一經の部分訳
『大雲無想經』	九卷	姚秦竺仏念訳	現存(『大正蔵』卷十二、No.388)	一經の部分訳
『仏垂般涅槃略説教誡經』	一卷	姚秦鳩摩羅什訳	現存(『大正蔵』卷十二、No.389)	

『仏臨涅槃記法住經』	一卷	唐玄奘訳	現存（『大正蔵』卷十二、No.390）
『般泥洹後灌臘經』	一卷	西晋竺法護訳	現存（『大正蔵』卷十二、No.391）
『仏滅後棺斂葬送經』	一卷	失訳	現存（『大正蔵』卷十二、No.392）
『迦葉赴仏般涅槃經』	一卷	東晋竺曇無蘭訳	現存（『大正蔵』卷十二、No.393）
『仏入涅槃密迹金剛力士哀恋經』	一卷	失訳	現存（『大正蔵』卷十二、No.394）
『仏説当来变經』	一卷	西晋竺法護訳	現存（『大正蔵』卷十二、No.395）
『仏説法滅尽經』	一卷	失訳	現存（『大正蔵』卷十二、No.397）

これらの經典は、それぞれ取扱うテーマも違っていて大乘・小乗の区別もし難い。横超氏「一九八一」¹⁰は、これらの經典を右のように五つの分類している。

- 一、仏の涅槃に関連して、大乘の教理を説くもの。
- 二、仏が入滅した後の法を伝えて守っていく人のことについて説くもの。
- 三、仏の入滅に関連して、中陰について説くもの。
- 四、仏舍利などの崇拜、仏塔供養について説くもの。
- 五、仏の涅槃に関連して、ある特定な場面のみ取り上げて説くもの。

右に記した『涅槃經』関連經典について、横超氏によって考察されているため、ここではリストのみを挙げる。詳細は参照されたい¹¹。

¹⁰ 横超慧日「一九八一」三四頁。

¹¹ 横超慧日「一九八一」二十七―三十七頁。

第四節 『涅槃經』の伝訳

『涅槃經』の成立は、いつごろかについて諸説あつて明らかではないが、一般的に西暦紀元前であるとされ、中国では既に漢代には訳出されたという¹²。『涅槃經』の伝訳に関する最古の記録は、梁の僧祐（四三五―五一八）による『出三藏記集』（六世紀初め成立）に見られる。『出三藏記集』卷二に、

胡般泥洹經一卷（今闕）¹³（…中略…）

右十三部、凡二十七卷。漢桓帝靈帝時、月支國沙門支讖所譯出。¹⁴

とある。漢代に支婁迦讖（一四七―没年不詳）によって訳出された『胡般泥洹經』は、六世紀初めには、闕本となつていているという。また、同じく『出三藏記集』卷二には、

般泥洹經

支讖出胡般泥洹經一卷。

支謙出大般泥洹經二卷。

竺法護出方等泥洹經二卷。

曇摩讖出大般涅槃經三十六卷。

釋法顯出大般泥洹經六卷。

方等泥洹經二卷。

釋智猛出泥洹經二十卷。

¹² 布施浩岳「初一九四二・再一九七三」では、漢代には訳出されたとしている。（前篇、二四頁。）

¹³ 『大正藏』五五、六中。

¹⁴ 『大正藏』五五、六中。

求那跋陀羅出泥洹經一卷。

右一經。七人異出。其支謙「大般泥洹」與「方等泥洹」大同。曇摩讖「涅槃」與法顯「泥洹」大同。其餘三部並闕、未詳同異。¹⁵⁾

「般泥洹經。支謙、胡般泥洹經一卷を出だす。支謙、大般泥洹經二卷を出だす。竺法護、方等泥洹經二卷を出だす。曇摩讖、大般涅槃經三十六卷を出だす。釈法顯、大般泥洹經六卷、方等泥洹經二卷を出だす。釈智猛、泥洹經二十卷を出だす。求那跋陀羅、泥洹經一卷を出だす。右の一經、七人異出す。其の支謙の大般泥洹と方等泥洹大同なり。曇摩讖の涅槃と法顯の泥洹大同す。其の余の三部、並びに闕す。未だ同異詳らかならず。」

僧祐は、『涅槃經』の一經に七訳あったとした。その中で、支謙の「大般泥洹」と竺法護の「方等泥洹」は凡そ同じであり、曇摩讖の「涅槃」と法顯の「泥洹」も大体同じものだったとしている。そのほかの三訳は闕本だったことから、異同の判別はできなかったと述べている。これを見るに、「竺法護出方等泥洹經二卷」は、現存する竺法護訳の『仏說方等泥洹經』二卷（『大正藏』十二、No.376）、「曇摩讖出大般涅槃經三十六卷」とは、おそらくは現存する曇無讖訳の「四〇卷本」（『大正藏』十二、No.374）であると考えられる。

第一項 小本『涅槃經』の伝訳

大本『涅槃經』（六卷本や四〇卷本と言った大部の『涅槃經』）が訳出される前に、二卷から三卷で構成された小本『涅槃經』が先に訳出された。すでに、布施浩岳氏が、その大著である『涅槃宗の研究』（前篇）「聖典論」において、中国の歴代の経録にあたり、左記の各経典について詳細に論及されている。ここでは時代別にリストを挙げるのみとする¹⁶⁾。また、カッコ内で示している闕は、現存していないことを表し、小乗經大乘經とあるのは、布施氏及び藤井氏「一九九四」による考察結果を記したものである。

¹⁵⁾ 『大正藏』五五、十四上。

¹⁶⁾ 布施浩岳「初一九四二・再一九七三」二二三―六十三頁。

【後漢～三国時代】

- ① 『胡般泥洹經』一卷、後漢 支讖（支婁迦讖）訳（闕、小乗經^{17）}）
- ② 『大般涅槃經』二卷、魏 安法賢訳（闕、大乘經の初訳^{18）}）
- ③ 『大般泥洹經』二卷、吳 支謙訳（闕、大乘經の第二訳^{19）}）

【西晋～東晋、南北朝時代】

- ④ 『方等般泥洹經』二卷、西晋 竺法護訳（現存、大乘經^{20）}）
- ⑤ 『泥洹經』二卷、西晋 帛法祖訳（現存、小乗經^{21）}）
- ⑥ 『方等泥洹經』二卷、東晋 法顯訳（闕、法顯訳ではない可能性が高い。「方等」の名から、大乘經と推測する^{22）}）
- ⑦ 『泥洹經』一卷、求那跋陀羅訳（闕、大乘經か。^{23）}）

第二項 大本『涅槃經』の伝訳

大本『涅槃經』の漢訳テキストには次の四本が現存する。

¹⁷ 前掲、二十九頁。

¹⁸ 前掲、三十三頁。

¹⁹ 前掲、三十八頁。

²⁰ 前掲、四〇頁、四十二―四十三頁。

²¹ 『出三藏記集』卷十五に、「祖既博涉多閑。善通胡漢之語。常譯惟逮弟子本五部僧等三部經。又注首楞嚴經。又言。別譯數部小經。值亂零失不知其名。」（『大正藏』五五、一〇七下）。布施浩岳「初一九四二・再一九七三」に、僧祐のころには、闕本となっているようであるが、『大正藏』に現存するとある。四十九―五〇頁。

²² 藤井教公「中国における小本大乘『涅槃經』の伝訳について」『大倉山論集』三十五号、一九九四年。九十三―九十四頁。

²³ 藤井教公「一九九四」九十五―九十六頁。

『大般泥洹經』六卷本 法顯訳

東晋義熙十三—十四年(四一七—一八)訳出。(六卷本、内容は、「北本」の前十品に相当する。)

『大般涅槃經』四〇卷、曇無讖訳

北凉玄始三十一年(四一四—四二二)にかけての訳出。(「北本」)

『大般涅槃經』三十六卷、慧嚴等編纂

劉宋元嘉十三年(四三六年)編集完了。

『大般涅槃經後文』二卷、若那跋陀羅訳

七世紀前半に訳出。(内容は、仏陀の入滅及び荼毘供養についてである。)

法顯訳『大般泥洹經』について『出三藏記集』卷八に、

六卷。「泥洹記」第十八、出經後記。摩竭提國、巴連弗邑、阿育王塔、天王精舍。優婆塞伽羅、先見晉土道人釋法顯、遠遊此土、爲求法故、深感其人、即爲寫此大般泥洹經如來祕藏。願令此經、流布晉土、一切衆生悉成平等如來法身。義熙十三年十月一日、於謝司空石所立道場寺、出此方等大般泥洹經、至十四年正月二日校定盡訖。禪師佛大跋陀、手執胡本、寶雲傳譯。于時坐有二百五十人。²⁴

と記載があり、優婆塞の伽羅が法顯が遙々と求法のために西域を訪れたことに深く感動し、そのために『大般泥洹經』を書写し、この經が広く晋土に流布することを願ったとしている。その後、義熙十三(四一七)十月一日に道場寺(建業)において訳出し、十四年(四一八)に校訂し終わるとある。通称「六卷本」『涅槃經』が訳出した内容は、四〇卷本の最初の十卷(最初の五品)に相当するものである。ここで言う「禪師佛大跋陀」とは、仏陀跋多羅(三五九—四二九)のことである。この法顯の「六卷本」では、まだ明白に一闡提の仏性について述べられていないが、竺道生(生年末詳—四三四)がこの「六卷本」の内容のみで、一闡提の成仏の可能性について述べたことで、仏性論についての論争に火がついた。

次に、曇無讖訳『大般涅槃經』四〇卷本について『出三藏記集』卷二に、

²⁴ 『大正藏』五五、六〇中。

大般涅槃經三十六卷 偽河西王沮渠蒙遜玄始
十年十月二十三日譯出

(…中略…)

右十一部。凡一百四卷。晉安帝時。天竺沙門曇摩識。至西涼州。為偽河西王大沮渠蒙遜譯出或作曇
無識。と記載される。

『大般涅槃經』三十六卷は、晉安帝(三八二―四一九)の時に、天竺の沙門曇摩識(曇無識)が涼州において、沮渠蒙遜(三六八―四三三)のために訳出したとある。『出三藏記集』卷十四の曇無識の伝記に、「初學小乘覽五明諸論。」とあることから、最初は小乘を習ったことが知られる。その後白頭禪師に会い、樹皮の涅槃經本を授かって、初めて大乘に転じたとある。呪術を以て国から渴水を救うなど、西域の大呪師と呼ばれたようである。その後国の王を怒らせてしまい、大涅槃經本(前分十二卷)を携えて龜茲国に向かったが、龜茲では小乘を学ぶ人多く、涅槃經を信じなかったという。その後河西王の沮渠蒙遜が曇無識の名を聞き及んで、歓待し經本を訳出するようお願いし、曇無識は漢語を三年学んだ後に訳出した。その後、涅槃經本の品数が足りないことを理由に、一旦国に帰り、その後于闐にて經本を得て、姑臧に戻って訳經を続け三十六卷としたと記載されている²⁵。ここに、三十六卷とあるが、『出三藏記集』卷八にある作者不明の「大涅槃經記第十七」には、「今現已有十三品作四〇卷。」とある。また、『開元釈教録』卷十一にも、「大般涅槃經四〇卷(或三十六卷四帙)」とあることから、すでにこの時代には分巻の違いによって、四〇巻ものと三十六巻ものの「北本」が混在したことがわかる²⁶。次に、慧嚴らが編纂した『大般涅槃經』三十六巻について『開元釈教録』卷十一に、

大般涅槃經四〇卷 或三十六
卷四帙

²⁵ 『大正蔵』五五、十一中。

²⁶ 『大正蔵』五五、一〇二下―一〇三中。

²⁷ 『大正蔵』五五、五九一上。

²⁸ 『大正蔵』五五、六十上。

北涼天竺三藏曇無讖於姑臧譯 第五單
重合譯

其涅槃經、宋文帝代元嘉年中、達于建業時、有豫州沙門范慧嚴・清河沙門崔慧觀・陳郡處士謝靈運等、以識前經品數疎簡乃依舊泥²⁹。洹經加之品目。文有過質頗、亦改治結為三十六卷。行於江左、比於前經時有小異。有論一卷略釋大經。又論一卷釋本有今無一偈。

この曇無讖訳四〇卷本『涅槃經』は、宋文帝の代の元嘉年中（四二四―四五三）に、慧嚴、慧觀及び謝靈運らが曇無讖訳の品目数が簡単すぎることで、『泥洹經』（六卷本）を参照して品目を加えたとしている。また、その文についても手を入れて三十六卷としたとあるが、前の經と比べてその異は少ないとある。したがってこの時代から、「北本」「南本」の相違は、小さいものだと認識されていたことがわかる。

最後に、『大般涅槃經後分』は、四〇卷本『涅槃經』の不足分として、唐に入ってから後に訳出補足されたものである。「六卷本」、「四〇卷本」、そして「三十六卷本」の三部と違って、その内容は教理中心のものではなく、釈尊死後荼毘に付される様子が史實的に描写されたものである。

趣旨の違う『後分』の二巻を除き、前述の三本のほかに、同時期に智猛が訳した二十巻本が存在した。しかし、僧祐の頃には、すでに闕本となったようである。『出三藏記集』卷二に、

般泥洹經二十卷 闕

摩訶僧祇律一部 胡本末
譯出

右二部定出一部、凡二十卷。宋文帝時、沙門釋智猛遊西域還、以元嘉中於西涼州譯出泥洹經一部。至十四年齋還京都³⁰。

²⁹ 『大正藏』五五、五九一上。

³⁰ 『大正藏』五五、十二下。

とあり、沙門であった智猛が、宋文帝（四〇七―四五三）の時に西域から戻り元嘉中（四二四―四五三）に西涼州において泥洹經一部およそ二十巻を訳したが、すでに闕本であると記載している。

第五節 『涅槃經』の現存諸本

第一項 小乗『涅槃經』の現存諸本

小乗經の現存諸本に、パーリ語の經本が一本、漢訳本が五本、サンスクリット語が一本、チベット語が一本現存する。

・パーリ語經典：

- ① 長部〔(Sk.) Dīghanikāya〕第十六經である『大般涅槃經』³¹
- ・漢訳經典：

- ② 『仏般泥洹經』西晋白法祖訳、二卷（『大正蔵』二、No.5）
 - ③ 『般泥洹經』訳者名なし、二卷（『大正蔵』二、No.6）
 - ④ 『長阿含經』中の卷二―四『遊行經』後秦仏陀耶舎・竺仏念共訳、三卷（『大正蔵』一、No.1）
 - ⑤ 『大般涅槃經』東晋法顕訳、三卷（『大正蔵』二、No.7）
 - ⑥ 『根本説一切有部毘奈耶雜事』中の卷三十五―三十九卷³²、義浄訳（『大正蔵』二十四、No.1451）
- ・サンスクリット語版本（断片）：（中央アジア・トルファンにて発見されE.Waldschmidt氏によって校訂されたもの）

E.Waldschmidt, *Das Mahāparinirvāṇasūtra*, Teil I-III, Berlin, 1950-51（『根本説一切有部毘奈耶雜事』の部分に相当）
E.Waldschmidt, "Drei Fragmente buddhistischer Sūtras aus den Turfanhandschriften," *Nachrichten der Akademie der Wissenschaften in Göttingen. I. Philologisch-historische Klasse*, Jahrgang 1968, Nr. 1（『遊行經』の一部分に相当し、法蔵部所伝）

³¹ パーリ語原典は下記サイトに掲載している。 <https://suttacentral.net/dn16/pli/ms>

The Dīgha Nikāya, ed. by T. W. Rhys Davids and J. Estlin Carpenter, vol. II, London, The Pali Text Society, 1947, pp.72-168°

³² 『大正蔵』二十四、三八二―四一四中。

Mark Allon and Richard Salomon, *Kharoṣṭhī fragments of a Gāndhārī of the Mahāparinirvāṇasūtra, Manuscripts in the Schøyen Collection* 1, *Buddhist Manuscripts* Vol. I, Oslo 2000, pp. 243-273.³³

Klaus Wille, *Fragments of the Mahāparinirvāṇasūtra, Manuscripts in the Schøyen Collection* III, *Buddhist Manuscripts* Vol. II, Oslo 2002, pp. 17-24.³⁴

・チベット語經典：

Īdul ba phran tshegs kyi gshi (*Vinayaśūdrakavastu*, 『根本説一切有部毘奈耶雜事』の部分に相当) Otani No.1035, Tohoku No.6, Vidyākaraṇa, Dharmasīrabha, Dbar ḥbyor 共訳

これらの小乗『涅槃經』は、一つの經典から發展されたものであるのか。それとも、それぞれ違う系統のものがあって、別々に發展してきたのだろうか。この問題に着目し、これらの小乗『涅槃經』の相关性について比較検討した研究がある。長谷川滋氏は、小乗『涅槃經』の中の説話部分に着目して検討し、諸類本の中にある説話の類似性及びその編纂目的に共通する部分が多いことを理由に、以上の諸本はほぼ同一原型から發展したものであるとしている³⁵。

第二項 大乘『涅槃經』の現存諸本

大乘『涅槃經』の現存諸本に、先に述べた漢訳本が四本、チベット語訳が二本、そのほかにサンスクリット語断片が多く発見されている。・漢訳經典：

- ① 法顯訳『大般泥洹經』六卷
- ② 曇無讖訳『大般涅槃經』四〇卷
- ③ 慧嚴・慧観・謝靈運ら再治『大般涅槃經』三十六卷

³³ 塚本啓祥・磯田熙文『新国訳大蔵經 涅槃部1 大般涅槃經(南本)I』(大蔵出版、二〇〇八年)二十八―二十九頁参照。

³⁴ 前と同じ。

³⁵ 長谷川滋「大般涅槃經の研究」『密教文化』通号一〇五、一九七四年、二〇―三九頁

これらの断片について、幅田裕美「一九九六、二〇〇七、二〇〇九³⁹⁾、二〇一五」、ボンガード・レヴィン (Bongard-Levin) 「一九八六」⁴⁰⁾、松田和信「一九八八」⁴¹⁾、湯山明「一九八一」⁴²⁾などによる研究成果がある。

第六節 『涅槃経』の成立についての諸研究

大乘『涅槃経』の成立史について、横超慧日氏、下田正弘氏、藤井教公氏、幅田裕美氏による論及がある。まず、横超氏の説から見てみる。横超氏は、四〇巻本を対象に、その成立にいくつかの段階があるとした。六巻本と対照しながら、仏の説法の対象の推移と変化、付嘱流通文の位置、同一事項の再出など、経が説かれる方法やスタイルを手掛かりに、十三章に分かれている四〇巻本を次のように分類した。

- 第一集 (1) 寿命品・金剛身品・名字功德品 (迦葉菩薩登場前)
- 第一集 (2) 寿命品・金剛身品・名字功德品 (迦葉菩薩登場後)
- 第二集 如来性品・大衆所問品
- 第三集 現病品・聖行品・梵行品・嬰兒行品
- 第四集 光明遍照高貴徳王菩薩品
- 第五集 師子吼菩薩品
- 第六集 迦葉菩薩

³⁹⁾ 幅田裕美 [2009] *The Mahāparinirvāṇa-mahāsūtra Manuscripts in the Stein and Hoernle Collection (I)*, The British Library Sanskrit Fragments Vol 2, Tokyo, pp551-588, 2009

⁴⁰⁾ Bongard-Levin, G. M. [1986] *New Sanskrit Fragments of the Mahāyāna Mahāparinirvāṇasūtra in the Central Asian Manuscript Collection at Leningrad*, Studia Philologica Buddhica Occasional Paper Series VI, Tokyo

⁴¹⁾ 松田和信『インド省図書館所蔵・中央アジア出土大乘涅槃経梵文断簡集―スタイン・ヘルンレ・コレクション』東洋文庫、一九八八年。

⁴²⁾ Yuyama, Akira *Sanskrit Fragments of the Mahāyāna Mahāparinirvāṇasūtra I Koyasan Manuscript*, Studia Philologica Buddhica. Occasional Paper Series IV, Tokyo, 1981

以上の八段階を経て成立したと考えた。しかし、同じ段階の成立でも時間的な前後がある可能性を示した⁴³。

これに対して、藤井氏は、横超氏の説は、経文に着目して、その構成形態や内容の変化からその成立段階を仮設したものであるが、それぞれの段階での思想、戒律や教団史などの内容について厳密な検討を加えたものではないとしている⁴⁴。また、同じ大本でも、漢訳六卷本、チベット訳十三卷本、四〇巻本において、説かれている内容も変化している。例えば一闡提について、六卷本は、悉有仏性から唯一除外される対象であり、一闡提は成仏できないとしているが、四〇巻本では、一闡提にも仏性があると説かれ、一闡提も成仏できるとしている。チベット訳では、ある部分では六卷本に近い記述でありながら、四〇巻本と同様に一闡提にも仏性があるとする。このように三つのテキストの間でも相違する記述がある上、同じテキスト内においても相矛盾する記述がある。この点において、横超氏は、厳密的に検討しておらず、その矛盾について触れていないと述べている⁴⁵。

次に、下田氏の説について述べる⁴⁶。下田氏は、横超氏の説を踏まえて、同一テキスト内の矛盾や相違する記述について、合理的に説明するには、経が段階的に成立したことを認めるべきとし、『原始涅槃経』なるものがあつて、これをベースに徐々に発展し、変更が加えられ、現行の『涅槃経』の形が出来上がったと考えた。また、三つの漢訳テキストにおける内容の矛盾を、二つの視点から解消しようとした。最初に、サンガ（教団）の発展的な面から検討し、『涅槃経』の成立は三つの段階、つまり「菩薩化」「出家化」「教団化」を経ているとした。次に、思想的な側面からは、「如来蔵化」という視点を通じて、『原始涅槃経』たる存在を推定したのである。

具体的に、「六卷本」の章で区分けすると、経の支持者として菩薩が中心（二類）となっている章、とそれ以外（一類）と区別したわけである。

一類… 序品第一、大身菩薩品第二、長者純陀品第三、哀歎品第四、金剛身品第六の五品分

⁴³ 横超慧日「一九八一」三十九―四十三頁。

⁴⁴ 藤井教公「一九九四」八十七頁。

⁴⁵ 藤井教公「一九九四」八十八頁。

⁴⁶ 下田正弘『原始涅槃経』の存在「『東洋文化研究所紀要』第百十三冊、一九九一年。

二類… 長寿品第五、受持品第七、四法品第八から最後の品である随喜品第十八まで

下田氏の説は、第五品の長寿品と第七品の受持品以外は、横超氏の説とは一致する。下田氏が定義した一類の段階とは、法師（ダルマバーナカ）が中心で、戒律緩く、出家と在家双方が存在し、その思想内容は、仏身常住のみであり、まだ如来蔵及び一闍提思想がない段階である。この部分は『原始涅槃經』にあたる部分で、三訳の中で、最も早く成立し「六卷本」の最初の五品分に近い。また、第二類の特徴とする、声聞・九分経批判、菩薩・一闍提・三昧などの語を除外したものとする。支謙訳『大般泥洹經』二巻と安法賢訳『大般涅槃經』二巻がそれにあたるという。

下田氏のこの説に対して、藤井氏はこの二訳は両方とも闕本である故、その内容を検討することはできないため、根拠が十分でないとしている。藤井氏は、『涅槃經』の成立説は、小本テキスト→大本六卷本→チベット訳十三巻本→二十巻→四〇巻本の順番だったのではないかと推測し、大乘『涅槃經』は、小部のものから順次増広され、より大部へと発展したのではないかとしている⁴⁴。

一般的に『涅槃經』は、法顯訳「六卷本」から曇無讖訳「四〇巻本」へと発展したと考えられているが、しかし、幅田裕美氏のいくつかの考察⁴⁵では、曇無讖訳のほうが古い形を帯びていることもあることがわかってきた。『涅槃經』の成立及び伝訳について、その発展してきた姿は、極めて複雑であり、まだ決定論たるものがないように思われる。

第七節 『涅槃經』注釈書について

注釈書の種別について、湯用彤氏は、『隋唐仏教史稿』の中で、こう区別し説明している。

⁴⁴ 藤井教公「一九九四」八十六頁。

⁴⁵ 例えば、幅田裕美「一九九六」や「二〇一五」の論攷の中で、曇無讖訳に比定されたB写本の新たな断片は、ほかのAやC写本よりも、古い形を伝えているとした。ほかに、「二〇〇七」の中でも、一般的に法顯訳のほうが古い形を残していることに対して、疑義を呈している（二二六頁）。

注疏名目各殊。而性質亦不同。其專分一經之章段者、曰科分。其隨文解釋字句者、曰文句。其隨文解釋義理者、曰義疏。而此中因師口授、筆記所得、則謂之述記。其總論一經之大義、恒不隨文出疏、而分門以釋全書之內容、則常曰玄義。其集前賢注疏而成一書者、曰集注。（…中略…）其疏之注釋常、曰疏抄。其字音之訓釋、則稱爲音義或音訓。凡此名目繁多、不能具列。⁵⁶

《注疏の名目は各おの殊なれり。而も性質も亦た同じからず。其の専ら一經の章段を分かつは、科分と曰う。其れ文に隨い字句を解釋するは、文句と曰う。其れ文に隨い義理を解釋するは義疏と曰う。而して此の中師に因りて口授、筆記する所を得るは、則ち之れを述記と謂う。其れ總じて一經の大義を論ずるも、恒に文に隨いて疏を出さず、而も門を分かちて以て全書の内容を釋するは、則ち常に玄義と曰う。其れ前賢の注疏を集めて一書と成すは集注と曰う…（中略）…其れ疏の注釋は常に疏抄と曰う。其れ字音の訓釋、則ち稱じて音義或いは音訓と爲す。凡そ此の名目は繁多にして、具さに列すること能わず。》

（注釈書の名目はそれぞれ違う。しかも、その性質もまた同じではない。一つの經典の章や段落を分けることを専門にするものは、科分という。文に従って字句を解釈するものは、文句という。文に随ってその意味を解釈するのは、義疏と言う。しかもこの中において、師によって口授され、筆記によって得たものは、これを述記という。総じて一つの經典の大義を論ずるのに、恒に文に随って解釈しないものは、常に玄義と言われる。しかも門を分けて全書の内容を釈すものは、則ち常に玄義という。それ前賢の注釈書を集めた一冊の本とするものは、集注と呼ばれる。…（中略）…その疏の注釈は常に、疏抄と言う。字や音の訓釈は、音義あるいは音訓と呼ばれる。おおよそこの名目は繁多であるので、ここで詳細に列挙することはできない。）

先般に湯用彤氏によって述べられた注釈書の形式類別は、大乘『涅槃經』の注釈書にほとんど存在する。それだけ多くの注釈書が制作されてきたということだ。しかし残念ながら、多くの注釈書は失われてしまった。

韋諡の『注涅槃經』が伝わった頃にあった『涅槃經』関係の注釈書を見るために、「奈良朝現在一切經疏目錄」に記載されている『涅槃經』の注釈書を左記に列出する。同時代の韋諡が参照した可能性があるからである。

『大般涅槃經集解』	七十一卷	梁 宝亮等
『大般涅槃經義記』	二十卷	隋 慧遠
『涅槃經疏』	十四卷	隋 吉蔵
『大般涅槃經疏』	二卷	唐 法宝
『涅槃經宗要』	二卷	新羅 元曉
『涅槃經述讚』	七卷	新羅 憬興
『涅槃經疏』	十四卷	新羅 憬興
『涅槃經剛目』	二卷	新羅 義寂
『涅槃經義記』	五卷	新羅 義寂
『註大般涅槃經』	三十卷	唐 導江縣令韋諗
『涅槃經抄』	一卷	林法師
『涅槃經文抄』	二卷	
『涅槃經音義』	一卷	
『涅槃經音義同異』	二卷	

大乘『涅槃經』は、訳出されたと同時にその研究が流行し、かなり早い段階から注釈書が製作されたようである。まず、東晋義熙十四年（四一八）に翻訳された六巻本の『大般泥洹經』に対して、道生・慧観・慧嚴及び慧叡が研究を行っていたようである。これらの劉宋時代の注釈書は残念ながら残っておらず、ほかの『涅槃經』注釈書による引用文という形でしかその中身を伺い知れない。

道生は、鳩摩羅什の門下の一人であり、六巻本『涅槃經』を研究して、一闡提成仏を唱えた人である。慧嚴は、後に「南本」『涅槃經』の再治に参加し、中心的な役割を担いだ。慧観も「南本」再治に参加し、その後頓漸五時説を唱えた人である。道生・慧観の後は、三論宗の興盛を経て天台宗の勃興まで、梁代を中心にその前後、江南において『涅槃經』は、大いに研究された。

道生は、「六卷本」『涅槃經』をいち早く研究し、独自の仏性論を展開し、それによって「六卷本」『涅槃經』研究が一気に広まった。『涅槃經』の立役者と言っても過言ではない。『涅槃經』には、もう一人の立役者がいる。それは、道朗である。「北本」『涅槃經』の研究史は、道朗に始まる。北涼玄始十年（四二一）に「北本」『涅槃經』四〇巻が曇無讖によって伝訳されて間もなく、共訳者であった道朗によって、『涅槃經義疏』⁵⁰が著された。翻訳に参加した道朗は、その後すぐに注釈書を著した。残念ながら、散逸して残っていないが、「河西云」というように引用され、『大正蔵』において散見する。

『大乘玄論』巻三に、

但河西道朗法師與曇無讖法師。共翻涅槃經。親承三藏作涅槃義疏。釋佛性義正以中道爲佛性。爾後諸師。皆依朗法師義疏。得講涅槃乃至釋佛性義。⁵¹

道朗・道生・慧觀・慧嚴らの後の宋朝には、宝林・慧浄・曇無成・僧含・僧莊・道汪・浄林・慧隆・慧定・曇斌・僧鏡・超進・法瑤・道慈等が、そして、斉朝には、道登・曇度・僧鐘・僧盛・僧惠・僧宗などがこぞって『涅槃經』を研究し講じた。宝林・慧浄・僧鏡・法瑤は、注釈書を著し、僧宗は、『涅槃經』の講述を百回以上したという。また、梁の武帝も自ら『涅槃經』を講じ、宝亮らに勅して『涅槃經集解』を撰述させ、自らもその序文を記すなど、梁代の仏教は、『涅槃經』の研究が大変隆盛した時代といえよう。

陳・隋の時代には、道朗・僧詮・法朗の三論宗が、そして智顗の天台宗が興ると、涅槃宗の勢力は以前のほどではなくなったが、それでも、唐代に至るまで、『涅槃經』の講述や研究は、衰えることはなかった。行等・靈潤・道洪によって、『涅槃經』は盛んに講讃された。また、法上・曇延・慧遠・靈裕・灌頂・吉蔵・玄会・誓空・義寂・法宝・慧沼・道暹・行滿がそれぞれ義疏を著した。慧遠の『義記』二十巻、灌頂の『玄義』二巻、『經疏』十五巻、吉蔵の『遊意』一巻が現存している。南北朝において、『涅槃經』の研究は、宝亮の『集解』、慧遠の『義記』、灌頂の『經疏』、吉蔵の『遊意』によって代表される。

⁵⁰ 道朗の『涅槃義疏』：『大乘玄論』巻三に、その記述がある。「佛性者名第一義空。故知。第一義空爲正因佛性也。但河西道朗法師與曇無讖法師。共翻涅槃經。親承三藏作『涅槃義疏』。釋佛性義正以中道爲佛性。爾後諸師。皆依朗法師義疏。得講涅槃乃至釋佛性義。師心自作各執異解。悉皆以涅槃所破之義以爲正解。豈非是經中所喻解象之殊哉。雖不離象。無有一人得象者也。」（『大正蔵』四五、三五下）。

⁵¹ 『大正蔵』四五、三五下。

唐代では、法宝・憬興・太賢・義寂が『涅槃經』を講じた。また、義疏では、湛然による灌頂の『經疏』の治定、そしてその門下の行滿、道暹の注釈がある。そして、宋代の智円によって、灌頂の『玄義』の復注である『発源機要』四卷、『經疏』の復注である『三德指帰』二十卷を以て、中国での『涅槃經』の研究は終焉を迎える。

左記に現存する注釈書の一覧を掲げる。

〈梁代の注釈書〉		
『大般涅槃經集解』	七十一	梁 宝亮等
〈隋代の注釈書〉		
『大般涅槃經義記』	十	隋 慧遠
『大般涅槃經玄義』	二	隋 灌頂
『大般涅槃經疏』	三十三	隋 灌頂
『涅槃經遊意』	一	隋 吉藏
〈唐代の注釈書〉		
『涅槃經宗要』	一	新羅 元曉
『註大般涅槃經』	三十	唐 導江縣令韋諗
『涅槃經疏私記』	十二	唐 行滿
『涅槃經疏私記』	九	唐 道暹
『涅槃經玄義文句』	二	唐 道暹
〈宋代の注釈書〉		
『涅槃經疏三德指帰』	二十	宋 智円
『涅槃經玄義発源機要』	四	宋 智円

第八節 『涅槃經』「壽命品」の概要

『涅槃經』の内容は、主に仏身の常住・涅槃の常樂我淨・一切衆生悉有仏性（一闡提を含む）の三つの思想に集約できる。これらの思想は、ほぼ本經を通じて説かれている。この中で「壽命品」は、「北本」『涅槃經』の巻一―巻三の途中までを範囲としている。「南本」では、巻一が「序本」、巻二が「純陀品」・「哀歎品」、巻三が「長壽品」となっている。『注涅槃經』の注釈範囲は、「北本」の巻二の「壽命品」のみとなっており、「南本」も同じく巻二となっているが、内容的には、「純陀品」から「哀歎品」までと二品をまたがっている。

『注涅槃經』

「北本」

「南本」

巻二「壽命品」

巻二「壽命品」

巻二「純陀品」・「哀歎品」

次に、本論攷の研究対象である北本『涅槃經』「壽命品」の内容について概述する。

世尊が涅槃に入ると宣言する。疑問がある衆生は今聞くようにと言う。その音声は、有頂天まで聞こえた。多くの衆生・弟子・菩薩・天王・阿修羅・魔王波旬さえも、仏への最後の供養を携えて急いで世尊のところに集まってくる。しかしながら、世尊は、どの人からも供養を受けようとしな（巻一）。

クシナガラにいる匠の子の純陀が、その仲間十五人と共に、最後の供養を受けてくれるようお願いする。世尊は、その供養を受け入れる。そこで、世尊は、施食に二種類あるが、その果報に差はないと説く。純陀は、悟りを開く前の煩惱の身で受ける供養と、今煩惱を尽きて一切種智を得た仏身への供養が同じはずでないと質問を投げかける。それに対して、世尊は、如来は既に遠い昔に悟っているから、煩惱の身ではないため、果報は同じと説く。これによって、仏は、久遠より以前に既に存在し、常住なる存在であることを説く。そのあと、ほかの質問も続く。この中に有名な貧女生梵天、春池尋珠などの喩話がある。さらに、世間には四顛倒法があるが、如来は、既に四倒を離れたので常樂我淨を知っていると説く（巻二）。

巻二から質問が続く。巻三での最初のテーマは、一切の衆生を平等心持て我が子のように接すると長い寿命といて果報を得ることについて世尊が説く。その一切の衆生に悪人や一闡提も含まれているのか、彼らをも平等に見るのか、また、そうであるなら、世尊の寿命はなぜ短いのかという質問が出てくる（巻三の途中まで）。

第三章 『注大般涅槃經』について

第一節 現存状況

『注大般涅槃經』は、中国で流行した形跡は見られない。現在日本に残存しているものは、以下の六巻のみである。

- | | | | | | | | | | |
|--------------|-----|----|------------------|------|-----|-------|----|-----|--------|
| ◎ 1 『注大般涅槃經』 | 卷二 | 一卷 | 縦二六・〇糶、全長一六五九・四糶 | 奈良時代 | 三重 | 西來寺 | 北本 | 卷二 | 壽命品の注 |
| ◎ 2 『注大般涅槃經』 | 卷八 | 一卷 | 縦二六・四糶、全長一二八一・〇糶 | 奈良時代 | 滋賀 | 西教寺 | 北本 | 卷八 | 如來性品の注 |
| ○ 3 『注大般涅槃經』 | 卷十 | 一卷 | 不詳 | 奈良時代 | 滋賀 | 聖衆來迎寺 | 北本 | 卷九 | 如來性品の注 |
| ◎ 4 『注大般涅槃經』 | 卷十二 | 一卷 | 縦二六・四糶、全長一四六六・六糶 | 奈良時代 | 三重 | 西來寺 | 北本 | 卷十四 | 聖行品の注 |
| ◎ 5 『注大般涅槃經』 | 卷十四 | 一卷 | 縦二六・三糶、全長一一五二・二糶 | 奈良時代 | 京都 | 毘沙門堂 | 北本 | 卷十四 | 聖行品の注 |
| ◎ 6 『注大般涅槃經』 | 卷十九 | 一卷 | 縦二六・四糶、全長一一一三・九糶 | 奈良時代 | 神奈川 | 西方寺 | 北本 | 卷十九 | 梵行品の注 |
- ◎ 國指定重要文化財、○ 県指定有形文化財

これらは、卷十が県指定有形文化財である以外、いずれも国指定重要文化財である。奈良中期のいわゆる天平写經の中の一つと思われる、もともと一具のものであったと考えられている。

右記の六巻の内、卷十及び卷十二を除く四巻の写真の一部分が、文化庁監修毎日新聞社発行の『重要文化財 20（書籍・典籍・古文書Ⅲ・仏典Ⅰ）』に掲載されている。そこには、卷二、八、十四は、巻首の一部分が、卷十九は、巻末の一部分が写し出されている。卷二、八、十四の各巻首には、題目である『注大般涅槃經』と、巻数、品名及び撰者の肩書及び氏名の記載がある。撰者についての記載箇所には、「導江縣令韋諗注」と記されている。

現在、文化庁の国指定文化財等データベース⁵²においても、これらを確認できる。しかしながら、卷十のみは、滋賀県の県有形文化財の指定となっており、この国指定文化財等データベースには、掲載されていない。滋賀県のホームページに掲載されている県所有の文化財目録⁵³において確認できる。不思議なことに、同じ目録の中で、滋賀県は、国の重要文化財指定の卷八を所有していながら、卷十については、県の指定としている。

また、大津市立歴史博物館のデータベース⁵⁴では、大津市の聖衆来迎寺所蔵の卷十については、「黄紙二十五紙を継ぎ、淡墨界がほどこしであり、一紙に二十五行、一行に十七字、注は双行になっている」と記載されている。また、「その巻末に最澄の筆あり、天正九年（1581）四月九日玄祐から賜ったことを記す当時の住職真雄の付箋が貼られている。書写年代は奈良時代である。」と説明されている。聖衆来迎寺の開基は伝教大師最澄である。卷十九が真言宗派の寺院の所蔵であるのを除き、残りの五巻は、ともに天台宗派系の寺院の所蔵である。この『注涅槃経』の伝教大師最澄との関係も大変興味深い。

第二節 書誌情報

『注涅槃経』卷二及び卷十二の書誌情報について掲載する。

《卷二》西来寺 重文（京都国立博物館寄託）

《卷十二》西来寺 重文（京都国立博物館寄託）

名称…『注涅槃経』卷二

『注涅槃経』卷十二

外題…『注涅槃経』卷二

『注涅槃経』卷十二

内題…『注大般涅槃経』卷二^{寿命} 導江縣令韋諗注

『注大般涅槃経』卷十二^{聖行} 導江縣令韋諗注

⁵² 文化庁国指定文化財等データベース http://kunsitei.bunka.go.jp/bsys/index_pc.asp（平成三十年十一月六日リンク確認済）

⁵³ 滋賀県大津市重要文化財リスト http://www.pref.shiga.lg.jp/edu/katei/bunkazai/bunkazaimokuroku/yukeibikou/files/bikoh_ohsu.pdf（平成三十年十一月六日リンク確認済）

⁵⁴ 大津市歴史博物館の大津歴史データベース『注大般涅槃経』卷第十 <http://www.rekihaku.otsu.shiga.jp/db/bunka/detail.html?349>（平成三十年十一月六日リンク確認済）

尾題…『注大般涅槃經』卷二

撰者…導江縣令韋諗注

刊写…写本

装訂…卷子

時代…奈良

裏打ち…無

表紙…有(原) 縦25.9 糎、横22.8 糎

紐…無

見返し…有

軸…有(原力)

軸首…撥

界線…淡墨界

存欠…完

状態…良好

紙質…楮打紙(厚手)

紙色…染紙黄藥

第二紙…一紙 22 行 17 字 縦 26・0 横 51・2 界高 19・5

界幅 2.3 天界 3.2 地界 3.4

法量… 42.2 糎—51.2 糎の間 全 33 紙

印記…無

奥書…無

『注大般涅槃經』卷十二

導江縣令韋諗注

写本

卷子

奈良

無

有(原) 縦26.2 糎、横23.9 糎

無

有

有(原力)

撥(軸頂に模様有り)

淡墨界

完

良好

楮打紙(厚手)

染紙黄藥

一紙 22 行 16 字 縦 26.3 横 51.0 界高 19.4

界幅 2.3 天界 3.3 地界 3.5

48.1 糎—51.1 糎の間 全 29 紙

無

有(軸付紙、紙背)「一國守 二福足 三■」⁵⁵

⁵⁵ 一國守 二福足 三■…三回校訂されたであろう。■は、文字の存在が予想されるが、軸付紙が途中で裁断されているため、判読できない。

備考： 各紙のほぼ中央近くに折り跡有り。

紙背部分にも折り跡有り。

第一項 経軸―校了者の手がかり

各紙の二行目に近い部分に折り跡有り。紙継部分にも有り。

神奈川県横浜市港北区にある西方寺は、卷十九の『注涅槃経』を所蔵している寺院である。二〇一七年六月に訪問した際に、実物を拝見することは叶わなかったが、平成二十年に発行された『西方寺本堂修復落慶記念誌』を頂戴することができた。その四頁目に、所蔵の卷十九の巻首及び巻末の写真と共に、軸の部分の写真があった。その軸の写真に、写経者についての大きな手掛かりがある。軸についている経の端に、校了者と思われる「一国守、二人足」と書かれている。これは、おそらく校了者の名前を表しているのではないだろうか。「一（校）国守」が一校目の校了者であり、「二（校）人足」は二校目の担当者であったと思われる。

また、その後に調査をした卷十二も経の端を見ることができ、そこにも校了者と思われる名前が記されていた。卷十二の場合は、「一（校）国守、二（校）福足。三■・」とあった。これは、大変な記録である。というのも、『注涅槃経』は、三回校了していることがわかったからである。無名な一士大夫が書いたものが、紫檀の軸に、軸端には嵌め込みの装飾があり、端麗な字で書写され、さらには三回内容を校了している。経典でも、三回校了するのはまれである。こんな破格な扱いをされた韋諡の『注涅槃経』は、果たしてどうしてなのか。ますます謎が深まるばかりである。

さて、この登場した「国守」「人足」「福足」の三者について、東京大学史料編纂所の奈良時代古文書フルテキストデータベース⁵⁶にて、調べたところ、国守については多くの該当者がいたが、その中でも「田部国守」という人物が『注涅槃経』にかかわった人ではないか。しかしながら、直接『注涅槃経』を書写した記録は、管見の限り見当たらなかった。ただ、田部国守は、写経師であったのは確かなようだ。正倉院文書には、国守が写経用の紙の交付や墨の給付、経典の貸出し、さらに借金についての記録があった。前述したように、『注涅槃経』はおそ

⁵⁶ 奈良時代古文書フルテキストデータは、東京大学史料編纂所が出版した『大日本古文書』（編年文書）全二十五冊の全文データベースである。『大日本古文書』（編年文書）は、大宝二年（七〇二）―宝龜十一年（七八〇）の古文書を網羅的に収録したものである。その大半は正倉院文書である。

らく『注維摩經』と同じ時期に請来され書写されたと思われる。また、『注維摩經』の貸出記録は、天平勝宝五年（七五三）であることから、書写はそれ以前である。三回校了されたことや校了者の点から、韋諡の『注涅槃經』をみた場合、どのようなことが見えて来るかについては、今は、課題を残しつつ、本文の研究後に、違う切り口から検討したい。

第三節 所蔵寺院

『注涅槃經』を所蔵されている寺院の多くは、卷十九の神奈川県を除いて、三重、滋賀、京都の三県に集中している。また、卷十九を所有している西方寺が真言宗であるのを除き、他は全て天台宗の寺院の所有となっている。特に卷八を所有している西教寺と卷二・第十二を所有している西来寺は、同じ天台真盛宗の総本山と別格本山の関係にある。また、毘沙門堂は天台宗五箇室門跡の一つで天皇家とゆかりがある。さらに聖衆來迎寺は開基が最澄と言われ、聖衆來迎寺所有の卷十の奥書には、最澄の筆によるものと伝えられている⁵⁷。このことは、『注涅槃經』が珍重されてきた経緯と何か関係があるのだろうか。天皇家ゆかりの寺院と天台宗最澄ゆかりの寺院、これは何を意味するのだろうか。韋諡がやはり韋后と何らかの関係があつて、朝廷対朝廷という構図で、『注涅槃經』がもたらされたのだろうか。いまの段階では、まだ何ともいえないが、ただの県令の注釈書がこれほどまで、価値のあるものとして扱われたことには、何か理由があるはずである。左記に、現存する『注涅槃經』の所有寺院及び所在地の一覧を掲載した。

〈所蔵巻〉	〈寺院所在地〉	〈寺院名〉	〈宗派〉	〈所在〉
1 『注大般涅槃經』卷二・卷十二	三重県津市乙部	西来寺	天台真盛宗別格本山	京都国立博物館
2 『注大般涅槃經』卷八	滋賀県大津市坂本	西教寺	天台真盛宗総本山	大津市歴史博物館
3 『注大般涅槃經』卷十	滋賀県大津市比叡辻	聖衆來迎寺	天台宗	琵琶湖文化館
4 『注大般涅槃經』卷十四	京都府京都市山科区	毘沙門堂	天台宗	京都国立博物館

⁵⁷ 大津市歴史博物館の大津歴史データベース『注大般涅槃經』卷第十の紹介に。 <http://www.rekihaku.otsu.singa.jp/db/bunka/detail.html?349>（平成三十年十一月六日確認。）

5 『注大般涅槃經』卷十九

神奈川県横浜市港北区

西方寺

真言宗

西方寺⁵⁸

〈寺院名〉

〈宗派〉

〈ご本尊・脇侍〉

- | | | | |
|---|-------|-----------|-------------------------|
| 1 | 西來寺 | 天台真盛宗別格本山 | 阿弥陀如来・毘沙門天（右側）、不動明王（左側） |
| 2 | 西教寺 | 天台真盛宗総本山 | 阿弥陀如来・毘沙門天（右側）、不動明王（左側） |
| 3 | 聖衆來迎寺 | 天台宗 | 阿弥陀如来、釈迦如来、薬師如来の三仏 |
| 4 | 毘沙門堂 | 天台宗 | 毘沙門天 |
| 5 | 西方寺 | 真言宗 | 阿弥陀如来 |

第四節 撰者について

第一項 韋諡の出自

撰者韋諡についてであるが、残されている歴史的文献を見つけることができなかった。現在わかっていることは、唐代の導江県令であったことのみである。『注涅槃經』の現存する諸本の巻首には、『注大般涅槃經』の題目、巻数、品名、そして撰者号の「導江県令韋諡注」のみ記載されている。

韋氏という姓は、漢代から唐代まで綿々と続いた名門の家であり、すでに漢代から都の長安では、「城南韋杜、去天尺五」⁵⁹（城南の韋（氏）と杜（氏）は、（最高権力者としての）天（子）から離れてわずか五尺のみ）と言われたという。これはつまり、天子のそばにいて、それだけ大きな権力を持った一族だったことを示している。

⁵⁸ 神奈川県文化財目録 種別順（平成三〇年五月一日現在）にて所在を確認した。http://www.pref.kanagawa.jp/docs/ar3/cnt/f70052/documents/mokuroku.pdf

⁵⁹ 「隋唐都京兆杜氏・韋氏皆以衣冠名位顯故、當時語曰、城南韋杜去天尺五。二家各名其郷、謂之杜曲・韋曲。自漢至唐、未嘗不爲大族。」宋・鄧名世撰『古今姓氏書辯證』卷二十四、二丁（四庫全書電子版）『文淵閣四庫全書電子版』—原文及全文檢索版—、迪志文化出版、香港、一九九九年。〔韋・杜二家歴代全顯

また、楊曾文氏によると、韋氏一族は、北周逍遙公韋竄（五〇二―五七八）の時以來、仏教を信奉していたという⁸⁰。宰相を十七人輩出し、唐の中宗（六五六―七一〇）にも重用された韋氏一族ではあったが、韋后（生年不詳―七一〇）の中宗毒殺により、韋后に関連した韋氏の一族は、朝廷から失脚し処刑された。しかしながら、このことはあくまでも韋后に直接関係した一族のみの範囲のことで、ほかの系列の韋氏及び地方にいる豪族の韋氏は、変わらずに任官されているものもいたという⁸¹。もし、韋諡が開元中に活躍したと仮定すれば、韋后の事件（七一〇年）の後、開元中（七一二―七四一）に朝廷から県令に任命されていることに鑑みると、韋后と直接関係のあった家系の出身でないことが推測される。

韋諡の生没年については、知ることができないが、一般的に県令になる年は、三十歳から四十歳であるという。また、導江県は、隋が滅び、唐が始まった武徳元年（六一八）年の翌年（六一九）に、導江県に名前が改められている。しかしながら、『新唐書』によると、その八年後の貞観中（六二七―六四九）には、灌寧と呼ばれ、そして開元中（七一二―七四一）にまた導江という名前に戻ったと記されている。『注涅槃經』が天平写経の一部であることなどを鑑みて、韋諡は、おそらく開元中に導江県令に在職していたのであろう。このことから、韋諡は、八世紀初頭に活躍した人と推測できる。

第二項 唐代の県

唐代には、大小約千五百の県があったという。これらを唐の朝廷は、等級に分けて管理していた。唐代の有名な地理書である『元和郡県図志』や『新唐書』『地理志』を見ると、地名の下に、「望」や「緊」などの漢字が書かれているのが見られる。これらは、その土地の等級を表していた記号である。例えば、『新唐書』『地理志』の導江県の記述を例に挙げると、

宦故、唐人語曰、城南韋杜去天尺五。』『陝西通志』卷七三、六十一丁（四庫全書電子版）『文淵閣四庫全書電子版』—原文及全文檢索版—、迪志文化出版、香港、一九九九年。）

⁸⁰ 楊曾文「淨覺及其『注般若波羅蜜多心經』与其校本」『中華仏学學報』第六期、台北：中華仏学研究所、一九九三年、二四一頁。

⁸¹ 矢野主税「韋氏研究（二）」『人文科学研究報告』十一（臨時増刊号）一九六二年、二六―四九頁。矢野氏によれば、韋氏は、漢の末及び晋の末の戦乱により、地方に散って、南北朝には、地方でいくつかの豪族が形成されたとのこと。唐代になると、中央で活躍する韋氏にもいくつかの家系ができたという。

導江

望。本盤龍。武德元年以故汶山置。尋更82名。貞觀中曰灌寧。開元中復為導江。

「導江、望。は、盤竜。武德元年、故を以て汶山に置く。尋いで名を更む。貞觀中に灌寧と曰う。開元中に復た導江と為す。」

これを見ると、導江県は「望」という階級に属していることがわかる。では、導江県の上の成都府はどうかというと、成都府蜀郡は、「赤」という階級になっている。唐代の州県等級制度について研究された翁俊雄氏によると、唐代の県の等級は、十段階に分かれている。上から「赤県」「次赤県」、「畿県」、「次畿県」、「望県」、「緊県」、「上県」、「中県」、「中下県」及び「下県」の十段階となっている。⁸²唐の朝廷は、これらすべての県を平等に扱っているわけではなく、実際に重視した県は、「上県」までであったという。数でいうと、「中県」から「下県」までの規模が小さく人口の少ない県は、半分以上を占めている。⁸³等級で見ると、意外なことに、導江県の地位は、決して低くはない。導江県は、吐番の領地に隣接しており、『中国歴史地図』で確認すると、辺鄙な場所にあるが、外敵から自国を守る役割があるため、管理上では、重要な場所であったことから、その等級が低くなかったことがわかる。

導江県は、現在の中国四川省都江堰とこうえん市にある。成都から西に約六十キロ離れたところに位置する。秦の時代（紀元前二二―二〇六）からある古い都市で、その名の通り、江を導く堰が設置されている。秦の時代に作られたこの水利施設は、代々にわたって、維持され、現在も役目を果たしている。また、道教の聖地である青城山や古い町並みのその美しい景色と文化価値から、ユネスコの世界遺産に登録されている。唐代の地理書である『元和郡縣志』⁸⁴に、導江県についての記述がある。

本漢郫縣地。武德元年、于灌口置盤龍縣、尋改爲灌寧縣。二年、又改爲導江縣。取禹貢岷山導江之義也。属成都。垂拱二年割属彭州。

⁸² 欧陽修『百衲本二十四史（二九）新唐書上』（台北：台灣商務印書館、一九三七年）一六〇九八頁。

⁸³ 翁俊雄「唐代的州縣等級制度」『北京師範學院學報』第一期、一九九一年、九一―十八頁。

⁸⁴ 賴瑞和『唐代中層文官』（台北：聯經、二〇〇八年）二二六―二二九頁。

⁸⁵ 『元和郡縣志』三二卷、九―十頁。

本は、漢の郫縣もとの地。武徳元年（六一八）、灌口に盤龍県を置き、尋いで改めて灌寧県と爲す。二年（六一九）、又た改めて導江縣と爲す。『禹貢』の岷山導江の義を取るなり。成都に属す。垂拱二年（六八六）に割いて彭州に属す。

武徳元年（六一八）は、隋が滅び、唐が始まった年で、唐高祖の執政下の時代であった。その翌年（六一九）に、導江県に改められている。名の由來は、古代の中国の地理書であった『禹貢』の中の一文から取ったとされている⁹⁹。また、『新唐書』⁹⁹（地理志）では、導江県について、このように述べられている。

導江 望。本盤龍。武徳元年以故汶山置。尋更名。貞觀中日灌寧。開元中復爲導江。有侍郎堰、其東百丈堰、引江水以溉彭、益田、龍朔中築。又有小堰、長安初築。西有蠶崖關、有岷山、玉壘山。有鎮靜軍、開元中置。有白沙守捉城。有木瓜戍、三奇戍。導江、望。もとは、盤龍。武徳元年（六一八）故を以て汶山に置く。尋いでに名を更める。貞觀中（六二七―六四九）に灌寧と曰う。

開元中（七一三―七四一）に復た導江と爲す。侍郎堰有り、其の東に百丈堰が、江水を引いて以て彭、益の田を溉そそぎ、竜朔（六六一―六六三）中に築く。又た、小堰有り、長安（七〇一―七〇四）の初めに築く。西に蠶崖関さんがいかん有り、岷山、玉壘山有る。鎮靜軍有り、開元中に置く。白沙に守捉城有り。木瓜戍もつかじゆ、三奇戍さんきじゆ有り。

⁹⁹ 諸説あり。

⁹⁹ 『新唐書』第四冊、卷四二（北京：中華書局、一九七五年）一〇八〇頁。

これを見ると、導江縣は、貞觀中（六二七―六四九）に灌寧と呼ばれていたが、開元中（七一三―七四一）に復た導江という名前に戻ったことがわかる。

また、撰者の記述の部分で、我々は、韋諗は、縣令であつたとわかる。その県令についてだが、唐代には、縣が約千五百あると言われる⁸⁶。その縣は、都に近いかどうか、人口の多さなどで約十等級に分かれている⁸⁷。頼瑞和氏によると、唐代の縣の一級官員には、四種ある。その階位を低いほうから並べると、縣尉、主簿、縣丞、縣令である。これらは、朝廷から各縣に派遣される官員であり、九品三十階の流内官であるという⁸⁸。通常は、縣令になるには、この一番下の縣尉から任用され、段階を踏んでいくので、大体縣令は、三十代または四十代になるという。また基本的に、縣令に任用される期間は、四年であるという。このことから、我々は、ある程度韋諗が『注涅槃經』を撰述した時の年代及びその人物像について推測できる。

第三項 韋諗の著作

歴史の中に埋もれた韋諗ではあるが、辛うじて目録等にその痕跡を残してくれている。まず、目録で確認できる著作が二本ある。

『注涅槃經』、そして『注維摩經』である。そのタイトルから主に注釈書であることがわかる。『東域伝灯目録』⁸⁹及び『奈良朝現在一切經疏目録』⁹⁰を確認すると、

⁸⁶ 頼瑞和「二〇〇八」二三八頁。

⁸⁷ 唐縣の等級の分け方は、一番細かく分けているのが、『元和郡縣圖志』及び『新唐書・地理志』であるという。ただ、細かいので、普通は、『通典』のように、七等級、あるいは、『唐六典』、『舊唐書』及び『新唐書』の「職官志」では、六等級（京縣、畿縣、上縣、中縣、中下縣、下縣）と簡略化するものもある。頼氏「二〇〇八」二三九―二四三頁。

⁸⁸ 頼瑞和「二〇〇八」二三四頁。

⁸⁹ 『高山寺本東域傳燈目録』（高山寺資料叢書第十九冊）『東域傳燈目録』は、永超が著し、嘉保一年（一〇九四）に成立した章疏目録である。永超は、南都七大寺及び北嶺の比叡山など有数の經藏を閲覽して目録を作成したと言われる。井上光貞『日本古代思想史の研究』（岩波書店、一九八二年）二三〇―二三二頁。

⁹⁰ 石田茂作『奈良朝現在一切經疏目録』（寫經より見たる奈良朝佛教の研究）（東洋文庫、一九六六年）一〇二頁、一一三頁。（一九五七 註維摩詰經、婁諗註、六卷、天平勝寶五年、三ノ六四二、一〇二頁）（二二七六、註大般涅槃經、三十卷、天平九年、七ノ七八、唐 道江縣令韋諗、東域衆經、一一三頁）。

注維摩經六卷(大唐導江縣令壽諗注⁷³)

注涅槃經三十卷(大唐導江縣令⁷⁴諗注⁷⁵)

とある。韋諗には、『注大般涅槃經』のほかにも、『注維摩經』の著作があったことがわかる。この韋諗の『注維摩經』について、『正倉院文書』⁷⁶にその記録が残されている。

また、新たに日本や中國で書かれた注釋書の中で、韋諗の痕跡を発見することができた。しかも、『維摩經』及び『大般涅槃經』ではない經典に関するものである。引用したのは、釈中算撰の『妙法蓮華經釈文』である。

爾時上兒氏反。釋氏云、是也。捷公云、宜訓是也。今案、――猶是時也。『金剛般若韋諗注』云、――猶此時也。⁷⁷

《爾⁷⁸時、上は、兒氏の反。釈氏云わく、是れなり。捷公云わく、宜しく是れを訓ずるなり。今案ずるに、爾時、猶しこの時のときなり。『金剛般若韋諗注』云わく、爾時、猶しこの時のときなり。》

⁷³ 『高山寺本東域傳燈目錄』(高山寺資料叢書第十九冊)(東京大学出版會、一九九九年)影印五九頁、翻字一九三頁。『大正藏』五五、一一五一下。「奈良朝現在一切經疏目錄」では、「註維摩詰經、婁諗註」となっている。(『寫經より見たる奈良朝佛教の研究』(東洋文庫、一九六六年)一〇二頁。

⁷⁴ 合二令壽『東域傳燈目錄』(大谷大學藏寫本)、『大正藏』五五、一一五四中。

⁷⁵ 『高山寺本東域傳燈目錄』(高山寺資料叢書第十九冊)(東京大学出版會、一九九九年)影印二〇五頁、翻字七八頁。『大正藏』五五、一一五四中。「奈良朝現在一切經疏目錄」では、「註大般涅槃經、唐 道江縣令韋諗」となっている。(『寫經より見たる奈良朝佛教の研究』(東洋文庫、一九六六年)一〇二頁。

⁷⁶ 宮内庁正倉院事務所編『正倉院文書影印集成十七塵芥文書』(八木書店、二〇〇七年)一〇六頁。

⁷⁷ 釋氏一未詳。

⁷⁸ 捷公―大隋京師惠日道場沙門曇捷の『字釋』ことを指す。『大正藏』五六、一四四中。

⁷⁹ 『大正藏』五六、一四六中。

⁸⁰ 爾の中古音⁷⁹ nié(niě)

これにより、韋諗には、『維摩經』と『大般涅槃經』のほかに、『金剛般若經』の注があったことがわかった。この注に関して、名古屋市にある七寺所蔵の『古聖教目録』にその記録が残されていた。

金剛般若註一卷 韋諗⁸¹

このほかに、韋諗の注釋書と思われるものが二か所、晩唐の栖霞（一八七九―）撰『法華經玄贊要集』の中で引用されている。

專⁸²諗云、「不師其心、而爲心師」、名不隨心行也⁸³。

《專諗云わく、「その心を師とせずして、心の師と爲す」は、不隨心行と名づくなり。》

事⁸⁴諗注、經云、狩⁸⁵形人面、而有一角、舊云疑神仙、人人見疑、是人非人。又云、馬頭人身能語。⁸⁶

⁸¹ 『七寺古逸經典研究叢書』第六卷「中國・日本經典章疏目録」（大東出版社、一九九八年）一八三頁。

⁸² 『法華經玄贊要集』の注に、「專一作韋」とある。『法華經玄贊要集』卷三五、『卍新纂大日本統蔵經』三四、九二四上。

⁸³ 『法華經玄贊要集』卷三五、『卍新纂大日本統蔵經』三四、九二四上。

⁸⁴ 「事」は、「專」の間違いだったのではないか。また、「專一作韋」の例があるので、韋諗の注の可能性が高い。

⁸⁵ 狩…「狩、猶獸也。」（出典…「公羊傳・桓公」）宗福邦・陳世鐸・蕭海波主編『故訓匯纂』（北京…商務印書館、二〇〇三年）一四一八頁。

⁸⁶ 『法華經玄贊要集』卷十、『卍新纂大日本統蔵經』三四、四一三中。

《事論注、經に云わく、狩の形して人の面、一つの角有りて、旧云わく神仙に疑（擬）す、人人に疑われ、是れ人にして人に非ず。又た云わく、馬の頭、人の身にして能く語る。》

ここでは、「專諡」や「事諡」となっているが、『法華經玄贊要集』の注に「專」は、「專一作韋」⁸⁷（專、一には、韋と作る）とあることから、「事」も「專」も「韋」の誤写だった可能性がある。また、「奈良朝現在一切經疏目錄」では、「婁」になっている例もある。⁸⁸

⁸⁷ 『法華經玄贊要集』の注に、「專一作韋」とある。『法華經玄贊要集』卷三五、『卍新纂大日本統藏經』三四、九二四上。

⁸⁸ 「奈良朝現在一切經疏目錄」の「一九五七『註維摩詰經』婁諡註 六卷」では、婁諡となっている。（一〇二頁）

第三章 『注大般涅槃經』の成立問題

第一節 正倉院文書

正倉院文書は、奈良県の東大寺正倉院宝庫によって保管されてきた文書群のことをいう。その文書の数は一万数千点とされる。正倉院中倉には東大寺写経所が作成した文書群が保管されていた。狭義的に、この写経所から出た文書のことを正倉院文書と呼ぶ。その中身は、東大寺の写経・造仏事業・造寺に関わった記録のほかに、写経文書等の紙背に書かれた戸籍・計帳など（紙背文書）が含まれている。

この正倉院文書に僅かではあるが、韋諗に関する記録があった。これは、現在わかる範囲で韋諗に関する一番古い記録である。左記は『大日本古文書』を参考にして、『正倉院文書』影印版を翻刻したものである。

『正倉院古文書影印集成十七』一〇六頁（宮内廳）

第三〇卷裏 14.慈訓奉請經卷狀

1 謹奉請

2 注維摩詰經六卷 韋諗注

3 維摩詰經 二卷

4 大方等頂王經一卷 一名維摩詰子問經／已上三部九卷經以六年五月一七日便請留外嶋院

已上玖卷並黃紙及表綺緒紫檀軸無帙疏二部八卷請鬱多羅疏四卷 林法師疏二卷 請遠法師疏四卷
5 維摩經四部 無名疏五卷 元暁疏三卷

已上疏貳部八卷並白紙黃表紫緒梨軸

6 右件之經及疏欲請

7 合見請拾柒卷（經九卷疏八卷）並付便使沙美戒慈

8 天平勝寶五年九月三日使沙弥戒慈

慈訓

9 司判依請

10 次官佐伯宿禰今毛人

判官石川朝臣 豊麻呂

11 主典阿刀連酒主

12 依政所宣合請如前

知吳原生人

右を見ると、慈訓（六九一―七七七）が、沙弥戒慈を遣わして、天平勝寶五年（七五三）に韋諡の『注維摩經』六卷を借り出していることがわかる。ほかにも『維摩經』の注釈書を借り出していることから、おそらく研究比較のために借り出したのであろう。つまり韋諡の注釈書は、当時では、その内容に一定の評価があったと推測できる。

慈訓は、奈良時代法相宗興福寺の僧である。唯識法相の師に、興福寺の玄昉（生年不詳―七四六）と元興寺の良敏（生年不詳―七三八）、華嚴の師には、奈良大安寺の審祥（生没年不詳）がいる。慈訓にとって、同じ興福寺の玄昉は直接の師であった。玄昉は『続日本紀』天平十年（七四六）六月十八日の条に、その名の記載がある。そこには、靈龜二年（七一一）に入唐して、天平七年（七三五）に遣唐使の多治比真人広成に伴って帰国し、その際に、經典五千卷余りを請來したと記してある。また、玄昉より少し前に、道慈（生年未詳―七四四）が大宝二年（七〇二）に入唐し十六年間滞在して、その際にいろんな經典を収集していたと記述がある（『扶桑略記』第六）。韋諡の注釈書は、道慈又は玄昉によって請來された可能性が高い。このことから韋諡の活躍した年代は、おそらくは、八世紀前葉ごろではないだろうか。

第二節 遣唐使

舒明天皇二年（六三〇）に始まった遣唐使制度は、寛平六年（八九四）に停止されるまで、任命が二十回、実際に中国に渡ったのは、十五回であるという⁸⁰。この間、韋諡が導江県令に在職していたであろう開元年中（七一二―七四一）の期間中に派遣があったのは、玄昉、吉備真備及び阿倍仲麻呂の養老元年（七一七）出発、天平六年（七三四）帰国の回である。それより少し前には、大宝二年（七〇二）発、養老二年（七一八）帰国の道慈がいる。その後の派遣には、天平五年（七三三）出発した栄叡、普照、玄明、玄法、業行、理鏡などがある。この時は、戒律の師を求めて中国に渡ったが、この中で唯一普照が天平勝宝六年（七五四）に鑑真と帰国したのみである。また、この時の天平五年（七三三）の戻り船が菩提遷那、仏哲、道璿を載せて天平八年（七三六）に帰ってきている。しかしこの中において、『注涅槃經』が請来された可能性が高いのは、玄昉あるいは道慈ではないだろうか。道慈は、五千数巻の經典や注釈書を持ち帰ったとの記録があること、また、玄昉の場合は、弟子であった慈訓による韋諡の『注維摩經』の貸出し記録があるから、この二人の可能性が高いと推測できるのである。

また、石田氏は、中国における訳経や撰述はどの位の時間で日本に伝来するのかについて言及しており、最も短い期間は、訳著後七年ほどであり、長い期間のものでは二十三年であると表に示している⁸¹。よって、開元中の最後の年の七四一年から遅くても七六四年あたりには、日本で書写されていると考えられる。この期間は、後述する韋諡のもう一つの著作である『注維摩經』の貸出記録の年代である天平勝寶五年（七五三）に矛盾しない。おそらくは、『注涅槃經』も『注維摩經』も同じ時に日本に請来され、同じ時期に書写されたと考えられる。また、韋諡の『注維摩經』の貸出記録から、韋諡の注釈書は、ただその書が美しさで注目されたのみならず、注釈書としても注目されたことが言える。さらに言えば、貸出記録の一行目に、元曉の疏や慧遠の疏を差し置いて韋諡『注維摩經』が大きく書かれたことは、その注目度の高さがあつたことであろう。

⁸⁰ 河上麻由子『古代日中関係史―倭の五王から遣唐使以降まで』（中央公論社、二〇一九年）一四四―一四七頁。

⁸¹ 石田茂作『一九三〇』六十一―六十二頁。

道慈
702-
718

玄昉
716-
735

西暦	中國王朝暦	和暦	事項	備考
618	隋恭帝・義寧元年/唐高祖・武徳元年	推古二十六年	・五月に隋から唐高祖・武徳元年に変わる。 ・導江縣についての記述：「本漢郫縣地。武徳元年（618）于灌口置盤龍縣、尋改為灌寧縣。」（『元和郡縣志』三十二卷、9~10頁）	
619	唐高祖・武徳二年	推古二十七年	・灌寧縣から導江縣に改名 ・導江縣についての記述：「二年、又改為導江縣。」（『元和郡縣志』三十二卷、9~10頁）	
627~649	唐太宗・貞觀年中	推古三十五年~孝徳・大化五年	・導江縣についての記述：「貞觀中曰灌寧。」（『新唐書』（地理志）卷四二）	
702	唐中宗・嗣聖十九年/ 周則天武后長安二年	文武・大寶二年	・道慈入唐（『扶桑略記』第六）	
713~741	唐玄宗・開元年中 （開元一年~二十九年）	元明・和銅六年~ 聖武・天平十三年	復た導江縣に戻る ・導江縣についての記述：「開元中復為導江。」（『新唐書』（地理志）卷四十二）	韋諗が縣令になったのは、 713年以降。
716	唐玄宗・開元四年	靈龜二年	玄昉八月に入唐。（『扶桑略記』第六）	
718	唐玄宗・開元六年	養老二年	道慈大宰府に歸國（『続日本紀』卷八、卷十五）一説、養老元年（『扶桑略記』第六）	10月に
735	唐玄宗・開元二十三年	天平七年	四月に玄昉經論五千餘卷を請来し歸國（『続日本紀』卷十六）	遣唐使多治比真人廣成に伴って、經典五千卷余り請来。
736	唐玄宗・開元二十三年	天平八年	唐の道璿、菩提遷那・佛徹と共に来朝。（『延暦僧傳』道璿傳）	
744	唐玄宗・天寶三年	天平十六年	道慈没（『続日本紀』卷十五）	
746	唐玄宗・天寶五年	聖武十八年	玄昉没（『続日本紀』卷十六）	
753	唐玄宗・天寶十二年	天平勝寶五年	慈訓、韋諗撰『注維摩經』借り出し申請。（『正倉院古文書影印集成十七』）	
753	唐玄宗・天寶十二年	天平勝寶五年	鑑真ら来朝（12月）（『続日本紀』卷十九）	



第三節 慧琳『一切経音義』所収釈雲公「涅槃経音義」

音義とは、經典や漢籍の中に於いて難解や難読の語句及び多義語について、その発音及び意味を注釈した書物をいう。元々は、經典や漢籍の本文の間に割り注という形で書かれるものであったが、後にその注釈した中身のみを取り出して独立した書物となって現れた。字書や辞典と異なる点は、特定の經典或は書物に特化し、その中の語彙を解釈したもので、その書物に出てくる語句のみを収録した字典である。音義の「音」は文字通りその音の読み方を表わす。その表し方とは、ほか二字の漢字を組み合わせて、上の漢字の子音と下の漢字の母音を組み合わせることによってその発音を示す。そのことを反切という。例えば、東という字の反切は、「徳紅」で示すが、「徳」の子音の「と」と、「紅」の字の母音の「う」で、「東」の発音を表す。義は、その語彙の意味を解釈する部分を指す。簡潔な場合は、意味のみ書いてあるが、多くの場合は、『爾雅』などの字典から引用する場合がある。例をあげると、慧琳の『一切経音義』の序文では、慧琳の『一切経音義』に於いて使用された辞書が記されている。『一切経音義』巻一に、

大略以七家字書釋誼

七書謂玉篇、說文、字林、字統、古今正字、文字典說、開元文字音義。

15

大略そ七家の字書を以てその誼（義）を釈す

七書とは、『玉篇』、『說文』、『字林』、『字統』、『古今正字』、『文字典說』、『開元文字音義』を謂う。

『涅槃経』に関する研究が隆盛であったから、古写経目録などを見ると、多くの涅槃経音義が作られたことが確認できる。しかしながら、その現存は、慧琳の『一切経音義』と玄応の『一切経音義』（以下、「玄応音義」）のみである。

¹⁵ 『大正藏』五四、三二一下。

「玄応音義」は、『大唐衆経音義』又は、『一切経音義』とも言い、中国に現存する最古の仏典の音義である。その成立については、諸説あるが、大まかに六六三年までには成立したのではないかと推測されている⁹²。全二十五巻中、前の二十巻は、玄奘以前に翻訳された旧訳經典の音義であり、後の五巻は、玄奘によって新訳された經典の音義である。

『大唐大慈恩寺三藏法師伝』巻六に、

又有字學大德一人至、即京大總持寺沙門玄應。⁹³

（又字學大德一人有りて〔弘福寺に〕至る。即ち（西）京の大總持寺沙門玄応なり。）

また、『統高僧伝』巻四に、

沙門玄應、以定字偽。⁹⁴

沙門玄応、以て字偽を定む。

⁹² 諸説などについては、李乃琦氏によって、論じられているので、そちらを参照されたい。李乃琦「玄應音義に関する研究史と課題」『研究論集』十六巻、北海道大学文学研究科出版、二〇一六年、八六―八七頁。

⁹³ 『大正蔵』五〇、二五四上。

⁹⁴ 『大正蔵』五〇、四五五上。

とあることから、字を判別する専門家であったことがわかる。多くの玄奘の翻經にも関わっていたようである⁹⁵。既に周知されているように、慧琳の『一切経音義』は、「玄応音義」二十五巻を下地に、慧琳が作成刪定したものである。「玄応音義」が、そのまま包摂された点から見ても、慧琳の「玄応音義」への評価の高さが伺える。

玄応のほかに、慧琳は、重要な經典の音義に三人の音義を採用している。唐の慧苑（推定六七三―七四三⁹⁶）による「華嚴經音義」と、基（六三二―六八二）の「法花音訓」と、そして釈雲公（生没年不詳）の「涅槃經音義」である。

まず、慧苑の「華嚴經音義」についてであるが、慧苑は法藏（六四三―七一三）の「上首門人」と評された弟子でありながら、異端児と目され華嚴宗の相承系譜から外された人である⁹⁷。その為、多くの著作が散逸し現存するものは、「音義」の二巻と『刊定記』十五巻のみとなった。どんなにいい著作でも、その思想を受け継ぐ人がいないとやはり相承が途切れてしまう。韋諗にも同じことが起きたのだろうか。

次に、基の「法花音訓」についてであるが、「法花音訓」慧琳の『一切経音義』の巻二十七に収録されている。しかし、この収録された基の音義は、慧琳によって治定されたものである。改訂前の「法花音訓」は、釈中算の『妙法蓮華經釈文』に約三百箇所引用され、その元の姿を垣間見ることができる⁹⁸。

最後に釈雲公の「涅槃經音義」についてであるが、この人物もまた韋諗と同じように全く史料からその生涯に関する情報を見出すことができない。玄応、慧苑、窺基という三大学僧と並ぶ釈雲公、優れていなければ、慧琳によって採用されることもなかろう。音義を研究している周孜慧氏もその著書において、

除未詳雲公誰何外、諸法師皆爲唐朝兼通訓詁儒佛之高僧。⁹⁹

⁹⁵ 『大乘大集地藏十輪經』卷一〈序品〉「大總持寺沙門玄應正字」（『大正藏』一三、七二八上）『阿毘達磨大毘婆沙論』卷一、「大慈恩寺沙門玄應正字」（『大正藏』二七、五上）など。

⁹⁶ 浄法寺慧苑の推定在世年代。この推定は、坂本幸男氏によるものである。詳細は、坂本幸男『華嚴教學の研究』（平樂寺書店、一九五六年）六頁。

⁹⁷ 『開元釋教錄』卷九に、「沙門釋慧苑。京兆人。華嚴藏法師上首門人也。勤學無情内外兼通。華嚴一宗尤所精達。苑以新譯之經未有音義。披讀之者取決無從。遂博覽字書撰成二卷。使尋讀之者不遠求師而決於字義也。」（『大正藏』五五、五七一上）上

⁹⁸ 丁峰「窺基『法華音訓』原型考」『姜亮夫 蔣禮鴻 郭在貽先生記念論文集』（上海：上海教育出版社、二〇〇三年）一一九―一二八頁。

⁹⁹ 周孜慧『從中古音方言層重探「切韻」性質——「切韻」・「玄應音義」・「慧琳音義」的比較研究』（台北：國立臺灣大學文史叢刊、二〇〇五年）三二頁。

「詳細のわからない雲公以外、ほかの法師はみな、唐朝の訓詁・儒学・仏学を兼ねてよく通じている高僧〔慧琳、玄応、慧苑〕である。」と述べている。

「一切経音義」には「義注」の部分と、「音注」との部分がある。通常、熟語（二文字以上な形で）の形で掲出され、その下に反切に依る表記方法に続けて意味の解説及び他の辭典からの引用が記されている。經典に出てくる言葉を何らか法則や規則で整理して、その順番で並べる方式（字書体）と、藏經に含まれる經典に対して、經典に沿った順番で言葉を解釈していく（随函体）の二つの形に分かれているという^{100）}。

本稿で比較する「玄応音義」、及び「釈雲公音義」のいずれも随函体である。高田時雄氏によれば、「玄応音義」以前にも北齊の導慧の『一切経音』や隋の智騫の『衆経音』などの仏典の音義が存在したが、「玄応音義」のような大部の著作ではなかったとみられるという^{101）}。

「釈雲公音義」は、『慧琳音義』の卷二十五及び二十六に収められている。卷二十五は、『大般涅槃經』の卷一から卷十まで、卷二十六には、残りの卷十一から四十までの音義が収められている。撰者号には、「釋雲公撰 翻經沙門慧琳再刪補」とあることから、釈雲公の書いたものを慧琳が手を加えていることがわかる。なお、慧琳が手を加えたところは、その都度慧琳の名前が記されている。慧琳の「釈雲公音義」への評価を知るために、「釈雲公音義」の序文を読み解きたいと思う。

^{100）} 「字書体」及び「随函体」の名稱は、高田時雄氏が提唱された音義の附け方の形式である。（高田 時雄「玄應音義について」『日本古寫經善本叢刊第一輯 玄應

撰 一切経音義二十五卷〈解題篇〉』國際佛教學大學院大學學術フロンティア實行委員會、二〇〇六年、五頁）
^{101）} 前掲、四頁。

釋雲公撰『涅槃經音義』（慧琳撰『一切經音義』卷二十五所收）

【原文】

一切經音義卷二十五

開元二十一年壬申歲終南太一山智炬寺集

釋雲公撰 ¹⁰²翻經沙門慧琳再刪補

大般涅槃經音義卷上 ^{并序}

涅槃經者、北涼西主沮渠蒙遜、玄始三年、請天竺沙門曇無羅識法師、與沙門慧嵩・道朗等同譯也。法師初至、未閑漢語、三年習學、妙盡方言、辭辯如流、富於文藻、故此經文後人莫繼。法師所翻經夾唯有上祿。經既未足、再往于闐求本、三譯乃畢其功。至玄始十年、方得周備。乃是窮原之極教、最後之微言、髻裏明珠、金剛寶藏者也。竊謂經爲佛母。佛爲人師。法藉人弘、人唯法器、即三種般若文字居先、十二真詮、修多建首。譬以春池競寶、獲珠者必假安徐。依文習義會意者、須遵定教。比者、尋條以求本、沿波以討源。離按經文、素無定本。復覽諸家音義、梗概相傳。梵語未譯於方言。字體仍合於真偽。遂使挑 ¹⁰³挑渾於手木。悵帳亂於心中。牘草繁於果園、要點刪于寫富、修脩茲用飾脯、天乖悟寤同書、解眠翻覆。雲、匪量寡昧敬慕茲經、慮以三點不圓、八恒無趣。皮紙骨筆敢盡虔誠。冀握先王之刀、更訪新醫之乳。遂觀說文以定字。檢韻集以求音。訓詁多據玉篇、傳梵先資金簡。糅爲音義兩卷。用爲私記。時觀案篋、未敢流行。同意披詳幸無哂誚云耳。

大般涅槃經壽命品第一

〈慧琳云、雲公所製言、雖繁冗有似章疏。今取周備、不失經意。由勝諸家所音、此後南本涅槃三十六卷同用此音。音義、依雲公所製。唯陀羅尼及論梵字疎遠。不切者、慧琳今再依梵本翻譯。爲正覽者詳焉也。 ¹⁰⁴〉

〔校注〕

¹⁰² 『大正藏』脚注（大唐）＋翻【甲】頻伽精舍本。

¹⁰³ 挑「挑」の間違ひ。

¹⁰⁴ 大正藏五四、四六三上—中。

【訓讀文】

一切經音義卷二十五

開元二十一年（七三三年）^{じんしんとし}壬申の歲、終南の太一山智炬寺^{とし}に集めたり。

釋雲公撰す。翻經沙門慧琳再び刪補す。

大般涅槃經音義卷の上 ^{並びに序}

『涅槃經』とは、北涼の西主沮渠蒙遜^{そきようもうそん}、玄始¹⁰⁶三年（四一四）、天竺の沙門曇無羅識¹⁰⁷法師に請うて、沙門慧嵩・道朗等^{とも}と共に訳せり。法師初め至るも、未だ漢語を閑^{なら}わず。三年習學して、妙¹⁰⁸に方言¹⁰⁹を盡す。辭の辨ずること流るるが如く文藻^{ぶんそう}に富む。故に此の經文、後の

〔訳注〕

¹⁰⁵ 終南太一山智炬寺 終南山またの名を太一山ともいう。智炬寺は、後に宗密が住んだ寺として有名である。

¹⁰⁶ 玄始 北涼の年号。

¹⁰⁷ 曇無羅識 曇無識のこと。曇無羅識の用例は、わずかに隋灌頂の『大般涅槃經玄義』、『涅槃經玄義文句』、『一切經音義』のこの箇所と、宋の從義が撰した『金光明經玄義順正記』（卷上）及び『金光明經文句新記』（卷第一）に見られるのみ。

『大般涅槃經玄義』卷二「到西涼州、沮渠蒙遜割據隴後、自號玄始。其號三年、請曇無羅識、共猛譯五品得二十卷。」（『大正藏』三八、十四上）

『玄義文句』の文言は、『玄義』の引用文である。

『金光明經玄義順正記』卷一、「識師者、中天竺三藏法師曇無羅識、涼言法豐也。」（『卍新纂大日本統藏經』二十、三〇九中）

『金光明經文句新記』卷一、「據北涼姑臧郡、時中天竺三藏法師曇無羅識、或云曇摩識。涼云法豐、六歲出家、日誦萬言。初學小乘五明諸論後、遇白頭禪師教以大乘、十日交諍、方悟大旨、遂專大乘、明解呪術、所向皆驗、西城呼為大神呪師、來至北涼譯金光明經等。」（『卍新纂大日本統藏經』二十、三六九下）

¹⁰⁸ 妙 非常に上手に

¹⁰⁹ 方言 その土地のことば。

人繼ぐこと莫^なし。法師の翻する所の經來は、唯だ上祿有るのみ。經既に未だ足らざれば、再び干闥に往きて、本を求む。三訳し、乃ち其の功畢わる。玄始十年（四二一）に至りて、方に周備^{まさ}することを得。乃ち是れ窮原の極教¹¹⁰、最後の微言、髻裏の明珠¹¹¹、金剛の寶藏なるものなり。竊かに謂く、經は佛母爲り。佛は人師爲り。法は、人の弘を藉り、人は唯だ法器、即ち三種の般若¹¹²、文字を先に居し、十二の真詮¹¹³、修多¹¹⁴を、首に建つ。譬うるに、春池に、寶を競い¹¹⁵、珠を獲る者は、必ず安徐を仮るを以てす。文に依りて義を習い、意を会する者は、須らく定教に遵うべし。比者は、條を尋ねて以て本を求め、波に沿て以て源を討ぬ。經文を讎校¹¹⁶するに、素より定本無し。復た諸家の

110 窮原の極教 窮原＝窮源「探尋事物的本原」（物事の根源を探すこと）。『漢語大詞典』八卷四七〇頁、漢語大詞典出版社。

111 髻裏の明珠 法華一乗を髻中の明珠にたとえたもの。『法華經』に説かれる七喻の一つ。「安樂行品」に説くもので、『法華經』が經典の中でもっともすぐれたものであるために、佛が容易に説かなかったことを、転輪聖王がみずからの髻中の明珠を勲功のある兵士にしか与えないことに喩えたもの。『佛教語大辞典』（小学館）『大般涅槃經』卷三 壽命品 一、「世尊、譬如國王髻中明珠、付典藏臣、藏臣得已、頂戴恭敬、增加守護。我亦如是、頂戴恭敬、增加守護如來所説方等深義。何以故、令我廣得深智慧故。」（『大正藏』十二三八〇中）

112 三種の般若 『大乘義章』卷十「三種般若義。三種般若、出『大智論』。言般若者、是外國語、此翻名慧。於法觀達、目之為慧。慧義不同。一門説三。三名是何。一、文字般若。二、觀照般若。三、實相般若。此三種中觀、照一種是般若體。文字實相、是般若法。法體合説、故有三種。言文字者、所謂般若波羅蜜經、此非般若。能詮般若、故名般若。如『涅槃經』詮涅槃、故説為涅槃。此亦如是。又此文字、能生般若、亦名般若。如食生命、説食為命。言觀照者、慧心鑒達、名為觀照。即此觀照體、是般若、名觀照般若。」（『大正藏』四四、六六九上）

平井俊榮「三種の般若説の成立と展開」『駒澤大學佛教學部研究紀要』第四十一號、昭和五十八年三月、一七八―一九八頁。

113 真詮 真諦

114 修多…修多羅、經典のこと。

115 春池競寶、獲珠者、必假安徐。『大般涅槃經』卷二 壽命品 一、「譬如春時、有諸人等、在大池浴乘船遊戲、失琉璃寶、沒深水中。是時諸人、悉共入水、求覓是寶、競捉瓦石、草木、沙礫、各自謂得琉璃珠、歡喜持出、乃知非真。是時寶珠猶在水中、以珠力故、水皆澄清。於是大衆乃見寶珠故在水下、猶如仰觀虛空月形。是時衆中有一智人、以方便力、安徐入水、即便得珠。汝等比丘、不應如是修習無常、苦、無我想、不淨想等、以為實義、如彼諸人、各以瓦石、草木、沙礫而為寶珠。汝等應當善學方便、在在處處常修我想、常、樂、淨想。復應當知、先所修習四法相貌、悉是顛倒。欲得真實修諸想者、如彼智人巧出寶珠、所謂我想、常、樂、淨想。」（『大正藏』十二、三七七下 三七八上）

116 讎校 讎校（シュウコウ）相手と二人で書物を原本と比べて調べ、字句の誤りを正す。

音義を覽るも、梗概^二相い伝う。梵語未だ方言を訳さず、字體仍お真偽を含む。遂に挑桃^二の手術に渾じり、悵悵、心中を乱し、牘^二草、果園に繁く、要點、寫富に刪¹²⁰り、修¹²¹脩¹²²茲に¹²³用いて脯¹²⁴を飾り、天に垂いて悟寤¹²⁵同じく書すれば、解りと眠りとが翻覆せしむ。雲、寡昧¹²⁶を量らずに、茲の經を敬慕す。慮るに三點¹²⁷圓ならざるを以てすれば、八恒¹²⁸すれども趣¹²⁹く(ところ)無し。皮の紙骨の筆

117 梗概…(コウガイ)骨組みの意から、あらずじ。あまし。(古訓)梗概 オオムネ(觀名)。

118 挑…「桃」の間違い。原文を訂正した。「挑桃渾於手木」は、「挑」「桃」のように、手偏と木偏で混っている。「悵悵亂於心中」は、「悵」「悵」のように、心偏と巾偏で乱れている。ようするに、昔から字を写す時に、よく起こす間違いのことについて記述している。

119 牘…牘(部首、貝)に同じ。(動)おくる。(動)あます。(名)あまり。(副)あまつさえ。その上。すこぶる。

①ヨウ、物相増加す。送る、副う。物のあまり。②(漢シヨウ・ジヨウ)長し。ます。あまり。

120 刪(けずる)書物の不當な所や不要な部分をけずる。転じて書物を整った形にまとめあげる。

121 修(おさめる)資料を添削して編集し、すらりとした書物の形に整える。

122 脩(ほじし)肉をほして細長くさいたもの。

123 茲(古訓)カクノゴトク、ココニ。(動)しげる。(副)ますます。(指)ここ。ここに。これ。この。(接)すなわち。

124 脯(ほじし)蒸して平らに伸ばし、干した肉。脯脩(ホシユウ)干し肉。平らにのばしたものを脯、細い形をしているのを脩という。

125 寤の字、寐の間違いか。文の意味で取ると、ここでは、眠るという意味を指すのが正しいと思われる。寤(さめる)目がさめる。寐は、ねむるの意。

126 寡昧 寡(か)(形)すくない。昧(形)くらい。道理にくらい。謂知識淺陋、不明事理。(知識が浅く、物事のことわりをわからない。『漢語大詞典』)

127 三點(さんてん)法身、般若、解脱の三徳が不即不離であることをイ字の三點にたとえたもの。中村『佛教語大辞典』

128 八恒 ここでは、長い間の修行のことをさす。『法華文句記』に、発心とは、一佛が生まれた時代に遭遇した時に、一願を発し、それによって一粒の沙を置く。

それを、八恒の数まで積むことを指し、その時間のことを言う。『法華文句記』卷四 釋方便品、「言發心者、有云、値一佛發一願下一砂。縱值多佛、不發願者、亦不下砂。縱有發心、不見佛者、亦不下砂。見一佛、縱發多願、亦祇下一砂。一發心、見多佛、亦祇下一砂。如是積數、至八恒等、以明入位、初易後難故也。」「大正藏』三四、二三三中)

129 八恒無趣 八恒は八恒河沙のこと。八恒河沙は、『華嚴經探玄記』卷十九 入法界品三四、「又涅槃、供八恒佛、攝因位等。」「大正藏』三五、四六四下)『大般涅槃經集解』卷十五 四依品八、「經言、初地菩薩、供養微塵諸佛、豈當止八恒沙、便具十地。但說初依功德如此。餘三人不復待言也。性地解地、有三種慧、謂聞思修也。是有漏功德。各有三品。熙連河沙得下下聞慧。第八恒河得上上修慧。是為九品。有漏慧滿。過是得無漏。入初地也。未來護法之人。供養八恒河沙。始能宣說。恐有退者。以此勸之也。」「大正藏』三七、四三九中)

敢えて虔誠を盡す。冀わくば¹³¹先王の刀¹³²を握りて、更に新醫の乳¹³³を訪う。遂に『説文』¹³⁴観て以て字を定め、『韻集』¹³⁵を檢して以て音を求む。訓詁は多く『玉篇』に據る。梵を伝うることは、先に金簡¹³⁶に資¹³⁷る。糅して音義両卷と爲して、用いて私記と爲す。時に案¹³⁸篋を觀るに、未だ敢えて流行せず。同意¹³⁹披詳¹⁴⁰すれば、幸いに晒¹⁴¹誚¹⁴²すること無かれと云うのみ。

大般涅槃經壽命品第一

(慧琳云く、雲公の製する所の言は、繁冗¹⁴³と雖も章疏に似ること有り。今周備を取れば、經意を失わず。諸家の音する所に勝れたるが由に。此の後、南本涅槃三十六卷、同じく此の音を用ゆ。音義は、雲公の製する所に依れり。唯だ陀羅尼及び梵字を論ずるものは疎遠なり。切ならざるものは、慧琳今再び梵本に依りて翻訳す。正覽する者の爲に、焉を詳らかにするなり。)」

130 皮紙骨筆 『大般涅槃經』卷十四 聖行品 七、「迦葉菩薩白佛言、世尊、如佛所讚、大涅槃經猶如醍醐最上最妙、若有能服、衆病悉除、一切諸藥悉入其中。

我聞是已、竊復思念、若有不能聽受是經、當知是人、為大愚癡無有善心。世尊、我於今者、實能堪忍剝皮為紙、刺血為墨、以髓為水、折骨為筆、書寫如是大涅槃經、書已讀誦、令其通利、然後為人廣說其義。」(『大正藏』十二、四四九上)

131 冀 (副) ねがわくば。(動) ねがう。こいねがう。心でそうなつてほしいと思う。

132 先王の刀 不詳。

133 新醫の乳 『大般涅槃經』卷二 壽命品一、「譬如國王、闇鈍少智、有一醫師、性復頑騷、而王不別、厚賜俸祿、療治衆病純以乳藥、亦復不知病起根原、雖知乳藥復不善解、或有風病、冷病、熱病、一切諸病、悉教服乳……何者是我。若法是真、是真、是常、是主、是依、性不變易者、是名為我。如彼大醫善解乳藥、如來亦爾、為衆生故、說諸法中真實有我。汝等四衆、應當如是修習是法。」(『大正藏』十二、三七八上—三七九上)

134 『説文』 『説文解字』(せつもんかいじ) 後漢・許慎撰。永元十二年(一〇〇)に成立。後漢時代の字書。

135 『韻集』 『声類』より後に成立した早期古代韻書であり、西晋時代の呂靜の撰、すでに散逸している。逸文が若干引用され残されている。

136 金簡 (キンカン) ここでは、經典のことを指すか。黄金製のふだ。たいせつな手紙。『学研 漢語大辞典』一三六八頁。

137 質 (はかる) いろいろな意見を用意して相談すること。

138 案 (アン) つくえ。

139 同意 同じ心。又、心を同じくする。賛成。『大漢和辞典』同心、一心。意義相同、意旨相同。『漢語大詞典』ここでは、同じ志を持った人をさすか？

140 披詳 仔細審閲。詳細に読む。

141 晒 (わらう) 古訓 アサケル、アサワラフ、ワラフ。

142 誚 (せめる) せめてしかる。(そしる) いじわるく悪口を言う。

143 [宋・木十儿] 冗の異体字。(漢) ジョウ(呉) ニュ、むだ、あまり。繁冗 むやみに無駄が多い。

【日本語訳】

開元二十一年（七三三年）壬申の歳、終南の太一山智炬寺にて集めた。

釈雲公が著し、經典の翻訳僧の慧琳が再び訂正し補足した。

大般涅槃經音義上卷 ならびに序文

『涅槃經』とは、北涼の西主沮渠蒙遜が、玄始三年（四一四年）に、天竺の沙門曇無羅識法師にお願いして、沙門慧嵩・道朗等と共に訳させたものである。法師が（中国に）至った初めの頃、まだ漢語を習っていなかった。三年（間）学んで、非常に上手にその土地の言葉を極めた。ことばが（川の）流れのように巧み¹⁴⁵で、文を作る才能に富んでいた。そのため、この經文は、その後に継ぐ人がいなくなった。法師の翻訳した經夾は、唯だ上秩有るのみであった。經典が足りないもので、再び干闥に赴いて經典を求めた。（それを）三度訳して、ようやくその事業がおわった。玄始十年（四二一年）になって、ようやく周到に準備することができた。すなわち、これが龜原の極教、（世尊の）最後の微言、髻裏の明珠、金剛の宝蔵になるものである。ひそかにこのように思う。經典は、仏母であり、仏は、人の師である。仏法は、人を介して弘められ、人は、ただ佛法を載せて（運ぶ）器にすぎない。つまり、三種の般若とは、まず文字（般若）、十二部經である經典が最初に來るものである。たとえて言うなら、春の池の中で、宝さがしの競争をする時に、宝の珠をとる人は、必ず落着いてゆつくりとしなければいけない。文に依ってその意味を習い、意義を理解する者は、必ず定まった教えに遵うべきである。このごろの人たちは、枝先¹⁴⁶を探すことでその本を求めている。（また、うわべの）波に沿って、それで根源を探索しようとしている。經文を校訂するのに、最初から定本がない。また諸家の音義を見るにしても、大体のところは、お互いに引用しあっている。梵語（の部分）は、まだ中国語に訳していない。字の形も、まだなお正しいかどうかの判断が難しい。遂には、挑と桃の手（偏）と木（偏）が渾じり、悵と帳は、立心偏と巾偏が乱れ、余計な草冠が、果園に繁く、必要な点は、写や富にはなく、修と脩をここに使って、脯（干した肉）を修飾して、天に垂いて悟と寤とを同じく書くと、解りと眠りとがひっくり返る。私、雲は、自分の知識の無さを考えずに、この涅槃經の經典を敬い慕いしている。思うに、法身、般若と解脱の三点が円満でなければ、八恒という長い時間の間（修行したとしても）趣く所がない。皮の紙骨の筆をもって思い切って誠心を盡す。願わくば、先王の刀を握って、更に新しい医者¹⁴⁷の乳（藥）を訪ねよう。そこで『説文』を觀て字を定め、『韻集』を調べて発音を求めた。訓詁の多くは『玉篇』

144 辭辨（べんじ）巧みなことば。ここでは、動詞的な使い方と同じ意味にとった。

145 條（えだ）木の細長い枝。

に拠る。梵語を伝えるために、先に經典（を見て、それに）則った。まとめて音義二巻とし、個人的に使用するものにした。時々机の上の（本の）箱を覗ては、まだに（これを）流通させることができないでいたが、同じ志をもつものに披露して、幸いなことに笑われたり責められたりされなかったとだけ（ここで）言おう。

大般涅槃經壽命品第一

（慧琳が言うには、雲公の造った音義は、煩雜で冗長であり、註釋書のようなものである。今（削らないで）、その經の意味を失うことのないようにする。なぜなら、諸家の音義より勝れているからである。この後、南本涅槃三十六巻も同じようにこの音義を使用している。音義は、雲公が書いたものに依る。唯だ陀羅尼及び梵字について論じるところについては、（雲公は、）詳しくない。（反）切にならないものは、慧琳今再び梵本に依って翻訳する。正しく覽る者の爲に、これを詳細に明らかにした。）」

以上「釈雲公音義」の序文について見てきた。「釈雲公音義」は、開元二十一年（七三三）に、終南の太一山智炬寺にて釈雲公によって著されて、慧琳によって訂正された上で、わざわざ採用されている。しかしながら、慧琳本人が言うように、音義の部分は、「音義、依雲公所製」釈雲公に依る、とある。また、「唯陀羅尼及論梵字疎遠。不切者、慧琳今再依梵本翻譯。」釈雲公は、陀羅尼及び梵字に疎いので、適切でないものについては慧琳が手を加えている、とも述べている。慧琳が直した箇所では、慧琳の署名がある。ここで注目すべきことは、慧琳が、釈雲公の音義の部分は注釈書のように長いとしながらも、その文の意味を損ねることのないよう、釈雲公が書いた音義の部分は削らない、としたことである。その理由は、他の音義よりも優れているからであるとしている。その証拠に、南本大涅槃經も「釈雲公音義」に依拠していると述べている。この慧琳の序文から、慧琳は、「釈雲公音義」に対して、多大な評価をしていることが伺える。

『注涅槃經』における韋諗の「音注」であるが、卷二全体が七〇二行あるのに対して、「注」の箇所は全体で、四二〇箇所ある。卷十二は、全体が六二二行あるのに対して「注」の箇所は、二二五箇所、その中で、卷二及び十二の音に対する注が十四箇所ある。その十四箇所のうち、「釈雲公音義」の注と一致するのは、七箇所存在する。ダブルカウントになるが、「玄応音義」と一致するものが七箇所、「釈雲公音義」・「玄応音義」の両方とも一致しない所が、六か所のみ存在する。「釈雲公音義」にだけ一致するところが一か所ある。一か所だけであるが、その意味するところは大きい。韋諗が「釈雲公音義」を参照したとするならば、これによって、撰述年代の絞り込みが七二一年から七五三年の間へと一層狭まることになるであろう。「釈雲公音義」の序には、その著述年代が記されている。

次に韋諗の音注を「玄応音義」と「釈雲公音義」とで比較してみよう。

参照：別表（韋諗撰『注大般涅槃經』（卷二・十二）中にみられる音義注と「玄応音義」・「釈雲公音義」との比較表）

以上の結果を踏まえて、韋諗は、『注涅槃經』を撰述した時、おそらく「玄応音義」と共に、「釈雲公音義」を参考したのであろう。

「釋雲公音義」については、詳細がわからず、先行研究も見当たらない。しかしながら、後代では無名の釋雲公の音義を、慧琳は、窺基と慧苑の音義と共に選んでいる。このことに注目しなければならない。

韋諗撰『注大般涅槃經』(卷二・十二)中に見られる音義注と玄応音義・雲公音義との比較

No.	韋諗撰 『注涅槃經』	玄應音義(成立663年頃か、諸説あり) 慧琳音義引用文(大正藏古写経本)・(七寺藏本、金剛寺藏本)	雲公音義(733年成立)	同異	親字 (中古音)
1	藐音彌略反	該当なし	藐字、依梵音應作彌略反。(注1)	=雲公	藐 mieu(mbieu)
2	鐫音古玄反	鐫除 古玄反 方言南楚疾愈謂之鐫。『郭璞』云、鐫、除也。(注2)	鐫除(上古玄反。『郭璞』曰、鐫除也。)(注3)	=雲公	鐫除 (-)
3	漂音偏妙反	漂疾、芳妙反。漂猶流急也。(注4)	其水澍疾(漂、疋要反。水流急也)。水不能漂(匹遙反。激也。『經』有作溺義。通用有作濡、非此義也。)(注5)	未詳	漂疾 (p'ieu)
4	鼈音魚袁反	鼈虺 魚袁反。下、渠周反。鼈、大龜也。廣疋有角、曰虺龍。『熊氏瑞應圖』曰、虺龍。黑身無鱗甲。『淮南』云、女媧之時、服應龍驂、青虺是也。(注6)	鼈鼈(上魚袁反。『玉篇』曰、似鼈而大。鼈音、徒多反。『山海經』云、江水足鼈。『郭璞』曰、形似蜥蜴。大者、長一丈、又有鱗。取皮可以為鼓也。)(注7)	=雲公	鼈鼈 (kiui)
5	駭音五駭反	驚駭 胡駭反。『蒼頡篇』駭亦驚也。『廣疋』駭-人+(火-(班-珪))』、起也。(注8)	癡駭(五駭反。『玉篇』無知也。仡仡也。仡音、魚乞反。)(注9)	=雲公	癡駭 (ηai)
6	胲音古才反	腦胲依字、『說文』古才反。足、大指也。恐非今用。案字義、宜作解音、胡賁反。謂腦解也。案『無上依經』解三十二相中、二如來頂骨無解是也。諸經中作頂骨、堅實同一義也。或古字耳。(注10)	腦胲諸脉。(胲、古來反。『玉篇』云、足大指也。謂分段之身。極上為腦、極下為胲。血肉所及、皆有其脉。腦外是髮、胲外是甲。此中無脉、故以簡之。舊音以為、胡賁反呼。為骨者、全非經意也。)(注11)	=玄応	胲 (-)
7	膾音時充反	膾骨或作[跳-兆+專]、同時究反。『說文』膾、腓腸也。字從肉端聲。(注12)	膾骨(時究反。『說文』腓腸也。扶非反。膾即腸也。或作[跳-兆+專]字用亦同。)(注13)	=雲公	膾 (-)
8	髕音口丸反	髕骨或作臑同。口丸反。埤蒼臑尻也。『說文』臑髕上也。(注14)	髕骨(口丸反。埤蒼臑尻也。或作臑字用同。)(注15)	=雲公 =玄応	髕骨 (-)
9	瞋音舜	視[日*寅]『列子』作瞬。通俗文作瞬、同尸閏反。『說文』瞋目開闔數搖也。『服虔』云、目動曰、瞬也。』(注16)	視瞋(尸閏反。『玉篇』云、目動也。『列子』作瞬。通俗文作瞬、音縣並同。)(注17)	未詳	瞋[juēn (瞬[juēn 舜[juēn 瞬[juēn)
10	蜚螫 上音哲 下音壑 (カク)	蜂螫 舒赤反。『說文』虫、行毒也。關西行、此音又呼各反。山東行、此音、蛆知列反。東西通語也。蜚字與蛆同。知列反。虫、螫也。又作哲也。又作哲了也。智也。二形並非經旨。 「蜂螫 舒赤反。『說文』虫、行毒也。關西行、此音又呼各反。山東行、此音、坦知列反。東西通說也。』(七寺藏本)「蛆知列反。東西通語也。』(金剛寺本) (注18)	螫蠱(螫音芳福反三蒼云螫蛇也色如綬帶有牙最毒江已北名虺音虛鬼反蠱螫也經誤為蝎字此音胡葛反是木中蟲非此義)。 蜂螫(蟲行毒也一音尸赤反是關西音也又音呼各反山東音也又作蛆字知列反東西通用也)。 瘴言厲勝而難差也經文作蜚字與蛆同知列反謂蟲螫也又作哲字智也此之兩字並非經意。)(注19)	未詳	蜚螫(てつせき) (jiek hak)
11	剖音普後反	「開剖 普厚反。剖、猶破也。『蒼頡篇』剖、析也。『說文』剖、判也。』(注19)	開剖(普目反。析也、開。)。開剖(普厚反。上聲破也。『蒼頡篇』判也。析也。分也。)(注21)	未詳	剖 (p'ieu)
12	駿音惣公反	「駿馬 子閏反 馬之美稱也。『說文』駿馬之才、良者也。』(注22)	「駿馬(尊迅反。『說文』云、駿為馬之才、良者也。有音、思閏反、非。)」(注23)	未詳	駿 (tsiuēn)

第四章 『注大般涅槃經』の文献的特徴

第二節 注釈文の翻刻

この章では、韋諡の語彙へのこだわりからその注釈的特徴をみてみたいと思う。韋諡の注釈の特徴を見る前に、現存する巻二及び巻十二の韋諡注釈文の全文及び図鑑掲載写真に見られる部分の注釈文の翻刻を行った。また、巻第二に対して訓読を施し、本文の下に訓読文を付記する。その後、この中に見られる特徴を述べていきたい。なお、本論攷中にて引用した巻十二及び巻十四の一部分について、同じく訓読を施した。巻十二注釈文全体の訓読及び校注については、次の課題にしたい。

【凡 例】

- 一、行の最初の番号（例、12）は、通し番号である。
- 二、通し番号の次の番号は、筆者による『注涅槃經』各巻の行番号である。
- 三、同じ行に数か所の注がある場合もあるので、その時は、同じ行番号となっている。
- 四、翻刻に際して、自体は概ね正字に改めた。原文が現行漢字の異体字である場合は、翻刻文は現行漢字で示し、原文の字は、脚注に記すこととする。

【韋諗注集成 卷二篇】

【通し
番号】 【注經行
番号】

【『注涅槃經』注釈文】

1. 3 此第二成就種性遣執分。純陀、法身大士也。
以本願故、現生工巧之家。
2. 5 捨即坐之威儀。崇請法之容止。
3. 6 表心無二也。
4. 8 請受施者、爲度衆生、非敢自利。
5. 10 佛是衆生法主。今若涅槃、則無所趣。
6. 11 無法利人曰貧。無德自養爲窮。
生死迫切名飢。流轉艱勞是困。
7. 12 食謂常果也。
8. 13 不設供具而請受者、見上諸人所獻弗納故、
先啓佛然後辨之。
9. 14 王種也。
10. 14 淨行者也。
11. 14 若今之官長也。
12. 14 農夫之類也。
13. 15 況無出世之善也。
14. 15 捨生死之本居、趣涅槃之他國。
15. 16 喻修出世之行。
16. 17 志不迂曲也。
17. 17 鹵鹹土也。喻不生邪見及餘煩惱。

【訓読文】

- 此れは第二に成就種性遣執分なり。純陀は法身の居士なり。
本願を以ての故に、生を工巧の家に現ず。
捨は即ち坐の威儀なり。崇は法を請うの容止なり。
心に二無きを表わすなり。
施しを受けるを請うは、衆生を度せんが爲にして、敢えて自らを利するに非ず。
仏は是れ衆生の法主なり。今若し涅槃すれば、則ち趣く所なし。
法の人を利すること無きを貧と曰う。徳の自ら養うこと無きを窮と爲す。
生死迫切するを飢と名づく。流轉艱勞は是れ困なり。
食は常果を謂うなり。
供具を設けずして受くるを請うは、上の諸人の所獻を納めざるを見るが故に、
先ず仏に啓して然る後に之れを弁（そな）う。
王の種なり。
淨行者なり。
今の官長の若きなり。
農夫の類なり。
出世の善無きに況うなり。
生死の本居を捨て、涅槃の他國に趣く。
出世の行を修むるを喩う。
志は迂曲ならざるなり。
鹵は鹹き土なり。邪見及び余の煩惱を生ぜざるを喩う。

18. 1 8 世尊若許、則法牙得生、猶如衆苗希雨一潤。

世尊若し許せば、則ち法牙の生ずることを得ること、猶お衆苗の雨の一潤を希うが如し。

19. 1 9 況身口七支也。

身口の七支を況うるなり。

20. 2 2 譬常教也。

常教を譬うるなり。

21. 2 5 希佛神力令得充足。

仏の神力もて充ち足るを得しめんことを希う。

22. 2 6 觀純陀之請意有兩種。一、請受供。

純陀の請を觀るに意に兩種有り。一に、受供を請う。

二、請說法。求將來食者、

二に、說法を請う。將來の食を求むるは、

請受供也。希天雨者、請說法也。

受供を請うなり。天雨を希うは、說法を請うるなり。

23. 3 0 許施其常、是爲法雨。

其の常を施すことを許すは、是れ法雨が爲になり。

24. 3 2 食者、得五利、故施人獲五果。

食とは、五利を得るが故に、施す人は五果を獲。

25. 3 3 一者、初施得菩提。二者、後施入涅槃。

一には、初施は菩提を得。二には、後施は涅槃に入る。

施因不同、故云二也。俱獲常果、是則無差。

施因は異なるが故に、二と云うなり。俱に常果を獲。是れ則ち差無し。

26. 3 5 藐音、彌略反。

藐の音、彌略の反なり。

27. 3 6 受不擇貴、示平等也。

受くるには貴きを択ばざるは、平等を示すなり。

28. 3 6 由其施因、得成佛果。

其の施因に由りて、仏果成ずることを得。

故行施之人、具足檀度。

故に施しを行ずる人は、檀度を具足す。

29. 3 8 世尊以二施田等、純陀以二施田別。

世尊は二つの施田を以て等しとし、純陀は二つの施田を以て別とす。

由田不同、故生疑也。

田は不同に由るが故に、疑を生ずるなり。

30. 4 0 菩提樹下、未成正覺。故知初施、非勝田也。

菩提樹下、未だ正覺を成ぜず。故に初施は勝田に非ざるを知るなり。

31. 4 1 既非勝田、熟能令具。

既に勝田に非ざれば、熟んぞ能く具せしめんや。

32. 4 3 田既不同、果必有異。

田は既に同じからざれば、果は必ず異有り。

33. 4 4 未得聖果。

未だ聖果を得ず。

34. 4 4 諸天望佛、猶人望天、故曰天中天也。

諸天の仏を望むること、猶お人の天を望むるがごときが故に、

35. 4 5 資飯食故。
36. 4 5 煩惱所依故。
37. 4 6 生死有邊故。
38. 4 6 有生滅故。
39. 4 7 非煩惱所依故。
40. 4 7 不可壞故。
41. 4 7 法性身故。
42. 4 8 無生滅故。
43. 4 8 離有邊故。
44. 4 9 初施非佛、後施是佛。
佛與非佛、二果不同。
- 云何說言、二因之報、等無異也。
45. 5 1 眼非是肉、以依肉成、故云肉眼。
46. 5 1 此眼是證實無分別慧也。
47. 5 2 證無相慧也。
48. 5 4 先受施時、未能備善。後受施時、
已得具足。而言二施無差、故興此難。
49. 5 8 先受而食、於身有用。
後受不食、於身無用。
先後有殊、理在無惑。
今云不別、故疑難生焉。
50. 9 1 資身之身、非如來也。

天中天と曰うなり。
 飯食を資くるが故に。
 煩惱の依り所なるが故に。
 生死は有辺なるが故に。
 生滅有るが故に。
 煩惱の所依に非ざるが故に。
 不可壞なるが故に。
 法性身の故に。
 無生滅の故に。
 有辺を離るるが故に。
 初施は仏に非ず、後施は是れ仏なり。
 仏と非仏、二果は同じからず。
 云何んが説いて言わく、二因の報いは、等しくして異無きなりと。
 眼は是れ肉に非ず、肉に依りて成ずるを以ての故に、肉眼と云う。
 此の眼は是れ実にして、無分別慧を証するなり。
 無相の慧を証するなり。
 先に施しを受くる時、未だ善を備うることを能わず。後に施しを受くる時、
 已に具足することを得。而して二施に差無きを言うが故に、此の難を興す。
 先に受けて食して、身に於いて有用なり。
 後に受けて食せず、身に於いて無用なり。
 先と後に殊り有り。理は、無惑に在り。
 今別ならずと云う、故に疑難生ずるなり。
 身を資くるの身は、如來に非ざるなり。

51. 69 夫見性者、乃是照理之極。

豈可以食身而見之乎。

苟見食身、則知非實。

今昔皆爾、故二施無差。

52. 68 成佛・涅槃俱破四魔。始終平等、故無二也。

53. 71 說與不說、但爲待緣。久已通達、故云不異。

54. 73 純陀以五事有殊、而生二見。

世尊以五事果同、說爲一相。

何以故。如來成佛已無量劫故。

然則前施後施俱是化佛。

施佛不殊、故無二也。

55. 75 此二女人是姊妹也。初成佛時、

受女人施。臨涅槃時、受丈夫施者、

爲表内外二德也。

内徳如女取其順柔。

外徳如男表其剛正。

56. 78 樹下成佛、是權不食。

後施是實。權實雖殊、而不食一也。

57. 84 今所解義、契昔嘉名。

名實相稱、故共讚之。

58. 85 昔於迦葉佛時、發斯誓願。

夫れ見性とは、乃ち是れ理を照らすの極みなり。

豈に食身を以て之れを見可けんや。

苟しくも食身を見れば、則ち実非ざるを知る。

今昔皆な爾るが故に、二施に差無し。

成仏・涅槃は、俱に四魔を破す。始終平等なるが故に、無二なり。

説と不説は、但だ縁を待つが爲なり。久しく已に通達するが故に、不異と云う。

純陀は、五事に殊り有るを以て、二見を生ず。

世尊は、五事の果同じきを以て、説きて一相と爲す。

何を以ての故に。如來は成仏して已に無量劫なるが故なり。

然れば則ち前施後施は俱に是れ化仏なり。

仏に施すこと殊ならざるが故に、無二なり。

此の二りの女人は、是れ姊妹なり。初成仏の時、

女人の施しを受く。涅槃に臨む時、丈夫の施しを受くるは、

内外の二徳を表すが爲なり。

内徳は女の其の順柔を取るが如し。

外徳は男の其の剛正を表すが如し。

樹下成仏は、是れ權にして食さず。

後施は是れ実なり。權實は殊なりと雖も、不食は一なり。

今解する所の義は、昔の嘉名に契い、

名実相あい称かなうが故に、共に之れを讚う。

昔、迦葉仏の時に於いて、斯の誓願を發す。

今得最後供養、故云満足。

59. 8 6 具檀之利、爲無上也。

60. 8 7 輪王出世、此花乃現。

61. 9 0 南無此言歸命。

62. 9 5 同以大悲爲心也。

63. 9 8 他化自在天是欲界頂、魔王波旬都處也。

心超其境、故共歎之。

64. 1 0 4 承聲告滅、事同卒喪。

聞答五難、譬如劫蘇。

65. 1 0 6 彌音古玄反。

66. 1 1 0 自欣見佛、得離四趣。

67. 1 1 2 謂三有之頂也。

68. 1 3 3 止所請也。

69. 1 3 5 應身是有、名佛境界。隨化示滅、故曰無常。

五蔭遷流、名爲諸行、亦同佛化、故云如是。

70. 1 4 2 求其性相、不可得故。

71. 1 4 4 過患多也。

72. 1 4 6 扼縛況煩惱、癰瘡喻苦報。

73. 1 4 9 有謂有身之有也。如來久已無有。

今、最後の供養を得んが故に、満足と云う。

檀具うるの利は、無上と爲すなり。

輪王は世に出づれば、此の花は乃ち現わる。

南無は、此には歸命こつめいと言う。

同じく大悲を以て心と爲すなり。

他化自在天は是れ欲界の頂、魔王波旬の都の処なり。

心は其の境を超ゆるが故に、共に之を歎ず。

声を承けて滅を告ぐるは、事、卒に喪うに同じ。

五難を聞答するは、譬うれば劫蘇るが如し。

彌の音は、古玄の反なり。

自ら欣びて仏に見え、四趣を離るることを得。

三有の頂を謂うなり。

請う所を止むるなり。

応身は、是れ有にして、仏の境界と名づく。化に随い滅を示すが故に、

無常と曰う。

五蔭遷流するを、名づけて諸行と爲し、亦た仏の化に同ずるが故に、如是と云う。

其の性相を求むるに、得る可からざるが故なり。

過患多きなり。

扼縛は煩惱を況え、癰瘡は苦報を喩う。

有は有身の有を謂うなり。如來は久しく已に有ること無し。

而今捨身。此明非滅、而現滅也。

74. 150 度三有之河、至涅槃之岸。

75. 151 有有即有苦、無有即無苦。

無苦之極、是名妙樂。

76. 156 既有化生、理宜化滅。

77. 161 習道未久、名曰幼年。

始悟常理、是初出義。

78. 165 飢渴之人、必不變吐。

喻如來常住則本願滿足。

79. 170 小乘法中、以佛是有為諸行所攝。

若觀性相無常、而佛色身、終歸壞滅。

80. 171 由觀無常、知法無性、故能具足空三昧也。

81. 172 汝當觀行無常無性無相、

不應勸佛久住於世。

82. 174 如來者、乘如實來。所乘既實、

果必是真、故非行也。

83. 175 天人之行是行。世尊出過於天、

豈同諸天是行也哉。

若是行者、便為生滅、非正行也。

而して今捨身す。此れは滅に非ずして、滅を現ずることを明かすなり。

三有の河を度り、涅槃の岸に至る。

有有るは即ち苦有り、有きは即ち苦無し。

無苦の極みは、是れ妙樂と名づく。

既に化生有れば、理は宜しく化滅すべし。

道を習うこと未だ久しからざるを、名づけて幼年と曰う。

始めて常の理を悟るは、是れ初出の義なり。

飢渴の人は、必ず変吐¹⁴⁶せず。

如來常住すれば、則ち本願満足するを喻う。

小乘法の中、仏は是れ有為諸行の摂する所なるを以てなり。

若し性相の無常を觀ぜれば、而して仏の色身は、終に壞滅に歸す。

無常を觀ずるに由りて、法に性無きを知る。故に能く空三昧を具足するなり。

汝は当に行の無常・無性・無相なるを觀ぜべし。

応に仏に久しく世に住まることを勧めざるべし。

如來とは、如実に乗じて來たる。乗ずる所は既に実なれば、

果は必ず是れ真なるが故に、行に非ざるなり。

天人の行は、是れ行なり。世尊は、天を出過す。

豈に諸天に同じく是れ行ならんや。

若是^もし行ならば、便ち生滅と為し、正行に非ざるなり。

¹⁴⁶ 変吐…捨てるの意。『阿毘達磨大毘婆沙論』卷十四「未變吐者、未棄彼得。」（『大正藏』二七、六七中）『阿毘達磨發智論』卷二十「恒希望變吐者、希望有二。

一、希望財位。二、希望壽命。彼阿羅漢於此二種已斷遍知、故名變吐。即是棄捨恒希望義。」（『大正藏』二六、一〇三〇下）

84. 178 非想之天、壽八萬劫、

況佛之命而不長也。

85. 185 不知而說、是爲妄語。

若必知常、則不應說。

86. 186 責以常爲無常也。

87. 188 況衆生也。

88. 188 喻如來也。言衆生能感佛出世故。

89. 189 謂能摧四魔也。

90. 191 以四事供養也。

91. 193 藝謂無爲功德也。

92. 198 衆生感佛、來至三界故云生子。

93. 199 文殊說佛是無常也。

94. 200 家謂法性也。若佛非有爲、

則佛從法性家生、

是法真子、堪任紹繼法王家也。

若是有爲、則與法性相背、

非法真子、故曰不住。

95. 205 唯證乃悟耳。

96. 207 女況行人也。闕之妙理、

喻無居家、遠離善人、非有救護。

97. 208 煩惱是病苦、無法爲飢渴。

98. 209 丐亦乞也。尋師請道、行乞之象。

非想の天は、寿、八万劫なり。

況んや仏の命は而も長ならざらんや。

知らずして説くは、是れ妄語と爲す。

若し必ず常を知れば、則ち応に説くべからず。

常を以て無常と爲すを責むるなり。

況んや衆生をや。

如來を喩うるなり。衆生の能く仏の出世を感ずと言うが故なり。

能く四魔を摧するを喩うるなり。

四事を以て供養するなり。

芸は無爲功德を謂うなり。

衆生は仏を感じて、三界に來たり至るが故に、生子と云う。

文殊は、仏は是れ無常なりと説く。

家は法性を謂うなり。若し仏は有爲に非らざれば、

則ち仏は法性の家從り生まれ、

是れ法の真子、法王の家を紹繼するに堪任するなり。

若是し有爲なれば、則ち法性と相背き、

法の真子に非ざるが故に、不住と曰う。

唯だ証すれば、乃ち悟るなり。

女は行人を況^{たと}うるなり。これが妙理を闕くは、

居家無く、善人を遠離し、救護有るに非ざるを喩う。

煩惱は是れ病苦にして、無法を飢渴と爲す。

丐は亦た乞なり。師を尋ねて道を請うは、行乞の象なり。

99. 209 夫教有權捫之義故、

以大乘方諸逆旅。

100. 210 起解名生、紹佛爲子。

101. 210 謂化佛也。

102. 211 教之捨鈴、令求實故。

103. 211 入理不深也。

104. 212 持解喻携抱。廻向名欲至。

將趣佛果爲他國。

105. 213 正修行時、名爲中路。

觸對塵境、是遇風雨。

起惡招報、名寒苦也。

106. 214 啖食況惡友害善也。

107. 215 漂音偏妙反。

108. 216 中遇二乘、況經恒河。

持解求出、喻抱兒渡。

爲小所勸、名水漂疾。

守解莫從、如不放捨。

109. 217 以身殉法、俱沒之狀。

夫れ教に權捫の義有るが故に、

大乘を以て諸^{これ}を逆旅に方^くぶ^{147°}。

解を起すを生と名づけ、仏を紹ぐを子と爲す。

化仏を謂うなり。

教の捨鈴、実を求めしむるが故なり。

理に入ること深からざるなり。

持解は携抱を喻う。廻向は至らんと欲すを名づく。

將に仏果に趣かんとするを他國と爲す。

正しく修行する時を、名づけて中路と爲す。

觸の塵境に對するは、是れ風雨に遇う。

惡を起こし報を招くは、寒苦と名づくるなり。

啖食は、惡友の善を害するを況うるなり。

漂の音は、偏妙の反。

中に二乘に遇うを、恒河を経^ふねを況う。

解を持し出を求むるは、兒を抱きて渡るに喻う。

小の勸むる所と爲るを、水の漂疾と名づく。

解を守り從わざるは、放捨せざるが如し。

身を以て法に殉ずるは、俱に没するの狀なり。

110. 218 慈念況護法、梵天喻解脈。

慈念は、護法を況え、梵天は解脈¹⁴⁸を喩う。

111. 220 應化二身、有常無常、

応・化の二身に、常・無常有るは、

蓋諸佛方便利生之教也。

蓋し諸仏の方便利生の教えなり。

若説同諸行、是違常教。

若し諸行に同じと説けば、是れ常教に違う。

若説不同諸行、違無常

若し諸行に同じからずと説けば、無常の教えに違う。

教。護正法人、不當説

言同不同也。

112. 223 方便是有爲、真諦は無爲。

方便は是れ有爲、真諦は是れ無爲、

二法相依、不可言定。

二法相依し、定と言う可からず。

113. 224 談真不言俗也。

真を談じ俗を言わざるなり。

114. 228 説同有爲、是謗佛也。

有爲に同じと説くは、是れ仏を謗るなり。

115. 230 女以慈故生天、人以不謗得解。

女は慈を以ての故に、天に生ず。人は、謗らざるを以て解を得ん。

116. 234 起修長久、是曰遠行。

修を起こすこと長久なるは、是れ遠行と曰う。

以中疲廢故、名爲疲極。

中ごろ疲廢するを以ての故に、名けて疲れ極まると為す。

117. 235 退住小乘、名爲寄止。

退いて小乗に住するを、名づけて寄止と為す。

二乘所居、是爲他舍

二乗の居する所は、是れ他舎と為す。

118. 236 喻大解未發也。

大解の未だ発らざるを喩うるなり。

119. 236 火況無常也。聞説無常燒諸世間、

火は無常を況うるなり。無常の諸世間を焼くを説くを聞くは、

義同卒起。

義は卒かに起くと同じ。

120. 237 覺知無常、爲驚寤。

無常を覺知するを、驚寤と為す。

¹⁴⁸ 解脈…脈を知る。『摩訶止観』卷五に、「良い医者が、薬や病を詳しく區別して、（患者の）身体や声そして脈の様子を分析して薬を与えると違いが出るように…」とある。「譬如良醫精別藥病、解色解聲解脈逗藥即差。有命盡者亦不能起死。若不解脈醫問病相依語作方、亦挑脫得差。」（『大正藏』四六、五六下）

漸識權教、名思惟。

漸く權教を識るを、思惟と名づく。

121. 2 3 8 憂慮佛身、爲嚴教所隱、故言必死。

仏身を憂慮して、嚴教の隠す所と爲るが故に、必死と言う。

122. 2 3 9 佛現無常、有類身醜、

仏は無常を現じ、有類の身は醜く、

恥佛無常、故名慚愧¹⁴⁹。

仏の無常なるを恥ずるが故に、慚愧と名づく。

說佛真常、隱佛無常、是曰纏身。

仏の真常を説きて、仏の無常を隠すは、是れ纏身と曰う。

123. 2 4 0 護心至死名爲終也。

心を護りて死に至るを、名けて終と爲すなり。

124. 2 4 0 須彌山上有三十二天、

須彌山上に、三十二の天有りて、

爲忉利天王之輔臣。

忉利天王の輔臣と爲す。

125. 今言生忉利者、喻得三十二相也。

今、忉利に生ずと言うは、三十二相を得るに喩うるなり。

126. 2 4 2 況得八十種好也。

八十種好を得るに況うるなり。

127. 2 4 3 百千譬壽無量。

百千は壽の無量を譬う。

輪王況不共功德。

輪王は不共の功德を況う。

128. 2 4 3 不生喻證常、三惡譬流轉。

不生は常を証するを喩え、三惡は流轉を譬う。

129. 2 4 4 無爲常果、是安處也。

無爲の常果は、是れ安處なり。

130. 2 4 6 遇火之人愧身醜惡、以衣覆體、

火に遇うの人は身の醜惡を愧じ、衣を以て体を覆い、

命終生天。護法之人、

命終りて天に生ず。護法の人は、

不說如來同於諸行、故得解脫。

如來の諸行に同じと説かざるが故に、解脫を得ん。

131. 2 4 9 比丘之人是佛弟子、

比丘の人は、是れ仏の弟子にして、

不應師處起生滅心。

応に師の処に生滅心を起さすべからず。

132. 2 5 1 因既不善、果是地獄。

因は既に不善なれば、果は是れ地獄なり。

¹⁴⁹ 佛現無常、有類身醜、恥佛無常、故名慚愧…この一句の意味が良く取れない。訓読文として、二つの読みを試みた。①仏、無常を現し、有類、身の醜きことを恥ず。仏、無常なるが故に、慚愧と名づく。②仏、無常を現し、有類の身醜く、仏の無常なるを恥じて、故に慚愧と名づく。

此道必然、如入已宅。

133. 253 當捨生滅之心、而觀實相常法。

134. 256 文殊說佛無常、以權道除常也。

純陀說佛常住、以實智除無常也。

二俱利益、兩義無傷。

135. 258 歎其深解也。

136. 264 視同一子故。

137. 265 除悅執也。

138. 265 有悅可想、是名顛倒。

139. 267 此舉果以除因執。

140. 268 若執權爲實、是則與仁俱行倒妄。

141. 269 教離分別也。

142. 272 非如母牛獨念其子。

143. 273 無愛念觀真也。

等視一切緣俗也。

真俗雙觀、是佛慧境。

144. 277 鳥況法身也。

145. 277 喻淨土也。

146. 278 海譬生死也。

147. 278 龍音魚袁反。

148. 279 徒多反。

149. 279 喻見六道衆生也。

此の道は必然にして、已が宅に入るが如く。

當に生滅の心を捨てて、実相の常法を觀ずべし。

文殊の仏の無常を説くは、權の道は常を除くを以てなり。

純陀の仏の常住を説くは、実智は無常を除くを以てなり。

二つは俱に利益し、兩義に傷無し。

其の深き解を歎ずるなり。

同じく一子なりと視るが故なり。

悦の執を除くなり。

悦の想う可き有るは、是れ顛倒と名づく。

此に果を挙げて、以て因執を除く。

若し權を執して実と為せば、是れ則ち仁と俱に倒妄を行ず。

分別を離れしむるなり。

母牛の独り其の子を念ずるのみなるが如きに非ず。

愛念無きは、真を觀るなり。

等しく一切の緣俗を視るなり。

真俗双觀するは、是れ仏の慧境なり。

鳥は法身を況うるなり。

淨土を喩うるなり。

海は生死を譬うるなり。

龍の音は魚袁の反。

徒多の反。

六道の衆生を見るを喩うるなり。

150. 280 反視化身、現於三界。

反^{かえ}りて化身、三界に現るるを視る。

151. 280 真俗俱鑒也。

真俗俱に鑒^{かんが}みるなり。

152. 284 我今說佛同諸行者、非是不了。

我れ今、仏は諸行に同じと説くは、是れ不了に非ず。
將に新學の人を試さんとするが故に、是の說を作す。

將試新學之人、故作是說。

153. 285 佛自催供也。

仏は自ら供を催すなり。

154. 292 將因食起化故促之也。

將に食に因りて化を起すが故に、之を促すなり。

155. 295 恐一人之誠不能感佛、

故自大衆同共請住。

一人の誠は、仏を感ずること能わざるを恐るるが
故に、自ら大衆は同じく共に住するを請う。

156. 296 亂心迷道故止之也。

心を亂し道に迷うが故に、之を止^{とど}むるなり。

157. 297 不堅牢也。

堅牢ならざるなり。

158. 297 體無實也。

體に実無きなり。

159. 298 不可搏也。

搏^とる可からざるなり。

160. 298 無不空也。

空ならざること無きなり。

161. 298 望之似有、即之實無。

之に望めば有るに似たるも、之に即せば実に無し。

162. 299 言不固也。

固からずと言うなり。

163. 299 出已便沒。

出で已りて便ち沒す。

164. 300 勢不全也。

勢いは全からざるなり。

165. 306 久住則不生難逢之想。

久しく住まれば則ち逢い難きの想を生ぜず。

166. 307 衆生不知身之過患、有爲無常。

衆生は身の過患、有爲無常を知らず。

今示般涅槃、令解斯義、故云法爾。今、般涅槃を示し、斯の義を解しせしむるが故に、法爾と云う。

167. 3 1 0 上言生死之患教之令離。

今、生死の患を言い、之を教えて離れしむ。今、涅槃の樂を説くは、之を勧めて求めしむ。

168. 3 1 3 住無益也。

住まるも益無きなり

169. 3 1 5 以聞滅故致憂、許受供故欣悅。

滅を聞くを以ての故に憂いを致し、供を受くるを許すが故に欣悅す。

170. 3 1 8 隨陽之鳥也。若此方鴻鷹之屬。

隨陽¹⁵⁰の鳥なり。若し此の方なれば、鴻鷹¹⁵¹の属^{たぐ}なり。

171. 3 1 9 四河之源也。

四河¹⁵²の源なり。

172. 3 1 9 況引根熟之人同入涅槃之海。

根熟の人を引きて、同じく涅槃の海に入らしむることを況う。

173. 3 2 1 化佛之身、隨衆生機。

化仏の身は、衆生の機に隨う。縁有れば則ち現じ、縁尽くれば則ち滅す。

有縁則現、縁盡則滅。

此乃由機、而不由壽。

此れは乃ち機に由りて、壽に由らず。

今現涅槃、不應思量、壽與不壽。

今、涅槃を現じ、応に壽と不壽を思量すべからず。滅を示し、生を示すは、幻に同じ、化に同じ。

174. 3 2 2 示滅示生、同幻同化。

生に染まらず、滅に著さず。

175. 3 2 3 不染於生、不著於滅。

最後の施を以ての故に、能く之を得ん。

176. 3 2 6 以最後施、故能得之。

能く仏果を生ずるは、喩うるに良田を以てす。

177. 3 2 7 能生佛果、喩以良田。

汝、今、施せば、檀波羅蜜を具え、

178. 3 2 8 汝今施者、具檀波羅蜜、

¹⁵⁰ 隨陽…該当なし。

¹⁵¹ 鴻鷹…該当なし。

¹⁵² 四河…『大般涅槃經義記』卷二〈壽命品〉「出四河者、經說不定。或云出八、或復言出二十大河、各有所由。言出四者、此池在於香山之頂。於山四面有四獸頭。

東方金象、口出恒河。南方銀牛、口中流出辛頭大河。西瑠璃馬、口中流出悉陀大河。北頗梨師子、口中流出博叉大河。」（『大正藏』三七、六五八中）

能爲衆生之大福田也。

179. 330 將辨施供故、先飲淚、而後辭其不敏。

180. 334 入與不入之機、惟佛所了。

我識微淺、故不能量。

337 純陀不閑獻。則是故文殊與之同去。

181. 338 梵此言淨。乃至有頂、皆名爲梵。

今之一動、偏種三界也。

182. 348 此語當是佛說、集經之人記之略耳。

183. 368 稟教生也。

184. 369 喻正見也。

185. 369 謂戒定慧也。

186. 370 旃陀羅此言執惡。況死魔也。

187. 374 先學是智、後怖是愚。

188. 375 似畏法深也。

189. 377 喻佛初發心時、誓度衆生也。

能く衆生の大福田と爲るなり。

將に施供を弁ずる¹⁵³が故に、先に涙を飲みて、後に其の不敏を辞す。

入と不入の機は、惟だ仏の了する所なり。

我が識は微淺なるが故に、量ること能わず。

純陀は獻に閑れず。則ち是の故に文殊は之れと¹⁵⁴同に去る。

梵は、此^{こゝ}には淨と言う。乃ち有頂に至りて、皆な名づけて梵と爲す。

今の一動は、偏^{ひと}えに三界に種^ううるなり。

此の語は当に是れ仏説なるべし。集經の人、之を記して略するのみ。
教を稟けて生ずる¹⁵⁴なり。

正見を喻うるなり。

戒定慧を謂うなり。

旃陀羅は、此には執惡と言う。死魔を況うるなり。

先に学ぶは是れ智、後に怖るるは、是れ愚なり。

法の深きを畏るるに似たるなり。

仏の初発心の時、衆生を度するを誓うを喻うるなり。

¹⁵³ 辨…「辨」辨と通ず。ソナウ、力を致す、支度をするの意有り。「正字通治裝就道曰辨嚴。」『大字典』。

¹⁵⁴ 稟…「上からの授かりものを」受け取る。う…ける・う…く。賦与する。あた…える。あた…う。

190. 378 衆生感佛故。

衆生は仏を感じるが故なり。

191. 378 圜圜姫周之獄名也。

圜圜は姫周の獄名なり。

佛以感化俯入三界、故況之以閑。

仏は感化を以て三界に俯入するが故に、之を況うるに閑を以てす。

192. 379 人謂善知識也。

人は、善知識を謂うなり。

193. 380 以衆生有病而菩薩亦病。

衆生に病有るを以て、菩薩も亦た病む。

194. 381 衆生惱盡名爲得脫。

衆生の悩の尽くることを、名づけて脱を得と為す。

入大涅槃是乃安樂。

大涅槃に入るは、是れ乃ち安樂なり。

195. 383 既未得脫、如何涅槃。

既に未だ得脱せざれば、如何んが涅槃せん。

196. 390 譏佛有慈而不平等。

仏に慈有るも、不平等なるを譏る。

197. 396 時衆以佛滅爲實故、種種勸請。

時衆は仏滅を以て実と為すが故に、種種に勸請す。

198. 402 感盡歸真也。

感尽きて真に歸するなり。

199. 403 教持戒也。

持戒を教うるなり。

200. 404 令修定也。

定を修せしむるなり。

201. 404 勸修慧也。

慧を修するを勧むるなり。

202. 405 空謂生死。不空是涅槃。

空は生死を謂う。不空は是れ涅槃なり。

203. 406 涅槃是常、生死是無常。

涅槃は是れ常、生死は是れ無常なり。

204. 407 煩惱未盡爲苦、已斷爲非苦。

煩惱は未だ尽きざるを苦と為し、已に断ずるを非苦と為す。

205. 407 如來藏者、是一切法之所依。

如来蔵とは、是れ一切法の所依なり。

餘非一切法依故。

余は一切法の依に非ざるが故なり。

206. 408 正行出離、名之爲去。

正行もて出離するは、之を名けて去ると為す。

邪行沈没、名爲不去。

邪行もて沈没するは、名けて去らずと為す。

207. 408 三寶是可歸、餘不可歸故。

三宝は是れ歸す可し。余は歸す可からざるが故なり。

208. 4 0 9 法報二身無變易故是恒。

餘有變易故非恒。

209. 4 1 0 執緣起是無爲。

210. 4 1 0 斷執有自性名常。

211. 4 1 1 未見佛性、名爲衆生。

已見性者、名非衆生。

212. 4 1 1 生滅爲有、不生不滅爲無。

213. 4 1 2 一乘是實、二乘非實。

214. 4 1 2 聖諦爲真、俗諦非真。

215. 4 1 3 化身有滅法身無滅。

216. 4 1 3 究竟說者爲密。

非究竟說者爲非密。

217. 4 1 4 世諦有二、真諦不二。

218. 4 1 6 此舉疑以勸問也。

若有疑不問、則佛在無益。

若疑問決了、則知佛是常。

219. 4 2 0 喻前五難也。

220. 4 2 1 八難者、一、地獄。二、畜生。

三、餓鬼。四、人中盲啞。

法報の二身に変易無きが故に、是れ恒なり。

余は変易有るが故に、恒に非ず。

縁起はれ無爲なりと執するは、断なり。

自性有りと執するは、常と名づく¹⁵⁶。

未だ仏性を見ざるを、名づけて衆生と爲す。

已に性を見るは、衆生に非ずと名づく。

生滅を有と爲し、不生不滅を無と爲す。

一乗は是れ実、二乗は実に非ず。

聖諦を真と爲し、俗諦は真に非ず。

化身に滅有り、法身に滅無し。

究竟説とは、密と爲す。

非究竟説とは、密と爲す。

世諦に二有るも、真諦は不二なり。

此れは疑を挙げて、以て問いを勧むるなり。

若し疑有りて問わざれば、則ち仏在るも益無し。

若し疑問決了すれば、則ち仏は是れ常なりと知る。

前の五難¹⁵⁶を喩うるなり。

八難とは、一、地獄。二、畜生。

三、餓鬼。四、人中盲啞。

¹⁵⁵ 断執有自性名常…これは、有を執する自性を断じるを名づけて常（なり）、と読むべきか。

¹⁵⁶ 五難…謂三塗及躰單越長壽天等。唐・李師政撰『法門名義集』卷一「生善處對治五難。謂三塗及躰單越長壽天等。值善人對治佛後難。發宿心願治世智辯聽。值善根治盲聾暗啞。」（『大正藏』五四、二〇四中）

五、世智辯聰。六、生佛前後。

七、生鬱單越。八、生長壽天。

221. 4 2 5 勸勤修也。

222. 4 2 7 俾倪者、謂於孔中伺望非常之事。

戒況牆也。以防非故。

定譬塹也。取境深故。

慧喻俾倪。是見性故。

223. 4 2 8 取二涅槃爲虛偽也。

224. 4 3 1 住於小果是下心也。

225. 4 3 2 出家者始學之初名。

非涉真之極路。

226. 4 3 6 自上皆是奪其昔解、使捨迷封也。

227. 4 3 7 欲示新伊涅槃故云真實教勅。

228. 4 3 8 明三寶緣具是可學之時。

229. 4 4 1 山況法性、草喻萬善。

230. 4 4 2 譬能除物患也。

231. 4 4 4 四謂道俗男女也。

232. 4 4 5 涅槃之道非二乘境、故云秘藏。

233. 4 4 6 言我亦隨住秘藏、

五、世智弁聰。六、生仏前後。

七、生鬱單越。八、生長壽天。

勤修を勧むるなり。

俾倪¹⁵⁷とは、孔の中に於いて非常の事を伺い望むるを謂う。

戒は牆に況うなり。非を防ぐを以ての故なり。

定は塹に譬うるなり。境の深¹⁵⁸きを取るが故なり。

慧は俾倪に喩う。是れ性を見るが故なり。

二つの涅槃を取ることを虚偽と爲すなり。

小果に住するは、是れ下心なり。

出家とは、始学の初名なり。

涉真の極路に非ず。

上自り皆な是れ其の昔の解を奪い、迷封を捨てせしむるなり。

新しい伊の涅槃を示さんと欲するが故に、眞実に教勅すと云う。

三宝の縁具わるは、是れ学ぶ可きの時なるを明かす。

山は法性を況え、草は万善を喩う。

譬えば能く物の患いを除くなり。

四に道俗の男女を謂うなり。

涅槃の道は二乗の境に非ざるが故に、秘藏と云う。

我れも亦た秘藏に随住すと言うは、

¹⁵⁷ 俾倪…『一切経音義』卷二五、「俾倪(上、普米反。下、五禮反。『玉篇』又作僻倪、埤蒼。『廣雅』並云城小牆。又『釋名』云、於牆孔中伺候非常之事。今詳此字、

有其二種。一者、伺候。二者、垣牆。垣牆不合、從人伺候、豈宜從土。若是垣牆、應為埤倪。若取伺候、應作俾倪。兩文二義、不失諸宗故也。)(『大正蔵』

五四、四六六下。)

¹⁵⁸ 隋・古藏『法華義疏』卷六〈譬喻品三〉「〔鱗鬻〕者、六根起貪取境深重、如鱗鬻也。)(『大正蔵』三四、五三三上)

化滅身智入涅槃也。

234. 4 4 8 婆羅門伊字三點、

合成上一下二、狀如鼎足。

若並若從雖有三點皆不成字。

235. 4 4 9 此天三目一在額中、

236. 4 5 0 如世伊字非從並也。

237. 4 5 0 三點異處、則不成字。

238. 4 5 3 夫證涅槃者、要有能證之身、

智慧之用。又須煩惱等滅三法具足、
名證涅槃。此三各別、
未有斷證非涅槃也。

239. 4 5 4 無感不應、名為法身。

無境不照、稱為般若。
無累不盡、是名解脫。

240. 三法圓備、即是涅槃。

241. 4 5 5 示滅身智也。

242. 4 5 6 以三點喻三法。

243. 4 5 8 捨應歸本、長與物隔、故生憂也。

244. 4 6 0 無常故空、空故無我。

245. 4 6 1 象喻於常、迹況無常、

故尋象之迹、以得象體。

身智を化滅し、涅槃に入るなり。

婆羅門の伊字三點は、

上の一つと下の二つを合成すれば、状は鼎の足の如し。

若しは並び若しは縦にすれば、三點有りと雖も、皆な字を成ぜず。

此の天の三目は、一は額の中に在りて、
世の伊字は縦・並に非ざるが如きなり。

三點は處を異にすれば、則ち字を成ぜらず。

夫れ涅槃を証すとは、能証の身、

智慧の用有ることを要す。又た須からく煩惱等滅して三法具足すべきを
涅槃を証す名づく。此の三は各別にして、
未だ斷証有らず、涅槃に非ざるなり。

感として応ぜざること無きを、名づけて法身と為す。
境として照らざざること無きを、稱して般若と為す。
累として尽くさざること無きは、是れ解脫と名づく。

三法は円備して、即ち是れ涅槃なり。

身智の滅するを示すなり。

三點を以て三法を喩う。

応を捨てて本に歸す。長く物と隔つるが故に、憂いを生ずるなり。

無常の故に空、空の故に無我なり。
象は常を喩え、迹は無常を況う。

故に、象の迹を尋ねて、以て象の體を得。

尋無常用以至於常。

246. 462 謂能除三界欲愛慢也。

247. 464 想謂證智也。

248. 465 此引昔說以難今也。

若世尊久離無常想者、

何故今日方般涅槃。

249. 468 此引今說以難昔也。若修無常想、

不能離無常想者、

則昔言能離是虛妄也。

250. 469 此歎無常之勝用。草穢況愛慢也。

251. 470 夫空解必因於有。有不可得空。

252. 471 何以空。空有既除、二想俱滅。

253. 474 勝義生常故。

254. 478 若棄衆生、入涅槃者、是無兼愛之心。

255. 479 云何見捨將入涅槃。

256. 482 象喻菩薩。

257. 483 況魔王也。

258. 484 此喻菩薩、絕棄煩惱、

不籍如來、久住於世。

259. 485 見惑有四十四諦、各十故。

欲愛有六、貪・瞋・慢・無明・俱生身・邊見。

上二界各五、除瞋・無明住地。

無常の用を尋ねて、以て常に至る。

能く三界の欲愛慢を除くを謂うなり。

想は智を証するを謂うなり。

此れは昔の説を引きて、以て今を難ずるなり。

若し世尊は久しく無常の想を離るれば、

何が故に今日方に般涅槃するや。

此れは今の説を引きて、以て昔を難ずるなり。若し無常の想を修して、

無常の想を離るること能わざれば、

則ち昔、能く是の虚妄を離ると言うなり。

此れは無常の勝用を歎ず。草穢は愛慢を況うるなり。

夫れ空解は必ず有に因る。有は不可得空なり。

何を以て空なるや。空有既に除ければ、二想は俱に滅す。

勝義は常を生ずるが故なり。

若し衆生を棄て涅槃に入るれば、是れ兼愛の心無し。

云何んが捨てられて、將に涅槃に入らんとするや。

象は菩薩を喩う。

魔王を況うるなり。

此れは菩薩を喩う。煩惱を絶ち棄て、

如來の世に久住することを籍^かりず。

見惑に四十四の諦有り、各十あるが故なり。

欲愛に六有り。貪・瞋・慢・無明・俱生身・辺見なり。

上の二界に各五あり。瞋・無明住地を除く。

一合五十七也

一合して五十七なり。

260. 486 聲聞之人不同菩薩、

能脱煩惱故勸住也。

声聞の人は菩薩に同じからず、
能く煩惱を脱するが故に、住を勧むるなり。

261. 487 業起不恒故、況之以瘡疾。

業起こるも恒ならざるが故に、之を況うるに瘡疾を以てす。

262. 491 酒況煩惱。人喻比丘。

酒は煩惱を況え、人は比丘を喻う。

言其不能覺了自體之實、
此譬不知真也。

其の自體の実を覺了すること能わざるを言う。
此れは真を知らざるを譬うるなり。

263. 492 況不知妄也。

妄を知らざるを況うるなり。

264. 492 喻起倒想。

倒想を起こすを喻う。

265. 493 譬所發業也。

発する所の業を譬うるなり。

266. 493 喻生死也。

生死を喻うるなり。

267. 494 良師譬佛、藥況教法。

良師は仏を譬え、藥は教法を況う。

268. 494 喻斷煩惱也。

煩惱を斷ずるを喻うるなり。

269. 495 知真識妄也。

真を知り妄を識るなり。

270. 495 愧迷荒也。

迷荒を愧ずるなり。

271. 496 悔前非也。

前の非を悔ゆるなり。

272. 496 煩惱爲衆惡之源也。

煩惱は衆惡の源と為すなり。

273. 497 煩惱若斷、則衆惡咸滅。

煩惱若し斷ずれば、則ち衆惡は咸く滅す。

274. 498 明昔過也。

昔の過を明かすなり

275. 502 合服已吐酒也。

合せて服し已りて、酒を吐くなり。

276. 502 喻未斷煩惱也。

未だ煩惱を斷ぜざるを喻うるなり。

277. 504 芭蕉不堅亦猶身之無我。

芭蕉は堅からず、亦た猶お身の無我なるがごとし。

278. 507 無我用也。

無我の用なり。

279. 5 0 9 無我體也。
280. 5 1 1 我尚不可得。我所何可得。
所我兼忘、故無慢也。
281. 5 1 2 昔教今教俱世尊說。
昔教既非、今何必是。
故執昔之教。取決於今。
282. 5 1 5 有我想者、則有見取。
無我故、無想則無見。
283. 5 1 7 別其所執、故稱歎之。
284. 5 2 0 悶惑之狀也。
285. 5 2 1 聲聞之人謂菩薩、於非常之中、妄生常執。
猶如醉人、於非轉中、而生轉想。
286. 5 2 4 不修無常苦空無我、
則流轉生死、非聖人也。
287. 5 2 5 以能離生死故修。
288. 5 2 7 聲聞之人、觀空無常、以爲實諦。
未知真我是佛、故云不達。
289. 5 2 9 佛果是常、而計無常。
猶如醉人於非轉處而生轉想。
290. 5 3 1 妄生計執不達真我等。
291. 5 3 3 報佛是法、佛妙用能生一切法、
292. 5 3 4 故言是佛義。
293. 5 3 4 法身寧然恒住、
- 無我的體なり。
- 我すら尚お得る可からず。我所は何ぞ得可きや。
- 所・我兼ねて忘るるが故に、慢無きなり。
- 昔の教、今の教は俱に世尊の説なり。
- 昔の教は既に非なれば、今何ぞ必ずしも是なるや。
- 故に昔の教を執し、決を今に取る。
- 我想有りと、則ち見取有り。
- 無我的故に、無想は則ち無見なり。
- 其の所執を別つが故に、之れを称歎す。
- 悶惑の状なり。
- 声聞の人は、菩薩、非常の中に於いて妄りに常執を生ずと謂う。
- 猶如醉人の非転の中に於いて、転の想を生ずるが如し。
- 無常・苦・空・無我を修せざれば、
則ち生死に流転し、聖人に非ざるなり。
- 能く生死を離れるを以ての故に修す。
- 声聞の人は、空無常を觀じて、以て実諦と為す。
- 未だ真我は是れ仏と知らざるが故、達せずと云う
- 仏果は是れ常なるも、而も無常なりと計す。
- 猶如醉人の非転處に於いて転想を生ずるが如し。
- 妄りに計執を生じ、真我に達せざる等なり。
- 報仏は是れ法なり。仏の妙用は能く一切の法を生ず。
- 故に是れ仏の義なりと言う。
- 法身は寧然として恒住し、

能與二身為所依故云常也。

二身隨機起滅、不得名常。

294. 536 法身離二生死、

證得無餘涅槃故云樂也。

295. 536 法離非法、故名爲淨。

296. 539 汝之三修、是昔權教。

以昔對今非實義也。

297. 540 勝者謂大乘三修也。

298. 544 正謂常樂我淨也。

299. 546 夫倒必起對。若於樂中生苦想等、

必於苦中生樂想等。

300. 547 謂非我計我等。

301. 548 謂真常真樂等。

302. 549 謂苦中見樂等。

303. 550 謂知我是佛義等。

304. 551 分別是名爲想倒。

謬緣於理。此爲心倒。

305. 552 執佛無常是爲見倒。

306. 553 謂佛地中起四倒也。

307. 555 生死不自在故知無我也。

若有我者應當自在。

308. 556 如來有八自在故得名爲我也。

309. 557 二乘有生滅故無常。

能く二身とともに所依と為すが故に、常と云うなり。

二身は機に隨いて滅を起こすを、常と名づくることを得ず。

法身は二つの生死を離れ、

無余涅槃を証得するが故に、樂と云うなり。

法は非法を離るるが故に、名づけて淨と為す。

汝の三修は是れ昔の權教なり。

昔を以て今に對するは、實義に非ざるなり。

勝れたる者は、大乘の三修を謂うなり。

正しく常・樂・我・淨を謂うなり。

夫れ倒は必ず對を起こす。若し樂中に於いて苦想等を生ずれば、

必ず苦中に於いて樂想等を生ず。

非我を我と計す等を謂う。

眞の常、眞の樂等を謂う。

苦中に樂を見る等を謂う。

我は是れ仏の義なるを知る等を謂う。

是非を分別するを、名づけて想倒と為す。

謬りて理を緣ず。此れを心倒と為す。

仏の無常を執するは、是れを見倒と為す。

仏地の中に、四倒を起こすを謂うなり。

生死は自在ならざるが故に、無我なりと知るなり。

若し我有れば、応当に自在なるべし。

如來に八自在有るが故に、名づけて我と為すことを得るなり。

二乘に生滅有るが故に、無常なり。

310. 5 5 7 法身無生滅故名常。
 311. 5 5 8 因苦果苦也。
 312. 5 5 8 體寧靜故。
 313. 5 5 9 謂一切有漏之法也。
 314. 5 6 0 謂一切無漏道法也。
 315. 5 6 0 見正而無倒也。
 316. 5 6 1 體言識旨爲知字義。
 317. 5 6 2 能知四德則無復四倒。
 318. 5 7 0 若不住世則隨入涅槃。
 勸住誠深。敢以死請。
 319. 5 7 2 獨付迦葉者、以彼亦有一時匡化能故。
 320. 5 7 8 勸知前權而後實也。
 321. 5 7 9 喻起行時也。
 322. 5 7 9 譬聞衆也。
 323. 5 8 0 洗塵垢也。
 324. 5 8 0 依權教也。
 325. 5 8 0 常理可珍故況之以寶。
 326. 5 8 1 隱於無常之教故云沒水。
 327. 5 8 1 求權教人也。
 328. 5 8 2 俱觀無常也。
 329. 5 8 2 求常旨也。
 330. 5 8 3 以妄計爲真實也。
 331. 5 8 4 離龜重縛名爲持出。

法身に生滅無きが故に、常と名づく。
 因苦、果苦なり。
 体は寧靜なるが故なり。
 一切有漏の法を謂うなり。
 一切の無漏の道法を謂うなり。
 見正しくして、無倒なり。
 言を体し旨を識るを、字義を知ると爲す。
 能く四德を知れば、則ち復た四倒無し。
 若し世に住せざれば、則ち随いて涅槃に入る。
 住することを勧むること誠は深し。敢えて死を以て請う。
 独り迦葉に付すとは、彼に亦た一時の匡化の能有るを以ての故なり。
 前は權にして後は実なるを知るを勧むるなり。
 行を起こす時を喩うるなり。
 聞衆を譬うるなり。
 塵垢を洗うなり。
 權教に依るなり。
 常理は珍とす可きが故に、之を況うるに宝を以てす。
 無常の教に隠るるが故に、水に没すと云う。
 權を求めて人に教うるなり。
 俱に無常を觀するなり。
 常旨を求むるなり。
 妄計を以て真実と爲すなり。
 龜重の縛を離るるを、名づけて持ち出すと爲す。

猶拘相染是曰非真。

332. 585 言真常之旨隱昔教中。
333. 586 珠力況常性也。澄清謂聞經生信。
334. 587 謂大乘人也。
335. 587 依教聞見未得親證故云在下。
336. 588 真理圓明喻如空月。
337. 589 謂依教起行之人也。
338. 589 於無常中諦觀常理。
339. 590 證常理也。
340. 600 若有我爲真、無我非實。
世尊昔時何故不言令謬取。
二說相違故起斯問。
341. 602 無我之理於邪爲藥、於真爲病、
故須昔讚而今毀也。
342. 603 王喻比丘也。
343. 603 鑒況說邪教者也。
心不測正法爲頑。
口不談中道爲囂。
344. 605 混邪正也。
345. 604 加供養也。
346. 605 乳況邪我也。

猶お相染¹⁵⁹に拘わるは、是れ真に非ざるを曰う。

- 真常の旨は昔教の中に隠るるを言う。
珠の力は常性を況うるなり。澄清は經を聞いて信を生ずるを謂う。
大乘の人を謂うなり。
教に依りて聞見するも、未だ親証を得ざるが故に、下に在りと云う。
真理は円明にして、喻うるに空の月の如し。
教に依りて行を起こすの人を謂うなり。
無常の中に於いて、常理を諦観し、
常理を証するなり。
若し我有るを真と為せば、無我は実に非ず。
世尊は昔時、何が故に、謬りて取らしむと言わざるや。
二説は相違するが故に、斯の問いを起こす。
無我の理は、邪に於いては藥と為し、真に於いては病と為す。
故に須く昔は讚うるども、今は毀るべきなり。
王は比丘を喻うるなり。
医は、邪教を説く者を況うるなり。
心、正法を測らざるを頑と為す。
口、中道を談せずざるを囂と為す。
邪正を混ざるなり。
供養を加うるなり。
乳は、邪我を況うるなり。

¹⁵⁹ 相染…相縛と同義で使用されているのではないだろうか。

347. 606 不知我有真偽也。

我に真偽有るを知らざるなり。

348. 607 風喻瞋、冷況癡、熱譬貪。

風は瞋を喩え、冷は癡を況え、熱は貪を譬う。

349. 608 喩八萬四千之塵勞也。

八万四千の塵勞を喩うるなり。

350. 608 純說邪我也。

純ら邪我を説くなり。

351. 609 邪我増諸煩惱、正我能滅無明。

邪我は諸煩惱を増し、正我は能く無明を滅す。

352. 610 喩佛也。

仏を喩うるなり。

353. 610 一、識病。二、知病因。

一、病を識る。二、病因を知る。

三、知病相。四、知病處。

三、病相を知る。四、病處を知る。

五、知病時。六、知藥。

五、病時を知る。六、藥を知る。

七、知療。八、知禁。

七、療を知る。八、禁を知る。

354. 611 知衆生之根性也。

衆生の根性を知るなり。

355. 611 況我無我教也。

我・無我の教えを況うるなり。

356. 612 遠方謂淨土也。

遠方は淨土を謂うなり。

357. 613 邪見熾然謂佛劣已。

邪見は熾然として、仏の劣し已わるを謂う。

358. 614 況設權道也。

權道¹⁰⁰を設くるを況うるなり。

如以鬱頭藍弗爲師之類是也。

鬱頭藍弗を以て師と爲すの類の如き、是れなり。

359. 616 將欲化之故先誘之。

將に之を化せんと欲するが故に、先に之を誘う。

360. 617 外道多修六行。

外道は多く六行を修す。

361. 618 八禪地中各有六行。

八禪地の中に各六行有り。

六八四十有八也。

六八四十有八なり。

¹⁰⁰ 權道…權實のこと。『大般涅槃經集解』卷六四「僧亮曰。智者見法。法理無二。謂佛說實不說權也。無智不見法故。佛說權道、謂道有權實、說不定也。謂我作不定說者、自不見法。謂佛說有二。所以起諍論也。」(『大正藏』三七、五七五下)

362. 6 2 0 因邪以通正也。
363. 6 2 1 謂十善五戒等。
364. 6 2 2 謂神通解脫等。
365. 6 2 3 以定除亂謂之治國。
以慧去結名爲療病。
366. 6 2 4 謂聞正教也。
367. 6 2 5 癡喻邪見。騃音五駭反。
368. 6 2 6 棄邪也。
369. 6 2 6 歸正也。
370. 6 2 8 空理無二故云一也。
371. 6 2 9 右以便爲喻。況初學也。
372. 6 2 9 譬常樂等信根也。
373. 6 3 0 無所執也。
374. 6 3 1 根未偏熟故云不敢。
375. 6 3 3 勸捨邪我也。
376. 6 3 4 邪我執著故多損耳。
377. 6 3 5 邪我爲衆倒之源故、況之以首也。
今說無常之教以斷其惑、猶如斬焉。
378. 6 3 6 若禁邪我、則慧命得全。爲不橫焉。
379. 6 3 7 樂謂涅槃之道也。
380. 6 3 8 所教易信也。
381. 6 3 8 況轉教也。
382. 6 4 0 禁邪我也。
- 邪に因りて以て正に通ずるなり。
- 十善・五戒等を謂う。
- 神通解脫等を謂う。
- 定を以て乱を除くは、之を治國と謂う。
- 慧を以て結を去るを、名づけて療病を爲す。
- 正教を聞くを謂うなり。
- 癡は邪見を喩う。騃の音は五駭の反なり。
- 邪を棄つるなり。
- 正に歸するなり。
- 空理に二が故に、一と云うなり。
- 右は便を以て喩と爲す。初學を況うるなり。
- 常樂等の信根を譬うるなり。
- 執する所無きなり。
- 根は未だ偏えに熟さざるが故に、不敢と云う。
- 邪我を捨つることを勸むるなり。
- 邪我は執著するが故に、損多きのみ。
- 邪我は衆倒の源と爲すが故に、之れを況うるに首を持つてするなり。
- 今、無常の教を説いて、以て其の惑を斷ずるは、猶お斬するが如し。
- 若し邪我を禁ずれば、則ち慧命は全きを得。不横と爲すなり。
- 樂は涅槃の道を謂うなり。
- 教うる所は信じ易きなり。
- 教を転ずるを況うるなり。
- 邪我を禁ずるなり。

383. 6 4 0 終以無我斷彼邪我也。
384. 6 4 2 喩佛於小教中、說種種之法、
化衆生也。
385. 6 4 3 執病悉除也。
386. 6 4 3 況諸比丘因學無我、
遂於佛地起無我倒。
387. 6 4 4 執見情深爲病重。迷真未返爲欲死。
388. 6 4 5 無我之執何法可除。
389. 6 4 6 無我之病非我不除。
390. 6 4 7 說今教也。
391. 6 4 8 前爲著邪故斷。今緣破執故須。
此爲方便之門、非是真實語也。
392. 6 4 9 讚今教也。
393. 6 4 9 執說無我爲熱病。
真我能除爲服乳。
394. 6 5 0 昔非今是豈不狂邪。
395. 6 5 2 前說有毒復言良妙。
語涉相誣故云欺我。
396. 6 5 4 先毀後讚非勝如何。
397. 6 5 6 木況有漏、虫喩外道。
一切諸病悉以乳療、不識病由。
偶然有中故云成字。
398. 6 5 7 外道說我不知我所對除。
- 終に無我をして彼の邪我を断ずるなり。
- 仏の小教の中に於いて、種種の法を説きて、
衆生を化するを喩うるなり。
- 執の病は悉く除くるなり。
- 諸の比丘の無我を学ぶに因りて、
遂に仏地に於いて、無私の倒を起こすを況う。
- 見に執する情深きを、病重しと爲す。真に迷い未だ返らざるを死を欲すと爲す。
- 無私の執は、何れの法か除く可き。
- 無私の病は、我に非ざれば除かず。
- 今の教を説くなり。
- 前は邪に著すと爲すが故に断ず。今は執を破するに縁るが故に須ゆ。
- 此れを方便の門を爲す。是れ真実の語に非ざるなり。
- 今の教を讃うるなり。
- 執して無我を説くを、熱病と爲す。
- 真我は能く除くを、乳を服すと爲す。
- 昔は非、今は是なるは、豈に狂ならざらんや。
- 前に毒有りと説き、復た良妙と言う。
- 語を涉り相い誣うるが故に、我を欺くと云う。
- 先に毀して後に讃うるは、勝に非ざれば如何ん。
- 木は有漏を況え、虫は外道を喩う。
- 一切の諸病は悉く乳を以て療するは、病を識らざる由なり。
- 偶然中ること有るが故に、字を成ずと云う。
- 外道の我を説くは、我所の対除を知らず。

如虫食木不知是字非字。

399. 6 5 9 食木之虫偶然成字不知是字。

外道説我偶言是我、不知我義。

是故智人不驚不怪。

400. 6 6 2 合不知字也。

401. 6 6 3 喻外道所説之我。

402. 6 6 3 況佛説真我也。

403. 6 6 4 牛況彌經。菩薩謂能生大慧之子也。

404. 6 6 5 糟能生狂、譬癡起業。

405. 6 6 5 草滑順情、喻貪悅意。

406. 6 6 6 麤澁違情、況瞋逆志。

407. 6 6 6 此喻智慧柔和也。

408. 6 6 7 譬觀諸境。

409. 6 6 7 況不住二乘也。

410. 6 6 7 譬不住世間也。

411. 6 6 8 喻受正教也。

412. 6 6 8 況不失戒定也。

413. 6 6 9 遠惡知識也。

414. 6 6 9 教不失時。

虫の木を食すも是れ字なるや、字に非ざるやを知らざるが如し。

木を食するの虫は、偶然字を成じ、是れ字なるを知らず。

外道は我を説くは、偶^{たま}たま是れ我なりとを言い、我の義を知らず。

是の故に智人は、驚かず怪しまず。

合わせて字を知らざるなり。

外道の説く所の我を喩う。

仏の真我を説くを況うるなり。

牛は（阿）弥（陀）經を況う。菩薩は能く大慧を生ずるの子を謂うなり。

糟は能く狂を生じ、癡の業を起こすを譬う。

草の滑^{なめら}かなるの情に順ずるは、貪の意を^{よろこば}悦すを喩う。

麤¹⁶¹の¹⁶¹渋なるの情に違うは、瞋の志に逆うを況う。

此れは智慧の柔和なるを喩うるなり。

諸の境を観ずるを譬う。

二乗に住せざるを況うるなり。

世間に住せざるを譬うるなり。

正教を受くるを喩うるなり。

戒・定を失わざるを況うるなり。

悪知識を遠ざくるなり。

教うるに時を失わず。

415. 699 慧心磨境名行定。心不移稱住。
 416. 671 此喻真我之解、能除生死重苦。
 417. 672 謂與聖道相違者。
 418. 674 依教修行所執除也。
 419. 676 轉化衆生也。
 420. 677 鬼況無明、狂喻四倒。
 421. 681 同信我教也。
 422. 683 真我之教出生功德。
 若能信行、煩惱永斷、故曰悉除。
 423. 691 昔言無我今說有我是知時也。
 424. 693 不同外道所計邪我也。
 425. 695 執我相也
 426. 696 破我執也。
 427. 696 非無真常之我。
 428. 698 破有則言無。談真故說有。

慧心、境を磨くを、行定と名づく。心移らざるを住と称す。
 此れは真我の解を喻え、能く生死の重苦を除く。
 聖道と相違する者を謂う。
 教に依りて修行するは、所執除くなり。
 衆生を転化するなり。
 鬼は無明を況え、狂は四倒を喻う。
 同じく我の教を信ずるなり。
 真我の教は、功德を出生す。
 若し能く信行すれば、煩惱は永く断ずるが故に、悉除と曰う。
 昔は無我と言ひ、今は有我と説くは、是れ時を知るなり。
 外道の計する所の邪我に同じからざるなり。
 我相を執するなり。
 我執を破するなり。
 真常の我無きに非ず。
 有を破すれば、則ち無と言う。真を談ずるが故に有と説く。

【韋諡注集成 卷八篇抄】¹⁶²

1. 3 勸捨凡夫二乘之見。
2. 4 教依大乘同一相也。
3. 5 此之三性、體同而義異也。
4. 6 覺義名佛、持義名法、和義名僧。
凡夫二乘、薄福少智、不能信同。
- 7 7 故說三寶異相。
- 7 7 若爲福智衆生、則說三寶同性。
- 1 0 謂歸自身之中法身佛也。

凡夫・二乗の見を捨することを勧む。
 教は大乘に依りて同一の相なり。
 此の三性は、体同じけれども、義は異なるなり。
 覺の義を仏と名づく。持の義を法と名づく。和の義を僧と名づく。
 凡夫・二乗は、福薄く智少なく、信ずること能わざること同じ。
 故に三宝の異相を説く。
 若し福智の衆生が為ならば、則ち三宝の同性を説く。
 自身の中の法身仏に歸するを謂うなり。

1. 3 此喩法僧衰相。謂不生三乘之因、
不獲三乘之果。
此れは法・僧の衰相を喩う。三乗の因を生ぜず、
三乗の果を獲^えざるを謂う。
2. 4 況人天善根、不增長也。
人天の善根、增長せざるを況うるなり。
3. 5 諸藥譬五乘也。
諸藥は五乗を譬うるなり。
4. 1 5 謂不執有而捨無、(不)執無而捨有也。
有に執せずして而も無を捨し、無に執(せず)して而も有を捨すことを謂うなり。
5. 1 7 牛譬正教。女況傳法之人。
牛は正教を譬う。女は伝法の人を況う。
6. 1 8 私宣教法、令人生解、
^{ひそか}私に教法を宣べて、人をして解を生ぜしむるは、
如賣乳人、觀於利養、此曰貪也。
乳を売る人の利養を觀るが如し。此れを貪と曰うなり。
7. 2 0 有所得心爲二分也。
有所得の心を二分と爲すなり。
8. 2 2 近城喩近末法。城中況末法時。
近城は末法に近きを喩う。城中は末法の時を況う。
9. 2 3 在衆宣唱也。
衆に在りて宣唱するなり。
10. 2 4 人譬學者、子況菩提心、
人は學ぶ者を譬え、子は菩提心を況え、
婦喩諸行也。
婦は諸行を喩うるなり。
11. 2 5 須常法教化衆生也。
常法もて衆生を教化するを須うるなり。
12. 2 5 詣師聽受也。
師に詣りて聽受するなり。
13. 2 7 邪多正少也。
邪多く正少なきなり。
14. 2 8 廣化有情故、不得已而聽之也。
廣く有情を化するが故に、已むを得ずして之れを聽くなり。

15. 29 受法者取已感。於是（文終）

受法とは已感^{ニヤ}を取る。是^{こゝ}に於いて（文終わる）

16 已感は、已惑の誤写か。

1. 6 腦極於上、胲極於下¹⁶⁶、
即足拇指生三毛處也。
自頂至足所有諸脈、
皆悉觀之。胲音古才反。
 2. 7 色不淨故、故知無我。
 3. 8 責我所屬也。
 4. 8 破以色爲住處也。
 5. 9 責法屬我也。
 6. 10 骨非是我、離骨無我。
 7. 骨我之際、誰爲我耶。
 8. 11 衆相既虛、獨骨存耳。
 9. 是故菩薩、諦觀之也。
 10. 13 求之諸相、無有實體。
 - 故知是中、亦無有我。
 11. 15 妄我非青等色故。
 12. 16 毛髮齒爪俱無我。實乃至骨色、
亦無有我。無我之中、誰爲之主。
- 作此觀時、故能除一切色欲。
- 此の觀を作す時、故^{いふゆゑ}に能く一切の色欲を除かん。

165 【卷十二】

166 腦極於上、胲極於下…『一切經音義』卷二十六（釈雲公撰「大般涅槃經音義」）「腦胲諸脈（胲古來反。『玉篇』云足大指也。謂分段之身、極上爲腦、極下爲胲。血肉所及、皆有其脈。腦外是髮、胲外是甲。此中無脈故。以簡之舊音、以爲胡賣反呼。爲骨者、全非經意也。）」（『大正藏』五四、四七三上）

13. 1 9 膾音、時充反。

14. 2 1 髑音、口丸反。

15. 2 7 骨鎖相連、依因而住。

16. 2 8 以心目之無全體也。

17. 2 9 夫欲因愛起、愛是欲因。

如是之身、無可愛處。

故此觀成三欲具斷。

18. 3 2 偏觀諸有、無異體相。

19. 3 5 謂菩薩修三摩地時、所見影像之色也。

20. 3 6 於是光中現佛之像者、

皆是觀力所生也。

譬如水清則月影斯現。

21. 3 8 言無主宰也。

22. 3 9 音舜。

23. 4 0 問所主也。

24. 4 1 一切諸法緣起而生、緣息即滅。

推尋是中、無實主者。

是故化佛不答而隱、

欲令學人推尋取悟耳。

25. 4 3 佛不現說、當應識是我邪。

26. 4 4 前疑識或是我。今明此識非我。

膾の音は、時充の反なり。

髑の音は、口丸の反なり。

骨の鎖相連なり、因に依りて住す。

心を以て之に目^なづくるも、全体無きなり。

夫れ欲は愛に因りて起く。愛は是れ欲の因なり。

是の如きの身は、愛す可き処無し。

故に此の觀成ぜば、三欲は具さに斷ず。

偏えに諸有を觀ずるに、異体の相無し。

菩薩の三摩地を修する時、見る所の影像の色を謂うなり。

是に於いて光の中に仏の像を現ずとは、

皆な是れ觀力の生ずる所なり。

譬えば水清^すめば、則ち月の影、斯に現るるが如し。

主宰無しと言うなり。

音は舜。

主とする所を問うなり。

一切の諸法は緣起きて生じ、緣息めば即ち滅す。

是の中を推し尋ぬるも、實の主無き者なり。

是の故に、化仏は答えずして隱れ、

學人をして推し尋ねて、悟りを取らしめんと欲するなり。

仏は現に説かざるも、當応に是れ我なりと識るべし。

前に識は或いは是れ我なりと疑う。今、此の識は我に非ざるを明かす。

夫觀心之法、以前後剎那爲其體也。

破一念爲八百剎那。

破一剎那爲九百生滅。

以緣起故、生滅是空。

以生滅故、剎那是空。

以剎那故、念念是空。

即此空念、次第相續。

譬如流水無有我。

此疑息中有我也。

觀息非我也。

又觀四大亦非我也。

觀緣起非我也。

身相非淨、要假因緣、而後有耳。

謂前髮毛等。

四謂身受心法。此之四觀、除患之本也。

菩薩以犯濟生、於乘爲急、

於戒爲緩也。

空無有也。(木示)何令人同無所有。

103 法由人弘、弘法在行。護法之切、

是行之尤者、故能不墮。

107 苦諦是果。易見名見。

39. 107 由此集因、能令行者、轉生六道、故云轉相。

夫れ觀心の法は、前後の剎那を以てその体と為すなり。

一念を破して八百剎那と為す。

一剎那を破して九百の生滅と為す。

縁起を以ての故に、生滅は是れ空なり。

生滅を以ての故に、剎那は是れ空なり。

剎那を以ての故に、念念は是れ空なり。

即ち此の空念は、次第に相続す。

譬えば流水に我有ること無きが如きなり。

此れは息の中に我有るを疑うなり。

息は我に非ざるを觀ずるなり。

又た四大も亦た我に非ざるを觀ずるなり。

縁起は、我に非ざるを觀ずるなり。

身相は淨に非ず、因縁を假るを要し、而して後に有るのみ。

前の髮毛等を謂う。

四は身受心法を謂う。此の四觀は、患を除くの本なり。

菩薩は犯を以て生を濟すくい、乘に於いて急と為し、

戒に於いて緩と為すなり。

空にして有ること無きなり。(木示)何ぞ人をして無所有に同じからしめん。

法は人に由りて弘まり、法を弘むるは行に在り。護法の切は、

是れ行の尤もなる者、故に能く墮ちず。

苦諦は是れ果なり。見易きを見と名づく。

此の集因に由りて、能く行者をして、六道に転生せしむるが故に、転相と云う。

40. 1 0 8 除苦相故。
41. 1 0 9 由道力故、故能除苦也。
42. 1 1 0 苦上加苦、名爲苦苦。
43. 1 1 0 遷流不停也。
44. 1 1 1 色貌毀變也。
45. 1 1 1 此舉果以顯因也。二十五有是苦之果。
集起而成、故云集也。
46. 1 1 2 言滅苦也。
47. 1 1 3 此之三法、是道體也。
48. 1 1 4 集因苦果也。
49. 1 1 5 道因滅果也。
50. 1 2 3 釋生義也。
51. 1 2 5 謂剎那不住也。
52. 1 2 6 謂髮白等相也。
53. 1 2 7 相似相續也。
54. 1 2 7 壯色都改也。
55. 1 2 8 水火二大、冷熱相違。風地二大、浮沉性反。
56. 1 3 5 如食肉之人得病報也。
57. 1 3 6 猶人患冷更服冷藥。
58. 1 3 7 夏暑冬寒之類是也。
59. 1 4 1 謂捨所受分段身也。
60. 1 4 3 謂命終而福全也。
61. 1 4 4 依報滅壞正報猶存、名爲福盡。

苦の相を除くが故なり。

道力に由るが故に、故に能く苦を除くるなり。

苦の上に苦を加うるを、名づけて苦苦と爲す。

遷流して停まらざるなり。

色貌は毀變するなり。

此れは果を挙げ以て因を顯かにするなり。二十五有は是れ苦の果なり。

集起して成ずるが故に、集と云うなり。

苦を滅するを言うなり。

此の三法は、是れ道の体なり。

集の因は苦の果なり。

道の因は滅の果なり。

生の義を釈するなり。

剎那は住せざるを謂うなり。

髮の白等の相を謂うなり

相似の相續なり。

莊色は都て改むるなり。

水・火の二大は、冷熱の相違う。風・地の二大は、浮沈の性反ず。

食肉の人の病報を得るが如きなり。

猶お人の冷を患い、更に冷藥を服するが如し。

夏の暑さ冬の寒さの類、是れなり。

受くる所の分段の身を捨するを謂うなり。

命終わりて福全きを謂うなり。

報滅壞するに依りて、正報猶お存するを、名づけて福尽くと爲す。

62. 145 依報正報二報俱亡、是福命盡。

63. 164 言五蔭是盛七苦之器也。

64. 167 無老相也。

65. 168 少年而亡、則無老苦。

66. 169 能爲諸苦之本也。

67. 171 世人不知生必有死。

衆惡其死、而貪於生、是爲顛倒。

68. 172 知生而不知死、蓋末俗之常也。

69. 172 不貪於生、但見死過、故云不爾。

70. 173 知生必有死也。

71. 174 女況生相也。人所共悅、稱之爲女。

以在諸蔭、名入他舍。

72. 176 生者、人之所欣故、喻之以美艷。

73. 176 況樂事也。

74. 177 心屬諸境。名之爲見。

75. 178 求生實也。

76. 178 境對於心。義同。答耳。

77. 179 生是出相、功德是報主。

能具六識。光明而照

六塵之境、故云功德天也。

78. 183 況依報自隨也。

79. 183 見生所能、名爲聞也。

依報と正報の二報俱に亡ずるは、是れ福命尽く。

五蔭は是れ七苦を盛るの器と言うなり。

老相無きなり。

年少くして亡ずれば、則ち老苦無し。

能く諸苦の本と爲すなり。

世の人は、生に必ず死有るを知らず。

衆はその死を惡みて、生を貪るは、是れ顛倒と爲す。

生を知りて而も死を知らざるは、蓋し末俗の常なり。

生を貪らず、但だ死の過を見るのみ。故に爾らずと云う。

生に必ず死有るを知るなり。

女は生の相を況うるなり。人の共に悦ぶ所、之れを称して女と爲す。

諸蔭に在るを以て、他舍に入ると名づく。

生とは、人の欣ぶ所なるが故に、之れを喻うるに美艷を以てす。

樂事を況うるなり。

心は諸境に属す。之れを名づけて見と爲す。

生の実なるを求むるなり。

境は心に対す。義、同じ。答うるのみ。

生は是れ出相、功德は是れ報主なり。

能く六識を具す。光明にして、六塵の境を照らす

故に、功德天と云うなり。

依報は自ら隨うを況うるなり。

生の能くする所を見るを、名づけて聞と爲すなり。

80. 185 知生由善、故云我福。
 81. 186 譬造善以求生也。
 82. 186 生喩内、死況外也。
 83. 187 將死之貌也。
 84. 188 樂事衰減也。
 85. 188 諸苦隨逐^{ちく}也。
 86. 188 形色枯頼¹⁶⁷也。
 87. 189 死相現前也。
 88. 189 詰^と死狀也。
 89. 190 死是没相。無所覺知、故名爲黒。
 90. 191 徵名以求實也。
 91. 193 死相現前、依報預捨。
 92. 194 此菩薩厭死喩也。
 修習明慧、況持利刀。
 訶責死過、名斷汝命。
 93. 196 厭死求生、是癡狀也。
 94. 196 不知斷死之法、名無慧也。
 95. 198 生在死前故云姉也。
 199 生死相隨也。
- 生は善に由るを知るが故に、我福と云うなり。
 善を造りて、以て生を求むるに譬うるなり。
 生は内を喩えい、死は外に況うるなり。
 將に死なんとするの貌なり。
 樂事は衰減するなり。
 諸苦隨逐^{ちく}するなり。
 形色は枯頼するなり。
 死相は現前するなり。
 死を詰^とう狀なり。
 死は是れ没する相なり。覺知する所無きが故に、名づけて黒と爲す。
 名を徵して以て実を求むるなり。
 死相現前す。依報は預め捨す。
 この菩薩、死を厭う喩えなり。
 明慧を修習するは、利刀を持するを況う。
 死の過ちを訶責するは、汝の命を斷ずと名づく。
 死を厭い生を求むるは、是れ癡の狀なり。
 死を斷ずるの法を知らざるを、無慧と名づくなり。
 生は死の前に在るが故に、姉と云うなり。
 生死相い隨うなり。

¹⁶⁷ 頼…悴に同じ。やつれる。

96. 200 若厭於死、先斷其生。

97. 201 以情審法也。

98. 205 生死一體、應同恭敬。

99. 206 厭生死也。

100. 206 生死俱遣也。

101. 207 捨聖之凡也。

102. 209 況凡夫生死俱受也。

103. 210 樂生死也。

104. 211 歡生樂死也。

105. 212 推聖責凡也。

106. 214 以汝念我、二俱令住。

107. 215 未離生死、故不願也。

108. 218 愛樂之深、是爲貪受。

109. 219 喻修淨行也。

110. 219 善未增長、故名曰童。

111. 220 飢況苦也。

112. 221 糞譬老死菓喻生也。

113. 221 好生之深、況即取也。

114. 224 知生而不知死、故形赧¹⁸⁸而心愧。

115. 225 其心雖慙、而悔不盡。

若し死をて厭えば、先ず其の生を断じて、

情を以て法を審^{つまひ}らかにするなり。

生死の一体は、応に同じく恭敬すべし。

生死を厭うなり。

生死は俱に遣るなり。

聖を捨つるの凡なり。

凡夫の生死俱に受くるを況うなり。

生死を樂うなり。

生を歡び死を樂うなり。

聖を推し凡を責むるなり。

汝、我を念ずるを以て、二つ俱に住せしむ。

未だ生死を離れざるが故に、願わざるなり。

愛樂の深きは、是れ貪受と爲す。

淨行を修するを喻うるなり。

善は未だ増長せざるが故に、名づけて童と曰う。

飢は苦を況うるなり。

糞は老死を譬え、菓は生を喻うるなり。

生を好むの深きは、即ち取るを況うるなり。

生を知りて而して死を知らざるが故に、形は赧¹⁸⁸じて、而も心は愧ず。

その心は、慙ずと雖も、悔やむこと尽きず。

116. 2 2 6 若實惡死、何用貪生。
117. 2 2 8 不受生不捨死。

118. 2 3 0 人譬說者。

119. 2 3 0 衢¹⁶⁹ 況四生之路也。

120. 2 3 1 器喩諸天蔭身也。滿食譬諸天之報具也。

121. 2 3 2 以果貿因也。

122. 2 3 2 遠況久涉生死也。

123. 2 3 3 無善自充也。

124. 2 3 3 厭世苦也。

125. 2 3 4 觀彼諸天果報也。

126. 2 3 5 問是常邪、爲無常邪。

127. 2 3 9 責本意也。

128. 2 4 1 獨有凡夫、不知死過、而求人天之果也。

129. 2 4 4 天上人中、俱未免於生死、故不顛也。

130. 2 4 5 凡夫之人、貪愛生樂、而志死苦。

131. 2 4 7 樹況蔭身也。夫有樹、

則有毒。有身必有死。

132. 2 5 0 蔭之客生、亦猶樹之有毒。

若し実に死を惡めば、何を用て生を貪らん。
生を受けず、死を捨てず。

人は說者を譬う。

衢は四生の路を況うるなり。

器は諸天、身を蔭^{おお}うを喩うるなり。滿食は、諸天の報具を譬うるなり。

果を以て因を貿うなり。

遠は久しく生死に渉るを況うるなり。

善^よ自く充つること無きなり。

世の苦を厭うなり。

彼の諸天の果報を觀るなり。

是れ常なるや、無常と為すやを問う。

本意を責むるなり。

独り凡夫有るのみ。死の過を知らずして、人天の果を求むるなり。

天上人中、俱に未だ生死を免れざるが故に、不顛なり。

凡夫の人は、生樂を貪愛し、而して死苦を志す。

樹は身を蔭^{おほ}うを況うるなり。夫れ樹有れば、

則ち毒有り。身有らば、必ず死有り。

蔭の客の生、亦た猶お樹の毒有り。

樹偏能殺、蔭偏能死。

樹は偏えに能く殺し、蔭は偏えに能く死す。

133. 252 長短雖殊、俱未免於死患。

長短殊なると雖も、俱に未だ死の患いを免れず。

134. 253 此喻諸天之神也。

此れは諸天の身を喩うるなり。

135. 254 將墮三途名之爲險。

將に三途に墮ちんとすねを、之を名づけて險と為す。

以癡障心也。

癡を以て心を障うるなり。

136. 255 露況天中妙樂¹⁷⁰也。

露は天中の妙樂を況うるなり。

137. 256 天報長也。除人之苦、受天之樂。

天の報は長きなり。人の苦を除きて、天の樂を受く。

138. 258 坑況惡道也。謂造業求報也。

坑は惡道を況うるなり。業を造り報を求むるを謂うなり。

139. 259 跌況報盡也。以貪生故、死墮三途。

跌は報の尽くるを況うるなり。生を貪るを以ての故に、死して三途に墮つ。

140. 260 天人之中、皆不樂生也。

天人の中、皆な生を樂わざるなり。

141. 262 地獄之中唯以鐵丸爲食。

地獄の中、唯だ鉄丸を以て食と為す。

142. 273 喻死也。

死を喩うるなり。

143. 274 況老也。譬客能也。生死相對也。

老を況うるなり。客能を譬うるなり。生死相対するなり。

144. 275 生死相違也。老死相資、故云遣耳。

生死相違なり。老死相資くるが故に、遣ると云うのみ。

145. 276 老能客生也。生不免老也。

老は能く生を客するなり。生は老を免れざるなり。

146. 277 生必歸死也。

生は必ず死に歸するなり。

147. 297 王喻盛色也。

王は盛色を喩うるなり。

148. 298 敵國況老病死也。

敵國は老病死を況うるなり。

149. 3 2 0 喩少年之時、諸根具足也。
 150. 3 2 0 王譬病身、夫人況老。
 151. 3 2 1 喩無常之力、能遷少色也。
 152. 3 2 2 譬少不免老。
 153. 3 2 3 病能毀壞諸根。
 154. 3 3 5 怨賊喩破戒、囊橋況戒體。
 以病因緣而破淨戒、
 猶如毀圻也。
 155. 3 3 6 由病苦逼、故不得正念。
 156. 3 8 5 上音哲、下音叡。
 157. 3 8 6 其蛇黑毒。
 若觸人衣及人行處、此人必死。
 158. 3 8 7 此星出自仲秋、
 因星結呪能消四毒。
 159. 3 9 3 況二十五有也。
 160. 3 9 4 闕善以自給也。
 161. 3 9 4 生死無窮也。
 162. 3 9 5 五根皆滅、意識獨行。
 孤魂長逝、無伴之義。

少年の時、諸根具足するを喩うるなり。
 王は病身を譬え、夫人は老を況う。
 無常の力の能く少色を遷すを喩うるなり。
 少きは老いを免れざるを譬う。
 病は能く諸根を毀壞す。
 怨賊は破戒を喩え、囊橋^ニは戒体を況う。
 病の因縁を以て、而して淨戒を破すること、
 猶お毀圻^ニするが如きなり。
 病苦の逼まることに由るが故に、正念を得ず。
 上の音は哲、下の音は叡なり。
 其の蛇は黒毒なり。
 若し人の衣及び人の行く処に触るれば、此の人は必ず死す。
 此の星は仲秋より出で、
 星の結呪に因りて、能く四毒を消す。
 二十五有を況うるなり。
 善以て自給することを闕くなり。
 生死窮まること無きなり。
 五根は皆な滅するも、意識独り行く。
 孤魂長逝するは、無伴の義なり。

¹⁷¹ 囊橋…浮囊橋梁のこと。浮袋及び橋のこと。
¹⁷² 毀圻…(ぎちやく)こわす。

163. 396 隨業所之也。

業の之く所に随うなり。

164. 397 死道昏沈、故云深邃¹⁷³。

死道は昏沈するが故に、深邃と云う。

諸根壞滅、是爲幽闇。

諸根は壞滅するは、是れ幽闇と爲す。

六識不行、無明之象。

六識行わざるは、無明の象なり。

165. 398 命將盡時、不因門戸而至死處。

命將に尽きんとする時、門戸に因らずして、而して死処に至る。

166. 399 臨終後念、五根冥然、無所知覺。

臨終の後の念は、五根冥然として、知覺する所無し。

167. 399 必死之病、良醫拱手。

必死の病は、良医は手を拱く。

168. 400 佛雖大慧、不能遮止衆生報業。

仏は大慧なりと雖も、衆生の報業を遮止すること能わず。

169. 400 到已便受、不可脫免。

到り已りて便ち受け、脱免する可からず。

170. 401 報識雖滅、形相儼然¹⁷⁴。

報識は滅すと雖も、形相は儼然なり。

見之心傷、是以愁也。

之を見る心は傷つぎ、是を以て愁うるなり。

171. 402 哀其同類、而有異相。

其の同類に而も異相有ることを哀れむ。

是故驚惶、心生憂惱。

是の故に驚き惶れ、心に憂惱を生ず。

172. 403 死不離身、而人不能覺知時節。

死は身を離れず、而も人は時節を覺知すること能わず。

173. 413 舉事釋也。

事を挙げて釈するなり。

174. 417 剖音、普後反。

剖の音は、普後の反なり。

175. 432 輪王有四種。金輪王四天下、

輪王に四種有り。金輪王は四天下、

銀輪王三天下、銅輪王二天下、

銀輪王は三天下、銅輪王は二天下、

¹⁷³ 深邃…(シンスイ)奥深い。深遠の意。『一切経音義』卷十四に(『大宝積經』音義)「深邃(尸任反。『字書』深測也。『說文』從水采聲。采音與上同、下雖醉反。

『說文』邃深遠也。從穴遂聲。)(『大正藏』五四、三九三上)

¹⁷⁴ 儼然…おごそかなさま。

鐵輪王一天下。

176. 4 4 3 駿音、惣公反。

177. 5 1 1 天眼不瞋¹⁷⁵、人眼瞋故、

以瞋不瞋、爲其異也。

178. 5 4 0 前說五陰皆是苦者、

即有漏中常無樂也。

既違教理故曰不然。

179. 5 4 2 有漏之色非獨是苦、亦有樂也。

180. 5 4 3 苦不應求、求則非苦。

181. 5 4 5 既有樂受、焉得皆苦。

182. 5 4 6 若行善得樂、明苦非常也。

183. 5 4 7 根塵所對、則有樂生。

184. 5 4 9 此下舉三乘樂也

185. 5 5 3 謂辟支樂也。

186. 5 5 5 是佛樂也。

187. 5 5 6 此經中三乘受樂偈。

188. 5 5 8 昔說有樂、令說爲苦。

前後相違、理不應也

189. 5 6 1 下苦謂人天二乘等果。

悉皆是苦、而妄生樂。

鐵輪王是一天下なり。

駿の音は、惣公の反なり。

天眼は瞋かず、人眼は瞋くが故に、

瞋く。瞋かざるを以て、其の異と爲すなり。

前に五陰は皆な是れ苦なりと説くとは、

即ち有漏の中に、常に樂無きなり。

既に教理に違うが故に、然らずと曰う。

有漏の色は、独り是れ苦なるのみに非ず、亦た樂有るなり。

苦は応に求むべからず、求むれば、即ち苦に非ず。

既に樂受有れば、焉^{いずく}ぞ皆な苦なるを得るや。

若し善を行じて樂を得れば、苦は常ならざるを明かすなり。

根と塵の對する所は、則ち樂生ずること有り。

此の下は三乗の樂を挙ぐるなり。

辟支の樂を謂うなり。

是れ仏の樂なり。

此の經の中、三乘受樂の偈なり。

昔、樂有りと説くも、説いて苦と爲さしむ。

前後相違、理應ぜざるなり。

下苦は人天・二乗等の果を謂う。

悉く皆な是れ苦なるも、而も妄より樂を生ず。

我昔隨彼妄情故說有樂。

190. 562 昔樂是苦。今說是苦。有何異哉。

191. 566 佛以天上輕苦爲下苦。

難者、以三惡爲下苦。此非得意也¹⁷⁶。

192. 567 三惡道生應名爲樂

193. 570 下樂生苦、亦猶下苦生樂。

194. 571 苦樂相形云何答也。

195. 573 千罰之中、初一是下、至半爲中、

數滿爲上。初一下時、應生樂想。

樂若不生即違前說。

196. 576 以是苦緣而生苦義、無別樂緣而生樂想。

197. 578 不以一下爲樂。以脫千罰爲其樂耳。

198. 581 此結苦中妄生樂也。

衆生之心得免三途、

則以人天爲樂、而實非樂。

由此觀之、苦是真實、而樂是虛妄。

譬如受一脫千、故生樂也。

我れは昔、彼の妄情に隨うが故に、樂有りと説く。

昔の樂は是れ苦なり。今、是れ苦なりと説く。何の異有らんや。

仏は天上の輕苦を以て下苦と爲す。

難者は三惡を以て下苦¹⁷⁷と爲す。此れ意を得るに非ざるなり。

三惡道の生、応に名づけて樂と爲すべし。

下の樂は苦を生じ、亦た猶お下苦は樂を生ずるが如し。

苦樂相い形^くぶれば、云何が答えんや。

千罰の中、初めの一は是れ下、半に至るを中と爲し、

數滿ちるを上と爲す。初めの一下の時、應に樂想を生ずべし。

樂若し生ぜざれば、即ち前説に違う。

是の苦緣を以て苦義を生ずるは、別の樂緣無くして、而も樂想を生ず。

一下を以て樂と爲さず。千罰を脱するを以て其の樂と爲すのみ。

此れは苦の中に妄より樂を生ずるを結ぶなり。

衆生の心は三途を免るることを得れば、

則ち人天を以て樂と爲すも、而も實は樂に非ず。

此れに由りて之を觀ずるに、苦は是れ真に實なり。而して樂は是れ虛妄なり。

譬えば一を受けて千を脱するが如し。故に樂を生ずるなり。

¹⁷⁶ 此非得意也…『大般涅槃經集解』卷三十に、「仏の意は、人天を下苦としているが、迦葉は、三塗（三惡道）を下苦としている」。「佛意以人天為下苦。迦葉以三塗為下苦。」（『大正藏』三七、四八二下）。韋諗は、これを承けてか、「仏は天上の輕苦を下苦として、討論者（迦葉）は、三惡を以て下苦としている。これは、（仏の）意を得ていない。」「566 佛以天上輕苦為下苦。難者、以三惡為下苦。此非得意也。」としている。

¹⁷⁷ 下苦…人天の苦は輕いので、下苦としている。『大般涅槃經集解』卷三十に、「下苦者、三惡重為上苦。人天輕為下苦。凡夫不覺下苦、橫生樂想也。」（『大正藏』三七、四八二下）

199. 583 昔说有樂以奪重苦。

200. 586 三受之中雖有樂受、以三苦論之、悉皆無樂。

201. 590 此三受中之樂受耳。而實是行苦壞苦也。

202. 592 知彼樂受不離於苦、所以說言一切皆苦。

203. 593 樂生厭死、二俱是苦。

204. 594 隨其倒妄¹⁷⁸ 說爲樂耳。

205. 598 昔說二乘爲樂、今言是苦。

昔说有樂、今言皆苦。

以今徵昔是妄不邪

206. 601 前說衆事已辨是爲最樂。

今說無樂其義若何

207. 605 前所說偈 是道根本。

208. 611 一切資用能爲樂因亦能爲苦因也。

209. 614 能生苦因、是無樂也。

210. 617 說有顛倒之樂想也。

211. 618 知無漏諸善感。

變易苦¹⁷⁹ 名爲苦因。

得涅槃樂、名爲樂因也。

昔は樂有りと説きて、以て重苦を奪う。

三受の中に樂受有りと雖も、三苦を以て之を論ずれば、悉く皆な樂無し。

此の三受の中の樂受なるのみ。而して實は是れ行苦・壞苦なり。

彼の樂受は、苦を離れずと知る。所以に説いて一切皆苦と言う。

生を樂い死を厭うは、二俱に是れ苦なり。

其の倒妄に隨いて、説いて樂と爲すのみ。

昔は二乘を説いて樂と爲し、今は是れ苦なりと言う。

昔は樂有りと説くも、今は、皆苦なりと言う。

今を以て昔を徵^{ちよう}するは、是れ妄なるやいなや。

前に衆事を説き、已に是れ最樂と爲すと辨ず。

今無樂を説くは、其の義^{いか}若何ん。

前に説く所の偈は、是れ道の根本なり。

一切の資用は能く樂因と爲すも、亦た能く苦因と爲すなり。

能く苦の因を生ずるは、是れ無樂なり。

顛倒の樂想有りと説くなり。

無漏の諸善感を知る。

變易の苦は、名づけて苦因と爲す。

涅槃の樂を得るは、名づけて樂因と爲すなり。

¹⁷⁸ 倒妄…顛倒妄有のこと。

¹⁷⁹ 變易苦…（存在が）生滅し壞れる苦しみ。『大乘義章』卷八、「生滅壞苦、名變易苦。」（『大正藏』四四、六一五下）

1. 4 此破外道常計也。
2. 5 非本無今有故無生。
3. 6 非已有還無故無滅。
4. 6 既無生滅何去何來。
5. 7 非已生已滅故。
6. 7 非未生未滅故。
7. 7 非已生未滅故。
8. 7 是體常有故。
9. 8 賴因證故。
10. 8 離所作相故。
11. 8 離能作相故。
12. 9 離妄想故。
13. 9 是實相故。
14. 9 言語道斷故。
15. 10 假立名故。
16. 10 非四蔭故。
17. 10 離色蔭相故。
18. 11 離色相也。
19. 12 結常義也。
20. 13 如來是境如智也。 法是智如境也。

此れは外道の常計を破するなり。
本無今有に非ざるが故に、無生なり。
已に有り還た無なるに非ざるが故に、無滅なり。
既に生滅無ければ、何ぞ去り何ぞ來たる。
已生・已滅に非ざるが故なり。
未生・未滅に非ざるが故なり。
已生・未滅に非ざるが故なり。
是の体は常に有が故なり。
因に頼って証するが故なり。
所作の相を離るるが故なり。
能作の相を離るるが故なり。
妄想を離るるが故なり。
是れ實相なるが故なり。
言語道斷なるが故なり。
假に名を立つるが故なり。
四蔭に非ざるが故なり。
色蔭の相を離るるが故なり。
色相を離るるなり。
常の義を結ぶなり。
如來は是れ境如智なり。 法は是れ智如境なり。

20. 1 3 明境是常也。
21. 1 4 境常智亦常故。
22. 1 5 法僧如來、性不異故。
23. 1 5 三寶之性無差異也。
24. 1 6 離三寶外 悉從緣生。

境は是れ常なりと明かす。

境は常なれば、智も亦た常なるが故なり。

法・僧・如來は、性異ならざるが故なり。

三宝の性に差異無きなり。

三宝を離れて外は、悉く縁從_より生_ずず。

【韋諗注集成 卷十九篇抄（卷首）】 181

1. 5 闍王煞父是昔年也。

述經之人、却序前事、故曰爾時。

闍王之煞父は、是れ昔年なり。

經を述ぶる人、却って前の事を序するが故に、爾時と曰う。

【韋諗注集成 卷十九篇抄（卷末）】

六、12 若具造者、則於一劫之中、受五倍苦。

若し具さに造れば、則ち一劫の中に於いて五倍の苦を受く。

181

【卷十九】『神奈川縣文化財圖鑑』には、巻首及び巻末の写真が掲載されている。巻首は、題目及び撰者号から始まる十五行の内容の写真である（八四頁）。巻末の写真は、奥書がなく、題目から十六行の内容が掲載されている（一〇三頁）。巻首及び巻末には、それぞれ一か所ずつ計二か所の注釈が確認できる。経文は、わずかに巻首及び巻末の合計三二行の中からでも、それぞれ『大正蔵』所収の「北本」『涅槃經』と内容の出入が見られた箇所があった。解説によると、巻第十九には全部で四十二箇所の注釈があるという。しかしながら、二、三箇所を除き、ほとんどが短いものにすぎないだそうだ。（『神奈川縣文化財圖鑑』（書蹟篇）一〇三―一〇四頁。）

第二節 韋諡注釈の特徴

韋諡の注釈には、特に次の三点の特徴が見られる。

七、引用文献の不開示

八、語彙の一部変更

九、同語反復の忌避

ここでは、この三点について論証する。

第一項 引用文献の不開示

まず、引用文献の不開示について検討する。全三〇巻の内、現存の確認が取れている六巻について、巻二及び巻十二は、全体を確認できた。その中で、巻二の注釈箇所は、全部で三九三箇所、そして巻十二は、全部で一八七箇所存在する。そして、凶鑑で確認できた巻八、第十、第十四、巻十九もそれぞれ二三箇所、十五箇所、十三箇所、二箇所であるが、いずれも引用先を表す特定の人名、經典名や書物名の「○○に曰く」などの表現が見当たらない。このことから、韋諡がどのような經典や論書を読み、どの人からどういった思想の影響を受けたのかは、簡単には知ることができない。それを知るためには、まず韋諡の注の特徴を精査し、また注釈の部分がオリジナルであるのか、あるいはほかの『涅槃經』の注釈書のものなのか、具に調べていくしかない。

そうは言っても、既に散逸した『涅槃經』の注釈書も多くあり、その内容も窺い知ることができない。いま、ここでできるのは、あくまでも、現存する史料と照らし合わせ、韋諡が参照したであろうという可能性があることを指摘するのみである。具体的な論証は、第五章にて述べる。

【『集解』からの引用と思われる箇所】

ひとまず、現存する一番古い『涅槃經』の注釈書である梁代の『大般涅槃經集解』（以下『集解』と略す。）について考えてみる。『集解』は、その名の通り、人の注釈を集めた書物である。『集解』には、道生、僧亮、法瑤、曇濟、僧宗、宝亮、智秀、法智、法安、曇准の十人の法師の注釈が集められたものである。七十一巻の大作であり、梁代から伝えられて、奈良時代に日本に伝えられて、「奈良朝一切経目録」にも

多く記録され、天平写本として書写されたものが重要文化財にも指定されている。唐代の韋諗にとっては、『涅槃經』を注釈する上で、まず参照したい本であろう。

『注涅槃經』426 - 427 行

426 具足種種功德珍寶、戒定智慧以爲牆塹俾

427 俾俾倪者謂於孔中伺望戒況牆也、以譬塹也、取喻俾倪、是。

非常之事。戒防非故。定境深故。慧見性故。

まず、韋諗がこの「俾倪」という言葉の注をどのように著したかを見てみる。

「俾倪者、謂於孔中伺望非常之事。戒、況牆也、以防非故。定、譬塹也、取境深故。慧、喻俾倪、是見性故。」

〔俾倪とは、孔の中に於いて非常の事を伺い望むことを謂う。戒は、牆を況うるなり、以て非を防ぐが故に。定は、塹を譬うなり、境の深さを取るが故に。慧は、俾倪を喩うるが故に、是れ見性の故に。〕

俾倪という言葉は、城壁を指す言葉である。と同時に、城壁に設けている小さい穴から城外の様子を見るという非常時事態をも指すことがわかる。

では、『集解』では、この部分はどうなっているか。『集解』の卷六に、

「案僧亮曰、此譬廣上事也。城喻涅槃。僧宗曰、佛果排遣累、喻城之防非也。戒防身口外失、如牆也。定水為塹也。慧能決斷除惡、如俾倪也。¹⁸²⁾」

¹⁸²⁾ 『大正藏』三七、四〇一中。

〔案ずるに、僧亮曰わく、此れ広上事を譬うるなり。城は、涅槃を喩う。僧宗曰わく、仏果は、遺累を排すは、城の非を防ぐを喩うなり。戒は、牆の如きに身口の外失を防ぐなり。水を定んで塹と為すなり。慧は能く惡を除き決斷す、俾倪の如くなり。〕

次に釈雲公撰「涅槃經音義」の「俾倪」の箇所を見ると、

俾倪（上、普米反。下、五禮反。『玉篇』又作隣圪。『埤蒼』『廣雅』並云、城小牆。又『釋名』云、於牆孔中伺候非常之事。今詳此字有其二種。一者、伺候。二者、垣牆。垣牆不合、從人伺候、豈宜從土。若是垣牆、應為埤圪。若取伺候、應作俾倪。兩文二義、不失諸宗故也。）

〔俾倪、上は、普米の反。下は、五禮の反。『玉篇』は、又た隣圪に作る。『埤蒼』『廣雅』並びに云う、城の小さな牆なり、と。又た『釋名』に云わく、牆の孔の中に於いて非常の事を伺い候（ま）つこと。今に此の字を詳びらかにするに、其れに二種有り。一とは、伺い候つ。二には、垣（かき）の牆。垣の牆は合わず、人に従い伺い候つは、豈に宜しく土に従うや。若し是れ垣牆なれば、応に埤圪と為すべし。若し伺候を取れば、応に俾倪に作るべし。兩つの文に二義、諸の宗を失わざるが故なり。〕

上記の『注涅槃』の下線の部分に注目すると、「涅槃經音義」の下線箇所と一致する。韋諡は、『釈名』曰くとは特に注記していない。韋諡の註の中で、引用先を明記している註の箇所は、今のところ見当たらない。これは、韋諡註の特徴の一つであると考ええる。

もう一つ特徴を挙げるならば、韋諡は同じ字、同じ言葉を使用するのを嫌う傾向がある。例えば、釈雲公の「涅槃經音義」では、『釋名』云、於牆孔中伺候非常之事。」と挙げているが、韋諡は、「謂於孔中伺望非常之事。」と変更している。「牆孔」を「孔中」に、そして「伺候」を「伺望」と一文字ずつ変えている。このような傾向は、ほかの箇所でも見られる。

さらに、韋諡の特徴と言えることは、韋諡の「況」「譬」「喩」の使い方である。この三文字は共に、韋諡が、何か例をあげて喩える時に使われる。但し、同じ文の中に数回使用する場合は、韋諡はこの三文字を順番に使う。例えば、「況」↓「譬」↓「喩」という風に使用するのである。また三回以上使用する場合は、前に使用した字を繰り返す時がある。例えば、「況」↓「譬」↓「喩」↓「況」とこのように使う。

下記の韋諡註の下線箇所に注目して見て頂きたい。「戒、況牆也、以防非故。定、譬塹也、取境深故。慧、喩俾倪、是見性故。」と、このように違う字をあてて行くのが韋諡のやり方である。韋諡の註には、以上のような三つの特徴が見られる。

次に、この註で言えば、韋諡は、釈雲公の音義のみを参照したのではない。他からも引用している。それは、梁・宝亮等集『大般涅槃經集解』からの引用である。

この箇所は、韋諡の「戒、況牆也、以防非故。定、譬塹也、取境深故。慧、喻俾倪、是見性故。」と酷似している。ついでに、『集解』の「喻」の使い方を見ると、「城喻涅槃…喻城之防非也。」と「喻」「喻」と続いている。そのあとは、「如牆也…如俾倪也。」と、「如」「如」と続く。韋諡のように、三つも四つも違う字を当てることはしていない。

韋諡が確実に、釈雲公の「涅槃經音義」を見たと言うには、ほかの用例をも見ていかなければならない。『大正蔵』のデータベースでは、五十九件のヒットがある。ほかの用例を見て見ると、まず菩薩の名前としての用例が挙げられる。北涼・曇無讖訳の『大方等無想經』卷一に、「大雲俾倪王菩薩摩訶薩」とある。また、ほかの用例を見ていくと、註の中で「伺候」と挙げているほかの用例はない。釈雲公の「涅槃經音義」は確実に後代の宋・希麟の『続一切經音義』にも受け継がれたようである。

宋・希麟集『續一切經音義』卷二、

「俾倪(上、普米反。下、五禮反。『說文』作墀垠、又作墀院。『廣雅』云、城上小垣也。考聲女牆也。『釋名』云、於牆孔中伺候非常也。二字亦通。去聲呼經本、或作脾脫非也。)」(『大正蔵』五四、九四二中)

韋諡が釈雲公撰「涅槃經音義」(『唐・慧琳撰『一切經音義』卷二五所収)を参照したであろうと言える引用箇所は、俾倪という言葉についての韋諡の注から見て取れる。

第二項 語彙の部分改変

韋諡の注の特徴の第二点は、語彙の改変である。韋諡は引用をする場合、そのままの引用を嫌い、引用文の語彙の中の一字を変えることがしばしば行われる。

韋諡は、言葉の意味や使い方に大変注意深い傾向が見られる。まず、『注涅槃經』卷二の二二四—二二八行からの例をしてみる。

214 (……………中略……………)經由

215 恒河、抱兒厲渡¹⁸³⁾。其水漂疾^{漂音、偏妙反}。終¹⁸⁴⁾不放捨。

216 中遇二乘、況經恒河。持解求出、喻抱兒渡。
爲小所勸、名水漂疾。守解莫從、如不放捨。於是母子

217 遂共俱沒^{以身殉法}。如是女人慈念功德、命終
俱沒之狀

218 之後生於梵天。

《恒河を經由し、兒を抱き厲¹⁸³⁾渡す。其の水漂疾なれども、(漂の音、偏妙の反。)終に放捨せず。(中に二乘に遇うを、況えて恒河を経す。解を持して出づるを求むるは、喻うるに兒を抱きて渡る。小の勸む所と爲すを、名づけて水漂疾なり。解を守り従わざること、放捨せざるが如し。)是に於いて母子遂に共俱に沒す。(身を以法に殉じ、俱に没する状。)是の如き女人、慈念の功德にて、命終の後、梵天に生ず。》

この一段は、「壽命品」でも有名な貧女昇天の物語の箇所であるが、この中の215行にある「厲渡」という言葉は、「北本」「南本」に由来するものではなく、韋諡が『般泥洹經』から採用したもののように思われる。「北本」も「南本」も「而渡」というただ「渡る」という意味の言葉を採用している。この「厲渡」を大正蔵のデータベースで調べてみると、わずに五例¹⁸⁵⁾しかない。その用例は、主に二種類に分かれる。

¹⁸³⁾ 厲渡 『大正蔵』「北本」・「南本」 而渡。『大正蔵』「南本」客注 渡¹⁸⁶⁾度【三】。

¹⁸⁴⁾ 終 『大正蔵』「北本」・「南本」 而。

¹⁸⁵⁾ 厲渡 『大正蔵』「北本」而度。「南本」而度。渡¹⁸⁶⁾度【三】。厲は、腰ぐらいの高さの川を渡るという意有り。『一切経音義』卷五二「厲渡(力制反。『余雅』由帶已上、爲厲。由自也疎已下、爲揭褰衣也。揭音、去例反。)」(『大正蔵』五四、六五七中)

¹⁸⁶⁾ 『般泥洹經』卷二、「彼時、佛請賢者阿難、俱之拘夷邑、已樂波旬、歷城中度、行半道所、佛疾生、身背痛、止樹下坐。勅賢者阿難、持鉢到拘遺河取水、則受教行。是時五百乘車、厲渡上流、水濁未清、阿難行取水還、往白佛言、向群車過、水濁未清、適可澡洗、有無連河、去此不遠、請取可飲。佛取鉢水、澡面洗足、於是以忍、疾又得間。」(『大正蔵』一、一八三下) 『大莊嚴論經』卷十五、「如牛厲渡水、導正從亦正、人王立正法、從者亦如是。」(『大正蔵』四、

まず、第一は、「五百乗車厲渡上流」、もう一つの用例は、「如牛厲渡水」¹⁸⁷である。具体的に見て見ると、

《般泥洹經》卷二の用例では、

「是時五百乗車、厲渡¹⁸⁸上流、水濁未清¹⁸⁹」

厲渡という言葉は、初期仏教の『涅槃經』である『般泥洹經』巻下に見られる。この『般泥洹經』は、『大正蔵』巻一所収で、訳者不詳である。『仏書解説事典』によると、この經典は、①長阿含第二經遊行經（『大正蔵』巻一所収）、仏般泥洹經（『大正蔵』巻一所収、白法祖訳）③長尼柯耶一六經 Pari-nibbana S.④『大般涅槃經』（『大正蔵』巻一法顯訳）⑤根本説一切有毘奈耶雜事（『大正蔵』二四義淨訳）の中の一部であり、本經を含めて合計六本の同本異訳の經典の一つであり、他の本に比べて比較的に裝飾が少なく原始的であるという。

三四〇下）『法句經』卷二、「如牛厲渡水、導正從亦正、奉法心不邪、如是衆普安。」（『大正蔵』四、五七四中一下）『弥沙塞部和醯五分律』卷三十、「迦葉復詰阿難言、佛昔從汝三反索水、汝竟不奉、犯突吉羅、亦應見罪悔過。阿難言、我非不欲奉。時有五百乗車上流厲渡、水濁未清、恐以致患、是以不奉。我於此中亦不見罪相、敬信大德、今當悔過。」（『大正蔵』二二、一九一中一下）『一切經音義』卷五二、「厲渡（力制反。『爾雅』由帶已上為厲、由自也睪已下為揭褰衣也。揭音、去例反。）」（『大正蔵』五四、六五七中）

¹⁸⁷ 『大正蔵』四、三四〇下。

¹⁸⁸ 『大正蔵』校注、渡Ⅱ度【三】。

¹⁸⁹ 『大正蔵』一、一八三下。

『般泥洹經』卷二、「彼時、佛請¹⁹⁰賢者阿難、俱之拘夷邑、已樂波旬、歷城中度、行半道所、佛疾生、身背痛、止樹下坐。勅賢者阿難、持鉢到拘遺¹⁹¹河取水、則受教行。是時五百乘車、厲渡¹⁹²上流、水濁未清、阿難行取水還、往白佛言、「向群車過¹⁹³、水濁未清、適可澡洗；有漚連河、去此不遠、請取可飲。¹⁹⁴」

この箇所は、釈尊が体調を崩しているときに、水が飲みたいといい、阿難尊者に川に行って水を取ってくるようにとお願ひされる場面である。水を取りに行った阿難は、五百もの馬車が上流を渡ったがために、水が濁っていて、身体を洗うのにはいいが、飲み水に適していないので、ほかの近くに川に行って取ってくることを述べている場面である。

同じ用例が、後に『弥沙塞部和醯五分律』の中に使用されている。こちらは、阿難が水が飲みたいと言われる釈尊のために、水を取って来なかったことについて責められる場面で、阿難が馬車が通ったためと説明している箇所の例である。

もう一つの用例としては、「如牛厲渡水」（牛が水を渡るが如く）というものである。次の二か所で見られる。

『大莊嚴論經』卷十五、「如牛厲渡水、導止從亦正、人王立正法、從者亦如是。¹⁹⁵」

『法句經』卷二、「如牛厲渡水、導¹⁹⁶正從亦正、奉法心不邪、如是衆普安。¹⁹⁷」

¹⁹⁰ 『大正蔵』校注、請^{||}語【三】。

¹⁹¹ 『大正蔵』校注、遺^{||}匱【三】。

¹⁹² 『大正蔵』校注、渡^{||}度【三】。

¹⁹³ 『大正蔵』校注、過^{||}（水）【三】。

¹⁹⁴ 『大正蔵』一、一八三下。

¹⁹⁵ 『大正蔵』四、三四〇下。

¹⁹⁶ 『大正蔵』校注、導^{||}道【聖】。

¹⁹⁷ 『大正蔵』四、五七四中一下。

この二つともが、牛が水を渡るように、正しく導けば正しくついてくるといふ譬えで使用されている。三つ目の例は、『一切経音義』巻五二に収録されている。

厲渡(力制反。『余雅』由帶已上、為厲由自也。睽已下為揭褰衣也。掲音、去例反)。

《厲渡は、力制の反。『余雅』に帶より上、自らに由りて厲と為すなり。睽より下は褰衣を掲げると為すなり。掲の音、去例の反》

厲は、腰ぐらゐの高さの川を渡るといふ意味がある。褰は、説文解字では「褰、褲也。」とあるので、ズボンをあげることを指す。ここには、ただ川を渡るにも、明白な違いがある。「北本」も「南本」も、ただの「而渡」といふ言葉を使用し、ただ川を渡ることを示したのみであった。しかしながら、韋諡は、わざわざ『般泥洹經』から「厲渡」といふ言葉を採用した。貧女は、子どもを出して川を渡ったわけではない。水が腰ぐらゐの高さまで来ている川を渡ったのだ。韋諡は、その緊迫した場面を忠実に再現しようとしたのではないだろう。ここには、彼が士大夫としての言葉へのこだわりの一端が垣間見られる。

第三項 同語反復の忌避

次に、韋諡注の『涅槃經』本文及び『大正藏』「北本」「南本」に見られる「喩」、「譬」、「況」の使用状況について見てみたいと思う。

『涅槃經』卷二〈壽命品一〉にある下記の箇所であるが、「韋諡注」、「北本」、「南本」に於ける「喩」、「譬」、「況」ということばに当てる字の違いに焦点をあてて、その違いについて明確にしたい。

まず、『注涅槃經』依拠の「北本」、「韋諡注」、そして「南本」の順番で見えていききたいと思う。

まず、「北本」と『注涅槃經』を比較すると、両者が不一致する箇所には側線を入れた。「譬」と「況」の二字である。そのほかは、すべて一致している。「北本」を見ると、その内容は、

「北本」

「所謂少者、喩未增長法身之人。老者、譬重煩惱。病者、喩未脫生死。險路者、喩二十五有。」

《いわゆる わかもの 少者とは、未だ法身を增長せざる人を喩う。老者とは、重い煩惱を喩う。病者とは、喩未だ生死を脱せざるを喩う。險路者とは、二十五有を喩うなり。》

『注涅槃經』

「所謂少者、喩未增長法身之人。老者、譬重煩惱。病者、況未脫生死。險路者、喩二十五有。」

《いわゆる わかもの 少者とは、未だ法身を增長せざる人を喩う。老者とは、重い煩惱を譬う。病者とは、喩未だ生死を脱せざるを況う。險路者とは、二十五有を喩うなり。》

ここで注目すべきは、「北本」では、この「たとえる」という言葉を表す字を、すべてこの「喩」の字を使用していることである。『注涅槃經』を見てみると、「北本」に於ける二番目の「喩」（右文の側線箇所）が「譬」に、三番目が「況」に変更されていることを注目したい。「譬」も「況」もたとうと読むことができ、両方とも「喩」と同じ意味で使用する事ができる。同じような意味の字をなぜわざわざ変えるのは、考え得る点は、韋諲にとって、同じ字を重複して何度も同じ文に使用することは、彼にとって美しくないことと思えたのではないだろう。ここに、名家育ちの儒家の伝統教育を受け文才のある士大夫としてのこだわりがあったのではないかと推測できる。よって、わざわざ同じ意味の違う字を經典本文にも使用したのではないか。ここに、韋諲の文字へのこだわりを垣間見ることができる。

次に『注涅槃經』と「南本」を比較する。両文の不一致箇所には、側線をつけた。これを見ると、明らかに『注涅槃經』は「南本」をベースにしていることがはっきりとわかる。「南本」のこの箇所を見ると、

「所言少者、**喩**¹⁹⁸未增長法身之人。所言老者、**喩**重煩惱。所言病者¹⁹⁹、**譬**未脫生死。所言險道者²⁰⁰、**喩**二十五有。」

この見ると、「北本」では、「喩」「喩」「喩」「喩」「喩」「譬」「況」「喩」「南本」は、「喩」「喩」「譬」「喩」となっている。なお、『大正藏』の校注では、「南本」の最初の「喩」は、【宋】【元】【明】の三本では、喩||譬になっている。そうした時に、「南本」は、「譬」「喩」「譬」「喩」となる。ここで一つの仮説を立てたいと思う。

文章の修飾した順番で考えると、

「北本」	「喩」「喩」「喩」「喩」
「南本」	「譬」「喩」「譬」「喩」
『注涅槃經』	「喩」「譬」「況」「喩」

このように見た場合、文字を修訂した過程が見られるのではないだろうか。

この部分では、「北本」に完全に依拠して、全ての字を同じにしてもかまわないと思うのだが、韋諡は、あえて、「喩」の字を変えて、「譬」と「況」にしている。

では、次に「南本」との違いをみてみると、

「南本」の場合、「喩」が三か所、「譬」が一か所ある。下線のあるところが、「南本」が「北本」と違うところである。ちなみに、「南本」の注では、宋版、元版、明版の三本では、「喩」||「譬」としている。ということは、三本では、「喩」のところは、全て「譬」になっていることになる。

韋諡の注釈の特徴の一つに、『涅槃經』本文の於いても、同じ字を使用することを嫌うことにある。一例をあげると、この「喩」「譬」「況」の使用状況から見て取れる。特に、「況」ということばを、多用していることも、韋諡の特徴の一つである。

¹⁹⁸ 喩||譬【宋】【元】【明】

¹⁹⁹ 者||苦【宋】【元】【明】

²⁰⁰ 〔者〕―【宋】【元】【明】

第五章 韋諡の思想的特徴

第一節 はじめに

一士大夫が、『注維摩經』（六卷）、『金剛般若註』（一卷）、そして『注涅槃經』（三十卷）の注釈書を著した。これは、現代に置き換えて考えても、大変な偉業である。一地方県知事が、仕事の合間に仏教学の研究をして、著名な經典について注釈書を書くことは、現代においても容易なことではない。しかも、それが海を渡り、海の向こうで珍重されるほどの評価を受けることになるのである。国家の命を受けて、帰れるかどうかかわからず、命がけで海を渡り、貴重な品々と共に、仏教を礎に建国しようとしていた古代日本にとって、唐に渡った学僧たちが蒐集した經典論疏は貴重でないものではなかったはずである。しかも、日本に渡ってから、韋諡の『注涅槃經』は、一流写經生によって、端麗に書写され、その上内容を三回校訂され、さらには黒檀・紫檀の軸、装飾の付いた軸端によって丹念に装丁された。韋諡の『注涅槃經』の何がそうさせたのか。いまだに謎である。

韋諡の著作が中国に於いてほとんど引用されて形跡がない。その理由について、いくつかの想定ができる。その第一の理由として、韋諡の注釈スタイルについてあげたい。韋諡の注釈は、一文一文が短く、特定の語彙や語句に対する説明のみとなっている。卷二の一番長い注釈文でも、四十八文字しかない。短い上に、解説のような部分が存在しないため、読む人にとっては、物足りなさを感じるだろう。卷第一が現存していないため、推測になるが、これまで調査した卷二、卷十二から、また「北本」の四〇卷『涅槃經』に対して『注涅槃經』が三十卷しかないことから鑑みて、おそらく卷一の冒頭には、解説と言われる部分はなかったのではないかと推測する。なぜなら、卷二、卷十二共に十メートルを超える長さである上、『注涅槃經』の卷二の冒頭が『涅槃經』の卷二の巻首に対応しているからである。このことから、『集解』のように、解説部分のような序文は存在していないのだろう。韋諡の注釈は、經典を読む際の補助役としては、大変有益である。一文が短いため、余計な情報が入っていないため、經典自体に集中できるので、負担が少ない。よって、初学者にはありがたい書物である。しかしながら、その一方で、初学者の故の物足りなさもある。なぜなら、一文が短い故に、ある程度知識がないと、理解するのが困難であるからである。また、今まで調査してきた卷二、十二の中において、韋諡が自らの視点を論ずる部分がほとんどなかったため、読者にとって深い理解を得るのには、不足と感じる。要するに、読者のストライクゾーンが狭いのである。

第二に、引用文献が明記されていない。韋諗の『注涅槃經』は、現代で言えば、一般読者向けな『涅槃經』の解説書である。とはいえ、想定する読者は、基本的な仏教学の素養を持っているが、研究者ではない人である。そんな知識人にとって、韋諗がどこからこの文を引用してきたのかは、さほど重要ではない。しかしながら、それが学僧となると、話が違ってくるわけである。学僧にとっては、知識の遡及が必要である。学問の相承が重要である。現代においても、研究者にとって、先行研究は大事なのと同じことである。しかしながら、韋諗の『注涅槃經』では、引用先が開示されていないので、学問としての広がりに限られるのである。一般的な読者にとっては、『涅槃經』を理解するのに、ヒントとなるものであれば、満足できたのだが、学僧にとっては、そうはいかなかった。同時期に伝わり同じく天平写經として書写された七十一卷の『集解』には、十名もの名僧による注釈が書かれ、引用先もはっきりしている。学僧ともなれば、そちらを参照するだろう。

第三に、『涅槃經』研究の衰退である。『涅槃經』研究は、仏性の問題も絡み、翻訳された直後から、激しく論争が繰り広げられ、『涅槃經』の形成まで至った。しかしながら、『涅槃經』という形を取ったとはいえ、中国では、『涅槃經』のみを研究する学僧は少なく、様々な經典と並列して学ぶのが当たり前であることは、一人の人による様々な經典の注釈書の撰述によって、伺い知れる。また、のちに興った天台宗、華嚴宗、法相宗、三論宗と言ったような、隋唐の諸宗派の隆盛によって、『涅槃經』の人々、ほかの学派によって取り崩された。

また第四に、『大般涅槃經疏』の正述による序文で書かれているように、

吾祖章安尊者、約龍樹宗旨、用天台義門、製疏科經、深符佛意。荆溪刪補、法道重明。自四明慈雲講唱、孤山作記之後、寥寥絕聞。其故何哉。蓋由經文浩博、疏義淵微、加之科未入經卒難尋討。²⁰¹

《吾が祖章安尊者、龍樹の宗旨を約し、天台の義門を用いて、疏を製し經を科し、深く佛意に符す。荆溪刪補し、法道重ねて明す。四明・慈雲の講唱自り、孤山の記作すの後。寥寥として絶聞す。其の故は何かんや。蓋し經文の浩博に由りて、疏義の淵微、加えて之の科未だ經に入らざるに、卒いに尋討ね難し。》

²⁰¹ 『大正蔵』三八、四十二上。

〔わが祖である灌頂⁸²が、龍樹の宗旨を要約し、天台の義門によって、經の段落を分けて、深く仏意にびたりと合うように注釈書を著した。荆溪が、刪補し、法道が重ねて明らかにした。四明や慈雲の講唱より、孤山が注釈を作った後は、全く寂しいもので、（注釈を書いたという人のこと）聞かなくなった。その理由は何か。思うに經文の量が多いことに由来し、その注釈書の意味が奥深くて微妙であるから、加えてこの分科もまだ經には入っていないために、しまいには、研究することも難しくなった。〕

『涅槃經』は、四〇巻もあるため、気軽に研究する書物ではなかった。それは現代の我々にとっても同じことである。また、現代の研究に於いても、『涅槃經』の存在は、どこの宗派にも属さず、とはいえ、重視されていないわけではないという宙ぶらりんの位置づけにある。学派・宗派の継承がなく、日本に請来された後に、暫くしてそれを受け継ぐ宗派・学派がなくなり、引用されることがなくなったのではないかと推測する。

以上、なぜ韋諡の注釈書が後代に残らなかったかについて四つの理由の推定を試みた。

第二節 引用文献の推定

この章では、韋諡の注釈文から、韋諡が参照した可能性がある文献についていくつか推定したい。なぜ、推定であるか。三つの理由がある。第一に、先述したように、韋諡は、引用文献を表明していないからである。第二に、韋諡は、そのまま引用することが少ない。文字や句の構造を変更して引用しているからである。第三に、『涅槃經』の注釈書の多くは、散逸して、韋諡が見た文献を特定するのが難しい。また、特定できたとしても、その文献ではなく、既に散逸した注釈書の中身を孫引きした可能性を払拭し切れないからである。とはいえ、現存する文献の中で、推測することしかできないのであるから、この中に於いて、韋諡が参照したであろう文献を挙げるしかない。よって、推定という

⁸² 灌頂…章安灌頂（五六一—六三二）中国天台宗の僧侶。天台大師智顗（五三八—五九八）の弟子。天台の第四祖である。『続高僧伝』卷十九「唐天台山国清寺釈灌頂伝十」に、常に『法華經』に依拠しながらも、『涅槃』『金光明』『淨名經』も講義し、しかも円頓止觀四念等法門も説くという。智顗の説法をよく保ち、その意味がよくわかるのはただ灌頂一人と言われる。智顗の言葉を書き記し、自ら「義記」を撰述したという。「若觀若講常依法華。又講涅槃金光明淨名等經。及説圓頓止觀四念等法門。其遍不少。且智者辯才雲行雨施。或同天網乍擬瓔珞。能持能領唯頂一人。其私記智者詞旨。及自製義記。并雜文等題目。」（『大正藏』五〇、五八五中）

言葉を使用するほかなのである。具体的な方法として、韋諡の注釈文の中から、語句を抽出して、それに相似した語句との比較検討をする。それによって、韋諡が参照した可能性があったかどうかについて考察する。ここでは、唐代までに存在し、そして現存する『涅槃經』関係の注釈書や音義を中心に検討したい。すなわち、梁・宝亮『涅槃經集解』、隋・慧遠『涅槃經義記』、隋・灌頂(唐・湛然再治)『涅槃經經疏』、あと玄応の『一切経音義』(『涅槃經音義』)そして釈雲公による『涅槃經音義』(慧琳『一切経音義』卷二十五所収)を中心にしてみる。なお、隋・灌頂の『涅槃經經疏』について、唐代になってから湛然によって再治されているので、灌頂による元々の注釈部分についての議論があるが、この論攷の本題ではないので、あえて論じず、灌頂の『經疏』とした場合は、灌頂及び湛然二人の解釈という風にセットで考えとする。

第一項 梁・宝亮『涅槃經集解』

まず、第一に、『涅槃經集解』について取り上げる。梁・宝亮(四四四―五〇九)が撰述した『涅槃經集解』は、現存する一番古い『涅槃經』の注釈書である。梁武帝が天監八年(五〇九)五月八日に宝亮に勅して撰著させた。宝亮は、『涅槃經』を八十四回も講義したと『高僧伝』で伝えられている²⁰³⁾。十の有名な法師の注釈を集めて書いた七十一巻もの大作は、わずか四か月半後の九月二十日に完成したと、梁武帝が自ら『集解』のために書いた序文の中で述べられている²⁰⁴⁾。そして宝亮は、『集解』を上梓した後、一か月経たない十月四日に六十六歳で亡くなった²⁰⁵⁾。梁の武帝が自ら書かせた『集解』は、時代が下っても、その権威を失うことはなかっただろう。唐代の人々にとって、『涅槃經』研究に欠かせない必要書であったに違いない。よって、韋諡も読んでいた可能性が高い。ここでは、『注涅槃經』と『集解』の中で、似ている注釈文を取上げ比較し、『注涅槃經』が『集解』を参照したかどうかについて検討したい。黒太字で強調されている字は、同じ文字が使用されていることを示している。

²⁰³⁾ 『高僧伝』卷八に、「講大涅槃凡八十四遍、成實論十四遍、勝鬘四十二遍、維摩二十遍、其大小品十遍。法華、十地、優婆塞戒、無量壽、首楞嚴、遺教、彌勒下生等亦皆近十遍。黑白弟子三千餘人。」(『大正蔵』五〇、三八一下)

²⁰⁴⁾ 『大般涅槃經集解』卷一に、「以天監八年五月八日、勅亮撰大涅槃義疏、以九月廿日訖。」(『大正蔵』三七、三七七中)

²⁰⁵⁾ 『高僧伝』卷八に、「以天監八年十月四日卒于靈味寺。春秋六十有六。」(『大正蔵』五〇、三八二上)

(1)『涅槃經』本文	『集解』卷五 ²⁰⁶	『涅槃經』卷二178行
云何世尊是天中天、 壽命更促不滿百年。	如 非想之壽 、尚八萬劫。 況如來耶。	非想之天壽八萬劫 、 況佛之命而不長也。
《云何が世尊是れ天中天にして 壽命更に促にして百年に 満たさざらんや。》	《非想の寿なお八万劫の如くに、 況や如來をや。》	《非想の天は、寿、八万劫なり。 ① 況んや仏の命は而も長ならざらんや。》 ② 仏の命の長からざるを況う。》

右の文を見ると、『涅槃經』と『集解』は同じような表現法にあるように見える。しかしながら、そのまま引用したのではなく、少し変更している。例えば、『集解』の「如非想之寿、尚八万劫」の「如」を取って、さらに「寿」の前に「天」の一字を入れている。韋諡の注釈文の特徴でもあるのだが、文字を変えても、同じ意味になるように文字を選んでいる場合が多い。また、文字を増減した場合も、意味に影響が少ないようにしている。また、次に詳細に検討するが、一見同じ字を使用しているも、引用した元の文の形容詞を動詞の使い方にする、あるいはその逆の場合もある。士大夫出身という背景から培われた豊富な語彙力、文筆力によって、巧妙に引用し表現してこの注釈書を撰述したと考えられる。

さて、(1)の二つの文に於いて、文の形は似ているが、「況」という字の使用方法が異なっている。『集解』では、明らかに「A 尚…、況 B 耶」(A スラなお…、いわんや B ヲや)という文型で、「…でさえも、ましてや」という意味で使用している。『涅槃經』のほうの文を読んだ場合、筆者は、二つのとらえ方ができるのではないかと思った。「況」を「いわんや」で読むか、「なぞらえる」で読むか。いわんやで読んだ場合、「非想の天の寿は八万劫、況や仏の命の長からざらんをや。(非想天の寿命(でさえも)八万劫、ましてや仏の寿命が長くないなんてことがあるだろうか。)」という意味で取れなくもない。しかし、「いわんや」の本来の使い方には、「さらに」や「上回る」意味が含まれている。八万劫に対して「如来の寿命が長くない」という表現は、少々無理があるのかもしれない。

²⁰⁶ 『大正蔵』三七、三九五中一下。

今回の調査で韋諗は、「況」「喩」「譬」を多用して「たとえる」の意味で使用している例が多く見られた。「非想天の寿命は八万劫」は、本来であれば、それを上回る寿命であるはずの如来が、百年未満で亡くなることへの対比を強めるための強調と考えていいのではないだろうか。その対比によって、仏の寿命が長くないことを喩えていると捉えていいのではないか。このように検討した時、韋諗の注釈のほうが、『涅槃経』の経文の意味に近いと言えるのかもしれない。韋諗は、『集解』の「況や如来をや」の注釈にさらに言葉を補って、経の本来の意味に近づけて、さらに分かりやすく注釈したと考えられる。

次に、参考として慧遠の『義記』巻一を比較にあげると、

「非想壽八萬劫、名為極長。云何世尊是天中天不滿百年。²⁰⁷」

《非想の寿は八万劫、名づけて極長と為す。云何が世尊是れ天中天にして百年に満たさざらんや。》

慧遠のこの文は、『注涅槃経』と『集解』の文と比較すると、違う印象を持つ。『注涅槃経』と『集解』の両文の方が、相似しているように思われる。

²⁰⁷ 『大正蔵』三七、六三七中

(2)『涅槃經』本文 208		
諸佛法皆爾、 是故當默然。 樂不放逸行、 守心正憶念、 遠離諸非法。	諸佛法爾者、有感則應、 感盡歸真也。 樂不放逸者、 教令持戒守心。 正憶念者、其修定。 下句修慧也。	『注涅槃經』卷二402—5行 感盡歸真也。 教持戒也。 令修定也。 勸修慧也。
諸仏法皆な爾り、 是の故に當に默然す。 不放逸行を樂い、 心を守り正しく憶念し、 諸の非法より遠離す。	諸仏法爾りとは、感有れば則ち応じ、 感を尽きれば真に歸すなり。 不放逸を樂うとは、 持戒をして心を守らしむ。 正憶念とは、其れ定を修す（なり）。 下の句は、慧を修すなり。	感尽きて真に歸するなり。 持戒を教うるなり。 定を修せしむるなり。 慧を修するを勧むるなり。

『涅槃經』のこの場面は、大地が震動し、如来が當に涅槃に入ると知り、様々な衆生が涙を流して、この世に止まるようにとお願いするところである。その絶望の淵で泣いている衆生に世尊が偈頌を唱える。この文は、『涅槃經』經文偈頌の冒頭の一部分である。この文については、『集解』の方には、經の本文も載せた。というのも、何に対して注釈しているかを明白にしたかったからである。ここで氣になるところ

²⁰⁸ 『大般涅槃經』卷二、「爾時世尊為諸大衆、說是偈言、汝等當開意、不應大愁苦、諸佛法皆爾、是故當默然。樂不放逸行、守心正憶念、遠離諸非法、慰意受歡樂。」

(『大正藏』十二、三七六中)

²⁰⁹ 『大般涅槃經集解』卷六「諸佛法爾者、有感則應。感盡歸真也。樂不放逸者、教令持戒守心。正憶念者、其修定。下句修慧也。」(『大正藏』三七、四〇〇下)

が、一箇所ある。『涅槃經』一行目の文の「諸々の仏法も皆な爾り」の前に「汝等當開意、不應大愁苦。」という一文がある。この文の意味は、世尊が悲しむ衆生に対して、心を開き、悲しみ苦しむべきでないことを諭し、理由として、諸々の仏法は皆そうであるから、と言っている。これに対して、『集解』の注釈は、少し違う。「諸仏法爾りとは、感有れば則ち応じ、感を尽くせば真に帰ることができる」としている。『涅槃經』もこの解釈に沿って、この言葉を採択したと思われる。

(3) 『涅槃經』本文 ²¹⁰	『集解』卷六 ²¹¹	『注涅槃經』卷二432行
汝等今者雖得出家 於此大乘不生貪慕。	雖服袈裟者、 此乃始學之初門、 非涉真之極路也。	出家者、 始學之初名、 非涉真之極路。
汝ら今は、出家を得ると雖も この大乘に貪慕を生ぜず。	袈裟を服すと雖も、 此れ乃ち始學之初門、 真に渉るの極路に非ざるなり。	出家とは、 始學の初名なり。 渉真の極路に非ず。

『涅槃經』の本文にはない「初学」のニュアンスが『注涅槃經』及び『集解』の両方に出ており、その差は、「初門」を「初名」へと一文改めたのみである。さらには、『集解』の「雖服袈裟者」は「出家者」と同義である。全体的に考えて、二つの文は、全く同じ句型であり、中の語彙を少し改めたのみと考えて良い。韋諗は、『集解』の解釈を引き継いでいると考えて良いのではないか。

²¹⁰ 『大般涅槃經』卷二、「汝等今者雖得出家、於此大乘不生貪慕。汝諸比丘、身雖得服袈裟染衣、其心猶未得染大乘清淨之法。」（『大正藏』十二、三七六中一下）

²¹¹ 『大般涅槃經集解』卷六「雖服袈裟者。此乃始學之初門、非涉真之極路也。」（『大正藏』三七、四〇一中）

(4) 『涅槃經』本文	『集解』卷三十三 ²¹²	『注涅槃經』卷十四
佛性無生無滅	本無今有是名生。已有還無是為滅也。	非本無今有故無生。非已有還無故無滅。
仏性無生無滅にして	本無今有は是れ名づけて生、 已有還無に非ざるが故に無滅なり。	本無今有に非ざるが故に無生なり。 已に有り還た無なるに非ずるが故に、無滅なり。

この一文は、『涅槃經』を代表する偈「本有今無、本無今有、三世有法、無有是處。²¹³」に関連している。「本無今有、已有還無」のこの一文は、偈を説明する長行部分に現われ、『涅槃經』の随所で見られる。しかしながら、「本無今有是名生。」となると、『集解』の中にのみに見られるようである。韋諡のこの注釈文は、一見『集解』と違う解釈しているように見えるが、実は、『集解』の文の前後に「非」及び「無」字を加えて、否定文にし、同じことを述べているにすぎない。ここで見られるのは、韋諡の文へのこだわりである。同字反復を嫌い、引用先非開示、引用文で使用される字を変更するなど、元の文をそのまま引用を嫌う、そのようなこだわりが顕著に見られる一例ではないか。この文の続きを見てみよう。

²¹² 『大般涅槃經集解』卷三十三に、「本無今有是名生。已有還無是為滅也。」（『大正藏』三七、四〇九下）

²¹³ 『大般涅槃經』卷十、「本有今無、本無今有、三世有法、無有是處。」（『大正藏』十二、四二二下）

(5) 『涅槃經』 本文	『集解』 卷三十三	『注涅槃經』 卷十四
無去無來	既無生滅 無去無來	既無生滅 何去何來
無去無來にして	既に生滅なし、 去ること無く、来ること無し。	《既に生滅無ければ、 何ぞ去り何ぞ來たる。》

この一句は、韋諡が、必ずしもただ『集解』の注釈を引いたわけではないことがわかる。韋諡は、『集解』の解釈に全て承認しているわけではない。例えば、『集解』は、「捨身威儀とは、工巧の事業を廃し」としているが、韋諡は、この部分の引用をしていない。そのまま、「捨（とは）、則ち坐の威儀（を捨て）、法を崇めて請う容止（なり）」と注釈している。よって、韋諡は、きちんと自分の思想を基に取捨選択していると考えられる。

以上で見てきたように、韋諡の『注涅槃經』と『集解』の中では、相似している表現や文型が存在することがわかった。微妙な違いがあるものの、韋諡は、『集解』を参照したと言っても良いのではないだろうか。

第二項 『大般涅槃經義記』

次に、『集解』の次に貴重な隋・慧遠の『大般涅槃經義記』について検討したい。『義記』は、文型から見ると、『集解』とはまた違う型のように思う。また、『義記』は、『注涅槃經』を除いて、現存する唯一「北本」の注釈書でもある。

(1)『涅槃經』本文	『義記』卷一	『涅槃經』卷二213行
於其中路、遇惡風雨、 寒苦並至 ²¹⁵	於修行時、名為中路。 觸對塵境、名遇風雨。 起惡招苦逼切自身、 名寒苦至 ²¹⁶	正修行時、名為中路。 觸對塵境、是遇風雨。 起惡招報、名寒苦也。
其的中路 ²¹⁴ に於いて惡風雨に遇いて 寒苦並びに至る。	修行の時に於いてを、名づけて中路と為す。 觸の塵境に対するは、名づけて風雨に遇う。 惡を起し苦を招き自身を逼切すを、 名づけて寒苦至る。	正しく修行する時を、名づけて中路と為す。 觸の塵境に対するは、是れ風雨に遇う。 惡を起し報を招くは、 寒苦と名づくるなり。

この注釈文の中で、「觸對塵境」という言葉を韋諗は使用しているが、この言葉は、慧遠の『義記』及び『大乘義章²¹⁷』のみに見られるよ

(2)『涅槃經』本文	『義記』卷一 ²¹⁹	『涅槃經』卷二408行
若去不去	正行出離 ²¹⁸ 、名之為去。 邪行沈沒、説為不去。	正行出離、名之為去。 邪行沈沒、名為不去。
去る若しくは去らず	正行し出離す、之れを名づけて去ると為す。 邪行し沈沒す、説きて去らずと為す。	正行もて出離するは、之を名けて去ると為す。 邪行もて沈沒するは、名けて去らずと為す。

うである。他には、明代及び日本の注釈書の三か所にその形跡があるのみのようである。

この一文は、ほとんど同じ文である。唯一の違ひは、「説」を「名」に変更したのみである。この「正行出離」という語彙は、慧遠の『義

(3)『涅槃經』本文	『義記』卷五 ²²⁰	『注涅槃經』卷十二7—9行
菩薩如是專念觀時、 誰有是我、 我為屬誰、 住在何處、 誰屬於我。	於前所觀不淨物中、 何誰有我。 我屬誰者、 責我所屬。 於前所觀不淨物中、 繫屬何誰、 我住何處、徵我所在。 誰屬我者、 責法屬我。	色不淨故、 故知無我。 責我所屬也。 破以色為住處也。 責法屬我也。

記』及び唐・道暹の『涅槃經疏私記』にのみ見られるようである。

²¹⁴ 宋・施護訳の『仏説仏母出生三法藏般若波羅蜜多經』卷十四「中路者所謂聲聞、緣覺之地」とある。（『大正藏』八、六三四中）

²¹⁵ 『大般涅槃經』卷二「於其中路、遇惡風雨、寒苦並至。」（『大正藏』十二、三七四上）

²¹⁶ 『大般涅槃經義記』卷一に、「於修行時、名為中路。觸對塵境、名遇風雨。起惡招苦逼切自身、名寒苦至。」（『大正藏』三七、六三八中）

²¹⁷ 隋・慧遠『大乘義章』卷四、「所言觸者、**觸對塵境**、目之為觸。若依成實。對後受支說想為觸。觸假之初故名為觸。若依毘曇。以心法中觸數為觸。此之觸數。依根就塵。能令根塵共相觸對。故名為觸。」（『大正藏』四四、五四七下）

²¹⁸ 正行出離…正しい行を行い、（この輪廻のある世界から）出離する意か。この語彙は、慧遠の『義記』及び唐・道暹『涅槃經疏私記』にしか見られない。

²¹⁹ 『大般涅槃經義記』卷二、「正行出離名之為去。邪行沈沒說為不去。」（『大正藏』三七、六四三中）

²²⁰ 『大般涅槃經義記』卷五、「下明無我。誰有見我徵責我體。於前所觀不淨物中、何誰有我。我屬誰者、責我所屬。於前所觀不淨物中、繫屬何誰、我住何處、徵我所在。誰屬我者、責法屬我。此即徵破四種著我。」（『大正藏』三七、七三一上）

(3)『涅槃經』本文	『義記』卷五	『注涅槃經』卷十二7―9行
<p>菩薩是くの如く觀に專念し時、 誰れに是れ我有らんや。 我れ誰れが為に属すや。</p>	<p>前に於いて觀ずる所の不淨物の中、 何誰に我有らん。 我の誰に属すとは、我が所属を責²²¹む。 前に於いて觀ずる所の不淨物の中、 何誰に繫属す。 我何処に住すは、我が所在を徵む。 誰が我に属すとは、法の我に属すことを責む。</p>	<p>色は不淨なるが故に、 故に無我を知る。 我所の属を責むるなり。 破するに色を以てするを住処と為す。 法の我に属するを責むるなり。</p>

この中の、「責我所属」及び「責法属我」の表現も、前項と同様、慧遠及び道暹のみで見られるようである。

第三項 諸書籍より混合引用の場合

一、【『集解』と『經疏』の両方から引用したケース】

ここまで、梁の『集解』及び隋の『義記』について、韋諡の『注涅槃經』との相似性について見てきた。この項では、一つの注釈文の中に於いて、二つの注釈書から引用したケースについて見てみたい。

このケースでは、韋諡は、『集解』及び灌頂の『經疏』からそれぞれ引用している。まず、次表を見ると、韋諡は、『集解』の「五根皆滅、意識獨行。」（黒太字）をそのまま引用している。また、灌頂の『經疏』の「孤魂獨逝」（黒太字傍線）を「孤魂長逝」と、「独」を「長」と一文字変えて引用している。

²²¹ 責…せ・める。力づくで要求する。尋問する。

(1)『涅槃經』本文	『集解』卷二十九 ²²²	『大般涅槃經疏』卷十四 ²²³	『注涅槃經』卷十二395行
而無伴侶	五根皆滅、 意識獨行。 譬無伴侶。	而無伴侶、 孤魂獨逝、 無隨去者。	五根皆滅、 意識獨行、 孤魂長逝。 無伴之義。
而して伴侶無し	五根皆滅し、 意識独り行く。 伴侶無きを譬う。	而無伴侶とは、 孤魂独り逝きて、 隨去する者無し。	五根は皆な滅するも、 意識独り行く。 孤魂長逝するは、 無伴の義なり。

この文も、『集解』の解釈を踏まえていると考えて良いのではないだろうか。ちなみに、隋灌頂撰・唐湛然再治の『大般涅槃經疏』卷十四にも、

「摩羅毒蛇者、河西云、**黑蛇毒觸人衣即死。餘人觸此衣亦死。阿竭多星者、此星八月出。若有人得此星呪者、能消其毒。**²²⁴」
とある。河西とは、河西道朗（生没年不詳）のことである。曇無讖（三八五―四三三）の四〇卷本『涅槃經』翻訳を手伝い、その後『涅槃經』の注釈書であった『涅槃經義疏』（佚）を著した人である。おそらく宝亮の『集解』が道朗の『義疏』を参照し、この注釈を撰述したと考え
るべきなのかもしれない。よって、この「摩羅毒蛇」に関する注釈は、

道朗『義疏』↓宝亮『集解』↓灌頂『經疏』↓韋諗『注涅槃經』

²²² 『大正蔵』三七、四八一下。

²²³ 『大正蔵』三八、一二六上。

²²⁴ 『大正蔵』三八、一二六上。

このチャートは、あくまでも方便上時系列で表したものであり、実際には、韋諗は、同時にこれらの本を見ていただろう。これらの本を可能の限り蒐集して研究し『注涅槃經』を著したであろう。また、道朗の『義疏』は早く佚失したので、韋諗は、おそらく『集解』や他の『注釈書』なども参照したのだろう。

二、【多数の典籍から同時に引用したと見られるケース】

次に見られるケースは、二つの音義及び『經疏』からの同時に引用したと見られるケースである。前の章では、韋諗が釈雲公の「大般涅槃經音義」を参照した可能性について論じた。釈雲公の「涅槃經音義」の成立が開元二十一年（七三三）である。韋諗が確実に釈雲公の音義を見たならば、『注涅槃經』の成立を、七三三年から七四一年の間とすることができる。七三三年は、釈雲公が自ら「涅槃經音義」の序文に記した日付によるものである。韋諗がこれを見て『注涅槃經』を書いたのであれば、その成立の上限は、七三三年になろう。また、導江県という名称は、唐では、開元中（七一三―七四一）に於いて使用されたという記述があるから、県令として書いたのであれば、七四一年までとなろう。釈雲公の「涅槃經音義」については、前章で紹介した通りである。ここでは、韋諗が引用した箇所について見てみたい。

(2)『涅槃經』 肪膏腦膜、 骨髓膿血、 腦胛諸脈。	隋・灌頂撰『大般涅槃經疏』 腦者在足。 總舉上下。 河西及招提並云、是桃核。 腦中有骨、如桃梅核。 扁鵲方云、 足指三毛處、名胛。 其中有脈。	玄奘「涅槃經音義」 腦胛。依字『說文』 古才反 。 足大指也。恐非今用。 案字義宜作解音胡賣反。 謂腦解也。 案『無上依經』解三十二相中、 二、如來頂骨無解是也。 諸經中作頂骨堅實、 同一義也。或古字耳。	釈雲公「涅槃經音義」 腦胛諸脈(胛、 古來反 。 『玉篇』云足大指也。 謂分段之身、 極上為腦、 極下為胛。 血肉所及、 皆有其脈。腦外是髮、 胛外是甲。此中無脈故。 以簡之舊音、以為胡賣反呼。 為骨者、全非經意也。	『注涅槃經』卷十二6 腦極於上、 胛極於下、 即足拇指生三毛處也。 自頂至足所有諸脈、 皆悉觀之。胛音 古才反 。
-------------------------------------	--	---	---	---

この注釈文において、提起する点が三つある。まず、注目したいのは、韋諡の注釈文の「腦極於上、胛極於下。」という文である。胛というのは、足の親指の、長い毛の生えた肉の部分であるという。韋諡は、『涅槃經』の「腦胛諸脈」という文に対して、「腦極於上、胛極於下。」《腦、上に極まり、胛、下に極まる。》としている。これに対して、灌頂の『經疏』では、「腦者在上、胛者在足。」《腦とは上に在り、胛とは、足に在る。》と注釈している。「極」という字は使用していない。韋諡と同じように「極」という字を使用しているのは、釈雲公である。ただし、文型が違う。韋諡は、「極」を動詞の「極まる」、「至る」、「このうえないところまでいきつく」の意味で使用している。しかし、釈雲公は、「極」を形容詞として、「一番端」の意味で使用している。その違いがある。といっても、今までの韋諡の引用傾向から考えれば、韋諡が釈雲公の「涅槃經音義」を参照し、文型を変えた可能性は十分にある。よって、この部分について、韋諡は、釈雲公の注釈文を部分引用し改変した可能性があると思われよう。

次に、注目したい点は、韋諡の注の最後の文「𦵏音古才反。」という文である。これは、𦵏の音は、古才の反という意味であるが、同じ釈雲公の「涅槃經音義」を見ると、「𦵏、古來反。」となっている。これは、𦵏の字、音は、古來の反という意味である。韋諡の「𦵏音古才反。」とは違う。同じ「古才反。」としているのは、玄扈の「涅槃經音義」である。玄扈の「涅槃經音義」には、『説文』に依れば、古才の反である。」よって、ここで見られるように、韋諡は、注釈文（義）の引用は、釈雲公から、そして字の発音（音）のほうは、玄扈の音義から引用した可能性がある。とはいっても、直接『説文』を参照した可能性もあることを合わせて述べたい。

最後に、指摘したいところは、「𦵏」についての注釈部分である。韋諡は、「即足拇指生三毛處」《即ち足の拇指、三毛の生ずる處。》としている。これと同じ文が、灌頂の『經疏』に見られる。それには、『扁鵲方』云、足指三毛處、名𦵏。其中有脈。』《『扁鵲方』に云わく、足の指三毛の處を、名づけて𦵏となす。其の中に脈有り。》としている。二番目のケースと同じように、韋諡が、『説文』を参照した可能性を払拭できないように、この場合も『扁鵲方』の解釈を引用した可能性がある。しかしながら、いまの我々も何かの經典について研究する場合、それについての書物・論文を集めて目を通す。それと同様に、韋諡も『涅槃經』の注釈書を著すために、『涅槃經』に関連のある主要な注釈書及び音義書に目を通して、自分なりに各注釈書から取捨選択して、『注涅槃經』を撰述したと考える良いのではないだろうか。

第四項 『涅槃經』以外の注釈書

次に、『涅槃經』の注釈書以外で、参照した可能性のある書物について検討する。

一、【東晋・僧肇撰『金剛經註』を参照した可能性のある例】

東晋僧肇（三八四—四一四）の『金剛經註』は、一卷本で現存しており、おそらく鳩摩羅什訳の『金剛般若經』に対する最初の注釈書であるという²²⁵。韋諡も同じく『金剛般若註』一卷を撰述している。韋諡には他に、『注維摩經』六卷、『注大般涅槃經』三十卷の注釈書があるが、いずれも、「注」という字が先に来ている。『金剛般若經註』のみが、「註」という字が後に位置し、そして、「言」辺である。このことは、何を意味しているのかは不明である。確かに、有名な注釈書ほど、さまざまな異なる略称で呼ばれることが多々あり、「注」の字が、言辺で

²²⁵ 小野玄妙 編『仏書解説大辞典』第三卷（大東出版社、一九六四年）四五八頁。

あったり、さんすいであったり、あるいは、「注」の字が経題の前につき、または後につくこともよくあることである。ただ、引用される数が少ないせいか、韋諡の注釈書については、その傾向がさほど見られない。なぜ、『金剛般若若註』のみが、ほかの注釈書と違うのかは、引き

(1)『涅槃經』本文	僧肇の『金剛般若若注』	『注涅槃經』卷二669行
行住得所	心不移去、謂之為住耳。	慧心歷境名行定。心不移稱住。
	心、移去せず、之れを謂いて住と為す。	慧心、境を磨くを、行定と名づく。 心移らざるを住と稱す。

続き注目していきたい。

この注釈文は、『涅槃經』卷二の「行住得所」という言葉について注釈したものである。ここは、『涅槃經』の新旧の両匠と乳葉の譬喩話の箇所であり、この「行住得所」は、良い乳葉になる乳を出す牛は、特別な育て方が必要であると述べている所で、その牛をうまい具合に育てる譬喩は、修行に例えている。これに対しての『集解』の法瑤の注は右通りである。

「行則為觀、住則為止。止觀不失其宜、為中和之道。行住得所也。」

《行、則ち觀と為し、住、則ち止と為す。止觀その宜を失わざるを中和の道と為す。行住の所を得んなり。》

と、天台止觀の立場から注釈している。これに対して、韋諡の注は、全く違う注釈を施している。韋諡の注の、「心不移稱住」について注目したい。これに相似しているのが、僧肇の『金剛般若若注』の下記の文言である。これは、『金剛般若波羅蜜經』の中の有名な一句、「應云何住、云何降伏其心。」に対する注である。この「心不移」は、大正蔵では、さまざま所で使用されている。その内訳が、「心不移動」四十一件、「心不移」三十三件、「施心不移」十三件、「心不移易」十二件、「心不移転」四件、「心不移不動」一件、「専心不移」二件、「我心不移」一件、

「心不移変」一件である。この中で、韋諗或は僧肇の例のように、「心移らざるを住と称す。」という用例は、管見の限り見当たらない。実は、この中の「施心不移」という語句は、『涅槃經』卷二十八「師子吼菩薩品」の中の言葉である。

「善男子、若菩薩摩訶薩持戒不動、施心不移、安住實語如須彌山、以是業緣、得足下平、如奩底相。²²⁶」

《善男子よ、若し菩薩摩訶薩、持戒動ぜず、施心移らず、安住し実を語ること須弥山の如し。是の業縁を以て、足下平を得、奩²²⁶の底の相が如し。》

この部分は、師子吼菩薩が世尊に、（求道から）退く人と退かない人がいるのかについて問う場面である。それに対して、世尊は、菩薩が如来の三十二相を得るための行為をして、その相を得ることができれば、不退転の人と呼ばれると答える。その三十二相を得るための第一の方法として、この文がある。『涅槃經』のこの本文では、「施心不移」、施しの心が変わらざういうように使用されている。よって、韋諗や僧肇のように、「心が移らず（変化しないこと）を、住と呼ぶ。」のような意味合いでは使用されていない。ほかの用例では、心移らずの意味で使用する例もあるが、このことを「住と称す」としている例は僧肇の例以外には、管見の限り見当たらない。前述したように、韋諗は、『金剛經』の注釈書を著しているのので、僧肇の『金剛經註』を見ている可能性がある。

第五項 まとめ

²²⁶ (大正蔵十二、五三四下)

²²⁷ 奩:こぼこ。『一切經音義』卷四に、器の名。鏡、香や菴などを入れるものであるという。經で言う奩底というのは、底が平らであることの譬喩であるとある。

「奩底(力鹽反。『蒼頡篇』器物名也。『說文』鏡奩也。案奩者、即香奩、菴奩等是也。(中略)經言奩底者、取底平為喩也。」

《奩底(力鹽の反。『蒼頡篇』に器物の名なり。『說文』に、鏡の奩なり。案ずるに奩とは、即ち香奩、菴奩などが是れなり。(中略)經に言う奩底とは、底の平を取りて喩えと為すなり。)(大正蔵五四、三二九中)

以上、韋諗が『注涅槃經』を撰述する際に、どのような書物を読んだかについて、『涅槃經』関連の注釈書及び音義を中心に、その可能性について調査してきた。結論として、韋諗は、『集解』『義記』『經疏』及び「涅槃經音義」（玄奘・釈雲公）を参照し引用した可能性があると考えられる。

『注涅槃經』の注釈文は、短い文が多く、特徴のある言葉も少なくない。ありふれた表現であるから、かえってその特徴が見出すことが困難である。そんな中でも漸く少しずつ韋諗の特徴を知ることができた。韋諗の注釈文を見てみると、特定の宗派に関する用語が顕著に繰り返しに出現するということが見られない。華嚴、禪、浄土と言った宗派の影響が余り見られない。どちらかというと、法相、三論や天台に近い。しかしながら、それでも、これらの宗派の代表的な用語が注釈文の中に現われることもあまりない。残巻の六巻のうちに、一巻を調査したのみであるから、決定的なことは、まだ言えない。

そもそも士大夫である故に、韋諗は、『涅槃經』の本文を「北本」に依拠しながらも、かなり自由に經文の文字を変更し、あるいは、「南本」の文字を採用するなど、自由にしている。なので、ある特定な宗派を以て韋諗の思想をとらえること自体が、間違っているのかもしれない。『涅槃經』の經文と同じように、韋諗は、先の『涅槃經』研究諸師の論述をよく研究して後に、自由に諸師の注釈を取り入れていた傾向が見られると言えるのではないだろうか。

巻二を中心に調査してきたが、調査が未熟であるから、まだ調査し足りない部分も存在しており、これからの課題として、ほかの残巻についても翻刻校注し、それによって、韋諗の思想的な特徴を取り出せるようにしたい。

第六章 『注大般涅槃經』の「北本」「南本」依拠問題

第一節 韋諡が依拠した本について

前述のように、『涅槃經』には、四〇巻の「北本」及び三十六巻の「南本」がある。ここでは、この違いについて見てみる。

吉蔵（五四九―六二三）の『涅槃經遊意』に、

「就此經有南北二本。廣略不同。北方舊本或有三十三或三十者。品唯有十三。南土文卷有三十六。有二十五品²²⁸。」
《此の經に就いて、南北の二本有り。広略同じからず。北方の旧本、或いは三十三、或いは三十のもの有り。品は、唯だ十三有り。南土の文の巻、三十六有り。二十五品有り。》

また、湯用彤氏によれば、

「總之南北二本之不同、一、爲品目増加。此僅及北本之前五品。二、爲文字上之修治、則南北本相差更甚微也。²²⁹」
《総じて、この南北二本の不同は、一には、品目の増加と爲す。此れ、僅かに北本の前の五品に及ぶのみ。二には、文字上の修治と爲す。則ち南北本の相差、更に甚だ微かなり。》

とある。吉蔵の言う「北方の旧本、或いは三十三、或いは三十のもの有り。品は、唯だ十三有り。」は、おそらく増補する前の旧本だと考えられる。現代の湯用彤氏も「北本」と「南本」の違いは、品目の増加であるとしている。しかもそれは、「北本」の前の五品に及ぶのみとしている。そして、湯用彤氏は、さらにもう一つの相違点をあげているが、それは、文字の修治であるとしている。

²²⁸ 『涅槃經遊意』（『大正蔵』三八、二三〇上。）

²²⁹ 湯用彤『漢魏兩晉南北朝佛教史』（臺北：彌勒出版社、一九八二年）六一〇頁。

大乘の『涅槃經』は、北涼の曇無讖（三八五―四三三）が玄始十年（四二二）に訳したいわゆる北本（四〇卷）と法顕（三三七―四二二）が西域より持ち帰った六卷本及びその六卷本によって改訂された三十六卷本の南本とがある。北本と南本の文字上の違いは少ないが、最も大きな違いが品目の分け方である。北本は、十三品のみであるが、南本は、二十五品にと細かく分かれている。韋諲が書いた『注涅槃經』の品名と、「北本」「南本」の当該箇所を比較すると、以下の表になる。

【韋諲の注涅槃經】

【北本】		【南本】	
卷二 壽命品	卷二 壽命品	卷二 純陀品	
卷八 如來性品	卷八 如來性品	卷八 如來性品	
卷十 如來性品	卷九 如來性品	卷九 一切大衆所問品	
卷十二 聖行品	卷十二 聖行品	卷十一 聖行品	
卷十四 聖行品	卷十四 聖行品	卷十四 梵行品	
卷十九 梵行品	卷十九 梵行品	卷十九 光明遍照高貴德王菩薩品	

「壽命品」は、「北本」では、卷一から第二であるが、内容的には、南本の三十六卷『涅槃經』の「純陀品」にあたる。「如來性品」は、「北本」では、卷四から第十までであるが、「南本」の「如來性品」は卷八のみである。さらに、卷十四については、『注涅槃經』も、「北本」も同じく「聖行品」であるが、「南本」では、「梵行品」となっている。また、卷十九では、『注涅槃經』及「北本」は、「梵行品」であるのに対し、「南本」は、「光明遍照高貴德王菩薩品」であるため、明らかに『注涅槃經』は、「北本」に依據していることがわかる。

このほかに、『注涅槃經』と「北本」・「南本」の分巻の仕方が異なる場所が二箇所ある。『注涅槃經』の卷十は、「北本」では、卷九の途中からはじまる。また、『注涅槃經』の卷十二は、「南本」では、卷十一の途中から始まる。

『大正藏』「北本」との比較において、時々使用する言葉や文字の差異があるものの、大体のところは一致しているので、明らかに韋諲が依據した『大般涅槃經』は、「北本」であったことが言える。

第二節 韋諗の文字採択の傾向

韋諗は、言葉や文字を重んじている傾向が見られる。韋諗は「北本」に依拠しながら、完全に「北本」を写し、それに対して注釈をつけたのではないことが調査を通してわかった。前述したように、韋諗の注には三つの特徴があったが、そこには韋諗の士大夫としての言葉へのこだわりがあると思われる。このことは、韋諗が採択した『涅槃經』經文を見れば、明らかである。ここに卷二から、『注涅槃經』の經文と「北本」及び「南本」の關係を示すために、卷二の一部分を抜粋して図にした。『注涅槃經』の經文と「北本」、「南本」の關係は、今回問題提起のみにして、詳細な考察は、将来の課題にしたい。

No.	注行	独自	『注涅槃經』	「北本」	「南本」	「北本」脚注	「南本」脚注	備考
	2	宋	拘尸那	拘尸那城	拘尸邨城	〔城〕欠【宋】	〔邨〕欠【三】	
	3	注	間	間	間			間、間の異体字。
	6	注	悲感流涕	悲泣墮淚	悲感流淚			
	12	北	唯願哀愍受我微供	『注涅槃』に同じ	唯願哀受我等微供			
	12	南	然後涅槃	然後乃入於般涅槃	『注涅槃』に同じ			
	17	北	株机	『注涅槃』に同じ	荒穢			
		注	希	悌*	悌*		希 = 悌*	
		注	況	喩	喩		喩 = 譬【三】*	
		北	株机	『注涅槃』に同じ	荒穢			
		三・宮	諸	除	除	除 = 諸【三】【宮】		
		北	除去株机	『注涅槃』に同じ	耘除衆穢			
		宋	牙	芽	芽	芽 = 牙【宋】【宮】	芽 = 牙【宋】	
			色力					
		注	安無礙辯	安辯	安樂無礙辯才	安辯 = 安樂無礙辯才【元】【明】【宮】		
		北	直	『注涅槃』に同じ	猶			
	56	北	噉	噉	之			
	61	注	非	無	無			
	77	注	普爲此會	爲於此會	普爲作會	爲於 = 普爲【宋】【元】【明】		
	80	注	所言	世尊	世尊			
	80	注	將受	受於	哀受			
		注	見	現	現			
		注	生	活	活			
		注	因	復	復			
		南	滅	離	滅	離 = 滅【宋】【元】【明】		
		注	彼	是	是			
		注	廣度生死海	度人天生死	度人天生死			
		注	如蓮出水中	如蓮花處水	如蓮花處水			

結 論

筆者は、唐代の『涅槃經』の伝播や研究史に些かの関心を抱いていたが、幸いにも平成二九年（二〇一七）に唐導江県令韋諗撰『注大般涅槃經』（以下『注涅槃經』）巻二及び巻十二の熟覧調査の機会に恵まれた。『注涅槃經』は四〇巻本『涅槃經』（北本）の注釈書であるが、撰者号に「唐導江県令」という肩書があるように唐代に成立したものである。撰述後時を置かず日本に請求され、天平写経の一部として書写された。全三十巻のうち六巻のみが現存しているが、皆装丁は莊嚴である。書風の典雅さから一巻を除き五巻が重要文化財に指定されている。かくも重要な仏教文献にも関わらず先行研究は管見の限り一篇のみであり本文内容の研究には踏み込んでいない。

『注涅槃經』は、八世紀前葉に唐に派遣された遣唐使の留学僧が請求したものであり、その後天平写経の一部として書写された。請求に関してもまたその書写に関しても幾多の疑義が存している。地方の県令という一士大夫の撰述書が請求された理由はどこにあるのか明確な答えは見出し難い。

現存する『注涅槃經』は細密に漉かれた黄麻紙に一流の写経生の手になる端麗優雅な書であり、また軸装は貴重な紫檀もしくは黒檀がさり気なく使用されている。奈良写経の中でも一級品であることが一目でわかる。また、通常の經典でも二校までしか行われない中で『注涅槃經』は三校に及んでいる。これらは、一体何を意味しているのだろうか。『注涅槃經』は単に書風の面から重視されただけでなく、本文そのものに価値があるものと認められていたに違いない。

ところが韋諗という人物については何故かほとんど知られないのである。史料・古記録にその記録が残されていないばかりか、知ることができるのは僅か『注涅槃經』の撰者号のみである。だが筆者の研究によつて、韋諗は唐代開元中（七一三―七四一）に導江県（成都から約六十キロ離れた県）で、県令という役職についていた士大夫であることがわかった。そして、諸状況から『注涅槃經』を撰述したのは韋諗の三十代から四十代の時であろうと推測した。また、目録などの記載によれば、韋諗には『注涅槃經』のほかに『注維摩詰經』や『金剛般若註』、そしておそらく『法華經』の注釈書も著していたと推測するに至った。

韋諗の『注涅槃經』には、他の『涅槃經』注釈書に見られない特徴がいくつか見られる。まず経文の部分からその特徴を指摘すると、『注涅槃經』は「北本」「涅槃經」に依拠しながらも、「南本」「涅槃經」及び『泥洹經』など他の經典の語彙・用語を採択していることである。『注涅槃經』の経文が単純に「北本」に依拠したものではないということは、一体何を示唆しているのだろうか。そこには、学僧としてで

はない立場、即ち士大夫としての注釈への自由な立場が反映されているのではないだろうか。このような観点に立つて、その論証の幾つかを試みたが、巻二と巻十二の二巻という制限から多くの用例を示し韋諲の学的傾向を解明できたとは、現時点で言えない。

次に、注釈文の箇所の特徴を述べると三点ある。

第一には、引用文献の不開示。巻二、巻十二及び文化財目録に掲載された写真から確認できた部分についてはあるが、韋諲の注釈文には、「○○曰く」など、引用した文献の出典名が見られない。

第二には、語彙の一部変更。韋諲は、士大夫としての教養からか文字に対する一種独特なこだわりがある。韋諲は、引用する際に、文の構造や語彙を変更する。それによって、典拠の文章とは異なった文型、語彙となるため、一見別文かと思われる紛らわしい文章構成になる。このことによって、韋諲がどの文献を引用したのか調査に時間を要した。このようにして韋諲の注釈文の特徴をつかむことができ、一定数の引用文献が判明できたと考える。

第三に、同語反復の忌避。韋諲は、同じ語彙を繰り返す使うことを嫌う。これらの特徴は、学僧にはあまり見られない傾向である。韋諲の『注涅槃經』のユニークさを物語るものであると考える。

また、韋諲が参照したと想定される『涅槃經』注釈書を調べると、『涅槃經集解』、『涅槃經義記』及び『涅槃經疏』などであった。また、その他の注釈文を調べていくと、韋諲は、阿含經典を含め、『四分律』、『金光明最勝王經』など、実に幅広く經典を見ていることがわかった。その中で、注目すべきは、『一切經音義』の存在である。韋諲は、慧琳の『一切經音義』に含まれている釈雲公撰「涅槃經音義」を見ていた可能性が高いことを指摘した。もしそれが事実ならば『注涅槃經』が、七三三年から七四一年の間に撰述された可能性が高まることになる。なぜなら、釈雲公撰「涅槃經音義」の序文には、開元二年（七三三）という日時の記録があるからである。

また、正倉院文書の貸出記録から、韋諲の『注維摩經』は天平勝宝五年（七五三）に貸し出されていることも分かる。従って『注涅槃經』は七三三年から七四一年の間に成立し、七五三年までに日本に請来されたと言える。

以上のように唐代の知識人（士大夫）韋諲は、『涅槃經』四〇卷（北本）の注釈書『注涅槃經』三十巻を撰述したが唐土から失われてしまった。僅かに扶桑の地に六巻が伝存していることは知られていたが、未だ本格的な研究が行われていなかった。幸い筆者は現存する六巻の内、二巻を実際に調査することができ、本文研究の扉が開いた。

『注涅槃經』卷二・卷十二の本文研究を基礎とし、本書の成立年代を韋諡の活躍時期とあわせ考究し多くの新事実を提示することができた。とは言うものの、残されている課題も多々ある。先ずは現存する四巻の調査研究が必須である。また韋諡の思想的背景のより一層の解明が俟たれる。

參考文獻

【一次資料】

- 『大正藏』十二・三七・三八
- 『卍續藏經』（新文豐出版）五五、五六、五八、五九、九四
- 『妙法蓮華經』（『大正藏』九。）
- 『大般涅槃經』（『大正藏』十二。）
- 『法華玄論』（『大正藏』三十四。）
- 『妙法蓮華經文句』（『大正藏』三四）
- 『涅槃經遊意』（『大正藏』三八）
- 『妙法蓮華經釋文』（『大正藏』五六。）
- 『法華經玄贊要集』（『卍新纂大日本續藏經』第三四卷、國書刊行會、一九八七年。）
- 『續日本紀』一一五 新日本古典文學大系十二（岩波書店、一九八九年。）。
- 『扶桑略記』第六 元正（靈龜二年—養老二年） 黑板勝美編『新訂增補 國史大系』第十二卷（吉川弘文館、一九九九年。）
- 『元和郡縣志』三三卷。
- 『新唐書』第四冊、卷四十二（北京：中華書局、一九七五年。）
- 歐陽修『百衲本二十四史（二九）新唐書上』（台北：台灣商務印書館、一九三七年）
- 『公羊傳注疏』（四庫全書電子版）『文淵閣四庫全書電子版』—原文及全文檢索版—、迪志文化出版、香港、一九九九年。）。
- 唐徐堅『初學記』（四庫全書電子版）『文淵閣四庫全書電子版』—原文及全文檢索版—、迪志文化出版、香港、一九九九年。）
- 宋·鄧名世撰『古今姓氏書辯證』（四庫全書電子版）『文淵閣四庫全書電子版』—原文及全文檢索版—、迪志文化出版、香港、一九九九年。）。
- 『陝西通志』卷七三、六十一丁（四庫全書電子版）『文淵閣四庫全書電子版』—原文及全文檢索版—、迪志文化出版、香港、一九九九年。）

【辞書・図録・目録類】

《辞書》

宗福邦・陳世鐸・蕭海波主編『故訓匯纂』（北京：商務印書館、二〇〇三年）

小野玄妙 編『仏書解説大辞典』第三卷（大東出版社、一九六四年）

M・モニエル 編『梵英辞典』（名著普及会、一九八六年）

菅沼晃 編『インド神話伝説辞典』（東京堂出版、一九八五年）

《図録》

『重要文化財 20（書籍・典籍・古文書Ⅲ・佛典Ⅰ）』（毎日新聞社、昭和五十年。）

『国寶・重要文化財大全 7 書跡（上巻）』（毎日新聞社、一九九八年。）

『特別展 神佛います近江』（思文閣出版、二〇一一年。）

『神奈川縣文化財圖鑑』（書蹟篇）（神奈川縣教育委員會、一九九〇年。）

《目録》

「奈良朝現在一切經疏目録」『寫經より見たる奈良朝佛教の研究』所收（東洋文庫、一九六六年。）

『東域傳燈目録』（『大正藏』五五。）

『高山寺本東域傳燈目録』（高山寺資料叢書第十九冊）（東京大學出版會、一九九九年。）

宮内庁正倉院事務所 編『正倉院文書影印集成』十七 塵芥文書（八木書店、二〇〇七年。）

東京大學史料編纂所 編『1968』『大日本古文書』編年之三 天平二十年—天平勝寶五年、東京大學出版會。

「中國・日本經典章疏目録」『七寺古逸經典研究叢書』第六卷所收（大東出版社、一九九八年。）

【二次資料】

《外国》

E.Waldschmidt, Das Mahāparinirvāṇasūtra, Teil I-III, Berlin, 1950-51

E.Waldschmidt, "Drei Fragmente buddhistischer Sūtras aus den Turfanhandschriften," Nachrichten der Akademie der Wissenschaften in

Göttingen, I. Philologisch-historische Klasse, Jahrgang 1968, Nr. 1

Mark Allon and Richard Salomon, *Kharoṣṭhī fragments of a Gāndhārī of the Mahāparinirvāṇasūtra*, Manuscripts in the Schøyen Collection I, *The Dīgha Nikāya*, ed. by T. W. Rhys Davids and J. Estlin Carpenter, vol. II. London, The Pali Text Society, 1947

149

周玫慧『從中古音方言層重探『切韻』性質——『玄應音義』・『慧琳音義』的比較研究』國立臺灣大學文史叢刊、三二頁、二〇〇五年。
丁峰「窺基『法華音訓』原型考」姜亮夫 蔣禮鴻 郭在貽先生記念論文集（上海教育出版社、二〇〇三年。）
賴瑞和『唐代中層文官』（臺北：聯經出版社、二〇〇八年。）
李乃琦「玄應音義に關する研究史と課題」『研究論集』十六卷（北海道大學文學研究科出版、二〇一六年。）
湯用彤『漢魏兩晉南北朝佛教史』（臺北：彌勒出版社、一九八二年。）
湯用彤『隋唐佛教史稿』（北京：中華書局、一九八二年。）
翁俊雄「唐代的州縣等級制度」『北京師範學院學報』一九九一年第一期、一九九一年。
楊曾文「淨覺及其『注般若波羅蜜多心經』與其校本」『中華佛學學報』第六期（臺北：中華佛學研究所、一九九三年。）

《日本》

落合俊典「興聖寺本『馬鳴菩薩傳』について」『印仏研』第四十一卷第一号、一九九二年。
石田茂作「奈良朝現在一切經疏目錄」『寫經より見たる奈良朝佛教の研究』（東洋文庫、一九六六年。）
井上光貞『日本古代思想史の研究』（岩波書店、一九八二年。）
横超慧日『涅槃經——如來常住と悉有仏性——』（平樂寺書店、一九八一年。）
織田顯輔『大般涅槃經序說——二〇一〇年安居次講』（真宗大谷派（東本願寺出版部）、二〇一〇年）
河上麻由子『古代日中關係史——倭の五王から遣唐使以降まで』（中央公論社、二〇一九年）
坂本廣博「重要文化財・毘沙門堂藏本『注大般涅槃經』卷十四・聖行品について」（『叡山學院研究紀要』第三号、一九八〇年。）
坂本幸男『華嚴教學の研究』（平樂寺書店、一九五六年。）
島地大等『国訳大藏經』經部 第八卷（国民文庫刊行會、一九二七年。）
下田正弘「『原始涅槃經』の存在」『東洋文化研究所紀要』第百十三冊、一九九一年。

下田正弘『涅槃經の研究―大乘經典の研究―方法試論』（春秋社、一九九七年。）

高田時雄「玄應音義について」『日本古寫經善本叢刊第一輯 玄應撰 一切經音義二十五卷〈解題篇〉』（國際佛教學大學院大學學術フロンティア實行委員會、二〇〇六年。）

田上太秀『ブツダ臨終の說法〈1〉―〈4〉―完訳大般涅槃經』（大藏出版、一九九六七年）

塚本啓祥『新国訳大藏經』《大般涅槃經》（「南本」D）（大藏出版、二〇〇八年。）

中村 元『ブツダ最後の旅』（岩波書店、一九八〇年）

長谷川滋「大般涅槃經の研究」『密教文化』通号 一〇五、一九七四年、二〇―三九頁

幅田 裕美「大乘へ涅槃經Vにおける阿含の引用について」『印度哲学仏教学』十一号、一九九六年。

幅田 裕美「涅槃の比喻と失われた文字」『印度哲学仏教学』第二十二号、二〇〇七年。

幅田裕美 [2009] The Mahāparinirvāṇa-mahāsūtra Manuscripts in the Stein and Hoernle Collection (1), The British Library Sanskrit Fragments Vol 2, Tokyo

幅田 裕美「大般涅槃經の St. Petersburg 所蔵梵文新断片について（松田和信教授還暦記念号）」『インド論理学研究』八、二〇一五年。

布施浩岳『涅槃宗の研究』（前篇・後篇）（国書刊行会、初一九四二年・再一九七三年）

藤井教公「中国における小本大乘「涅槃經」の伝訳について」『大倉山論集』三十五号、一九九四年。

松田和信『インド省図書館所蔵・中央アジア出土大乘涅槃經梵文断簡集―スタイン・ヘルンレ・コレクション』（東洋文庫、一九八八年。）

望月良晃『大乘涅槃經の研究―教団史的考察』（春秋社、一九八八年。）

水谷幸正氏「『涅槃經』の成立問題」『印度学仏教学研究』通号二十二、一九六三年。

矢野主税「韋氏研究（二）」『人文科学研究報告』十一（臨時増刊号）一九六二年。

Yuyama, Akira Sanskrit Fragments of the Mahāyāna Mahāparinirvāṇasūtra 1 Koyasan Manuscript, Studia Philologica Buddhica. Occasional Paper Series IV. Tokyo, 1981

Hodge, Stephen. "The Mahāyāna Mahāparinirvāṇa-Sūtra: The Text and Its Transmission." Corrected and revised version of a paper presented in July 2010 at the Second International Workshop on the Mahāparinirvāṇa-sūtra held at Munich University, 2012. pp.3-4 <https://www.buddhismuskunde.uni-hamburg.de/pdf/5-personen/hodge/the-textual-transmission-of-the-mpns.pdf>

付記

この度、この論攷を上梓できたのは、様々なご縁によって支えられた賜物である。私の長き仏教学研究の人生には、様々な方々の支持・支援があったから、今日ここまで辿りつくことができた。まず、感謝の意を表したいのは、指導教授であり、そして韋諒の『注大般涅槃經』の存在を教えて下さった国際仏教学大学院大学教授落合俊典先生である。二児の子育てに奮闘しながら、研究を続けたいという気持ちを尊重して頂き、研究に専念するのが難しい時も、週一回必ず經典に親しむようにと、励まして続けて頂いた。難しい気質の私には、最高なコーチング手法によって、導いて下さったことに、感謝してもし尽くせない。

また、本学教授である斎藤明先生及び東京大学の学友であった三重県伊賀市天台真盛宗西念寺市川直史副住職のご紹介により、巻二・巻十二を所蔵している三重県津市にある天台真盛宗別格本山西來寺を訪問することができた。山主の寺井良宣猊下のご好意により、二〇一七年の七月に実際に京都国立博物館にて、巻二及び巻十二を熟覧し調査することができた。猊下のご理解がなければ、本日この論攷も日の目を見ることはなかったのだろう。また、斎藤先生には、東京大学在学中にも、ご指導頂き、ご懇意頂いた。心より感謝の意を表したい。

さらに、京都国立博物館の調査に際して、京都国立博物館の赤尾栄慶名誉館員及び上杉智英研究員には、調査にご同行頂きご尽力頂いた。その際に、多くのことを学ぶことができたことに大変感謝している。

また、国際仏教学大学院大学の藤井教公先生、デレアヌフロリン先生、後藤敏文先生は、いつも多くの知識を以て、時にはユーモアも交えて、ご指導頂いた。指導教授でなくとも、いつも気にかけてくださる温かい気持ちに感謝の意を表したい。また、すでに、退任された木村清孝先生には、公私に渡り、ご懇意頂いたことに感謝している。

国際仏教学大学院大学に対しても感謝の意を述べたい。子育てしながらの研究生活、時には、子どもを連れて大学に来ることもあった。そんな時でも、大学の職員・学友の方々には、温かく対応して頂いた。図書館の職員の方々も、常に親身に相談に乗って頂いた。共に研究する学友も互いに励ましあった。本学の方々の援助・支援がなければ、成し得ることはできなかったであろう。

また、私の研究ルーツを作ってくださった東京大学・大学院時代の末本文美士先生、丸井浩先生、下田正弘先生、丘山新先生、蓑輪顕量先生の諸先生方、先輩方、学友の方々にも感謝の意を表したい。ご指導頂き、また共に学んだ日々は、今でも私の財産である。

最後になるが、私の家族に感謝したい。家族の理解と協力がなければ、長きに渡り研究を続けることができなかっただろう。

一人一人の名を挙げることはできないが、私は、多くの良きご縁によって、今日という日を迎えることができた。いつか自分がその御恩に報いることができよう、これからも日々精進したい次第である。皆さまに真心を込めて厚く御礼申し上げます。

資 料 篇

- 一、『注大般涅槃經』卷二 翻刻校訂
- 二、『注大般涅槃經』卷二 訓讀訳注

1 『注大般涅槃經』卷二翻刻

【凡 例】

一、本テキストは、三重県津市にある天台眞盛宗西来寺所蔵（京都国立博物館寄託）韋諗撰『注大般涅槃經』卷第二を翻刻したものである。

二、翻刻に際して異体字等は、概ね正字にて表記した。

『注涅槃經』文中で正字に表記を改めた異体字は、左記通りである。

随↓陀、閒↓間、見↓現、（蝨↓木+文）↓蚊、邪↓耶、蔭↓陰、（駟↓戸+丘）↓駟、蟲↓虻、慙↓慚、段↓假、伍↓低、脩↓修、（𠂇↓左）↓怪、略↓啓、（𠂇↓羊）↓逆。

三、經の本文と注の部分には適宜、句点、読点を付した。

四、校訂に関しては、引用されている『大般涅槃經』本文について、『大正蔵』卷第十二所収、北涼曇無讖訳「北本」『大般涅槃經』（No. 374）及び宋慧嚴等による再治本の「南本」『大般涅槃經』（No. 375）に依った。異同は、脚注にて注記した。その際、「北本」「南本」の字は、それぞれ、「北本」○○、「南本」○○とした。『注涅槃經』と同じ場合は、特に注記していない。また、『大正蔵』にある脚注は、「北本注」、「南本注」とした。その際、『大正蔵』の表示に準じて、【宮】は、宮内庁本、【三】は、宋・明・元の三本、【宋】は、宋本、【明】は、明本、【元】は、元本とする。

1. 注大般涅槃經卷第二壽命品導江縣令韋諗注

2. 爾時、會中有優婆塞、是拘尸那²工巧之子、名

3. 曰純陀^{此第二成就種性遣執分。純陀、法身。大士也。以本願故、現生工巧之家。}與

4. 其同類十五人俱、爲令世間得善果故、捨

5. 身威儀從座而起^{捨、即坐之威儀。崇、請法之容止。}偏袒右肩

6. 右膝著地、合掌向佛、悲感流涕^{表心無二也。}頂

7. 禮佛足而白佛言、唯⁴願世尊及比丘僧、哀受

8. 我等最後供養、爲度無量諸衆生故^{請受施者、爲度}

9. 衆生、非敢自利。世尊、我等從今無主無親、無救無

10. 護、無歸無趣^{佛是衆生法主、今若涅槃、則無所趣。}、貧窮飢困

11. 無法利人曰貧。無德自養爲窮。生死迫切名飢。流轉艱勞是困。欲從如來求將來

¹ 壽命品…「北本」壽命品第一之一。「南本」純陀品第二。

² 拘尸那…「北本」拘尸那城。「北本注」〔城〕欠【宋】。「南本」拘尸邨城。「南本注」〔邨〕欠【三】。

³ 悲感流涕…「北本」悲泣墮淚。「南本」悲感流淚。

⁴ 唯…「南本注」【三】惟*。

12. 食^{食、謂常}。唯⁵願哀愍受我⁶微供然後涅槃⁷。

13. 不設供具而請受者、見上諸人、所獻弗納。故先啓佛、然後辨之。世尊、譬如刹利

14. 王種、若婆羅門^{淨行者也}、毘舍^{若今之官長也}、首陀^{農夫}

15. 之類、以貧窮故^{況無出世之善也}、遠至他國^{捨生死之}。

16. 本居、趣涅槃^{本居、趣涅槃}。役力農作^{喻修出世之行}、得好調牛、良

17. 田平正^{志不迂曲也}、無諸沙鹵^{鹵、鹹土也}、惡草株杻^{鹵鹹土也}。

18. 喻不生邪見^{及餘煩惱}。唯¹⁰希¹¹天雨^{世尊若許則法牙得生、猶如衆苗希雨一潤}。

19. 言調牛者、喻¹²身口七^{況身口七支也}。良田平正況¹³

⁵ 唯…「南本注」【三】惟*。

⁶ 哀愍受我…「南本」哀受我等。

⁷ 然後涅槃…「北本」然後乃入於般涅槃。

⁸ 鹵…「北本注」【三】鹵*。

⁹ 株杻…「南本」荒穢。

¹⁰ 唯…「南本注」【三】惟*。

¹¹ 希…「北本」·「南本」悌*。

¹² 喻…「南本注」【三】譬*。

¹³ 況…「北本」·「南本」喻。「南本注」【三】喻=譬*。

20. 於智慧、除去沙鹵¹⁴、惡草株杌¹⁵、喻¹⁶諸¹⁷煩惱。世尊、
21. 我今身有調牛良田、除去株杌¹⁸、唯¹⁹希²⁰如來甘
22. 露法雨²¹。譬²²常²³。貧四姓者、卽我身是貧於無上
23. 法之財寶。唯²⁴願哀愍²⁵、除斷我等、貧窮困苦、拯²⁶
24. 及無量苦惱衆生。我今所供、雖復微少、冀得
25. 充足、如來大衆²⁷。希佛神力²⁸。我今無主、無親無
26. 歸、願垂矜愍²⁹、如羅睺羅³⁰、觀³¹純陀之請、意有兩種。
27. 將來食者、請受供也。
希天雨者、請說法也。
28. 爾時、世尊一切種智・無上調御告純陀曰、善
29. 哉善哉。我今爲汝、除斷貧窮、無上法雨、雨汝

¹⁴ 鹵…「北本注」【二】滿*。
¹⁵ 株杌…「南本」荒穢。
¹⁶ 喻…「南本注」【二】譬*。
¹⁷ 諸…「北本」・「南本」除。「北本注」【二】【宮】除||諸。
¹⁸ 除去株杌…「南本」耘除衆穢。
¹⁹ 唯…「南本注」【二】惟*。
²⁰ 希…「北本」・「南本」悌*。
²¹ 唯…「南本注」【二】惟*。
²² 愍…「南本注」【二】憫*。
²³ 拯…「北本注」【宮】極。
²⁴ 愍…「南本注」【二】憫*。

30. 身田、令生法牙²⁵。許施其常、。汝今於我、欲求壽
是爲法雨。
31. 命色力²⁶。安無礙辨²⁷。我當施汝、常・命・色・力・安・無
32. 礙²⁸。辨²⁹。施人獲五果。何以故。純陀、施食有二、果
33. 報無差³⁰。一者、初施得菩提。二者、後施入涅槃。施。何
因不同、故云二也。俱獲常果、是則無差。
34. 等爲二。一者、受已得阿耨多羅三藐三菩提
35. 藐音彌。二者、受已入於涅槃。我今受汝最後供
略反。
36. 養³¹。受不擇貴、。令汝具足檀波羅蜜³²。由其施因、
示平等也。得成佛果、
37. 故行施之人、。爾時、純陀卽白佛言、如佛所說、二
具足檀度。
38. 施果報、無差別者、是義不然³³。世尊以二施田
等。純陀以二施
39. 田別。由田不
同、故生疑也。何以故。先受施者、煩惱未盡、未得
40. 成就一切種智³⁴。菩提樹下、未成正覺、
故知初施、非勝田也。亦未能令

²⁵ 牙…「北本」・「南本」芽。「北本注」【宋】芽。南本注「宋」芽。牙。

²⁶ 色力…「北本注」【宮】力色。

²⁷ 安無礙辨…「北本」安辯、「北本注」【元】【明】【宮】安辯。安樂無礙辯才。「南本」安樂無礙辯才。

²⁸ 礙…「南本」【二】闕*。

41. 衆生、具足檀波羅蜜既非勝田、熟能令具。。後受施者、煩惱已盡、已得成就一切種智、能令衆生普得
42. 具足檀波羅蜜田既不同、果必有異。。先受施者、直是是衆
43. 生未得聖果。。後受施者、是天中天諸天望佛、猶人望天、故曰天中天也。。
44. 先受施者、是雜食身資假食故。、煩惱之身煩惱所依故。、
45. 是後邊身生死有邊故。、是無常身有生滅故。。後受施
46. 者、無煩惱身非煩惱所依故。、金剛之身不可壞故。、法身法性
47. 身、常身無生滅故。、無邊之身離有邊故。。云何而言、二施
48. 果報等無差別初施非佛、後施是佛。佛與非佛、二果不同、云何說言、二因之報、等無異也。。
49. 先受施者、未能具足檀波羅蜜、乃至般若波
50. 羅蜜、唯得得肉眼眼非是肉、以依肉成、故云肉眼。、未得佛眼此眼是證

²⁹ 直…「南本」猶。

³⁰ 假…『注涅槃經』段。

³¹ 唯…「南本注」【二】惟*。

52. 實無分別慧也。³² 乃至慧眼³³證無相。後受施者、已得具足。
53. 檀波羅蜜乃至般若波羅蜜、具足佛³⁴眼乃至
54. 慧眼。云何而言、二施果報、等無差別³⁵。先受施時、未能
55. 備善。後受施時、已得具足。³⁶。世尊、先受施者、受已食而³⁷言二施無差、故興此難。
56. 噉³⁸、入腹消化、得命得色、得力得安、得無礙³⁹辯。
57. 後受施者、不食不消、無五事果。云何而言、二
58. 施果報、等無差別。先受而食、於身有用。後受不食、於身無用。先後有殊、理在無惑。
59. 今云不別、故疑難生焉。
60. 佛言、善男子、如來已於無量無邊阿僧祇劫、
61. 無有食身⁴⁰。資食之身、非如來也。煩惱之身、非⁴¹後邊身、常
62. 身法身、金剛之身。善男子、未見佛性者、名煩惱身、雜食之身、是後邊身。菩薩爾時、受飲食
64. 已、入金剛三昧。此食消已、即見佛性、得阿耨多羅三藐三菩提。是故我言二施果報等無

³² 佛…「南本注」【三】肉。

³³ 噉…「南本」之。

³⁴ 礙…「南本注」【三】闕*。

³⁵ 非…「北本」·「南本」無。

66. 差別夫見性者、乃是照理之極、豈可以食身而見之乎。苟見食身、則知非實、今昔皆爾故、二施無差。
67. 菩薩爾時破壞四魔、今入涅槃亦破四魔、是
68. 故我言、二施果報等無差別成佛涅槃、俱破四魔。始終平等、故無
69. 也。^二菩薩爾時、雖不廣說十二部經、先已通達
70. 今入涅槃、廣為衆生分別演說、是故我言^二
71. 施果報等無差別說與不說、但為待緣。久已通達、故云不異。善男
72. 子、如來之身已於無量阿僧祇劫、不受飲食
73. 純陀以五事有殊、而生二見。世尊以五事果同、說為一相。何以故。如來成佛已無量劫故、然則前施後施、俱是化佛。
74. 施佛不殊、。為諸聲聞說言、先受難陀・難陀波羅故無二也
75. 二牧牛女、所奉乳糜此二女人、是姊妹也。初成佛時、受女人施。臨涅槃時、受丈
76. 夫施者、為表內外二德也。內德如女、取其順柔。外德如男、表其剛正。然後乃得、阿耨
77. 多羅三藐三菩提。我實不食、我今普為³⁶此³⁷會³⁸

³⁶ 糜…「北本注」【宋】麋。

³⁷ 普為…「北本」為於、「北本注」【二】為於³⁶普為。

³⁸ 此…「南本」作。

78. 大衆、是故受汝、最後所奉、實亦不食。樹下成佛
是權。不食

79. 後施是實。權實雖殊、而不食一也。

80. 爾時、大衆聞佛所言³⁹、普爲大會、將受⁴⁰純陀、最

81. 後供養、歡喜踊躍、同聲讚言、善哉善哉、希有

82. 純陀、汝今立字、名不虛稱。言純陀者、名解妙

83. 義。汝今建立、如是大義、是故依實、從義立名、

84. 故名純陀。今所解義、契昔嘉名。名實相稱、故共讚之。汝今見⁴¹世、得大

85. 名利、德願滿足。昔於迦葉佛時、發斯誓願、今得最後供養、故云滿足。甚奇、

86. 純陀生在人中、復得難得無上之利。具檀之利爲無

87. 上。善哉純陀、如優曇花、世間希有。輪王出世此花乃現

88. 佛出於世、亦復甚難、值佛生信、聞法復難。佛

89. 臨涅槃、最後供養、能辨⁴²是事復難。於是南無

90. 純陀、南無純陀。南無此言歸命。汝今已具檀波羅蜜、

³⁹ 所言…「北本」·「南本」世尊。

⁴⁰ 將受…「北本」受於。「南本」哀受。

⁴¹ 見…「北本」·「南本」現。

⁴² 辨…「北本注」【宮】辨。「南本」辨。

91. 猶如秋月十五日夜、清淨圓滿無諸雲翳、一
 92. 切衆生、無不瞻仰。汝亦如是、而爲我等之所
 93. 瞻仰。佛已受汝最後供養、令汝具足檀波羅
 94. 蜜。南無純陀、是故說汝如月盛滿、一切衆生
 95. 無不瞻仰。南無純陀、雖受人身、心如佛心_{同以}
 96. _{大悲爲。}汝今純陀、真是佛子、如羅睺羅、等無
 97. 有異。爾時、大衆卽說偈言、
 98. 汝雖生人道、已超第六天_{他化自在天是欲界頂、魔王波旬都處也。}
 99. _{心超其境、}我及一切衆、今故稽首、請人中最勝
 100. 尊、今當入涅槃。汝應_ひ慰我等、唯_止願速請佛、久
 101. 住於世間、利益無量衆、演說智所讚、無上甘
 102. 露法。汝若不請佛、我命將不全、是故應見爲
 103. 稽請調御師。爾時、純陀歡喜踊躍、譬如有人、
 104. 父母卒喪、忽然還生_{承聲告滅、事同卒喪、}純_{聞答五難、譬如劫蘇。}
 105. 陀歡喜、亦復如是。因₄₆起禮佛、而說偈言、

⁴³ 慰…「南本注」【三】憫_＊。
⁴⁴ 唯…「南本注」【三】惟_＊。
⁴⁵ 生…「北本」・「南本」活。
⁴⁶ 因…「北本」・「南本」復。

106. 快哉獲己利、善得於人身、蠲除⁴⁷貪恚等^{蠲音古、玄反。}

107. 永離三惡道。快哉獲己利、遇⁴⁸得金寶聚、值遇

108. 調御師、不懼墮畜生。佛如優曇花、值遇生信

109. 難、遇已種善根、永滅⁴⁹餓鬼苦、亦復能損減、阿

110. 修羅種類^{自欣見佛、得離四趣。}芥子投針鋒、佛出難

111. 於彼⁵⁰、我以⁵¹具足檀、廣度生死海⁵²。佛不染世法、

112. 如蓮出水中⁵³。善斷有⁵⁴頂種^{謂三有之頂也。}、永度生

113. 死流、生世爲人難、值佛世亦難、猶如大海中、

114. 盲龜遇⁵⁵浮孔、我今所奉食、願得無上報。一切

115. 煩惱結、摧破不堅牢⁵⁶。我今於此處、不求天人⁵⁷

116. 身、設使得之者、心亦不甘樂。如來受供養⁵⁸、歡

⁴⁷ 除…「南本」餘。

⁴⁸ 遇…「南本注」【明】愚。

⁴⁹ 滅…「北本」離。「北本注」【三】離^{||}滅。

⁵⁰ 彼…「北本」·「南本」是。

⁵¹ 以…「北本注」【二】已*。「南本注」【元】【明】已。

⁵² 廣度生死海…「北本」·「南本」度人天生死。

⁵³ 出水中…「北本」·「南本」花處水。

⁵⁴ 有…「南本」水。

⁵⁵ 遇…「北本注」【元】【明】【宮】值。

⁵⁶ 不堅牢…「南本」無堅固。

⁵⁷ 天人…「北本注」【元】【明】【宮】人天。

⁵⁸ 供養…「北本」·「南本」我供。

117. 喜無有量、猶如伊蘭花、出於栴檀香。我身如
 118. 伊蘭、如來受我供、如出栴檀香、是故我歡喜。
 119. 我今得見⁶³⁹報、最勝上妙處、釋梵諸天等、悉來
 120. 供養我。一切諸世間、悉生諸⁶⁴⁰苦惱、以皆知⁶⁴¹世
 121. 尊、欲入於涅槃⁶⁴²、高聲唱是言、世間無調御
 122. 不應捨衆生、應視如一子、如來在僧中、演說
 123. 無上法、如須彌寶山、安處于大海、佛智能善
 124. 斷、我等無明闇、猶如虛空中、起雲⁶⁴³得清涼⁶⁴⁴、如
 125. 來能善除⁶⁴⁵、一切諸煩惱、猶如日出時、除雲光
 126. 普照、是諸衆生等、戀慕增悲慟⁶⁴⁶、皆悉⁶⁴⁷爲生死、
 127. 苦水之所漂、以是故世尊、應長衆生信、爲斷
 128. 生死苦、久住於世間。
 129. 佛告純陀、如是如是。如汝所說、佛出世難如
 130. 優曇花、值佛生信、亦復甚難。佛臨涅槃、最後

⁶³⁹ 見…「北本」・「南本」現。
⁶⁴⁰ 諸…「北本注」【元】【明】【宮】大。「南本」大。
⁶⁴¹ 皆知…「北本」・「南本」知佛。
⁶⁴² 欲入於涅槃…「南本」今欲入涅槃。
⁶⁴³ 起雲…「南本」雲起。
⁶⁴⁴ 猶如…清涼…「南本注」【宋】〔猶如虛空中、起雲得清涼〕（124行）と〔猶如日出時、除雲光普照〕（125～126行）とを入れ替える。
⁶⁴⁵ 除…「北本注」【宮】斷。
⁶⁴⁶ 戀慕增悲慟…「北本」啼泣面目腫。
⁶⁴⁷ 皆悉…「北本」・「南本」悉皆。

131. 施食能具足檀、又⁶⁸復倍⁶⁹難⁷⁰。汝今純陀、莫大愁

132. 苦、應生踊躍⁷¹、深⁷²自慶幸、得值最後、供養如來、

133. 成就具足、檀波羅蜜、不應請佛、久住於世^止
所

134. 也。請。汝今當觀、諸佛境界、悉皆無常、諸行性相

135. 亦復如是。應身是有、名佛境界。隨化示滅、故曰無
常。五蔭遷流、名爲諸行、亦同佛化、故云

136. 是。如。卽爲純陀而說偈言、

137. 一切諸世間、生者皆歸死、壽命雖無量、要當

138. 有盡期^{73 74}。壯年不暫⁷⁵停、美⁷⁶色病能⁷⁷侵、命爲死所

139. 吞、世法無常住⁷⁸。諸王得自在、威⁷⁹力難⁸⁰等雙、一

⁶⁸ 又…「北本」・「南本」〔又〕欠。

⁶⁹ 復倍…「北本注」【二】倍復。「南本」倍復。

⁷⁰ 難…「北本」・「南本」甚難。

⁷¹ 生踊躍…「南本」當歡喜。

⁷² 深…「北本」喜。

⁷³ 當有盡期…「北本」必當有盡。「南本」必有終盡。

⁷⁴ 〔盡期〕と〔壯年〕の間、「北本」・「南本」〔夫盛必有衰、合會有別離〕有り。

⁷⁵ 暫…「北本」・「南本」久。

⁷⁶ 美…「北本」・「南本」盛。

⁷⁷ 能…「北本」・「南本」所。

⁷⁸ 世法無常住…「北本」無有法常者。「南本」無有法常住。

⁷⁹ 威…「北本」・「南本」勢。

⁸⁰ 難…「北本」・「南本」無。

140. 切皆遷動⁸¹、壽命亦如是。衆苦輪無際、流轉不⁸²
141. 休息、三界皆無常、諸有悉非樂⁸³。此⁸⁴道本性相、
142. 一切皆空無⁸⁵。求其性相、不可得故。可壞法流轉⁸⁶、常有憂
143. 患等、恐怖諸過惡⁸⁷、老病死衰惱、是諸無有邊
144. 過患多。易壞怨所侵、煩惱相⁸⁸纏裹、猶如蠶處繭、
145. 何有智慧者、而當樂是處、此身苦所集、一切
146. 皆不淨、扼⁸⁹縛癰瘡等⁹⁰、根本無義
147. 利、上至諸天身、亦復皆⁹¹如是。諸欲悉⁹²無常、故
148. 我不貪著、離欲善思惟、而證於真實⁹³。究竟斷
149. 有者、今日當涅槃⁹⁴。有謂有身之有也。如來久已無、

有而今捨身、此明非滅而現滅也。

⁸¹ 動…「南本」滅。
⁸² 不…「北本」·「南本」無。
⁸³ 悉非…「北本」無有。
⁸⁴ 此…「北本」·「南本」有。
⁸⁵ 轉…「北本注」【宋】動。
⁸⁶ 惡…「北本注」【元】【明】【宮】患。
⁸⁷ 相…「北本」·「南本」所。
⁸⁸ 扼…「北本注」【二】輓。
⁸⁹ 亦復皆…「北本」·「南本」皆亦復。
⁹⁰ 悉…「北本」·「南本」皆。
⁹¹ 於真實…「南本」真實法。

150. 我度有彼岸⁸³、已得過諸⁸³苦、是故

151. 於今日⁹³、純⁹⁴受上妙樂⁹⁵。有即有苦、無有即無苦。無苦之極、是名妙樂。以

152. 是因緣故、證無戲論邊、永斷諸纏縛、今日入

153. 涅槃。我無老病死、壽命不可盡、我今入涅槃

154. 猶如大火滅、純陀汝不應、思量如來義、當觀

155. 如來常⁹⁶、猶如須彌山。我今入⁹⁷涅槃、受於⁹⁸第一

156. 樂、諸佛法如是^{既有化生、理宜化滅。}、不應復啼⁹⁹哭。

157. 爾時、純陀白佛言、世尊、如是如是、誠如聖教¹⁰⁰。

158. 我今所有智慧微淺、猶如蚊蚋¹⁰¹、何能思議如

159. 來涅槃深奧之義。世尊、我今已與諸大龍象

160. 菩薩摩訶薩、斷諸結漏、文殊師利法王子等。

161. 世尊、譬如幼年初得出家^{習道未久名曰幼年、始悟常理是初出義。}、

⁹² 已得過諸…「南本」出過一切。

⁹³ 日…「北本」·「南本」者。「北本注」【元】【明】【宮】日。

⁹⁴ 純…「南本」惟。「南本注」【二】唯。

⁹⁵ 「南本」【以是】（151行）、「啼哭」（156行）までを欠く。

⁹⁶ 常…「北本」住。「北本注」【元】【明】【宮】性。（「南本」本文欠）

⁹⁷ 入…「北本注」【三】【宮】正。（「南本」本文欠）

⁹⁸ 於…「北本注」【三】持。（「南本」本文欠）

⁹⁹ 啼…「北本注」【宋】涕。（「南本」本文欠）

¹⁰⁰ 教…「南本注」【三】言。

¹⁰¹ 蚋…「北本」蛇。

162. 雖未具戒¹⁰²。卽墮僧數。我亦如是。以佛菩薩神

163. 通力故、得在如是大菩薩數。是故我今欲請¹⁰³

164. 如來久住於世不入涅槃。譬如飢人終無變吐、

165. 唯¹⁰⁴願¹⁰⁵世尊、亦復如是、常住¹⁰⁶於世、不入涅槃^{飢渴}

166. 之人、必不變吐。喻如。
來常住、則本願滿足。

167. 爾時、文殊師利法王子告純陀言¹⁰⁷、純陀汝今

168. 不應發如是言。欲請¹⁰⁸如來常住於世、不般涅

169. 槃。如彼飢人¹⁰⁹無所¹¹⁰變吐、汝今當觀諸行性相

170. 小乘法中、以佛是有爲諸行所攝。若、如是觀行具
觀性相無常、而佛色身終歸壞滅。

171. 空三昧^{由觀無常、知法無性、故能具足空三昧也。}、欲求正法應如是

172. 學。^{汝當觀行無常無性無相、不應勸佛久住於世。}純陀問言文殊師利、

102 具戒…「北本」受具。

103 請…「北本」·「南本」令。

104 唯…「南本注」【三】惟*。

105 唯願…「北本」願使。

106 住…「南本注」【三】在*。

107 言…「南本注」【三】曰。

108 請…「北本」·「南本」使。「南本注」【三】令。

109 人…「北本注」【明】久。

110 所…「南本」有。

173. 夫如來者、天上人中最尊最勝、如是如來豈

174. 是行耶如來者、乘如實來。所乘既實、果必是真、故非行也。若是行者、爲

175. 生滅法天人之行是行。世尊出過於天、豈同諸天是行也哉。若是行者、便爲生滅、非正行也。。譬

176. 如水泡速起速滅、往來流轉、猶如車輪。一切

177. 諸行亦復如是。我聞諸天壽命極長、云何世

178. 尊是天中天、壽命更促不滿百年非想之天壽八萬劫

179. 況佛之命而不長也。如聚落主、勢得自在、以自在力、能

180. 制他人。是人福盡、其後貧賤、人所輕蔑、爲他

181. 策使。所以者何、失勢力故。世尊亦爾。同於諸

182. 行、同諸行者、則不得稱爲天中天。何以故。諸

183. 行卽是生死法故。是故文殊、勿觀如來、同於

184. 諸行。

185. 復次、文殊爲知而說不知而說不知而說是爲妄語。若必知常、

186. 則不應責以常爲無常也。而言如來同於諸行設復如

187. 來同諸行者、則不得言於三界中、爲天中天

¹¹¹ 文殊…「北本注」【二】【宮】文殊師利。
¹¹² 復…「北本」·「南本」使。

188. 自在法王。譬如人王^{況衆生、}有大力士^{喻如來也。言衆}

189. ^{生能感佛}其力當千、更無有能降伏之者^{謂能}

190. ^{摧四}魔也。故稱此人¹¹³一人當千。如是力士王所愛念、

191. 偏賜爵祿封賞自然^{以四事供養也}。所以得稱當千

192. 人者、是人未必力敵於千直¹¹⁴、以種種技¹¹⁵藝所

193. 能勝於¹¹⁶千故、故稱當千^{藝謂無爲功德也}。如來亦爾。

194. 降煩惱魔・陰魔・天魔・死魔、是故如來名三界

195. 尊、如彼力士一人當千。以是因緣、成¹¹⁷就具足

196. 種種無量、真實功德、故稱如來、應¹¹⁸正遍知。文

197. 殊師利、汝今不應憶想分別、以如來法同於

198. 諸行。譬如巨富長者生子^{衆生感佛來至三界、故云生子。}、相

113 人…「南本」士。

114 直…「北本」・「南本」但。

115 技…「北本」・「南本」伎。「南本注」【元】【明】技*。

116 能勝於…「北本」・「南本」能勝。

117 成…「南本」或。

118 應…「南本注」【三】應供。

199. 師占之有短壽相文殊說佛是無常也。、父母聞已、知其

200. 不任119紹繼家嗣家謂法性也。若佛非有爲、則佛從法性家生、是法眞子、堪任紹繼法

201. 王家也。若是有爲、則與法性相背、非法眞子、故曰不任。不復愛重親如芻

202. 草120。夫短壽者、不爲沙門婆羅門等121男女大小

203. 之所敬念。若使如來同諸行者、亦復不爲一

204. 切世間人天衆生之所奉敬。如來所說、不變

205. 不異眞實之法、亦無受者唯證乃悟耳。是故文殊122、

206. 不應說言、如來同於一切諸行。復次文殊123、譬

207. 如貧女、無有居家救護之者女況行人也。闕之妙理、喻無居家、遠離

208. 善人、非有救護。加復病苦、飢渴所逼124煩惱是病苦、無法爲飢渴、遊

209. 行乞巧125亦乞也。尋師、止他客舍夫教有權捨之義故、以大乘方

119 任…「北本注」【宮】住。

120 親如芻草…「北本」視如芻草。「南本」視之如草。

121 等…「南本注」【三】「等」欠。

122 文殊…「北本注」【元】【明】【宮】文殊師利*。

123 文殊…「北本注」【元】【明】【宮】文殊師利*。

124 逼…「南本注」【宋】（福禾十イ）。

125 巧…「南本」勾。

210. 諸逆¹²⁶、寄生一子¹²⁶、起解名生、是客舍主^{謂化佛也}、驅逐

211. 令去^{教之捨鈴}。其產未久^{入理不深也}、携抱是兒、欲

212. 至他國^{持解喻携。抱廻向名。欲、至將趣、佛果爲他國。}於其中路遇惡風

213. 雨寒苦並至^{正修行時、名爲中路。觸對塵境、是遇風雨。起惡招報、名寒苦也。}多

214. 爲蚊虻蜂蠹¹²⁸毒蟲之所咬¹²⁹食^{啖食況惡友害善也。}、經¹³⁰由

215. 恒河、抱兒厲渡¹³¹、其水漂疾^{漂音、偏、妙反。}、終¹³²不放捨

216. 中遇¹一乘、況經恒河。持解求出、喻抱兒渡、於是母子爲小所勸、名水漂疾。守解莫從、如不放捨。

217. 遂共俱沒^{以身殉法、俱沒之狀。}、如是女人慈念功德、命終

218. 之後、生於梵天^{慈念況護法、梵天喻解脈。}。文殊師利、若有

¹²⁶ 逆…『注涅槃經』では(、)十羊、逆の異体字。

¹²⁷ 其產未久…「南本」欠。

¹²⁸ 蠹…「北本」、「南本」蟹。

¹²⁹ 咬…「北本注」【宋】嗜。

¹³⁰ 經…「北本注」【宮】逕。

¹³¹ 厲渡…「北本」而度。「南本」而渡。「南本注」【三】渡||度。

¹³² 終…「北本」、「南本」而。

219. 善男子、欲護正法、勿說如來同於諸行、不同

220. 諸行應化二身、有常無常、蓋諸佛方便利生之教也。
若說同諸行、是違常教。若說不同諸行、違無常。

221. 教護正法、人不當。唯¹³³當自責我今愚癡、未有慧說、言同不同也。

222. 眼¹³⁴、如來正法不可思議。是故不應宣說、如來

223. 定是有爲、定是無爲。方便是有爲、眞諦是無爲。二法相依、不可言定。。若

224. 正見者、應說如來定是無爲。談眞、不言俗也。何以故。

225. 能爲衆生生善法故、生憐愍¹³⁵故。如彼貧女在

226. 於恒河、爲愛念子而捨身命。善男子、護法菩

227. 薩亦應如是、寧捨身命、不說如來同於有爲

228. 說同有爲、是謗佛也。、當言如來同於無爲。以說如來同無

229. 爲、故得阿耨多羅三藐三菩提。如彼女人得

230. 生梵天。女以慈故、生天人、以不謗得解。何以故、以護法故。云何

231. 護法、謂說¹³⁶如來同於無爲。善男子、如是之人

232. 雖不求解脫、解脫自至。如彼貧女不求梵天、

¹³³ 唯…「南本注」【二】惟*。

¹³⁴ 未有慧眼…「北本注」【三】無有慧目、【宮】未有慧目。

¹³⁵ 憐愍…「南本注」【二】憐憫心。

¹³⁶ 謂說…「北本」·「南本」所謂說言。

233. 梵天自至¹³⁷。

234. 文殊師利、如人遠行中路疲極、起修長久、是曰遠行。以中廢故、

235. 名爲疲、寄止他舍、退住小乘、名爲寄止。二乘所居、是爲他舍。臥寐之中

236. 喻大解、其室忽然大火卒起、火況無常也。聞說無常燒諸世間、義同卒起。

237. 卽時驚寤¹³⁸、尋自思惟、覺知無常、爲驚寤。漸識權教、名思惟。我

238. 於今者、定死無惑¹³⁹、憂慮佛身、爲權教所隱、故言必死。具慚愧

239. 故、以衣纏身、佛現無常、有類身醜、恥佛無常、故名慚愧。說佛眞常、隱佛無常、是曰

240. 纏身。即便命終、護心至死、須彌山上有三十二天。爲名爲終也。生切利天、

241. 切利天王之輔臣。今言生切利者、喻得三十二相也。從是已¹⁴⁰後、滿八十反¹⁴¹作大

242. 梵王、況得八十種好也。滿百千世生於人中爲轉輪王

¹³⁷ 至…「南本」應。

¹³⁸ 寤…「北本注」【宮】悟。

¹³⁹ 無惑…「北本」·「南本」不疑。「北本注」【三】不無。

¹⁴⁰ 已…「北本注」【宋】以。

¹⁴¹ 反…「北本」·「南本」返。「北本注」【三】【宮】返。反。

243. 百千譬壽。無量輪。不生喻。是人不得生三惡趣。證常。三
244. 惡譬。展轉常生安樂之處。無爲常果。以是
245. 緣故、文殊師利、若善男子有慚愧者、不應觀
246. 佛同於諸行。遇火之人、愧身醜惡、以衣覆體、命終。生天。護法之人、不說如來、同於諸行、
247. 故得。文殊師利、外道邪見可說如來同於有
248. 爲。持戒比丘、不應如是、於如來所、生有爲想
249. 比丘之人、是佛弟子、。若言如來是有爲者、即是
250. 妄語、當知是人死入地獄、如人自處於已舍
251. 宅。因既不善、果是地獄。此道必然、如入已宅。文殊師利、如來真實是
252. 無爲法、不應復言、是有爲也。汝從今日、於生
253. 死中、應捨無智。當捨生滅之心、。當知而觀實相常法。
254. 如來即是無爲。若能如是觀如來者、當得具
255. 足。143 十一相、速疾成就。144 阿耨多羅三藐三菩

¹⁴² 智…「北本注」【三】【宮】知。「南本」知。

¹⁴³ 當得具足…「北本」·「南本」具足當得。

¹⁴⁴ 速疾成就…「南本」疾成。

256. 提 文殊說佛無常、以權道除常也。純陀說佛常住、以實智除無常也。二俱利益、兩義無傷。

257. 爾時、文殊師利法王子讚純陀言、善哉善哉

258. 歎其深解也。 善男子、汝今已作長壽因緣、能知如

259. 來是常住法、不變異法、無爲之法。汝今如是

260. 善覆如來有爲之相 ^{147c}、如被 ¹⁴⁸ 火人爲慚愧故、以

261. 衣覆身。由 ¹⁴⁷ 是善心、生忉利天、復爲梵王轉輪

262. 聖王、不至 ¹⁴⁸ 惡趣常受安樂。汝亦如是善覆如 ¹⁴⁹

263. 殊師利言、如來於汝及以於我 ¹⁵⁰ 一切衆生、皆

264. 悉悅可 視同一子故。 純陀答言、汝不應言如來悅

265. 可 除悅執也。 夫悅可者、則是倒想 有悅可想是名顛倒。 若有

266. 倒想即 ¹⁵¹ 是生死。有生死者、即有爲法。是故文

267. 殊、勿謂如來是有爲也 此舉果以除因執。 若言如來

¹⁴⁵ 相…「北本」【宮】想。

¹⁴⁶ 被…「北本」彼「北本注」【三】彼¹¹被。

¹⁴⁷ 由…「北本」・「南本」以。

¹⁴⁸ 至…「南本注」【明】知。

¹⁴⁹ 『註涅槃經』は「善覆如」以降「來有爲相故」一切衆生。文「〔北本〕三七四頁中段二十三行から下段十四行まで、〔南本〕六一四頁上段十六行から中段八行）までの文が脱落。

¹⁵⁰ 於我…「南本」我等。

¹⁵¹ 即…「北本」・「南本」則。

268. 是有爲者、我與仁者俱行顛¹⁵²倒¹⁵²。若執權爲實、是則與仁俱

269. 行倒。文殊師利、如來無有愛念之想¹⁵³。教離分別也。夫

270. 愛念者、如彼母¹⁵³牛、愛念其子。雖復飢渴、行求

271. 水草、若足不足倏爾¹⁵⁴還歸¹⁵⁴。諸佛大慈¹⁵⁵無有

272. 是念、等視一切如羅睺羅¹⁵⁶。非如母牛獨念其子。如是念者、

273. 卽是諸佛智慧境界¹⁵⁷。無愛念、觀真也。等視一切緣俗也。眞俗雙觀、是佛

274. 慧境。文殊師利、譬如國王、調御駕馴、欲馳¹⁵⁸驢

275. 乘¹⁵⁷而¹⁵⁸及之者、無有是處。我與仁者、亦復如是。

276. 欲盡如來、微密深奧、亦無是處。文殊師利、如

277. 金翅鳥¹⁵⁹。鳥況法身也。飛昇¹⁵⁹虛空、無量由旬¹⁶⁰。喻淨土也。下

¹⁵² 「南本注」【宋】【元】顛＝眞*。

¹⁵³ 母…「北本注」【宋】乳。「南本」乳。

¹⁵⁴ 倏爾…「北本」·「南本」忽然。

¹⁵⁵ 大慈…「北本」·「南本」世尊。

¹⁵⁶ 馳…「北本」令。

¹⁵⁷ 乘…「北本」車。

¹⁵⁸ 而…「南本」令。

¹⁵⁹ 飛昇…「北本注」【宋】昇於。

278. 觀大海海譬生死也。 悉見水性魚鼈鼈音魚袁反。

279. 鼉徒多反。 龜龍之屬喻見六道衆生也。 及見己影反視化身

280. 現於三界。如於明鏡、見諸色像眞俗俱鑒也。 凡夫少智、

281. 不能籌量、如有所見。我與仁者亦復如是。不

282. 能籌量如來智慧。文殊師利語純陀言、如是

283. 如是如汝所說。我於此事非爲不達、直欲試

284. 汝諸菩薩事。我今說佛同諸行者、非是不了。將試新學之人、故作是說。 爾時、

285. 世尊從其面門出種種光佛自催供也。 其光明曜

286. 照文殊身。文殊師利、遇斯光已、卽知是事、尋

287. 告純陀、如來今者、現是瑞相、不久必當入於

288. 涅槃。汝先所設最後供養、宜時奉獻佛及大

289. 衆。純陀當知、如來放是種種光明、非無因緣。

290. 純陀聞已、情160咽161默然。佛告純陀、汝所奉施佛

291. 及大衆、今正是時。如來不久162當般涅槃。第二

¹⁶⁰ 情…「南本」悲。

¹⁶¹ 咽…「北本」、「南本」塞。

¹⁶² 不久…「北本」、「南本」正爾。

292. 第三亦復如是將因食起化故促之也。爾時、純陀聞佛

293. 語已、舉聲啼163哭、鳴咽164而言、苦哉苦哉、世間空

294. 虛。復白大眾、我等今者一切、當共五體投地、

295. 同聲勸佛、莫般涅槃恐一人之誠、不能感佛。故、白大眾同共請住。爾時、

296. 世尊復告純陀、汝莫啼哭自撓其心165亂心迷道故止

297. 之。也。當觀是身猶如芭蕉不堅牢也。、熱時之燄166體無實也。

298. 水沫168不可搏也。、幻化無不空也。乾闥婆城望之似有、即之實無。、坏169

299. 器言不固也。、電光出已便沒。、亦如畫水、臨死之囚、熟菓170、

300. 段171肉勢不全也。、如織經盡如碓上下。當觀諸行、猶

163 啼…「南本注」【三】號。

164 鳴…「北本」·「南本」悲。

165 咽…「北本注」【三】噎。「南本注」【二】【明】噎。

166 汝莫啼哭自撓其心…「北本」莫大啼哭令心顛悖。「北本注」【元】【明】【宮】顛悖。『南本』莫大啼哭自亂其心。

167 燄…「北本」·「南本」炎。

168 沫…「北本」·「南本」泡。「北本注」【三】【宮】泡∥沫。「南本注」【三】泡∥沫。

169 坏…「北本注」【宋】杯。

170 菓…「北本」·「南本」果。

171 段(假)…「北本」·「南本」段。

301. 雜毒食有爲之法、多諸過患。於是純陀復白

302. 佛言、如來不欲久住於世、我當云何而不啼

303. 哭¹⁷²。苦哉苦哉、世間空虛、唯¹⁷³願世尊、憐¹⁷⁴愍¹⁷⁵我等

304. 及諸衆生、久住於世、勿般涅槃。佛告純陀、汝

305. 今不應發如是言、憐¹⁷⁶愍¹⁷⁷我故、久住於世。我以

306. 憐¹⁷⁸愍¹⁷⁹汝及一切、是故今¹⁸⁰欲入於¹⁸¹涅槃^{久住則不。生難逢}

307. 之^{衆生不知身之過患、有爲}何以故、諸佛法爾^{無常。今示般涅槃、令解斯}想。

308. 義、故云、有爲亦然。是故諸佛、而說偈言¹⁸²、

309. 有爲之法、其性無常、生已不住、寂滅爲樂

310. 上言生死之患、教之令離。
今說涅槃之樂、勸之令求。

311. 純陀、汝今當觀一切、行雜諸法、無我無常、不

¹⁷² 哭…「北本」·「南本」泣。「南本注」【三】泣||哭。

¹⁷³ 唯…「南本注」【三】惟*。

¹⁷⁴ 憐…「南本注」【三】哀。

¹⁷⁵ 愍…「南本注」【三】憫*。

¹⁷⁶ 憐…「南本」哀。

¹⁷⁷ 愍…「南本注」【三】憫*。

¹⁷⁸ 憐…「南本」哀。

¹⁷⁹ 愍…「南本注」【三】憫*。

¹⁸⁰ 今…「南本」今日。

¹⁸¹ 於…「南本」〔於〕欠。

¹⁸² 偈言…「北本注」【宋】是偈。「南本」是偈。

312. 住此身、多有無量過患、猶如水泡。是故汝今

313. 不應啼泣。住無益也。爾時、純陀復白佛言、如是如

314. 是、誠如尊教。雖知如來方便示現、入於涅槃、

315. 而我不能不懷苦惱。183今184自思惟、復生慶悅。以聞

316. 滅故致憂。許。佛讚純陀、善哉善哉、能知如來
受供故欣悅。

317. 示同衆生、方便涅槃。純陀185、汝今當聽、如娑羅

318. 娑鳥。隨陽之鳥也。若此方、鴻鷹之屬。、春陽之月、皆共集彼阿

319. 耨達池。四河之源也。諸佛亦爾、皆至是處。況引根熟之人、

320. 同入涅槃之海。純陀、汝今不應思惟、諸佛長壽短壽

321. 化佛之身、隨衆生機。有緣則現、緣盡則滅。此乃由機、而不由壽。今現涅槃、不應思量、壽與不壽。、一切

322. 諸法、皆如幻相。示滅示生同幻同化。、如來在中、以方便

¹⁸³ 苦…「北本注」【二】憂。「南本」憂。

¹⁸⁴ 今…「北本」、「南本」覆。

¹⁸⁵ 純陀…「南本注」【二】「純陀」欠。

323. 力、無所染著^{不染於生}。何以故、諸佛法爾。純不著於滅。

324. 陀、我今受汝所獻供養、爲欲令汝度、於¹⁸⁶生死

325. 諸有流¹⁸⁷故。若諸人天、於此最後供養我者、悉

326. 皆當得不動果報、常受安樂^{以最後施}。何以故能得之。

327. 故、我是衆生良福田故^{能生佛果、}。汝若復欲^{喻以良田。}

328. 爲諸衆生作福田者、速辦所施、不宜久停^汝今

329. 施者、具檀波羅蜜、能。爾時、純陀爲諸衆生得度爲衆生之大福田也。

330. 脫故低頭飲¹⁸⁸淚^{將辨施供故先飲}、而白佛言善淚、而後辭其不敏。

331. 哉世尊、我若堪任爲福田者¹⁸⁹、則能了知如來

332. 涅槃及非涅槃。我等今者及諸聲聞・緣覺、智

333. 慧猶如蚊蟻¹⁹⁰、實不能量如來涅槃及非涅槃。

334. 入與不入之機、惟佛所了。我識微淺故、不能量。

¹⁸⁶ 於…「南本」脫。

¹⁸⁷ 流…「南本」漏。「南本注」【三】漏＝流。

¹⁸⁸ 飲…「北本注」【元】【明】【宮】「才」。

¹⁸⁹ 者…「北本」・「南本」時。

¹⁹⁰ 蟻…「南本」蚋。

335. 爾時、純陀及其眷屬、秋¹⁹¹憂啼泣、圍繞¹⁹²如來、燒
 336. 香散花、盡心敬奉。尋與文殊、從座而去、供辨

337. 食具^{純陀不閑獻、則是}。其去未久¹⁹³、是時此地、六
故文殊與之同去。

338. 種震動、乃至梵世、亦復如是^{梵、此言淨。乃至有}。
頂、皆名爲梵。今之

339. 一動、偏種^{三界也。}地動有二或有地動或大地動。小動

340. 者名爲地動。大動者、名大地動。有小聲者、名

341. 曰地動。有大聲者、名大地動。獨地動者、名曰

342. 地動。山河樹木及大海水¹⁹⁴一切動者、名大地

343. 動。一向動者、名曰地動。周迴旋轉名、大地動。

344. 動名、地動。動時能令衆生心動、名大地動。菩

345. 薩初從兜率天下閻浮提時、名大地動。從初

346. 生出家、成阿耨多羅三藐三菩提、轉於法輪

347. 及般涅槃、名大地動。今日如來、將入涅槃、是

348. 故此地、如是大動^{此語當是佛說。集經之人、記之略耳。}。時諸天龍、

349. 乾闥婆、阿修羅、迦樓¹⁹⁵、緊那羅、摩睺羅伽、人及

¹⁹¹ 秋…「北本」·「南本」愁。

¹⁹² 繞…「北本」·「南本」邊。

¹⁹³ 食具其去未久…「南本」食具／大般涅槃經哀歎品第三／純陀去已未久之頃。「南本注」【明】「大般涅槃經」欠。

¹⁹⁴ 山河樹木及大海水…「南本」山林河海。

¹⁹⁵ 迦樓…「北本」·「南本」迦樓羅。

350. 非人、聞是語已、身毛皆豎、同聲哀泣、而說偈
 351. 言、
 352. 稽首禮調御¹⁹⁶、我等今勸請。若¹⁹⁷離於人仙、無能
 353. 救護者¹⁹⁸。今見佛涅槃、我等沒苦海、愁憂懷悲
 354. 惱¹⁹⁹、猶如犢失母²⁰⁰、捨違無所託²⁰¹、有²⁰²若困病人、無
 355. 醫隨自心、食所不應食。衆生煩惱病、常爲諸
 356. 見害、遠離法醫師²⁰³、服食邪毒藥、由是大醫
 357. 王²⁰⁴、不應見捨離²⁰⁵。如國無君主²⁰⁶、人民皆飢餓²⁰⁷、
 358. 我等亦如是、失蔭²⁰⁸及法味。今聞佛涅槃、我等
 359. 心迷亂、如彼大地動、迷失諸方所²⁰⁹。大仙入涅槃、
 360. 佛日墜於地、法水悉枯涸、我等無所歸²¹⁰。如

¹⁹⁶ 禮調御…「南本」調御師。
¹⁹⁷ 若…「北本」違。「南本」遠。「南本注」【二】遠＝違。
¹⁹⁸ 無能救護者…「北本」·「南本」永無有救護。「北本注」【三】【宮】永＝故。
¹⁹⁹ 愁憂懷悲惱…「南本」悲戀懷憂惱。
²⁰⁰ 猶如犢失母…「南本」如犢失其母。
²⁰¹ 捨違無所託…「北本」·「南本」貧窮無救護。
²⁰² 有若…「北本」·「南本」猶如。
²⁰³ 師…「南本」王。
²⁰⁴ 由是大醫王…「北本」·「南本」是故佛世尊。
²⁰⁵ 捨離…「南本」遺捨。
²⁰⁶ 主…「北本注」【宮】王。
²⁰⁷ 餓…「北本注」【元】【明】【宮】饑。「南本」饑。
²⁰⁸ 蔭…「北本注」【宋】陰。
²⁰⁹ 諸方所…「北本」·「南本」於諸方。
²¹⁰ 無所歸…「北本」·「南本」定當死。

361. 來般涅槃、衆生皆憂²¹¹、譬如有長者²¹²、新喪其²¹³
 362. 父母。如來²¹⁴入涅槃、必若²¹⁵不還者、我等及衆生、
 363. 悉無有救護。如來入涅槃、乃至諸畜生、一
 364. 切皆愁怖、苦惱²¹⁶其心。我等於今日²¹⁷、云何不
 365. 愁惱。如來見放捨、猶如棄²¹⁸洩。譬如日出、
 366. 光明甚暉燄²¹⁹、既能還自照、亦滅一切闇。世尊
 367. 之光明²²⁰、能除我煩²²¹惱、處於²²²大衆中、譬若²²³須彌

368. 山。世尊、喻²²⁴如國王生育諸子^{稟教、}形貌端^{生也。}

369. 正^{喻正}、心常愛念、先教技²²⁵藝^{謂戒定、}悉令通^{慧也。}

211 皆憂²¹¹。〔北本〕・〔南本〕極苦惱。
 212 有長者²¹²。〔北本〕・〔南本〕長者子。
 213 其²¹³。〔北本〕・〔南本〕於。
 214 〔南本注〕【元】【明】、〔如來〕〔其心〕までの四十字と、〔我等〕〔涕唾〕までの二十字が入れ替わっている。
 215 必若²¹⁵。〔北本〕・〔南本〕如其。
 216 焦²¹⁶。〔北本〕・〔南本〕焦。
 217 日²¹⁷。〔北本注〕【二】【宮】者。
 218 洩²¹⁸。〔北本〕・〔南本〕涕。〔北本注〕涕^洩洩。
 219 餓²¹⁹。〔北本〕・〔南本〕炎。
 220 世尊之光明²²⁰。〔北本〕・〔南本〕如來神通光。
 221 煩²²¹。〔北本〕・〔南本〕苦。
 222 處於²²²。〔北本〕虛在、〔南本〕處在。
 223 若²²³。〔北本〕・〔南本〕如。
 224 喻²²⁴。〔北本〕・〔南本〕譬。
 225 技²²⁵。〔北本〕・〔南本〕伎。

370. 利、然後以之、付旃陀羅²²⁶。旃陀羅、此言執惡、況死魔也。世尊、我

371. 等今日爲法王子、蒙佛教誨已²²⁷具正見、願莫

372. 放捨、如其放捨則同王子。唯²²⁸願久住、不入涅槃。

373. 世尊、譬如有人善學諸論、復於此論而生

374. 怖畏^{先學是智、後怖是愚}。如來亦爾。通達諸法、而於諸

375. 法、復生怖畏^{似畏法深也}。若使如來久住於世、說

376. 甘露味、充足一切、如是衆生、則不復畏墮於

377. 地獄。世尊、譬如有人初學作務^{喻佛初發心時、誓度衆生也}、

378. 爲官所收^{衆生感佛故}、閉之囹圄^{囹圄姬周之獄名也。佛以感化俯入三界。}

379. 故況^之。有人問之、汝受何²²⁹事^{人謂善知識也}、答言²³⁰、我今

380. 受大憂苦^{以衆生有病、而菩薩亦病。}、若其得脫、則得安樂

²²⁶ 以之付旃陀羅…「北本」將付魁膾令殺、「南本」棄之付旃陀羅。

²²⁷ 已…「北本」·「南本」以。「北本注」·「南本注」【二】以＝已。

²²⁸ 唯…「南本注」【二】惟*。

²²⁹ 何…「北本注」【宮】同。

²³⁰ 言…「北本」·「南本」曰、「北本注」·「南本注」【二】曰＝言。

381. 衆生惱盡、名爲得脫。²³¹ 世尊亦爾、爲我等故、修諸入大涅槃、是乃安樂。²³²
382. 苦行。我等今者、猶未得免生死苦惱、云何如
383. 來得受安樂。²³³ 既未得脫、如何涅槃。²³⁴ 世尊、譬如醫王善解
384. 方藥、偏以祕方教授其子、不教其餘外受學
385. 者。如來亦爾。獨以甚深、祕密之藏、偏教文殊、
386. 遺棄我等、不見憐愍。²³⁵ 如來於法、應無慳吝。²³⁶ 如
387. 彼醫王、偏教其子、不教外來、諸受學者。彼醫
388. 所以、不能普教、情存勝負、故有祕惜。如來之
389. 心、終無勝負、何故如是、不見教誨。唯願久住、
390. 莫般涅槃。²³⁷ 識佛有慈、而不平等。世尊、譬如老少病苦之
391. 人、離於善徑、行於險路、路險澁難、多受苦惱。²³⁸
392. 更有異人、見之憐愍、即便示以平坦好道。²³⁹ 世
-
- 231 憐…「北本」·「南本」願。²⁴⁰
- 232 愍…「南本注」【二】憫*。²⁴¹
- 233 慳吝…「北本」慳吝。「南本」祕吝。²⁴²
- 234 普…「南本注」【宋】苦。²⁴³
- 235 唯…「南本注」【二】惟*。²⁴⁴
- 236 離於善徑…「南本」捨遠夷塗。²⁴⁵
- 237 行於險路…「北本注」【宮】險=嶮*。「南本」而行險道。²⁴⁶
- 238 路險澁難…「北本注」【宮】險=嶮*。「南本」險道多難。²⁴⁷
- 239 多受苦惱…「南本」備受衆苦。²⁴⁸
- 240 見之憐愍…「南本」見而愍之、「南本注」【三】愍=憫。²⁴⁹
- 241 道…「南本」路。²⁵⁰

393. 尊、我亦如是。所謂²⁴²少者、喻未增長法身之人。

394. 老者、譬²⁴³重煩惱。²⁴⁴病者²⁴⁵、況²⁴⁶未脫生死。²⁴⁷險路²⁴⁸者²⁴⁹、喻²⁵⁰

395. 二十五有。唯²⁵¹願如來、示導我等、甘露正道、久

396. 住於世、勿入涅槃。^{時、衆以佛滅爲實故、種種勸請。}

397. 爾時、世尊告諸比丘、汝等比丘、莫如凡夫、諸

398. 天人等、愁憂啼哭、當勤精進、繫心正念。時、諸

399. 天人阿修羅等、聞佛所說、止不啼哭。猶如有

400. 人喪其愛子、殯送已訖、抑止不啼²⁵²。爾時、世尊

401. 爲諸大衆說是偈言

402. 汝等當開意、不應大愁苦。諸佛法皆爾。^{感盡歸真也。}

403. 是故當默然。樂不放逸行^{教持戒也。}、守心正憶

²⁴² 謂…「南本」言。

²⁴³ 老者…「南本」所言老者。「之人」と「老者」の間、「南本」〔所言〕有り。

²⁴⁴ 譬…「北本」・「南本」喻。「南本注」【三】喻＝譬。

²⁴⁵ 病者…「南本」所言病者。「煩惱」と「病者」の間、「南本」〔所言〕有り。

²⁴⁶ 者…「南本注」【三】者＝苦。

²⁴⁷ 況…「北本」喻。「南本」譬。

²⁴⁸ 險路…「南本」所言險路。「生死」と「險路」の間、「南本」〔所言〕有り。

²⁴⁹ 路…「北本注」【宮】道。「南本」道。

²⁵⁰ 者…「南本注」【三】〔者〕欠。

²⁵¹ 唯…「南本注」【三】惟*。

²⁵² 喪其愛子、殯送已訖、抑止不啼…「北本」殯喪子已、止不啼哭。「南本」喪其愛子、殯送已訖、抑止不哭。

404. 念²⁶³、遠離諸非法^{勸修}、自慰²⁶³受歡樂。
定也。

405. 復次、比丘若有疑惑²⁶⁴、今皆當問。若空不空^{謂空}

406. 生死、不空、若常無常^{涅槃是常、死是無常。}、若苦非²⁶⁵苦、
是涅槃。惱煩

407. 未盡爲苦、已^{如來藏者、是一切法之所依。}斷爲非苦。若依非依^{餘、非一切法依故。}、若

408. 去不去^{正行出離、名之爲去。邪行沈沒、名爲不去。}、若歸非歸^{三寶是可歸、餘}

409. 不可^{法報二身、無變易故、是}歸故。若恒非恒^{恒。餘有變易故、非恒。}、若斷若

410. 常²⁶⁶、若衆生非衆生^{未見佛性、名爲}

411. 衆生^{已見性}、若有若無^{生滅爲有、不生不滅爲無。}、若實不

412. 實^{一乘是實、}、若眞不眞^{聖諦爲眞、俗諦非眞。}、若滅不

²⁶³ 自慰…「北本」慰意。

²⁶⁴ 惑…「北本」念、「北本注」【三】【宮】念||惑。

²⁶⁵ 非…「北本」·「南本」不。「北本注」【三】不||非。

²⁶⁶ 若常…「北本注」【元】【明】【宮】非斷。

413. 滅、化身有滅、若密²⁵⁷不密、究竟說者、爲密、非法身無滅。究竟說者、爲非密。若

414. 二不二、世諦有二、如是等種種法中、有所疑
真諦不二。

415. 者、今應諮問。我當隨順²⁵⁸爲汝斷之、亦當爲汝

416. 先說甘露、然後乃當入於涅槃。此舉疑、以勸問
也。若有疑不問、

417. 則佛在無益。若疑問諸比丘、佛出世難、人身難
決了、則知佛是常。

418. 得值佛、生信是事亦難、能忍難忍、是亦復難。

419. 成就禁戒、具足無缺、得阿羅漢果、是事亦難

420. 如求金沙優曇鉢花。喻前五諸比丘²⁵⁹、離於
難也。

421. 八難、得人身難。八難者、一、地獄。二、畜生。三、餓鬼。四、
人中盲啞。五、世智辯聰。六、生佛

422. 前後。七、生鬱單汝等遇我、不應空過。我於往
越。八、生長壽天。

423. 昔種種苦行、今得如是無上方便。爲汝等故

424. 無量劫中、捨身手足頭目髓腦、是故汝等不

²⁵⁷ 密…「北本注」【宮】蜜。

²⁵⁸ 順…「北本注」【明】順。

²⁵⁹ 諸比丘…「北本」·「南本」汝諸比丘。「南本注」【三】〔汝〕欠。

425. 應放逸^{勸勤修也}。汝等比丘、云何莊嚴正法寶城、

426. 具足種種功德珍寶。戒定智慧以²⁶⁰爲牆塹俾

427. 倪²⁶¹。俾倪者、謂於孔中伺望非常之事。戒、況牆也、以防非故。定、譬塹也、取境深故。慧、喻俾倪、是見性故。

428. 汝今遇是佛法寶城、不應取此虛僞之物^二取

429. 涅槃、爲²⁶²。譬如商主遇眞寶城、取²⁶³諸瓦礫、而便虛僞也。

430. 還家。汝亦如是。值遇寶城、取虛僞物。汝諸比

431. 丘、勿以下心而生知足^{住於小果、是下心也}。汝等今者、雖

432. 得出家、於此大乘不²⁶⁴生貪慕²⁶⁵。出家者、始學之初、名非涉眞之

433. 極²⁶⁶。汝諸比丘、身雖得服、袈裟染衣、其心²⁶⁷猶

434. 未得染²⁶⁸大乘清淨之法²⁶⁹。汝諸比丘、雖行乞食

²⁶⁰ 以…「北本注」【三】【宮】「以」欠。

²⁶¹ 俾倪…「北本」埤埭、「北本注」【宮】埤埭＝脾（月＋兒）。「南本」〔埤埭〕欠。

²⁶² 取…「北本」及。

²⁶³ 不…「北本注」【宋】未。

²⁶⁴ 慕…「北本注」【宋】慕。

²⁶⁵ 其心…「南本」心。

²⁶⁶ 得染…「南本」染。

²⁶⁷ 大乘清淨之法…「南本」大乘淨法。

435. 經歷多處、初未曾乞²⁶⁸、大乘法食。汝諸比丘、雖

436. 除鬚髮、未爲正法、除諸結使^{自上是奪其昔解、使捨迷封也。}。

437. 汝諸比丘、今當眞實、教勅汝等^{欲示新伊涅槃、故云眞實教勅。}。

438. 我今見²⁶⁹在大衆和合、如來法性、眞實不倒^{明三}

439. 寶緣具^是。是故汝等、應當精進、攝心勇猛、摧^{可學之時。}

440. 諸結使、十力慧日²⁷⁰、既滅²⁷¹沒已、汝等當爲、無明

441. 所覆。諸比丘、譬如大地諸山藥草^{山況法性、草喻萬善。}

442. 爲衆生用^{譬能除物患也。}。我法亦爾、出生妙善、甘

443. 露法味、而爲衆生種種煩惱病之良藥。我今

444. 當令一切衆生、及以我子四部之衆^{四謂道俗男女也。}、

445. 悉皆安住、祕密藏中^{涅槃之道、非一乘境、故云祕藏。}。我亦復

²⁶⁸ 乞…「南本」求。

²⁶⁹ 見…「北本」・「南本」現。

²⁷⁰ 十力慧日…「南本注」【明】慧日十力。

²⁷¹ 滅…「南本」潛。

446. 當安住是中、入於涅槃言我亦隨住秘藏、化滅身智、入涅槃也。何

447. 等名爲祕密之藏。猶如伊²⁷²字²⁷³三²⁷⁴點、若並則不

448. 成伊、從²⁷⁴亦不成婆羅門、伊字三點、合成上一下二狀、如鼎足。若並若從、雖有三點、皆不²⁷⁵

449. 成。如摩醯首羅、面上三目、乃得成伊此天三目一在額中、

450. 如世伊字。三點若別、亦不得成三點異處、非從並也。則不成字。我亦

451. 如是解脫之法、亦非涅槃如來之身、亦非涅槃

452. 槃。摩訶般若、亦非涅槃。三法各異、亦非涅槃

453. 夫證涅槃者、要有能證之身、智慧之用、又須煩惱等、滅三法具足、名證涅槃。此三各別、未有斷證、非涅槃也。

454. 我今安住如是三法無感不應、名爲法身。無境不照、稱爲般若。無累不盡、

455. 是名解脫。三法、爲衆生故、名入涅槃示滅身、圓備、即是涅槃。智也。如

456. 世伊字以三點。喻三法。

²⁷² 伊…「北本注」【元】【明】【宮】伊…。

²⁷³ 三…「南本注」【宋】一。

²⁷⁴ 從…「北本」・「南本」縱。

²⁷⁵ (歇一欠十斤)…鼎の異体字。『敦煌俗字典』八八～八九頁。

457. 爾時、諸比丘聞佛²⁷⁶、定當入般涅槃²⁷⁷、皆悉憂愁

458. 捨應歸本、長與物隔、故生憂也。、身毛爲豎、涕淚²⁷⁸盈目²⁷⁹、稽首佛

459. 足、繞無量匝。白佛言、世尊、快說無常、苦空、無

460. 我^{無常故空}、空故無我。世尊、譬如一切衆生、迹中象迹、

461. 爲上^{象喻於常迹、況無常故。尋象之迹、以得象體。尋無常用、以至於常。}、是無常

462. 想、亦復如是、於諸想中、最爲第一^{謂能除三界欲愛慢也。}。

463. 若有精勤修習之者、能除一切欲界欲愛³²⁰、色

464. 無色愛、無明憍慢、及無常想^{想謂證智也。}。世尊

465. 如來、若離無常想者、今則不應、入於涅槃^{此引}

466. 昔說以難今也。若世尊久離無常想者、何故今日方般涅槃。若不離者、云何

467. 說言修無常想、離三界、愛・無明・憍慢、及無常

²⁷⁶ 佛…「北本」、「南本」佛世尊。

²⁷⁷ 定當入般涅槃…「北本」、「南本」定當涅槃。

²⁷⁸ 淚…「南本注」【二】泗。

²⁷⁹ 盈目…「南本」交流。

²⁸⁰ 欲愛…「南本」貪愛。

468. 想²⁸¹ 此引今說以難昔也。若修無常想、不能離無常想者、則昔言能離是虛妄也。世尊、譬

469. 如農夫秋月之時²⁸¹、深耕其地、能除穢草²⁸⁴ 此數無常

470. 之勝用、草穢。是無常想、亦復如是²⁸⁴ 夫空解必因於有、有不可

471. 得空。何以空空有。能除一切欲界欲愛²⁸²、色無色既除、二想俱滅。

472. 愛、無明憍慢、及無常想。世尊、譬如耕田秋耕

473. 爲勝²⁸³。如諸迹中象迹爲勝。於諸想中無常想²⁸⁴

474. 爲勝²⁸⁵ 勝義生。世尊、譬如帝王知命將終、恩赦常故。

475. 天下獄囚繫閉、悉令得脫、然後捨命。如來今

476. 者、亦應如是、度諸衆生、一切無知、無明繫閉、

477. 皆令解脫、然後涅槃²⁸⁷。我等今者、皆未得度、云

478. 何如來、便欲放捨入於涅槃²⁸⁷ 若棄衆生、入涅槃者、是無兼愛

²⁸¹ 秋月之時…「南本」於秋月時。

²⁸² 欲愛…「南本」貪愛。

²⁸³ 勝…「南本」上。

²⁸⁴ 想…「北本注」【元】【明】【宮】〔想〕欠。

²⁸⁵ 爲…「北本注」【宋】〔爲〕欠。

²⁸⁶ 勝…「南本」最。

²⁸⁷ 涅槃…「北本」乃入於般涅槃。

479. 之心。²⁹⁷云何見。世尊、譬如有人爲²⁹⁸鬼所持、遇良呪捨、將入涅槃。

480. 師、以呪力故、便得除差。如來亦爾、爲諸聲聞

481. 除無明鬼、令得安住、摩訶般若、解脫等法、如

482. 世伊字。世尊、譬如香象爲人所縛^{象喻}、雖^{菩薩}

483. 有良師^{況魔王也}、不能禁制²⁹⁹、絕羈鎖³⁰⁰、自恣而

484. 去^{此喻菩薩、絕棄煩惱、}。我等未爾爲³⁰¹五十七煩

485. 惱繫縛^{見惑有四十四諦各十故。欲愛有六、貪瞋・慢・無明・俱生・身邊見。上二界各五、除瞋・無}

486. 明住地、一合。云何如來、便欲放捨、入於涅槃^{聲聞之人}、五十七也。

487. 不同菩薩、能脫。世尊、如人病瘡^{業起不恒故、}值^{煩惱、故勸住也。況之以瘡疾。}

488. 遇良醫、所苦得除。我亦如是、多諸患苦、邪命

489. 熱病、雖遇如來、病未除愈、未得無上、安隱常

490. 樂。云何如來、便欲放捨、入於涅槃。世尊、譬如

²⁹⁸ 爲…「北本注」【宮】惡。

²⁹⁹ 煩…「北本注」【三】【宮】頓。「南本」頓。

³⁰⁰ 鎖…「北本注」【宋】瑱。

³⁰¹ 等未爾爲…「北本」·「南本」未如是脫。

491. 醉人、不自覺知酒況煩惱。人喻比丘。言其不能覺了、自體之實、此譬不知真也。

492. 不識親疎、母女姊妹況不知妄也。迷荒姪喻起亂倒想。

493. 言語放逸譬所發業也。臥糞穢292 中喻生死也。時有良師、

494. 與藥令服良師譬佛、藥況教法。服已吐酒293 喻斷煩惱也。還自

495. 省294 識知真識妄也。心懷慚愧愧迷荒也。深自剋責悔前

496. 非也。酒爲不善、諸惡根本煩惱爲衆惡之源也。若能除

497. 斷、則遠衆罪煩惱若斷、衆惡咸滅。世尊、我亦如

498. 是、往昔已295 來、輪輪296 生死、貪嗜五欲297 明昔過也。、非

499. 母母想、非姊姊想、非女女想、於非衆生生衆

²⁹² 糞穢…「南本」不淨。

²⁹³ 吐酒…「南本」即吐。

²⁹⁴ 省…「北本」・「南本」憶。

²⁹⁵ 已…「北本注」【三】已＝以*。

²⁹⁶ 輪輪…「北本」・「南本」輪轉。

²⁹⁷ 「生死」と「貪嗜」の間、「北本」・「南本」〔情色所醉〕有り。

²⁹⁸ 貪嗜五欲…「北本」・「南本」情色所醉、貪嗜五欲。

500. 生想、是故輪轉、受生死苦、如彼醉人、臥糞穢²⁹⁹

501. 中。如來、今當施我法藥、令我還吐煩惱惡酒、

502. 合服已而我未得醒³⁰⁰寤³⁰¹之心、喻未斷煩惱也。云何如

503. 來、便欲放捨、入於涅槃。世尊、譬如有人、歎芭

504. 蕉樹、以爲堅實、無有是處。芭蕉不堅、亦猶身之無我。世

505. 尊、衆生亦爾、若歎我人衆生、壽命養育、知

506. 見作者、受者是真實者、亦無是處、我等如是

507. 修無我想。世尊、譬如漿滓無所復用、無我用也。是

508. 身亦爾、無我無主。世尊、如七葉花、無有香氣。

509. 無我體也。是身亦爾、無我無主。我等如是、心常修

510. 習、無我之想。如佛所說、一切諸法、無我我所。

511. 我尚不可得、我所何可得。所以我兼忘、故無慢也。汝諸比丘、應當修習³⁰²。如是

512. 修已、則除我慢。離我慢已、便入涅槃。昔教今教俱。世

²⁹⁹ 糞穢…「南本」不淨。

³⁰⁰ 醒…「北本注」【宋】惺。

³⁰¹ 寤…「北本注」【三】悟。

³⁰² 習…「北本注」【宮】集*。

513. 尊說、昔教既非、今何必是。
故執昔之教、取決於今。世尊、譬如鳥迹、空中

514. 現者、無有是處。有能修習無我想者、而有諸

515. 見、亦無是處。
有我想者、則有見取。無我故、無想無想則無見。

516. 爾時、世尊讚諸比丘、善哉善哉。汝等善能修

517. 無我想。
別其所執、故稱歎之。時、諸比丘即白佛言、世尊、

518. 我等不但修無我想、亦更修習其餘諸想、所

519. 謂苦想・無常想³⁰³・無我想³⁰⁴。世尊、譬如人醉其心³⁰⁵

520. 暝眩³⁰⁶、悶惑之狀也。見³⁰⁷諸山河³⁰⁸、石壁草木³⁰⁹、宮殿屋舍、

521. 日月星辰皆悉迴轉。
聲聞之人、謂菩薩於非常之中妄生常執、猶如

522. 醉人於非轉中、而生轉想。世尊、若有不修苦・無常想・無我

523. 等想、如是之人、不名為聖、多諸放逸、流轉生

³⁰³ 想…「北本注」【宋】「想」欠。「南本」等想。「南本注」【三】等||無我。

³⁰⁴ 無我想…「南本」【無我想】欠。

³⁰⁵ 人醉其心…「南本」醉人其心。

³⁰⁶ 暝眩…「北本」惛眩、「北本注」【三】惛||暝。「南本」眩亂。

³⁰⁷ 見…「南本注」【三】視。

³⁰⁸ 河…「南本」川。

³⁰⁹ 石壁草木…「南本」城廓。

524. 死不修無常・苦・空無我、則、。世尊、以是因緣、我等
流轉生死、非聖人也。

525. 善修、如是諸想以能離生死故修。

526. 爾時、佛告諸比丘³¹⁰、諦聽諦聽、汝向所引、醉人

527. 喻者、但知文字、未達其義聲聞之人、觀空無常、以爲實諦、未知

528. 眞我是佛、眞我是佛、故云不達。何等爲義、如彼醉人、見上日月、實

529. 非迴轉、生迴轉想佛果是常、而計無常。猶如醉人、於非轉處、而生轉想。

530. 衆生亦爾、爲諸煩惱、無明所覆、生顛³¹¹倒心。我

531. 計無我、常計無常、淨計不淨、樂計爲苦妄生

532. 計執、不達。³¹²雖生此想、不達其義、如彼醉人、
眞我等。

533. 於非轉處、而生轉想。我者卽是佛義報佛是法、

534. 佛妙用能生一切。常者、是法身義法身寂然恒住、能與

³¹⁰ 比丘…「北本注」【三】【宮】比丘言。「南本」比丘言。

³¹¹ 顛…「南本注」【宋】【元】俱*。

³¹² 〔爲苦〕と〔雖生〕の間、「北本」・「南本」〔以爲煩惱、之所覆故〕有り。

535. 二身為所依、故云常也。^二。樂者、是涅槃義法身
 身隨機、起滅不得、名常。離^二

536. 生死、證得無餘。淨者、是法義法離非法、故名爲淨。。汝等
 涅槃、故云樂也。

537. 比丘、云何而言、有我想者、僣慢貢高、流轉生

538. 死。汝等若言我、亦修習313無常、苦314無我、等315想是

539. 三種修無有實義汝之三修、是昔權教、以昔對今、非實義也。。我今當

540. 說勝三修法勝者、謂大、乘三修也。、苦者計樂、樂者計苦、

541. 是顛316倒法。無常計常、常計無常、是顛317倒法。無

542. 我計我、我計無我、是顛318倒法。不淨計淨、淨計

543. 不淨、是顛319倒法。有如是等四顛320倒法。是人不

544. 知正修諸法正謂常樂我淨也。。汝諸比丘、於苦法中、

545. 生於321樂想、於無常中生於322常想、於無我中生

³¹³ 習…「北本注」【宮】集*。

³¹⁴ 苦…「北本注」【元】【明】【宮】苦想。「南本注」【三】苦空。

³¹⁵ 等…「北本注」【元】【明】【宮】【等】欠。

³¹⁶ 顛…「南本注」【宋】【元】顛||俱*。

³¹⁷ 顛…「南本注」【宋】【元】顛||俱*。

³¹⁸ 顛…「南本注」【宋】【元】顛||俱*。

³¹⁹ 顛…「南本注」【宋】【元】顛||俱*。

³²⁰ 顛…「南本注」【宋】【元】顛||俱*。

³²¹ 生於…「南本」而生。

³²² 生於…「南本」而生。

546. 於³²³我想、於不淨中生於³²⁴淨想夫倒必起對、若於樂中生苦

547. 想等、必於苦。中生樂想等。世間亦有常樂我淨謂非我計我等。出

548. 世亦有常樂我淨謂眞常眞樂等。世間法者、有字

549. 無義謂苦中見樂等。出世間者、有字有義謂知我是佛義

550. 等。何以故、世間之法、有四顛³²⁵倒、故不知義。所

551. 以者何、有想³²⁶倒・心倒・見倒分別是非、名爲想倒。謬緣於理、此爲心倒。

552. 執佛無常、是爲見倒。以三倒故、世間之人、樂中見苦、常見

553. 無常、我見無我、淨見不淨、是名顛³²⁷倒謂佛地中、起四

554. 倒。以顛³²⁸倒故、世間知字、而不知義。何等爲義也。

³²³ 生於…「南本」而生。

³²⁴ 生於…「南本」而生。

³²⁵ 顛…「南本注」【宋】【元】顛||眞*。

³²⁶ 想倒…「北本」・「南本」想顛倒。「南本注」【宋】【元】顛||眞*。

³²⁷ 顛…「南本注」【宋】【元】顛||眞*。

³²⁸ 顛…「南本注」【宋】【元】顛||眞*。

555. 無我者、名爲³²⁹生死^{生死不自在、故知無我也。若有我者、應當自在。}。我者、

556. 名爲³³⁰如來^{如來有八自在、故得名爲我也。}。無常者、聲聞緣

557. 覺^{一乘有生}。常者、如來法身^{法身無生滅、故名常。}。苦

558. 者、一切外道^{因苦果苦也。}。樂者、卽是涅槃^{體寧靜故。}。

559. 不淨者、卽有爲法^{謂一切有漏之法也。}。淨者、諸佛菩

560. 薩所有正法^{謂一切無漏道法也。}、是名不顛³³¹倒^{見正而無倒也。}。

561. 以不倒³³²故、知字知義^{體言識旨、爲知字義。}。若欲遠離

562. 四顛³³³倒者、應知如是、常樂我淨^{能知四德、則無復四倒。}。

563. 時、諸比丘白佛言、世尊、如佛所說、離四倒者、

564. 則得了知、常樂我淨。如來今者、永無四倒、則

565. 已³³³知、常樂我淨。若已了知、常樂我淨、何故

³²⁹ 名爲…「南本」卽。

³³⁰ 名爲…「南本」卽。

³³¹ 顛…「南本注」【宋】【元】顛卽眞*。

³³² 倒…「南本注」【宋】【元】眞倒、【明】顛倒。

³³³ 顛…「南本注」【宋】【元】顛卽眞*。

566. 不住、一劫半劫、教導我等、令³³⁴離四倒、而見放

567. 捨、欲入涅槃。如來、若見顧念教勅、我當至心、

568. 頂受修習。如來若入於³³⁵涅槃者、我等³³⁶云何與

569. 是毒身、同共止住、修於梵行。我等亦當隨佛

570. 入於涅槃。若不住世、則隨入涅槃。
勸住誠深、敢以死請。

571. 爾時、佛告諸比丘、汝等不應作如是語。我今

572. 所有無上正法、悉以付屬³³⁷摩訶迦葉。獨付
迦葉

573. 者、以彼亦有¹。是迦葉者、當爲汝等、作大依止。
時匡化能故。

574. 猶如如來、爲諸衆生、作依止處。摩訶迦葉亦

575. 復如是、當爲汝等、作依止處。譬如大王多所

576. 統領、若遊巡時、悉以國事付屬³³⁸大臣、如來亦

577. 爾。所有正法、亦以付屬³³⁹摩訶迦葉。汝等當知、

578. 先所修習、無常苦想、非是眞實。勸知前權、
而後實也。譬

³³⁴ 令…「北本注」【宮】今。

³³⁵ 入於…「南本」當入。

³³⁶ 等…「南本」當。「南本注」【三】等。

³³⁷ 屬…「北本」・「南本」囑。

³³⁸ 屬…「北本」・「南本」囑。

³³⁹ 屬…「北本」・「南本」囑。

579. 如春時喻起行時也。、有諸人等譬聞衆也。在大池浴

580. 洗塵垢也。、乘船遊戲依權教也。、失瑠璃寶常理可珍故、沉之以寶。

581. 沒深水中隱於無常之教、故云沒水。。是時諸人求權教人也。悉

582. 共入水俱觀無常也。、求覓是寶求常旨也。、競捉瓦石、

583. 草木沙礫、各各自謂、得瑠璃珠以妄計爲、眞實也。

584. 歡喜持出、乃知非眞離龜重縛、名爲持出。猶拘相染、是曰非眞。。是

585. 時寶珠猶在水中言眞常之旨、隱昔教中。、以珠力故、

586. 水皆澄清珠力況常性也。清謂聞經生信。。澄。於是大衆謂大乘人

587. 也。、乃見寶珠、故在水下依教聞見、未得親證、故云在下。、猶如

588. 仰觀虛空月形眞理圓明、喻如空月。。是時衆中有一

589. 智人謂依教起行之人也。、以方便力、安徐入水於無常中、諦觀常理。、

590. 即便得珠^{證常}。汝等比丘、不應如是、修習

591. 無常・苦・無我想・不淨想等、以爲實義、如彼

592. 諸人、各以瓦石、草木沙礫、而爲寶珠。汝等應

593. 當、善學方便、在在處處、勤³⁴⁰修我想常樂淨

594. 想。復應當知、先所修習、四法相貌、悉是顛³⁴¹倒。

595. 欲得真實、修諸想者、如彼智人、巧出寶珠、所

596. 謂我想常樂淨想。

597. 爾時、諸比丘白佛言、世尊、如佛先說、諸法無

598. 我、汝當修學。修學是已、則離我想。離我想

599. 者則、離憍慢。離憍慢者、得入涅槃。是義云何

600. 若有我爲真、無我非實。世尊昔時、何故
不言、令我謬取、一說相違、故起斯問。佛告諸、

601. 比丘、善哉善哉。汝今善能諮問是義、爲自斷

602. 疑<sup>無我之理、於邪爲藥、於真
爲病、故須昔讚、而今毀也。</sup>譬如、國王闇鈍少

603. 智<sup>王喻比
丘也。</sup>有一醫師、性復頑<sup>醫況說邪教
者也。心不測</sup>

604. 正法爲頑、口不、而王不別<sup>混邪
正也。</sup>厚賜俸祿<sup>加
供</sup>

³⁴⁰ 勤…「北本」、「南本」常。

³⁴¹ 顛…「南本注」【宋】【元】顛＝慎*。

³⁴² 嚚…「北本注」【宋】嚚＝嚚。

605. 養³⁴³、療治衆病、純以乳藥^{乳況邪。我也。}亦復不知、

606. 病起根源³⁴³、雖知乳藥、復不善解^{不知我有真偽也。}

607. 或有風病冷病熱病³⁴⁴風喻瞋、冷況、一切諸病³⁴⁵癡、熱譬貪。

608. 喻八萬四千之塵勞也。悉教服乳^{純說邪。我也。}是王不別、是醫

609. 知乳、好醜善惡^{邪我增諸煩惱、正我能滅無明。}復有明醫

610. 喻佛也。曉八種術、^{一、識病。二、知病因。三、知病相。四、知病處。五、知病時。六、知藥。七、知療。八、知禁。}

611. 善療衆病^{知衆生之根性也。}知諸方藥^{況我無我教也。}從

612. 遠方來^{遠方謂淨土也。}是時舊醫不知諮受、反生

613. 貢高輕慢之心^{邪見熾然、謂佛劣已。}彼時明醫即便

614. 依附請以爲師^{況設權道也。如以鬱頭、藍弗、爲師之類是也。}諮受

³⁴³ 源…「北本」·「南本」原。「南本注」【元】【明】原||源。

³⁴⁴ 或有風病冷病熱病…「南本」風冷熱病。

³⁴⁵ 病…「南本注」【二】病||患。

615. 醫方祕奧之法語、舊醫言、我今請仁以爲師

616. 範、唯³⁴⁶願爲我宣暢解說^{將欲化之、故先誘之。}。舊醫答

617. 言、卿今若能爲我³⁴⁷給使四十八年^{外道多修六行。八禪}

618. ^{地中、各有六行、六}八^四十有八也。^六、然後乃當教汝醫法。時³⁴⁸彼明³⁴⁹

619. 醫、卽受其教、我當如是³⁵⁰隨我所能、供給³⁵¹走使。

620. 於是³⁵²舊醫、卽將客醫、共入見王^{因邪以通正也。}。是時

621. 客醫、卽爲王說、種種醫方^{謂十善五戒等。}、及餘技³⁵³

622. 藝。^{謂神通解脱等。}。大王當知、應善分別、此法如是、可

623. 以治國。此法如是、可以療病^{以定除亂、謂之治國、以慧去結、}

³⁴⁶ 唯…「南本注」【三】惟*。

³⁴⁷ 爲我…「北本注」【宮】爲我的二字は割注。

³⁴⁸ 時…「北本注」【宮】〔時〕欠。

³⁴⁹ 明…「北本注」【宮】明能。

³⁵⁰ 我當如是…「北本」・「南本」我當如是、我當如是。

³⁵¹ 供給…「北本」・「南本」當給。

³⁵² 於是…「北本」・「南本」是時。

³⁵³ 技…「北本」・「南本」伎。「南本注」【三】伎∥技。

624. 名爲。爾時國王聞是語已謂聞正、療病。方知舊醫、

625. 癡駝324無智癡喻邪見。駝音五駭反。即便驅逐、令出國界。

626. 棄邪。然後倍復恭敬客醫歸正也。是時客醫、

627. 作是念言、欲教王者、今正是時。卽語王言、大

628. 王於我、實愛念者、當求一願空理無二、故云一也。王卽

629. 答言、從此右臂右以便爲喻、況初學也。及餘身分譬常樂等、

630. 隨意所求、一切相與信根無所執也。彼客醫言、王

631. 雖許我一切身分、然我不敢多有所求根未偏熟、

632. 故云。今所求者、願王宣令一切國內、從今已不敢。

633. 往、不得更325服、舊醫乳藥勸捨邪我也。所以者何、

³²⁴ 駝…「南本」闕。
³²⁵ 更…「北本」·「南本」復。

634. 是藥毒害、多傷損故邪我執著、故多損耳。若欲³⁶⁶服者、

635. 當斬其首邪我爲衆倒之源故、況之以首也。今。斷說無常之教、以斷其惑、猶如斬焉。

636. 乳藥已終、更無³⁶⁷有橫死之人若禁邪我、則慧命、得全、爲不橫也。

637. 常受³⁶⁸安樂故求是願樂謂、涅槃之道也。時王答言、

638. 汝之所求蓋不足言所教易。信也。尋爲宣令況轉、教也。

639. 一切國內有病之人³⁶⁹、皆悉不聽、以乳爲藥

640. 禁邪。若爲藥者、當斬其首終以無我、斷彼邪我也。爾

641. 時、客醫以種種味和合衆藥³⁶⁰、謂辛苦鹹甜醋³⁶¹

642. 等味以療衆病喻佛於小教中、說種種之法、化衆生也。無不得

643. 差執病悉。除也。其後不久王復得病況諸比丘、因學無我、遂於

³⁶⁶ 欲…「北本」·「南本」故。「北本注」【三】【宮】故∥欲。

³⁶⁷ 更無…「南本」無復。

³⁶⁸ 受…「北本」·「南本」處。

³⁶⁹ 有病之人…「南本」凡諸病人。

³⁶⁰ 客醫以種種味和合衆藥…「南本」和合衆藥。

³⁶¹ 醋…「北本」·「南本」醋。「北本注」【三】【宮】醋∥酢、下同。

644. 佛地、起、即命是醫、我今病重困苦欲死。³⁶²執見
無我倒。

645. 爲病重迷、眞、當云何治。³⁶³無我之執、醫占王病
未返、爲欲死。何法可除。

646. 應用乳藥。³⁶⁴無我之病、尋白王言、如王所患、應
非我不除。

647. 當服乳。³⁶⁵說今。我於先時、所斷乳藥、是大妄
教也。

648. 語。³⁶⁶前爲著邪故、斷今緣破執故、須。今若服者、最
此爲方便之門、非是眞實語也。

649. 能除病。³⁶⁷讚今。王今患熱、正應服乳。³⁶⁸執說無我、
教也。爲熱病。眞

650. 我能除。³⁶⁹。時王語醫、汝今狂耶、爲熱病乎。³⁷⁰昔非
爲服乳。今是

651. 豈不狂耶。而言服乳、能除此病。汝先言毒、今云何

652. 服、欲欺我耶。³⁷¹前說有毒、復言良妙。先醫所讚、
語涉相誣故、云欺我。

653. 汝言是毒、令我驅遣。今復言好、最能除病。如

654. 汝所言、我本舊醫、定爲勝汝。³⁷²先毀後讚、
非勝如何。是

³⁶² 我今病重困苦欲死…「南本」我今病困。
³⁶³ 大妄語…「南本」非實語。

655. 時客醫、復364略王言、王今365不應、作如是語。如虫

656. 食木、有成字者木況有漏、虫喻外道、一切諸病、悉以乳療、不識病由、偶然有中、

657. 故云、此虫不知、是字非字外道說我、不知我所對除。如虫食木不知。

658. 是字。智人見之、終不唱言、是虫解字、亦不驚

659. 怪食木之虫、偶然成字。不知是字、外道說我、偶言是我、不知我義、是故智人、不驚不怪。大王、

660. 當知舊醫、亦爾不別、諸病悉與乳藥、如彼虫

661. 道偶成於366字。如是367舊醫、不解乳藥、好醜善惡

662. 合不知。時王問言、云何不解。客醫答言368、是乳字也。

663. 藥者、亦是毒害喻外道所說之我。亦是甘露況佛說真我也。

664. 云何是乳。復名甘露。若是特369牛牛況彌經、菩薩謂能生、大

³⁶⁴ 略…「北本」·「南本」語。

³⁶⁵ 今…「南本注」【明】令。

³⁶⁶ 成於…「南本」得成。

³⁶⁷ 如是…「北本」·「南本」是先。

³⁶⁸ 言…「北本」·「南本」王。

³⁶⁹ 特…「南本」乳。

665. 慧之、不食酒糟糟能生狂、滑草草滑順情、麥子也。譬癡起業。喻貪悅意。

666. 麤麤澁違情、其犢調善此喻智慧、放牧之處。
況瞋逆志。柔和也。

667. 譬觀。不在高原況不住二乘也。、亦不下濕譬不住世間也。、飲

668. 以清流370 喻受正教也。、不令馳走況不失戒定也。、不與特牛、同

669. 共一群遠惡知、飲飼371 調適教不失時。、行住得所慧心

670. 歷境、名行定。如是乳者、能除諸病、是則名爲心、不移稱住。

671. 甘露妙藥此喻真我之解、能除生死重苦。。除是乳已、其餘一

672. 切、皆名毒害謂與聖道相違者。。爾時、大王聞是語

673. 已讚言、大醫、善哉善哉。我從今日、始知乳藥、

674. 善惡好醜。即便服之、病得除愈依教修行、所執除也。。

675. 尋時、宣令一切國內、從今已往、當服乳藥

370 流…「南本」水。
371 飼…「北本」餒。「南本」食。

676. 轉化衆。國人聞之、皆生瞋恨、咸相謂言、大王生也。

677. 今者爲鬼所持、爲狂癲³⁷²耶鬼況無明、狂喻四倒。、而誑

678. 我等、復令服乳。一切人民、皆懷瞋恨、悉集王

679. 所。王言、汝等不應於我、而生瞋恨、而³⁷³此乳藥、

680. 服與不服、悉是醫教、非是我咎。爾時大王

681. 及諸人民、踊躍歡喜、倍共恭敬、供養是醫同信

682. 我教。一切病者、皆服乳藥、病悉除愈真我之教、

683. 出生功德、若能信行、汝等比丘、當知如來・應供³⁷⁴煩惱永斷、故曰悉除。

684. 正遍知・明行足・善逝・世間解・無上士・調御丈

685. 夫・天人師・佛・世尊亦復如是。爲大醫王出現、

686. 於世、降伏一切、外道邪醫。諸王³⁷⁵衆中、唱如是

687. 言、我爲醫王、欲伏外道、故唱是言、無我・無人・

688. 衆生・壽命³⁷⁶、養育知見、作者受者。比丘當知、

689. 是諸外道、所言我者、如虫食木、偶成字耳。是

³⁷² 狂癲…「北本」狂顛。「南本」是狂。

³⁷³ 而…「南本」如。

³⁷⁴ 應供…「北本」・「南本」應。「南本注」【二】應供。

³⁷⁵ 王…「南本」四、「南本注」【二】四＝王。

³⁷⁶ 命…「南本注」【二】命＝者。

690. 故、如來於佛法中、唱言³⁷⁷ 無我、爲調衆生。故爲

691. 知時、故說是³⁷⁸ 無我。有因緣故、亦說有我^{昔言}

692. ^{無我、今說有}。如彼良醫、善知於乳、是藥非藥、
我、是知時也。

693. 非如凡夫、所計吾我^{不同外道、所計邪我也}。凡夫愚

694. 人所計我者、或如拇指³⁷⁹、或如芥子、或如微塵、

695. ^{執我}。如來說我、悉不如是。是故說言、諸法
相也。

696. 無我^{破我執也}、實非無我^{非無眞常之我}。何者是我³⁸⁰、

697. 若法是實是眞、是常是主、是依性不變者³⁸¹、是

698. 名爲我。如彼大醫、善解乳藥^{破有則言無、談眞故說有}。如

699. 來亦爾、爲衆生故、說諸法中、眞實有我。汝等

700. 四衆、應當如是、修習是法。

701.

³⁷⁷ 言…「北本」是。

³⁷⁸ 說是…「南本」如是。

³⁷⁹ 或如拇指…「北本」或言大如拇指、「北本注」【三】或有說言大如拇指。「南本」或有說言大如拇指。

³⁸⁰ 我…「北本注」【元】【明】實。

³⁸¹ 不變者…「北本」不變易者、「北本注」【宋】【易】欠、【元】【明】【宮】〔者〕欠。「南本」不變易。

³⁸² 注大般涅槃經卷第二：「北本」大般涅槃經卷第二。「南本」大般涅槃經卷第二、「南本注」【明】〔大般涅槃經〕欠。

【訓読文】¹

『注大般涅槃經』卷第二 壽命品、導江県令韋諗注

^{371c}爾の時、会中に優婆塞有り。是れ拘尸那の工巧の子、名づけて純陀と曰う（3此れ第二成就種性遣執分なり。純陀、法身の^{371c}大士なり。本願を以ての故に、工巧の家に現生す。）。其の同類十五人と俱なり。世間をして善果を得しめんが為の故に、身の威儀を捨てて、座從り起ち、（5捨、即ち坐の威儀。崇、法を請うの容止なり。）偏に右肩を袒ぎ、右膝を地に著けて、合掌して仏に向い、悲しみ感じ涙を流し

「原文該当箇所は、『大正蔵』「北本」卷十二、三七一頁下～三七九頁上。なお、「南本」は、同卷六一一頁中～六一八頁下。
『大正蔵』三七四番「北本」「壽命品第一之二」（『大正蔵』十二、三七一頁下段）。

第二成就種性遣執分：世親が著した『涅槃論』に經を七區分した第二番目に相當する。「純陀」と「哀歎」の二品がこの範圍にあたる。婆藪槃豆作、達磨菩提記『涅槃論』卷一に、「從初如至至流血灑地、名不思議神通反示分。純陀・哀歎二品、名成就種性遣執分。從三告以下訖大衆問品、名正法實義分。五行、十功德、名方便修成分。師子吼品、名離諸放逸入證分。迦葉品、名慈光善巧住持分。橋陳如品、名顯相分。」（『大正蔵』卷二六、二七七頁下）。

また、宋の惟顯編『律宗新學名目』卷二に、「『涅槃經』七分（天親涅槃論一、不思議通返示分。二、成就種性遣執分。三、王法實義分。四、方便修成分。五、離諸放逸入證分。六、慈光善巧住持分。七、顯相分。」（『新纂大日本續藏經』五九卷、六八八頁上）

法身大士：菩薩をいうが、すでに佛の位に到達した菩薩を指す。『無量義經』卷一には、法身大士についての説明があるが、ほとんど仏と同じ性質をもっている。又、慧沼の説明では、すでに成仏した菩薩のことを法身大士としている。

唐・慧沼撰『十一面神呪心經義疏』卷一「凡菩薩階位不出二種。一者已成佛菩薩是法身大士也。二者未成佛菩薩是直往菩薩也。已成佛菩薩者。如妙德菩薩等是已成佛也。未成佛菩薩者。從初發心至于十地未滿行業故未成佛菩薩也。」（『大正蔵』三九卷、一〇〇六頁b21::26）

『無量義經』卷一（德行品一）、「是諸菩薩、莫不皆是法身大士、戒、定、慧、解脫、解脫知見之所成就。其心禪寂、常在三昧、恬安憚怕、無為無欲、顛倒、亂想不復得入、靜寂清澄、志玄虛寞、守之不動億百千劫、無量法門悉現在前。得大智慧、通達諸法、曉了、分別性相真實、有無長短、明現顯白。又善能知諸根性欲、以陀羅尼無礙辯才、請佛轉法輪、隨順能轉、微妙先墮、以淹欲塵、開涅槃門、扇解脫風、除世惱熱、致法清涼、次降甚深十二因緣、用灑無明老病死等、猛盛熾然苦聚日光。爾乃洪注無上大乘、潤漬衆生諸有善根、布善種子、遍功德田、普令一切發菩提萌、智慧日月、方便時節、扶疎增長大乘事業、令衆疾成阿耨多羅三藐三菩提、常住快樂微妙真實。無量大悲救苦衆生、是諸衆生真善知識、是諸衆生大良福田、是諸衆生不請之師、是諸衆生安隱樂處、救處、護處、大依止處、處處為衆作大導師。能為生盲而作眼目、聾啞者作耳鼻舌、諸根毀缺能令具足、顛狂荒亂作大正念。船師、大船師、運載群生、渡生死河、置涅槃岸。醫王、大醫王、分別病相、曉了藥性、隨病授藥、令衆樂服。調御、大調御、無諸放逸行、猶如象馬師、能調無不調、師子勇猛威伏衆獸、難可沮壞。遊戲菩薩諸波羅蜜、於如來地堅固不動、安住願力、廣淨佛國、不久得成阿耨多羅三藐三菩提。是諸菩薩摩訶薩、皆有如是不思議功德。」（『大正蔵』九卷、三八四頁b14::c12）

（6心に二無きを表わすなり。）^一、仏足を頂礼して、而して仏に白して言わく、『唯だ願はくば、世尊及び比丘僧、哀みて我等が最後の供養を受けたまえ。無量の諸の衆生を度せんが為の故に（8施しを受くを請うは、衆生を度せんが為に、敢えて自ら利には非ず。）』

世尊、我等今従り、主無く、親無く、救い無く、護り無く、歸る（ところ）無く、趣く（ところ）無く、（10仏は、是れ衆生の法主なり。今、若し涅槃すれば則ち趣く所なし。）貧窮飢困ならん。（11法無くして人を利するを、貧と曰う。徳無くして自ら養うを、窮と為す。生死迫切するを飢と名づく。流転。艱勞は、是れ因なり。）如來に従いて將來の食を求めんと欲す。（12食は常果^二を謂うなり。）唯だ願はくは哀愍みて、我が微供^三を受け、然る後涅槃したまえ。（13供具を設けずして、受くを請うは、上の諸人の献ずる所を納めざるを見るが故、先ず仏に啓して^四然る後に之を辨^五じう。）世尊よ、譬えば刹利（14王の種なり）、若しくは婆羅門（14淨行者なり。）毘舍

『自養…『般泥洹經』に「以法自養」とある。このことは、自利を表すことであろう。

『般泥洹經』卷一「佛告淳、沙門有四、當識別之。一日、行道殊勝、二日、達道能言、三日、依道生活、四日、為道作機。何謂殊勝、佛所說法、不可稱量、能行無比、降心能度、憂畏為法、御導世間、是輩沙門為最殊勝。何謂能言、佛所稱貴微妙之法、體解其情行之不疑、亦能為人演說道跡、是輩沙門、為愍能言。何謂依道、念在自守、勤綜學業、一向不迴、孜孜無倦、以法自養^一。是輩沙門、為知生活。何謂作機、恣意所樂、依恃種姓、專為機行、為衆致議、不敬佛語、亦不畏罪、是輩沙門為道作機。凡人見聞、將謂在道、學淨智者、如此而已。當知是中、有真有偽、有善有惡、不可齊同以為一也。」（『大正藏』卷一、一八三頁中段）
艱勞…（けんろう）、艱難に同じ意味であると思われる。この語は、『漢語大詞典』、『古訓匯纂』に記載なし。韋諗より以前の用例は、見当たらない。この後の時代は、唐の般若の訳語として使用され、また、宗密の注釈書での用例が見られる。

常果…常住の果。隋・吉藏『維摩經義疏』「上佛國品」「欲證萬德常果」『大乘義章』卷十二「言常果者、謂大涅槃。無常果者、謂佛菩薩大悲作用。隨世生滅、故曰無常。此二猶是涅槃經中二種莊嚴。常者、猶彼智慧莊嚴。故彼經言、智慧莊嚴無礙常住。無常是彼功德莊嚴。故彼經言、功德莊嚴有礙非常。」（『大正藏』四四、七一二頁中段。）

『大正藏』「北本」『注涅槃』に同じ唯願哀愍受我微供。（『大正藏』十二、三七二頁下段）。「南本」唯願哀受我等微供。（『大正藏』十二、六一一頁中段）。

『大正藏』「北本」「然後乃入於般涅槃。」（『大正藏』十二、三七二頁下段）、「南本」『注涅槃』に同じ然後涅槃。（『大正藏』十二、六一一頁中段）。弗…（ふ）ず。打消しをあらわすことば。不に同じ。

略…啓の異体字。申す。『高麗大藏經異体字典』李圭甲編、高麗大藏經研究所、二〇〇〇年、一一三頁。／『類聚名義抄』（觀智院本）法 一三五頁
辨…（そなう）辨の通字。力を致す意。ここでは、供品を準備すること。

(14 今の官長の若きなり。) 首陀 (14 農夫の類なり。) の如く、貧窮を以ての故に (15 出世の善、無きに況う。) 遠く他国に至り、(15 生死の本居を捨て、涅槃の他国に趣く。) 役力農作して (16 出世の行を修めるに喩う。) 好く調えた牛を得て、良い田を平らに正して、(17 志は迂曲ならざるなり。) 諸もろの沙鹵・惡草・株杙しゆぎ無く (17 鹵は、鹹い土なり。邪見及び餘の煩惱の生ぜざるに喩う。) 唯だ、天雨を希う。 (18 世尊、若し許さば則ち法牙の生を得。猶お衆苗の雨の一潤を希うが如し。) 調牛と言うは、身口の七しちに喩う。 (19 身口の七支に況うなり。) 良田平正は、智慧に喩う。沙鹵・惡草・株杙しゆぎを除去すは、煩惱に喩う。世尊よ、我れ今、身に調牛・良田有り、株杙しゆぎを除去して、唯だ如来の甘露法雨を希うのみ (22 常教に譬うなり。) 貧しき四姓とは、即ち我が身が是れなり。無上法の財宝に貧し、唯だ願わくは、哀愍あいつみして我等の貧窮困苦を除断し、無量苦悩の衆生を拯及しやうきやくうをことしたまえ。我れの今、供する所は、復た微少なりと雖も、冀わくは如来と大衆とに充ち足るを得んことを。 (25 仏の神力が充ち足るるを得さしめんことを希む。) 我れ今、主無く、親無く、歸無し。願はくは、羅睺羅の如く矜愍しやうみんを垂れんことを。 (26 純陀の請意を觀るに、兩種有り。一に、受供を請う。二に、説法を請う。将来の食を求めるは、受供を請うなり。天雨を希うは、説法を請うなり。)

¹³ 『一切經音義』卷二五、「刹利(或云刹帝利也。劫、初已來。帝、王貴種。此云田主。)。婆羅門(善見律云、常修淨行、博學多聞、高貴人也。)。毘舍(賣買求利、販易之人。)。首陀(下姓王役、田夫之類也。)。」(大正藏卷五四、四六六頁上段)

¹⁴ 『大正藏』「北本」『注涅槃』に同じ(大正十二、三七二頁下段)。「南本」「荒穢」(大正藏卷十二、六一一頁中段)。株杙(しゆぎ)切り株。

¹⁵ 七…七支のこと。身口

¹⁶ 「南本」「荒穢」。

¹⁷ 『大正藏』「北本」「除」「除諸【三】【宮】」。「南本」「除」。『注』は、「諸」の字だが、ここでは、「除」を取る。

¹⁸ 『大正藏』「北本」『注涅槃』に同じ。「南本」「耕除衆穢」(大正十二、六一一頁中段)。

¹⁹ 「南本」「愍憫【三】*」。

²⁰ 「北本」「拯極」【宮】。「興聖寺本」に「拯及」スクウと訓がつけられている。

爾の時、世尊・一切種智・無上調御は、純陀に告げて曰わく、「善き哉、善き哉。我れは今、汝が為に貧窮を除断し、無上の法雨を汝の身田に雨して法牙²¹を生ぜしめん（30其の常を施すことを許すは、是れ法雨が為に）。汝今、我に寿命と色と力²²と安と無礙辯²³とを求めんと欲すれば、我れ当に汝に、常の〔寿〕命と色と力と安と無礙辯²⁴とを施すべし。（32食とは五利を得る故に、施す人は五果を獲る。）何を以ての故に。純陀よ。施食に二有りて、果報に差無し。（33一は、初めの施しは、菩提を得。二は、後の施しは、涅槃に入る。施因、不同なるが故に、二と云うなり。俱に常果を獲る、是れ則ち差無し。）何等をか二と為すや。一には、受け已りて阿耨多羅三藐三菩提を得る（35藐の音²⁵、弥略の反なり。）二には、受け已りて涅槃に入る。我れは今、汝の最後供養を受けて（36受くに貴きを選ばずして、平等を示すなり。）汝をして檀波羅蜜を具足せしめん。（36其の施す因に由りて、仏果を成ぜ得しめんが故に、施しを行ずる人は、檀度を具足す。）」。

爾の時、純陀即ち仏に白して言わく、「仏の説くところの如きに、『二つの施しの果報に差別無し。』とは、是の義、然ず（38世尊、二つの施田を以て等しきとす。純陀、二つの施田を以て別とす。田の不同なるが故に、由りて疑を生ずなり。）何を以ての故か。先に、施しを受くは、煩惱未だに盡さず、未だ一切種智を成就するを得ず、（40菩提樹下、未だ正覺を成ぜずが故に、初施は、勝田²⁶に非ざるを知るなり。）亦た未だ衆生をして檀波羅蜜を具足せしむること能わず。（41既に、勝田非ずして、熟ぞ具せしめんこと能うか。）後の受施とは、煩惱已に盡きて已に一切種智の成就を得て衆生に普く檀波羅蜜を具足せしめ得ることを能う（43田、既に同じからずして、果、必ず

²¹ 『大正蔵』「北本」「芽」「芽²¹牙」【宋】。【宮】。「南本」「芽」「芽²¹牙」【宋】。

²² 『大正蔵』「北本」「色力²²力色」【宮】。

²³ 『大正蔵』「北本」「安辯²³安樂無礙辯才」【元】【明】【宮】。

²⁴ 『大正蔵』「南本」「礙²⁴闕」【三】。

²⁵ 藐²⁵唐・釋雲公撰 慧琳再加刪補『一切經音義』卷二六「阿耨多羅三藐三菩提²⁵耨音、奴篤反。藐字、依梵音應作彌略反。阿此云、無也。耨多羅此云、上也。三云、正也。藐等也。又三正也。菩提覺也。總云、無上正等正覺也。耨字、經中多作耨字。此音奴構反、正與梵音扶同。然僧徒皆用入聲字、宜作耨奴沃反、亦得名健行定名。經中自釋云、一切事畢竟堅固也。」（大正蔵卷五四、四七七頁中段）

²⁶ 勝田²⁶北涼・曇無讖譯『優婆塞戒經』卷四（雜品 十九）「施果三種、有勝財故獲得勝果、有田勝故獲得勝果、施主勝故獲得勝果。向須陀洹至後身菩薩乃至成佛、是名勝田、施如是田、故得勝果。若有施物、具足妙好色、香、味、觸、是名財勝、以是物施、故得勝果。若有施主信心淳濃、施、戒、聞、慧、則得勝果。」（大正蔵卷二四、一〇五四頁上段、中段）

異あること有り。」先の受施とは、直お^レ是れ衆生なり（44未だ聖果を得ず。）後の受施者は、是れ天中天なり。（44諸天、仏を望み、猶お人が天を望むがごとしが故に、天中天と曰うなり。）先の受施者は、是れ雜食の身（45假りの食を資けるが故に。）^レ、煩惱の身（45煩惱の依り所が故に。）^レ、是れ、後辺身（46生死は、有辺が故に。）^レ、是れ無常の身（46生滅が有るが故に。）^レ、後ちの受施者は、無煩惱身（47煩惱の所依に非ざるが故に。）^レ、金剛の身（47不可壞が故に。）^レ、法身（47法性身^レが故に。）^レ、常身（48無生滅が故に。）^レ、無辺の身（48有^レ邊^レを離れるが故に。）^レ。云何にして、「二つの施しの果報は、等しくして差別無し」と言うか。（49初めの施しは、仏に非ず。後の施しは、是れ仏なり。仏と非仏の二果は同からず。云何に説いて言わく、二因の報いは、等して異無しなりと。）先の受施は、未だに檀波羅蜜、乃至般若波羅蜜を具足すること能わず。唯だ肉眼のみを得て（51眼は、是れ肉に非ず、肉に依りて以て成ずが故に、肉眼と云う。）^レ、未だ仏眼（51此の眼は、是れ無分別慧の証実なり。）^レ、乃至慧眼を得ず（52無相の慧を証すなり。）後ちの受施者は、已に檀波羅蜜乃至般若波羅蜜を具足、仏眼乃至慧眼を具足し得る、云何して、言二施の果報は等しきして、差別無しと言うか（54先に施しを受く時、未だに、善に備えること能わず。後ちの受施時に、已に具足を得。而して、「三施に差無し。」を言いて、故に此の難を興す。）世尊よ、先の受施者は、受け已りて噉^レ食^レし腹に入り消化して、命を得て、色を得て、力を得て、安を得て、無礙辯を得る。後の受

『大正蔵』「南本」「直^レ猶^レ」。（六一一下）

法性身^レ：隋・吉藏の解釈によると、法性から生まれた身であるから、法性身。悟った法性を以て身とするからとしている。また、宋・知礼によれば、本覺を究顯するを法性身と名づくとこの解釈もある。韋諡は、ほかの箇所でも吉藏の維摩經關係の注釈書を読まれている可能性が高く、ここでも、吉藏の解釈に基づいて法性の注にわざわざ法性身としたと見える。

隋・吉藏『淨名玄論』卷三「問、云何名法性生身。答、此悟法性、是故受身、謂法性生身。問、佛亦悟法性、而受身與菩薩何異。答、佛窮法性之原、以法性常故、佛身亦常。故云諸佛所師、所謂法也。以法常故、諸佛亦常。菩薩未窮法性、法性雖常、而身未常。是故異也。若以所悟法性為身、名法性身者、則佛與菩薩法身不二、同皆常也。但論云受法性生身。法性生身者。從法性而生。故不指法性為身也。」（『大正蔵』卷三八、八七三頁下段）

宋・知礼『觀無量壽佛經疏妙宗鈔』卷四「報佛法性身者、滿足始覺名為報佛、究顯本覺名法性身。」（『大正蔵』卷三七、二二〇頁上段）

有邊^レ：唐・澄觀『大方廣佛華嚴經疏』卷二四（十無盡藏品 二二）「言有邊者、即斷見外道。計我於後世更不復作。則與此身俱盡。無邊者、謂我於後世更有所作。」（大正蔵卷三五、六七八頁上段）

「南本」「噉^レ食^レ」（たんしょく）^レがつつがつ食う。噉^レくらう。

施者は、食さず、消せず、五事の果無し。云何がして、二施の果報は、等しき差別無しを言うか（58先に受けて、食して身に於いて有用なり。後に受くは、食さずして身に於いて無用なり。先と後に殊り有り。理は、無惑に在り。今云わく別なわず、故に疑難生ずるなり。）。

仏言わく、善男子よ。如来已に無量無辺の阿僧祇劫に於いて食の身有ること無し（61身を資く身は、如来に非ずなり。）煩惱の身は、後辺身・常身・法身・金剛の身に非ず³²。善男子、未だ仏性を見ず者は、名づけて、煩惱身・雜食の身、是れ後辺身の菩薩なり。

爾の時、飲食を受け已りて金剛三昧³³に入る。此の食、消し已りて即ち仏性見て阿耨多羅三藐三菩提を得ん。是れの故に、我れ二つの施し、果報等しくして差別無しを言う。（66夫れ見性とは、乃ち是れ照理の極。豈に食身を以てして之れを見べけんや。苟しくも食身を見るは、則ち実に非ざるを知る。今も昔も皆な爾る故に、二つの施しに差無し。）菩薩は、爾の時、四魔を破壊りて、今涅槃に入り、亦た四魔を破る、是の故に、我れは、二つの施しの果報は、等しくして差別無しと言う。（68成仏・涅槃俱に四魔³⁴を破す。始終平等が故に無二なり。）菩薩は、爾の時に広く十二部經を説ずと雖も、先に已に通達し、今涅槃に入りて広く衆生の為に分別して演説す、是れの故に、我れは、二つの施しは、果報等しくして差別無しと言う。（71説と不説は、但だ縁を待つが為にす。已に通達して久しい、故に不異と云う。）善男子よ、如来の身は、已に無量阿僧祇劫に於いて飲食を受けたまわず、（73純陀は、五事を以て殊り有り、二見を生ず。世尊、五事を以て果同じくす、説きて一相と為す。何を以ての故に。如来、成仏し已りて無量の劫なるが故に。然るに則ち前施と後施俱に是れ化仏なり。施仏に殊ならずして、故に無二なり。）諸の声聞が為に説きて、「先に難陀・難陀波羅の二牧牛女の奉ぐる所の乳糜³⁵を受け（75此の二女人は、是れ姉妹なり。初成仏の時、女人の施しを受けたまう。涅槃に臨む時、丈夫の施しを受けたまうは、内外の二徳を表すが為なり。内徳は、女が其の順柔を取るが如くなり。外徳は、男が、其の剛正を表すが如し。）、然る後に乃ち阿耨多羅三藐三菩提を得」と言うも、我れは

³¹ 『大正蔵』「北本」「南本」「非無」。

³² 金剛三昧…『説無垢稱經疏』卷一、「若據化相、菩提樹下入金剛喻定、破煩惱魔。捨第五分壽、沙羅雙林入無餘涅槃、破蘊魔。留身三月、為破死魔、於死自在、故能留身。菩提樹下、得成道已。先入慈定、為破天魔。」（『大正蔵』卷三八、一〇〇五頁b5-9）。

³³ 『説無垢稱經疏』卷一、「薄伽者聲、梵謂具徳。若有為此薄伽聲、自能破四魔、具六種徳、名薄伽梵、且分段生死。四魔者、一、煩惱魔。二、蘊魔。三、死魔。四、天魔。百二十八根本煩惱及隨煩惱、名煩惱魔。有漏五蘊、名為蘊魔。無常死滅、名為死魔。他化天子、名為天魔。此四能破壞善事、能令有情流轉生死。損害深重、偏稱為魔。佛能破之、名薄伽梵。」（『大正蔵』卷三八、一〇〇五頁a27-b5）

³⁴ 麤＝麤【宋】。

実には食せず。我れは今、普く此の會の大衆の爲に、是の故に汝が最後に奉ぐる所を受くるも、実には亦た食せず」と（78樹下成仏は、是れ權にして、食せず。後ちの施しは、是れ実なり。權実、殊なると雖も、不食は一なり。）。

爾の時に、大衆は、仏の言う所の、普く大會が爲に、將に純陀の最後供養を受けたもうことを聞きて、歡喜し踊躍し声を同じくして讚めて言わく、「善き哉、善き哉。希有なり。純陀、汝が今、字を立てて、名も虚称ならず。純陀と言は、「妙義を解す」と名づく。汝が今、是くの如きに大義を建立す、是れの故に、実に依りて義に従いて名を立てるが故に、純陀と名づく（84今解する所の義は、昔の嘉名に契い、名と実が相称するが故に、共に之れを讚える。）。汝が今、現世に、大名利を得て、徳と願、満ち足る（85昔、迦葉仏の時に

於いて、斯の誓願を発し、今最後の供養を得ん。故に満足と云う。）甚だ奇なり。純陀、人中に在りて生まれ、復た得難し無上之利を得（86檀の利を具うは、無上と為すなり。）。善い哉。純陀、優曇花の如しに世間に希有なり。（87輪王が世に出づれば、此の花乃ち現わ

る。）仏が世に出るは、亦復甚しく難し。仏生に値い、法を信聞すは、復た難し。仏が涅槃に臨み、最後供養を辨すこと能うは、是の事復が難し。是れに於いて、南無純陀、南無純陀なり（90南無、此れ帰命を言う。）。汝今、已に檀波羅蜜を具するは、猶お秋月の十五日夜の清浄が如し。円満にして、諸の雲翳無く、一切の衆生、瞻仰せざる無し。汝亦是くの如しして、我らの瞻仰する所と為す。仏已に、汝の最後供養を受けたまわり、汝をして檀波羅蜜具足せしめん。南無純陀は、是れの故に説く。汝、月の如しに盛満し、一切の衆生、瞻仰せざるは無し。南無純陀。人身を受くと雖も、心は、仏心に如し。（95同じく大悲を以て心と為すなり。）汝今、純陀は真に是れ仏子にして、羅睺羅如くして、等しくして異有ること無し。爾の時、大衆即ち偈を説いて言わく、汝、人道に生じると雖も、已に第六天を超ゆ（98他化自在天は、是れ欲界の頂、魔王波旬の都の処なり。心、其の境超ゆが故に共に之を歎す。）我れ及び一切の衆、今の故に稽首して請う人中の最勝尊、今当に涅槃に入る。汝、応に我等を慰れみ。唯だ願わくは速やかに仏を請いて、久しく世間に住し、無量の衆を利益したも

35 『大正蔵』「北本」「為於此會」「為於普為【三】」、「南本」「普為作會」。

36 「南本」「此作」。

37 『大正蔵』「北本」「南本」「所言世尊」。

38 『大正蔵』「北本」「將受受於」、「南本」「將受哀受」。

39 『大正蔵』「北本」「南本」「見現」。ここでは、意味をとって、「現世」とする。

40 『大正蔵』「北本」辨。「辨辨【宮】」。

う 智の讃えるところの 無上の甘露法を演説したまえ 汝が若し仏に請わずんば 我が命は將に全うせざらん 是の故に応に見えて為に調御師を稽請すべし」と。

爾の時に、純陀が歡喜し踊躍すること、譬えば、有る人が父母を卒に喪い、忽然として還生するが如く、（104 声を受けて滅事を告ぐは、卒に喪うことと同じくす。五難を問答して、譬えて劫が蘇るが如し。）純陀が歡喜すること亦復た是くの如し。因りて起きて礼仏して偈を説いて言わく、

快き哉、己が利を獲 善く人身を得 貪恚等を蠲除し（106 蠲の音、古玄の反なり。）永に三惡道を離る 快き哉。己の利を獲し 金寶の聚に遇得り 調御師に値遇い 畜生に墮すること懼れず 仏は優曇花の如く 値遇いて信を生み難し 已に遇いて善根を種え 永に餓鬼の苦を滅し 亦復た能く 阿修羅の種類を損滅すること（110 自ら欣びて仏に見え四趣を離れることを得。）芥子を針鋒に投ずる（が如し）仏の出でること彼に難し 我れ具足檀を以て 広く生死海を度す 仏は世法に染らざること 蓮の水中を出でるが如し 善く有頂の種を断ず（112 三有の頂を謂うなり。）永に生死の流れを度る、世に生じて人と為ること難く、仏の世に値うも亦た難きこと、猶お大海の中にて盲龜の浮孔に遇うが如し。我が今、奉ぐる所の食もて、願わくは無上の報を得。一切の煩惱結の堅固ならざるを摧破し、我れは今、此処に於いて、天人の身を求めず。設使い之を得ても、心は亦た甘樂ならざるなり。如来が供養を受けたまわば、歡喜するに量有ること、猶お伊蘭花の栴檀香を出だすが如く、我が身も伊蘭の如し、如来が我が供を受けたまわば、栴檀香を出だすが如し。是の故に我れは歡喜す。我が今報を見るを得。最勝・上妙の処の〔帝〕釋・梵〔天〕の諸天等は、悉く来たりて我れを供養す。一切の諸ものの

41 『大正蔵』「北本」「南本」「生||活」。

42 『大正蔵』「北本」「南本」「因||復」。

43 「離||滅【三】」。

44 『大正蔵』「北本」「離」「離||滅【三】」。

45 『大正蔵』は、「是」。

46 以||已【宋】【元】【明】。

47 「具足檀廣」は、『大正蔵』には、なし。

48 「度生死海」は、『大正蔵』には、「度人天生死」。

49 『大正蔵』は、「中」なし。

50 『大正蔵』は、「處」。

世間、悉く諸の苦悩を生ずるは、皆な、世尊、涅槃に入りたまわんと欲するを知るを以てなり。高声に是の言を唱う。世間に調御無し、応に衆生を捨つべからず。応にこと一子の如く視るべし、と。如来が僧の中に在りて、無上の法を演説したもうこと、須弥の宝山が、大海に安処するが如し。仏智が能善く、我れ等の無明の闇を断ちたもうこと、猶お虚空の中に、雲を起こし清涼を得るが如し。如来が能善く一切の諸もろの煩悩を除きたもうこと、猶お日が出づる時に、雲を除き、光が普く照らすが如し。是の諸もろの衆生等、恋慕して悲慟を増し、悉皆く生死の苦水に為りて漂わさる。是れを以ての故に、世尊よ、応に衆生の信を長て、生死の苦を断たんが為に、久しく世間に住まりたもうべし、と。

仏は純陀に告げたまわく、是くの如く、是くの如し。汝の所説の如く、仏の出世の難きこと優曇花の如し。仏に値いて信を生ずるも亦復た甚だ難く、仏の涅槃に臨みて、最後に食を施して能く檀を具足すること倍復甚だ難し。汝は今、純陀よ、大しく愁苦すること莫れ。応当に歡喜して深く自ら最後に如来を供養するに値い、檀波羅蜜を成就し具足することを得るを慶幸ぶべし。応に仏に久しく世に住まることを請うべからず。(133 請う所を止めるなり。) 汝は今、当に「諸仏の境界は悉皆く無常なり、諸行の性相も亦復た是くの如し」と観すべし、と。(135 応身は、是れ有、仏の境界を名づく。化に随い滅を示すが故に、無常と曰う。五蔭の遷流、名づけて諸行と為し、亦た仏の化に同じ、故に如是と云う。) 即ち純陀が為に偈を説いて言わく、

一切の諸の世間、生ずる者は、皆な死に帰す。寿命は無量と雖ども、当に盡きる期有ることを要すべし。壯年暫く停らず、美色は、病に能く侵され、命は死の吞ぜられる所と為す。世法、無常に住す。諸の王は、自在威を得。力は、等しく雙び難きも、一切皆な遷動す。寿命も亦た是くの如し。衆苦の輪(廻)に際(限)無し。流転して休息せず。三界は皆無常なり。諸有は悉く樂に非ず。此の道本より性相は、一切、皆な空無なり。(142 其の性相を求めるも、得るべからずがゆえに。) 壊れる可き法は流転して、常に憂患等有り。恐怖の諸もろの過患なるに、老・病・死・衰悩あり、是の諸もろに辺有ること無く、(144 過患多きなり。) 壊れ易くして怨み侵さる。煩惱の相、煩惱に纏り裏まること、猶お蠶の繭に処うが如し。何れの智慧有る者か(而) 当に是の処を樂しむべきや

此の身は苦の集まる所にして、一切皆て不淨垢^二なり。扼縛・癰瘡等の(146 扼縛、煩惱を況い、癰瘡、苦報を喩う。) 根本に義・利無く、上は諸天の身に至るも、皆亦復た是くの如し。諸欲は皆無常なり、故に我れは貪著せず。欲を離れ善く思惟して、真実に於いて証す。

^二 不淨垢：隋・慧遠の『大般涅槃經義記』卷一(壽命品)に、「下明不淨。此身苦集一切不淨。果體不淨。扼縛癰瘡根本無利。種子不淨。扼者四扼。所謂欲有無明及見。欲界煩惱除無明見。名為欲扼。色無色界一切煩惱除無明見。名為有扼。三界無明名無明扼。三界諸見名為見扼。此等四種能令衆生為苦所扼。故名為扼。」
(『大正藏』卷三七六三六頁上)

究竟して有を断ずる者は、今日当に涅槃すべし。(149)有は、有身⁵²の有を謂うなり。如来、久しく已に有無し、而して今捨身す。此、滅に非ずして、滅を現ずを明かすなり。我れは有の彼岸に度り(150)三有⁵³の河を度り、涅槃の岸に至る。已に諸の苦を過るを得。是の故に、今日に於いて純(陀)上妙の樂を受くるのみ、と。(151)有は、即ち有苦、無有、即ち無苦。無苦の極み、是れ名づけて妙樂なり。是の因縁を以ての故に無戲論の辺を証す。永く諸の纏縛を断ず。今日涅槃に入り、我れ老病死無く、壽命も盡くしべからず。我れ今涅槃に入りて、猶お大火が滅するが如し。純陀、汝応に如来の義を思量べからず。当に如来の常なること、猶お須弥山が如く觀るべし。我れ今涅槃に入りて、第一樂を受く。諸の仏法、是くの如し。(156)既に化生せれば、理宜しく化滅すべし。應に復た啼哭せざるべし。

〔157〕爾の時、純陀仏に白して言く、世尊よ。是くの如し是くの如し。誠に聖教の如し。我が今、有する所の智慧の微淺なること、猶お蚊・蚋の如し。何んぞ能く如来の涅槃の深奥の義を思議せんや。世尊よ、我れは今已に、諸もろの大龍象なる菩薩摩訶薩にして諸もろの結漏を断ぜる文殊師利法王子と等し。世尊よ、譬えば幼年のものが初めて出家を得て(161)道を習いて未だ久しからず、名づけて幼年を曰く。始めて常の理を悟り、是れ初出の義なり。未だ具戒せざると雖も、即ち僧數に墮つるが如し。我れも亦た是くの如し。仏・菩薩の神通力以ての故に、是くが如く大菩薩の數に在ることを得。是れの故に、我れは今、如来をして久しく世に住まりて、涅槃に入りたまわざらしめんと欲す。譬えば如飢え人が終に變吐無きが如し。唯だ願わくは世尊よ、亦復た是くの如く常に世に住まりて涅槃に入りたまわざらんことを」と。(165)飢渴の人、必ず變吐⁵⁴せず。如来の常住則ち本願の満足を喩う。

〔167〕爾の時に、文殊師利法王子は純陀に告げて言わく、「純陀よ、汝は今、應に是くの如き言、如来を請いで常に世に住まりて、般涅槃せざらしめんと欲すと発すべからず。彼の飢え人、變吐する所無きが如くなり。汝は今、當に、諸行の性相を觀ずべし。(170)小乘法の中、仏を以て是れを有とす。諸行の摂する所と為す〔がゆえに〕。若し性相の無常を觀ずれば、而して仏の色身も、終に壞滅に歸す。是くの如く行を觀ぜば空三昧を具えん。(171)無常を觀ずるに由りて、法に性無しを知る。故に能く空三昧を具足するなり。正法を求めんと

⁵² 有身…隋・吉藏『維摩經義疏』卷五〈佛道品八〉「有身者、謂有漏五陰身也。」(『大正藏』卷三八、九七一頁下)

⁵³ 三有…『出曜經』卷五〈愛品三〉「三有者、欲有、色有、無色有。」(『大正藏』卷四、六三四頁上)

⁵⁴ 吐より、「南本」欠。

⁵⁵ 變吐…捨てるの意。『阿毘達磨大毘婆沙論』卷十四「未變吐者、未棄彼得。」(『大正藏』二七卷、六七頁a13-14)『阿毘達磨發智論』卷二十「恒希望變吐者、希望有二。一、希望財位。二、希望壽命。彼阿羅漢於此二種已斷遍知、故名變吐。即是棄捨恒希望義。」(『大正藏』卷二六、一〇三〇頁c1-4)

欲せば、応に是くの如く学ぶべし。」と。（172 汝当に行の無常・無性・無相なるを觀するべし。応に仏をして、久しく世に住まるを勧めやるべし。）

〔172〕純陀、問うて言わく、「文殊師利よ、夫れ如来とは、天上人の中の最尊・最勝なり。是くの如き如来は、豈に是れ行ならんや。（174 如来とは、如実〔の道〕に乗じて来りて、乗ずる所、既に実なれば、果も必ず是れ真なるが故に行に非ずなり。）若し是れ行なれば、生滅の法とせん。（175 天人の行は、是れ行なり。世尊は、天に出で過ぎたる、豈に諸天と同じく是れ行とならんや。若し是れ行ならば、便ち生滅と為し、正行に非ずなり。）譬えば、水の泡の速やかに起り、速やかに滅するが如く、往來し流轉すること猶お車輪の如く、一切諸行も亦復た是くの如し。我れは、『諸天の寿命は極めて長し』と聞く、云何ぞ世尊は是れ天中天なれども、寿命は更けること促くして百年に満たざるや。（178 非想の天、寿は八万の劫なり。況や仏の命、長からずなり。）聚落主⁵⁶の勢が自在を得て、自在力を以て能く他人を制せんに、是の人は福盡きて其の後貧賤にして人に輕蔑せられ、他に為りて策ちて使われるが如し。所以は何ん。勢力を失するが故なり。世尊も亦た爾なり。諸行に同じとす。諸行に同じとせば、則ち天中天為りと稱すことを得ず。何を以ての故か、諸行は、即ち是れ生死の法の故に。是れの故に文殊よ、如来は諸行に同じを觀すること勿れ。

〔185〕復た次に、文殊よ、知りて説くと為んや、知らずして説きて（185 知らずして説くは是れ妄語と為し、若し必ず常を知らば、則ち応さに説かざるべし。）而も如来は諸行に同じと言うや。（186 常を以て無常と為すを責むるなり。）設使い如来が諸行に同じとせば、則ち三界の中に於いて天中天の自在なる法王為りと言うを得ず。譬えば人王の如しなり（188 衆生を況うなり）。大力士有りて（188 如来を喩うなり。衆生の能く仏の出世を感じると言う故に。）其の力、千（人）に当たり、更に能く之を降伏する者、有ること無し（189 能く四魔を摧すを喩うなり）。是くの如き力士は、王の愛念する所なり、故に此の人、一人千に当ると稱す。謂能く偏えに爵禄を賜わり、封賞は自然なり（191 四事を以て供養するなり）。千人に当ると稱することを得る所以とは、是の人未だ必ず千に力敵せず、直だ⁵⁷種種の伎芸⁵⁸を以て能く千に勝る所の故、故に当千と稱す（193 芸、無為功德を謂うなり）。如来も亦た爾り。煩惱魔・陰魔・天

⁵⁶ 聚落主…（じゅらくしゅ）唐・普光述『俱舍論記』卷十八（分別業品四）「聚落主、即是城主邑主。」（大正藏卷四一、二八一頁中）

⁵⁷ 直『大正藏』『北本』『南本』共に、但。直も但も似たような意味や使い方ができる。韋詒は、同じ字の使用を嫌う傾向があり、こういう細かいところで、同じ意味の違う字を當てることをよくする。

⁵⁸ 伎芸『大正藏』『北本』『南本』共に伎藝とする。

⁵⁹ 所能勝於…『大正藏』『北本』『南本』共に所能能勝。

魔・死魔を降す。是の故に如来を三界尊と名づく。彼の力士の一人、千に当るが如し。是の因縁を以て、種種の無量真実の功德を成就し具足す。故に如来・応・正遍知と称す。文殊師利、汝今応に憶想分別し如来の法を以て於諸行に同じとすべからず。譬えば巨富の長者の子を生むが如き（198衆生、仏を感じ来たりて三界に至り、故に生子と云う。）、相師、之を占いて短寿の相有りと（199文殊説くに、仏は是れ無常なりと。）、父母聞き已りて、其の家嗣を紹繼すること任せざるを知り（200家は法性を謂うなり。若し仏有為に非らずんば、則ち仏、法性の家より生まれ、是れ法の真子、法の王家を紹繼するに堪任せるなり。若し是れ有為なれば、則ち法性と相い背き、法の真子に非らざるが故に不住と曰く。）、復び愛重せず視ること芻草の如し。夫れ短寿者は、沙門・婆羅門ら、男女・大小の敬念する所と為さず。若し如来をして諸行に同じくせしめば、亦復た一切世間の人・天・衆生の奉敬する所を為さず。如来の説く所の、不変・不異の真実の法も、亦た受く者無し。（205唯だ証のみが乃ち悟りなり。）是れの故に文殊、応さに、如来は、一切の諸行に同じという言を説くべからず。復た次に文殊、譬えば貧女の如し、居家救護の者有ること無し（207女、行人を況うなり。この妙理、闕するは、居家無く、善人より遠離し、救護有らざるを喩う。）。加えて復た病苦・飢渴に逼まれ（208煩惱は是れ病苦、無法は飢渴為り。）、遊行・乞丐し、（209丐は亦た乞なり。師を尋ね、道を請う行乞の象なり。）、他の客舎に止まり、（209夫れ教に權擧の義有るが故、大乘を以て諸逆

⑧ 隋・慧遠述『大般涅槃經義記』卷一〈壽命品〉「相師占之有短壽相。喻前文殊説佛有為。文殊相師觀佛名占。説佛今滅名短壽相。父母聞下喻世輕賤。父母聞等喻明感聖道機衆生聞短不愛。知佛不能常流法化。名為不任紹繼家嗣。」（『大正藏』卷三七、六三八五頁上段⑧）韋諡は、慧遠の『義記』を参照したと思われる。なぜなら、「文殊説佛有為」という表現が、「文殊説佛は無常也。」と相似しているからである。ただ、有為を無常に言い換えたに過ぎない。同じ言葉を使いたくない韋諡からは、想像し難くない。ほかに、このような表現を使用した例は、見当たらない。

⑨ 不復 「またゝせず」で読むべきかもしれないが、ここでは、「もう愛さない」の意味を強調するために、敢えて「ふたたびゝせず」とした。

⑩ 芻草

⑪ 象 姿、形、景色。

⑫ 權擧 權に仮の意有り。擧げ。棲に同じ。ねどこの意。權擧は、仮りのねどこの意、転じて旅宿のことをいう。

⑬ （ゝ）十羊 逆の異体字。（有賀要延編『難字・異体字典』国会刊行会、一九八五年）

逆旅 『大般涅槃經集解』卷五〈純陀品二〉「案、道生日、三界之身、為邪見之宅。為惡所止、於其本善、為他舎也。僧亮曰、人天之身、惑之所得。出自理外、終卒應無。譬客舎也。曇濟曰、生死之中、非其久處、譬之他舎也。智秀曰、常解習因、非生死眷屬。為客。五陰有權擧之義、曰舎。」（大正藏卷三七、三九六頁中段）ここの部分は、『集解』を参照したと思われる。

旅^㉒に方ぶ。寄りて一子を生む。(210解を起すを生と名づき、仏を紹ぐを子と為す。)是れ客舎の主(210化仏を謂うなり。)驅

逐して去らしむ。(211教の捨鈴^㉓実を求めさせしむるが故に。)其の産末だ久しからざるに、(211入理深からざるなり。)是の兒を

携抱して、他国に至らんと欲す。(212持解は携抱を喩う。廻向は、至らんと欲すを名づく。將に仏果に趣くは、他国と為す。)其の中路

に於いて、惡風雨に遇い、寒苦並びに至る。(213正修行^㉔の時、名づけて中路^㉕と為す。觸の塵に對する境は、是れ風雨に遇う。起惡招

報は、名づけて寒苦なり。)多く蚊虻・蜂螫・毒蟲の咬食せられる所と為す。(214咬食、惡友の善を害するを況うなり。)恒河を経由

し、兒を抱き厲^㉖渡す。其の水漂疾なれども、(215漂の音、偏妙の反。)終に放捨せず。(216中に二乗に遇うを、恒河を経すに況

う。解を持し出を求むは、兒を抱きて渡るに喩う。小の勸む所と為すを、水の漂疾と名づくなり。解を守り従わざること、放捨せずがの如

し。)是に於いて母子遂に俱に没す。(217身を以て法に殉じ、俱に没する状。)是の如き女人、慈念の功德にて、命終の後、梵天に生

ず。(218慈念は、護法を況う、梵天は解脈^㉗を喩う。)文殊師利、若し善男子有り、正法を護らんと欲せば、「如来、諸行に同じ、諸行

逆旅^㉘逆は迎なり。旅人を迎える意。旅舎をいう。李白の詩『春夜宴桃李園序』に、「天地者、万物之逆旅、光陰者、百代之過客。」。

捨鈴^㉙未詳。思うに、追ひ払うための鈴か。『一切經音義』のみならず、旃陀羅が、鈴を持って、ほかの人が近寄ってこないようにする義務があったとの記述

がある。それが転じて鈴の音を以て、人を追ひ払うことになったのではないか。唐・慧琳『一切經音義』卷二六(釈雲公撰『涅槃經音義』卷二三)「旃陀羅(亦名旃荼羅。此云嚴幟、謂以惡業自嚴、行持標幟也。其人若行、必搖鈴自標。若不爾者、必獲重罪。時人謂、殺人膽子屠也。獵・擔糞人也。)(『大正藏』卷五四、四七六頁下段)

正修行時^㉚唐・般若、牟尼室利詔『守護國界主陀羅尼經』卷八(般若根本事業莊嚴品八)「正修行時是般若業。自心明了是般若母。顯示他人是般若業。樂住寂

靜是般若母。知本寂靜是般若業。樂於獨處是般若母。一道清淨是般若業。修行妙觀是般若母。得慧解脫是般若業。修三解脫門是般若母。三智現前是般若業。」(『大正藏』卷十九、五六二頁中段)

中路^㉛『法華義疏』卷八に、「中路者、初發大心欲出離生死、遠求佛道欲離小行、而大解未成、於此中間而退也。」(『大正藏』卷三四、五七五頁下段)五七六頁上段)

厲渡^㉜『大正藏』「北本」而度、「南本」而度。渡^㉝度^㉞。厲は、腰ぐらいの高さの川を渡るという意有り。『一切經音義』卷五二「厲渡(力制反)『余雅』

由帶已上、為厲。由自也疎已下、為揭褰衣也。揭音、去例反。)(『大正藏』卷五四、六五七頁中段)

解脈^㉟脈を知る。『摩訶止觀』卷五に、「良い医者が、薬や病を詳しく區別して、(患者の)身体や声そして脈の様子を分析して薬を与えると違いが出るように」とある。「譬如良醫精別藥病、解色解聲解脈逗藥即差。有命盡者亦不能起死。若不解脈醫問病相依語作方、亦挑脫得差。」(『大正藏』卷四六、五六頁下段)

に同じからず」と説くこと勿れ。(220)応化の二身、有常無常なるは、蓋し諸仏の方便、利生の教えなり。若し諸行に同じと説かば、是れ常教に違う。若し諸行に同じからずと説かば、無常の教えに違う。正法を護るに、人は当に説いて、同、不同を言うべからずなり。)唯だ当に自ら責むべし、「我れ今愚癡にして、未だ慧眼有らず」と。如来の正法は思議すべからず。是の故に応に、如来の定は是れ有為、定は是れ無為と宣べて説くべからず。(223)方便は是れ有為、真諦は是れ無為、二法相依し、定と言うべからず。)若し正見する者は、応に如来の定は是れ無為と説くべし。(224)真を談じ俗を言わざるなり。)何を以ての故に、能く衆生が為に、善法を生ぜしめが故に、憐愍を生ずるが故に。彼の貧女の恒河に在りて子を愛念するが為に、身命を捨つるが如し。善男子、護法の菩薩も、亦た応に是くの如くなるべし。寧ろ身命を捨つとも、如来は、有為に同じと説かず。(228)有為に同じと説くは、是れ仏を謗るなり。)当に如来は、無為に同じと言うべし。如来は、無為に同じと説くを以ての故に、阿耨多羅三藐三菩提を得ん。彼の女人の梵天に生ずることを得るが如し。(230)女は、慈故を以ての故に、天に生ず。人は、謗らずを以て、解を得ん。)何を以ての故に。法を護るを以ての故に。云何が護法なる。謂ゆる説きて「如来、無為に同じ」と言うなり。善男子、是くの如き人は解脱を求めずと雖も、解脱は自ずから至らん。彼の貧女の梵天を求めざれども、梵天自ら至るが如し。文殊師利、人の遠行するが如く、中路に疲れ極まり、(234)起修して長久なるを是れ遠行と曰う。中を以て疲廢するが故に、名けて疲れ極まると為す。)他舍に寄止し、(235)退いて小乗に住するを、名づけて寄止と為す。二乗の居する所、是れ他舍と為す。)臥寐の中、(236)大解の未だ発らずを喩うなり。)其の室に忽然大火卒かに起き、(236)火は無常を況うなり。無常の諸世間を焼くを聞説すは、義、卒かに起きるに同じ。)即時に驚寤し、尋いで自ら思惟すらく、(237)無常を覚知し、驚寤と為す。漸く權教を識るを、思惟と名づく。)我れ今に於いて、定んで死せんこと惑無し。(238)仏身を憂慮して、嚴教の隠す所と為し、故に必死を言う。)慚愧を具ぐが故に、衣を以て身を纏い、(239)仏、無常を現し、有類有類の身醜く、仏の無常なるを恥じて、故に慚愧と名づく。仏の眞常を説きて、仏の無常を隠すを、是れ纏身と曰う。)即便命終わりて、(240)心を護りて死に至るを、名けて終と為すなり。)忉利天に生ず。(240)須弥山上に、三十二の天有り、忉利天王の輔臣と為す。今の言う忉利に生ずとは、三十二の相を得んを喩うなり。)是れ従り已

⁷² 佛現無常、有類身醜、恥佛無常、故名慚愧…この一句の意味が良く取れない。訓読文として、二つの読みを試みた。①仏、無常を現し、有類、身の醜きことを恥ず。仏、無常なるが故に、慚愧と名づく。②仏、無常を現し、有類の身醜く、仏の無常なるを恥じて、故に慚愧と名づく。

後、八十返⁷³を満ちて大梵王と作り（242 況えて八十種の好を得んなり。）百千世を満ちて、人中に生じて、転輪王と為る。（243 百千は、寿の無量を譬い、輪王は、不共の功德を況う。）是の人復三惡趣に生ぜず。（243 不生は、常を証すを喩い、三惡は流転を譬う。）展転して常に安樂之処に生ず。（244 無為の常果、是れ安處なり。）是の縁を以ての故に、文殊師利、若し善男子、慚愧有らば、応に仏を觀じて、諸行に同じとすべからず。（246 遇火の人、身の醜惡を愧じ、衣を以て体を覆い、命終りて天に生ず。護法の人、如来の諸行に同じを説かずして、故に解脱を得ん。）文殊師利、外道邪見は、如来有為に同じと説くべし。持戒の比丘、是くの如く如来の所に於いて、有為の想を生ずべからず。（249 比丘の人は、是れ仏の弟子、応に師の処に生滅心を起こすべからず。）若し如来は是れ有為と言わば、即ち是れ妄語なり。当に知るべし。是の人は、死して地獄に入ること、人の自ら己が舍宅に処すが如し。（251 因は既に不善、果は是れ地獄。此の道は必然にして、己が宅に入るが如く。）文殊師利、如来は眞實には無為の法なり。復た応に是れ有為と言うべからざるなり。汝今日従り、生死の中に於いて、応に無智を捨て、正智を求むべし。（253 当に生滅の心を捨て、実相の常法を觀するべし。）当に如来は即ち是れ無為なると知るべし。若し能く是くの如く、如来を觀する者は、当に三十二相の具足を得⁷⁴、速疾⁷⁵に阿耨多羅三藐三菩提を成就す。（256 文殊の仏の無常を説くは、権の道を以て常を除くなり。純陀の仏の常住を説くは、実の智を以て無常を除くなり。二つ俱に利益し、兩義に傷無し。）爾の時、文殊師利法王子は、純陀を讃えて言わく、善哉善哉哉。（258 其の解の深きことを歎ずるなり。）善男子、汝は今已に長寿の因縁を作し、能く如来は是れ常住の法、不變異の法、無為の法と知る。汝今、如くのはく善く如来の有為の相を覆う。被火の人⁷⁶の慚愧が為に、故に衣を以て身を覆い、是の善心に由りて、忉利天に生じ、復た梵王、轉輪聖王と為し、惡趣に至らず、常に安樂を受くが如し。汝も亦た是くの如し。善く覆如⁷⁷（：拔けあり）（文）殊師利言わく、如来は汝及び我れ（等）一切衆生⁷⁸に於い

⁷³ 反…『注涅槃經』は、「反」、「大正藏」「北本」返。「北本注」返^㉓反^㉔。〔南本〕返。

⁷⁴ [注] 當得具足、「北」・「南」具足當得。

⁷⁵ [注] 「北」速疾、「南」疾成。

⁷⁶ [注] 「南」如被火人、「北」如彼火人。「北注」彼^㉕被^㉖。

⁷⁷ 抜けた箇所あり。『大正藏』卷十二、三七四頁中段二十三行の「來」より、同頁下段十四行の「文」まで抜け。

⁷⁸ [注] 「北」於我一切衆生。「南」我等一切衆生。

て、皆悉く悦可す。(264 同じく一子と視るが故に。) 純陀答えて言わく、汝応に如来は悦可^すと言うべからず。(265 悦の執を除く
なり。) 夫れ悦可とは、則ち是れ倒想。(265 想うべき悦有ること、是れを顛倒と名づく。) 若し倒想有らば即ち是れ生死なし。生死有ら
ば、即ち有為の法。是れの故に、文殊、如来は是れ有為なりと謂うなかれ。(267 此の果を擧げ以て因執を除く。) 若し如来は是れ有為
と言わば、我と仁者と俱に顛倒を行ず。(268 若し權を執して実と為せば、是れ則ち仁と俱に倒妄を行ず。) 文殊師利、如来は、愛念の想
有ること無し。(269 分別を離せしむなり。) 夫れ愛念とは、彼の母牛の其の子を愛念し、復た飢渴して行きて水草を求むと雖も、若し
くは足るであれ、足らずであれ、條爾⁸⁰還歸するが如し。諸仏の大慈は是の念有ること無し。等しく一切を羅睺羅の如く視ん。(272 母
牛の独り其の子を念ずるのみが如きにあらざるなり。) 是くの如く念ずるは、即ち是れ諸仏の智慧境界なり。(273 愛念⁸¹無く、真を觀る
なり。等しく一切の縁俗を視るなり。真俗雙觀するは、是れ仏の慧境。) 文殊師利、譬えば国王の駕駟⁸²を調御するに、驢乘を馳せて之に及
ばしめんと欲すとも、是れの処なし。我と仁者と、亦復た是の如し。如来の微密深奥を盡さんと欲すとも、亦た是の処無し。文殊師利、如
金翅鳥の(277 鳥は、法身を況うなり。) 虚空を飛昇すること無量由旬にして、(277 淨土を喩うなり。) 大海を下觀して、(278
海は、生死を譬うなり。) 悉く水性の魚鼈・鼃(278 鼃の音、魚衰の反。) 鼃(279 徒多の反。)・龜龍の属を見、(279 六道の衆生
を見るを喩うなり。) 及び己影を見ること(280 化身を反視して、三界に現れる。) 明鏡に於いて、諸の色像を見るが如し。(280 真俗
俱に鑒⁸³るなり。) 凡夫は少智にして、是く如きの所見を籌量すること能わず。我と仁者と、亦復た是の如し。如来の智慧を籌量すること
能わず。文殊師利、純陀に語りて言わく、是の如し、是の如し。汝の所説の如し。我、此の事に於て達せずと為すに非ず。直だ、汝の諸の
菩薩事を試みんと欲するのみ。(284 我れ今仏の諸行者に同じと説くは、是れ了とせずと非ざるなり。將に新学の人を試さんと、故に是の
説を作す。) 爾の時、世尊は、其の面門従り種種の光出だす。(285 仏自ら供を催すなり。) 其の光明は文殊の身を曜照す。文殊師利、
斯の光に遇い已りて、即ち是の事を知り、尋いでに純陀に告ぐ。如来の今は、是の瑞相を現わし、久しからずして必ず当に涅槃に入りたま

⁷⁹ 悦可…『大般涅槃經』卷二(壽命品一)「夫悦可者、則是倒想。若有倒想、則是生死。有生死者、即有為法。」(大正藏卷十二、三七四頁下段)

⁸⁰ 『注』條爾(しゆくじ、意味、忽然。條然とも)。「北本」「南本」忽然。

⁸¹ 愛念…唐・行滿『涅槃經疏私記』卷二、「二舉譬顯者、意明有為無為。當無愛念。如彼乳牛愛念其子也。」(「新纂大日本統藏經」三七卷、二四頁21…22)

⁸² 駕駟…唐・慧琳『一切經音義』卷九(玄應撰『摩訶般若波羅蜜經』卷三〇音義「駕駟(相二反。說文、駟一乘也。『穆天子傳』曰、獻良馬十駟。郭璞曰、四馬駟、謂四匹也。」(大正藏卷五四、三六〇頁b3)

⁸³ 鑑…かんがみ…見る。見分ける。識別する。

うべし。汝が先に設くる所の最後の供養を、宜しく時に仏及び大衆に奉獻すべし。純陀当に知るべし、如来が是の種種の光明を放ちたまふこと、因縁無きに非ざることを。純陀、聞き已りて、情は咽ぎ[㊤]默然たり。仏、純陀に告げたまわく、『汝、仏及び大衆に奉施する所、今正に是の時なり。如来、久しからずして当に般涅槃すべし。第二第三も亦復た是くの如し。』(292) 將に食に困りて化を起せり、故に之を促すなり。爾の時、純陀、仏語を聞き已りて、声を擧げて啼哭し、嗚咽して言わく、『苦なる哉、苦なる哉、世間は空虚なり。』と。

復た大衆に白さく、我ら今者、一切、当に共に五体投地して、同声に仏に勧めて般涅槃したまふこと莫からしむべし。(295) 一人の誠は、仏をして感じさせたまふこと能わざるを恐れ、故に自ら大衆に同じく共に住を請いたまう。爾の時、世尊、復た純陀に告ぐ、汝、啼哭し自ら其の心を撓す莫かれ[㊤]。(296) 心を乱し道に迷う故に之を止すなり。当に是の身は、猶お芭蕉、(297) 不堅牢なり。熱時の餓[㊤]、(297) 体に実無しなり。水沫[㊤] (298) 搏るべからず[㊤]なり。幻化 (298) 空ならざること無しなり。乾闥婆城[㊤] (298) 之を望みて有るに似るも、即ち之れ実は無し。坏[㊤]器 (299) 固からずを言うなり。電光の如く、(299) 出で已りて便ち没きる。亦た水

情咽…「北本」情塞。「南本」悲塞。咽 ふさ…がる。充滿する。ふさぐ。

汝莫啼哭自撓其心…『大正蔵』「北本」 莫大啼哭令心顛悴。脚注 顛＝焦【元】【明】【宮】。「南本」 莫大啼哭自亂其心。

餓…『大正蔵』「北本」「南本」炎。

沫…『大正蔵』「北本」「南本」泡。「北本註」泡＝沫【三】【宮】。「南本註」泡＝沫【三】。

搏… とる。とらえる。

乾闥婆城…蜃気楼を指す。『勝天王般若波羅蜜經』卷一〈通達品一〉、「雖作是觀、知一切法如幻、夢、響、乾闥婆城、虛妄不實、顛倒故見。滅外境界、內心寂靜、不見我能行及所行法、無二無別、自性離故。是名菩薩摩訶薩學般若波羅蜜通達禪波羅蜜。」(『大正蔵』八卷、六八九頁c2,c3,c6)『翻譯名義集』卷三「乾闥婆城。大論云。日初出時。見城門樓櫓宮殿行人出入。日轉高轉滅。但可眼見而無有實。名健闥婆城。靜苑華嚴音義云。西域名樂人。為乾闥婆。彼樂人多幻作城郭。須臾如故。固即謂龍蜃所現。輔行云。乾城俗云蜃氣。蜃大蛤也。朝起海洲。遠視似有。近看即無。」(大正蔵』五四卷、一〇九八頁b26,c3)

坏器…坏 ハイ、陶器。

に畫くこと・臨死の囚・熟菓⁹¹・段肉⁹²の（300勢い全うせざるなり。）織の経の盡くるが如く、碓の上下するが如しと観ずるべし。当に諸行は猶お雜毒の食のごとく、有為の法は諸の過患多しと観るべし。』是に於いて純陀、復た仏に白して言わく、『如來は、久しく世に住したまうことを欲せず。我れ當に云何ぞ啼哭⁹³せざるべき。苦なる哉、苦なる哉、世間空虚なり。唯だ願わくば世尊、我ら及び諸の衆生を憐愍して、久しく世に住して、般涅槃をしたまうこと勿かれ。仏、純陀に告げたまわく、「汝は今、応に是くの如き言『我れを憐愍するが故に、久しく世に住まれ』を發すべからず、我れは汝及び一切を憐愍すを以て、是れの故に今、涅槃に入らんと欲す。（306久しく住まれば則ち生ぜず、之の想に逢い難し。）何を以ての故に、諸仏の法爾なればなり。（307衆生、身の過患⁹⁴を知らず、有為に常無し。今般涅槃を示し、その義を解しせしめ、故に法爾と云う。）有為も亦た然り。是れの故に諸仏は、偈を説いて言わく、有為の法 其の性は無常にして 生じ已りて住せず 寂滅を樂と為す。（310上は、生死の患を言い、之をして離せしむ。今涅槃の樂を説くは、之を勧めて求めしむ。）純陀、汝は今當に一切行雜⁹⁵諸法の無我・無常・不住を觀るべし。此の身は多く無量の過患有り、猶お水泡の如し。是れの故に汝今啼泣すべからず』（313住まるも益無しなり。）爾の時、純陀復た仏に白して言わく、『是くの如し。是くの如し。誠に尊教の如し。如來、方便にして涅槃に入るを示現すと知ると雖も、而も我れ苦悩を懷かざる能わず、今⁹⁶自ら思惟して復た慶悅を生ず』（315滅を聞くを以て故に憂いを致し、供を受くるを許せらるるが故に欣悅す。）仏、純陀を讚えて、『善い哉善い哉、能く如來が衆生を同めて、方便

⁹¹ 熟菓…熟れた果物。『毘尼母經』卷三「爾時世尊在波羅捺國。時世飢荒、諸比丘隨路而行、見熟菓皆落在地、不得自取待淨人頃。」（『大正藏』二四卷、八一四頁 23-25）

⁹² 段肉…段肉という熟語での収録なし。段には、されはしやかたまりの意味があるので、ここでは、ひとかたまりの肉を指すか。『中阿含經』卷四十（梵志品

一）「復次、尊師阿蘭那為弟子說法、『摩納磨、猶如小段肉著大釜水中、下熾然火、速得消盡。如是、摩納磨。人命如肉消、甚為難得、至少少味、大苦災患、災患甚多。』」（『大正藏』一卷、六八三頁 b16-19）

⁹³ 哭…『大正藏』「北本」「南本」泣。「南本註」泣＝哭【三】。

⁹⁴ 過患…あやまち。『涅槃經疏私記』卷七、「一明諸有過患者。通論三惑別論四趣最重也。」（『新纂大日本統藏經』三七卷、七九頁 24）『法華玄義釋籤』卷九に、「菩薩發心本破自他諸有過患。過患者何、謂一一有各有三惑及以業相。」（大正藏三三卷、八七九頁 b8-9）

⁹⁵ 一切行雜…宋・智円述『涅槃經疏三德指歸』卷四「長行中經、一切行雜者、即向經云、當觀諸行、猶雜毒食也。遠師云、汝觀一切行雜、勸其觀苦。諸法無我、勸觀無我、無常不住、勸觀無常、此身多有無量過患。勸觀不淨、猶如水泡。」（『新纂大日本統藏經』三七卷、三六四頁 b20-23）

⁹⁶ 今…「北本」「南本」覆。

して涅槃を示したもうを知る。純陀よ、汝は今、当に聴くべし。娑羅娑鳥⁹⁷が（318随陽⁹⁸の鳥なり。若し此の方なれば、鴻鷹⁹⁹の属い。）春陽の月¹⁰⁰に皆共に彼の阿耨達池¹⁰¹に集まるが如く、（319四河¹⁰²の源なり。）諸仏も亦た爾かり、皆な是の処に至る。（319根熟の人を引き、同じく涅槃の海入ることを況う。）純陀、汝今諸仏の長寿短寿を思惟すべからず。（321化仏の身、衆生の機隨う。縁有らば則ち現じ、縁が盡きれば則ち滅す。此れ乃ち機に由りて、寿に由らざるなり。今涅槃を現じ、応に、寿と不寿を思量すべからず。）一切の諸法は、皆な幻相が如し。（322滅を示し、生を示すは、幻に同じ、化に同じ。）如来中に在して方便力を以て染著する所無し。（323生に染めず、滅に著さず。）何を以ての故に、諸仏の法も爾なり。純陀、我れ今汝の獻する所の供養を受け、汝をして於生死諸有の流¹⁰³を度せんと欲すが為の故なり。若し諸の人天、此に於いて最後に我に供養せん者は、悉く皆な当に不動の果報を得、常に安樂を受くべし。（323最後の施を以ての故に能く之を得ん。）何を以ての故に。我は是れ衆生の良福田なるが故なり。（327能く仏果を生じ、良田を以てを喩う。）汝若し復た諸の衆生が為に福田を策すと欲す者、速かに所施を辦ぜよ。久しく停るべからず。（328汝の今の施は、檀波羅蜜を具なえ、能く衆生の大福田と為すなり。）爾の時純陀、諸の衆生が為に度脱を得るが故に頭を低れ涙を飲みて、（329將に

⁹⁷ 娑羅娑鳥…(しやらしやちょう) 鶴のこと。『一切經音義』卷二十五「娑羅娑鳥(此云共行亦云白鶴)。」(『大正藏』五四卷、四六六頁b19)

⁹⁸ 随陽…該当なし。

⁹⁹ 鴻鷹…該当なし。

¹⁰⁰ 春陽の月…二月のこと。『觀彌勒上生兜率天經贊』卷二、「二月者、涅槃經第三十云、二月名春陽。春陽之月萬物生長。種植根栽花菓敷榮。江河盈滿百獸孚乳。是時衆生多生常想。為破此常說一切法悉是無常。唯說如來常住無變。於六時中孟冬枯悴衆不愛樂。陽春和液人所貪愛。為破衆生世間樂故演說。常樂我淨亦爾。言二月者、喩二種法身。謂自性身及智法身。冬不樂者喩於智者不樂如來無常入於涅槃。二月樂者喩於智者樂於如來常樂我淨。種植者喩聞法歡喜發菩提心種諸善根。」(『大正藏』三八卷、二九一頁c9-19)

¹⁰¹ 阿耨達池…『一切經音義』卷二十二、「恒伽河(準經香山頂上有阿耨達池。其池四面各流出一河。東面私陀河。從金剛師子口流出。其沙金剛。東入震旦國便入東海。南面恒伽河。從銀象口流出。其沙白銀。流入南印度便入南海。西面信度河。從金牛口流出。其沙黃金。流入信度國便入西海。北面縛葛河。從瑠璃馬口流出。其沙是瑠璃。流入波斯拂林便入北海。其池縱廣五十由旬。四面口各一由旬也。)(『大正藏』五四卷、四四六頁c15-18)

¹⁰² 四河…『大般涅槃經義記』卷二〈壽命品〉「出四河者、經說不定。或云出八、或復言出二十大河、各有所以。言出四者、此池在於香山之頂。於山四面有四獸頭。東方金象、口出恒河。南方銀牛、口中流出辛頭大河。西瑠璃馬、口中流出悉陀大河。北頗梨師子、口中流出博叉大河。」(『大正藏』三七卷、六五八頁b5-10)

¹⁰³ 流…「南本」漏。

施供を辨う¹⁰⁴が故、先に涙を飲みて後ちに其の不敏を辭す。而して仏に白して言わく、『善い哉、世尊、我れ若し福田に堪任する者¹⁰⁵と為すは、則ち能く如来の涅槃及び非涅槃を了知せん。我等今者及び諸の声聞・縁覚は、智慧猶お蚊蟻の如く、実に如来の涅槃及び非涅槃を量ること能ず。』(334 入與不入の機は、惟だ仏の了する所、我れの識微浅なる故に、量ること能わず。爾の時純陀及び其の眷屬、秋¹⁰⁶憂啼泣して如来を圍繞し、香を燒き花を散し心を盡して敬奉し、尋いで文殊と、座從り去り、食具を供辨う。(337 純陀、獻に閑¹⁰⁷れず、則ち是れの故に文殊ともに之れと同一に去る。其の去る未だ久しからざるに、是の時、此の地六種に震動し、乃至梵世も亦復た是の如し。

(梵、此れを淨という、乃至有頂、皆な名づけて梵と為す。今の一動、種の三界¹⁰⁸を徧くなり。地動に二有り。或いは、地動有り。或いは大地動。小動とは、名づけて地動と為す。大動とは、大地動と名づく。小小有る者を、名づけて地動と曰く。大小有る者を大地動と名づく。独り地動する者は、名づけて地動と曰わく。山河樹木及び大海の水一切の動ずる者を、大地動と名づく。一向に動ずる者、名づけて地動と曰く。周廻旋轉を、大地動と名づく。動は、地動と名づく。動ずる時は、能く衆生をして心を動かせしめん、大地動と名づく。菩薩初めて兜率天從り閻浮提に下る時、大地動と名づく。初生從り出家し阿耨多羅三藐三菩提を成じ、法輪を轉じ及び般涅槃を、大地動と名づく。今日、如来將に涅槃に入る、是れの故に此の地是くの如く大動す。(348 此の語、当に是れ仏説なるべし。集經の人、之を記して略すのみ。)時に諸天・龍・乾闥婆・阿修羅・迦樓・緊那羅・摩睺羅・伽人及び非人、是の語を聞き已りて、身毛皆な豎ちて、同じく声し哀泣して偈言を説く、稽首して調御に礼す。我等今勸請す。若し人仙¹⁰⁹を離れ、能く救護する者無く、今仏の涅槃を見て、我等苦海に没す。愁憂し悲悩を懷くこと、猶お懷の母を失い、跣¹¹⁰して託す所無く、有るいは若し¹¹¹、病に困る人、医無く自心に隨い、食すべかざる所を食

¹⁰⁴ 辨…「辨」辨と通ず。ソナウ、力を致す、支度をするの意有り。「正字通治裝就道曰辨嚴。」『大字典』。

¹⁰⁵ 者…「北本」「南本」時。

¹⁰⁶ 秋…愁に通ず。「北本」「南本」愁。ウレウ

¹⁰⁷ 閑…なれる。習熟している。

¹⁰⁸ 種三界…種には、品目・部類に分けられるものを数えることばという意味がある。古訓では、たぐい、いろいろという読みがある。

¹⁰⁹ 人仙…(2)人間のの中の聖者の意。調御師、人仙、懷母は、皆これ積尊の称号なり。隋・灌頂撰『大般涅槃經疏』卷五〈哀歎品三〉「初標調御師・人仙・懷母、即是略舉三事、為哀請之端可見。次猶如困病人下、作喪師譬(云云)。如國無君主下、作喪主譬(云云)。長者子下、作喪親譬(云云)。」(『大正藏』三八卷、六五頁24…27)

¹¹⁰ 跣…= 棲遑(せいこう) 心があわただしく不安なさま。

¹¹¹ 有若…若有(若し有るいは)か。これは、逆に「有るいは若し」とした。

すが如く、衆生の煩惱病、常に諸見の害するを為す。法の医師を遠離し、邪毒の薬を服食し、是れに由りて大医王よ、応に見て捨離すべからず。国の君主無くが如く、人民皆な飢餓し、我等亦た是くの如し。蔭及び法味を失い、今仏の涅槃聞きて、我等心迷乱し、彼の大地が動き、諸方の所に迷失し、大仙の入涅槃は、仏日の地に墜ち、法水悉く枯涸するが如く、我等帰る所無し¹¹²。如来の般涅槃、衆生皆な憂い頼す。譬えば長者有り、新たに其の父母喪くすが如し。如来の涅槃に入るは、必ず若し不還する者 我等及び衆生悉く救護有ること無し。如来の涅槃に入るは、乃至諸の畜生 一切皆な愁怖し、苦惱其の心を焦がし、我等今日に於いて、云何が愁悩せざるや 如来の見放し捨つるは、猶な涕唾を棄つるが如し。譬えば日の初出、光明甚だ暉き炎の如し。既に能く還りて自らを照らし 亦た一切の闇を滅す。世尊の光明は、能く我が煩惱処を除く。大衆の中に在りて譬えば須弥山の如し。世尊、譬えば国王の諸の子を生育せんに（368 教生¹¹³を稟く¹¹⁴なり）、形貌端正にして（369 正見を喩うなり。）心常に愛念し、先に技芸を教え（369 戒定慧を謂うなり。）悉く通利せしめ、然して後之を以て旃陀羅に付す¹¹⁵が如し。（370 旃陀羅¹¹⁶、此執悪と言う。死魔に況うなり。）世尊、我等今日法王子と為り、仏の教誨を蒙り已に正見を具す。願わくは放捨したまうこと莫れ。如其放捨せば、則ち王子に同じ。唯だ願わくは久住して、涅槃に入りたまはざれ。世

¹¹² 我等無所歸：「北本」「南本」ともに、我等定當死。

¹¹³ 教生：『涅槃經會疏』卷九「正觀漸増如嬰兒長大。先藉教生解、故言是醫最良。藥病不同、故言善解一切衆生。未聞經時、常處無明。故言我本處胎與母。藥者母、譬經教、藥譬常、與無常相治。病去解生、故言安隱。惑心既解、還歎於教、故言奇哉。」（『新纂大日本統藏經』三六卷、四七五頁c14…18）

¹¹⁴ 稟：「上からの授かりものを」受け取る。う…ける…う…く。賦与する。あた…える。あた…う。

¹¹⁵ 以之付旃陀羅 「南本」は棄之付旃陀羅。「北本」は、将付魁膾令殺。

¹¹⁶ 旃陀羅 唐・慧琳撰『一切經音義』卷二六（釈雲公撰『涅槃經音義』卷二六）「氣嘘旃陀羅、旃陀羅（此云執悪。生殺氣嘘、是名以氣嘘人即死。國人有罪合死即付之）。」（T54p.477b15）唐・慧沼撰『金光明最勝王經疏』卷五（王法正論品二〇）「言羅刹旃荼羅者。旃荼羅、此云嚴幟執守惡者。即羅刹中執悪之者。此意惡此尚護。況餘善者。」『大正藏』三九卷、三二五頁b4…6）。

唐・『法華經玄贊要集』卷二七「五所行圓滿者、遠離五種過、諸比丘所不應行。一、唱令家。有人犯法、將此罪人、巡歷郡邑叫唱、令人普知故。由習此事、佛不交過。二、姪女家。三、沽酒家。四、旃荼羅、此云執悪、亦名屠者。五、羯恥羅、此典獄、獄卒也。六、見微細罪。起大怖畏。為於小罪。生大怖畏。勿輕小罪以為無殃（云云）。」（『新纂大日本統藏經』三四卷、七六五頁b24…c5）

唐・法宝撰『金光明最勝王經疏』卷五（王法正論品二〇）「言羅刹旃荼羅者、旃荼羅此云嚴幟執守惡者。即羅刹中執悪之者。此意惡此尚護。況餘善者。」（『大正藏』三九卷、三二五頁b4…6）唐・窺基撰『表無表章詮要鈔』卷二、「（『集解』云、旃陀羅者此執悪。」）とある。（D29p.86a2）。窺基撰の『表無表章詮要鈔』には、「集解云」とあるが、現行の大正蔵の『集解』には、見当たらず。

尊、譬えば人有りて善く諸論を学び、復た此の論於いて怖畏を生ずるが如し。(374 先に学ぶは、是れ智、後に怖れるは、是れ愚なり。) 如来も亦た爾り。諸法に通達して、而も諸法に於いて、復た怖畏を生ず。(375 法の深しに畏れるに似るなり。) 若し如来をして久しく世に住して、甘露味を説きて、一切を充足せしめたまわば、是の如きの衆生は、則ち復た地獄に墮ちることを畏れず。世尊、譬えば、人有りて初めて作務を学ぶが如し(377 仏の初発心の時の衆生度を誓うを喩うなり。) 官の収める所と為す¹¹⁸ (378 衆生仏を感じるが故に。) 之を閉じて圜圍し¹¹⁸、(378 圜圍、姫周の獄¹¹⁹名なり。仏感化を以て三界に俯入す。故に之を以て閑を況う。) 人有りて之に、汝何事を受けんやと問う(379 人は、善知識を謂うなり。) 答えて言わく、我が今大憂苦を受く(380 衆生に病有るを以てして菩薩も亦た病む。¹²⁰) 若し其の脱するを得れば則ち安樂得ん。(381 衆生の悩、盡すを名づけて脱を得ると為す。大涅槃に入るは、是れ乃ち安樂。) 世尊は亦た爾り。我らの為に、故に諸ものの苦行を修め、我ら今は、猶おもた生死苦悩を免かれることを得ざる、云何が如来安樂を受くを得ん。(383 既に未だ得脱せざれば、如何が涅槃せん。) 世尊、譬えば医王の善く方藥を解するに偏えに秘方を以て其の子に教授

¹¹⁸ 為官所收…『大般涅槃經集解』卷六〈哀歎品3〉「又釋、以慈悲為官也。寶亮曰、謂佛不應負誓者。昔發四弘願、處生死度一切衆生、云衆生病愈。我病乃除、今我幸是可度之數。而佛息化、豈不違誓耶。慧朗述僧宗曰、初學菩薩、懷大慈悲、誓為衆生、不捨生死。生死之應、必不可免、如官所收。若衆生得度、佛乃安樂。云何今日、獨離苦惱耶。有人問者、餘大菩薩問始行也。」(『大正藏』三七卷、四〇〇頁b8:16)

隋・慧遠『大般涅槃經義記』卷一〈壽命品〉「第三請中。先喻。後合。喻中如人初學作務為官所收閉圜圍者。喻佛化始隨物在。有有人喻佛。本在因時始習化人。名學作務。感聖之機名之為官。感佛在有名官所收。恒隨不捨名閉圜圍。古舊方獄名為圜圍。有人問下喻化未訖不得自安。有人問之汝受何事。假問起發。同行之流名為有人。問佛在於三有所以。名受何事。答曰我今受大苦者。假答顯德。為物辛勸名受大苦。若其脫下喻明化訖方得受樂。下次合之。世尊亦爾合有人也。為我等故修諸苦行。合初學作為官所收。我等今者未免生死云何如來得受樂者。合有人問汝受何事答言我今受大苦惱。我未出苦。佛今正應為我受苦。云何捨我自受安樂。若脫受樂。略而不合。」(『大正藏』三七卷、六四二頁b12:26)

¹¹⁸ 圜圍…(レイゴ)ひとや。ろうや。圜、格子のはまつたろうや。圜、ろうや。罪人をとじこめる。閉じ込めて防ぐ。

唐・慧琳撰『一切經音義』(釈雲公撰『涅槃經音義』卷二五)「圜圍(上力丁反。下魚呂反。『玉篇』曰、所以禁人也。又云、囚也。『釋名』云、圜領、守繫者也。謂領囚徒禁繫之也。)」(『大正藏』五四卷、四六六頁b24)

¹¹⁹ 姫周之獄…未詳。

¹²⁰ 隋・灌頂『大般涅槃經疏』卷十二〈鳥喩品十四〉「如淨名說。衆生病故菩薩亦病。」(『大正藏』三八卷、一一二頁a3)。

隋・智顗說・唐・湛然略『維摩經略疏』卷六「故文云、菩薩疾者從大悲起。以衆生病故菩薩亦病。若衆生得不病者則菩薩無復病。」(『大正藏』三八卷、六五一頁a28…b1)

し、其の餘の外の受学の者に教えざるが如し。如来も亦た爾り。独りで甚深の秘密藏を以て、偏えに文殊に教え、我等を遺棄して憐愍を見せず。如来は、法に於いて応に慍慍¹²¹して、彼の医王の偏えに其の子に教えて、外より来る諸の受学の者を教えざるが如くなること無かるべし。彼の医の普ねく教えること能わざる所以は、情に勝負を存するが故に、秘惜有るなり。如来の心終に勝負無し。何の故に是くの如く教誨を見ざるや。唯だ願わくは、久しく住まりて般涅槃したまうこと莫かれ。(390 仏の慈有るも、不平等なるを譏る。)世尊よ、譬えば老・少・病・苦の人が善い徑を離れ、險しき路を行くに、路は險しく洪難¹²²なるに、苦悩を多く受けん。更に異人有り、之を見て憐愍し、即便ちに示すに平坦な好道を以てせんが如し。世尊よ、我れ亦た是くが如し。謂う所の少とは、未だ法身を増長せざる人を喩う。老とは、重い煩悩を譬う。病とは、未だ生死を脱せずことを況う。險路とは、二十五有を喩う。唯だ願わくは如来よ、我らを導き甘露の正道を示し、久しく世に住まり、涅槃に入りたもうこと勿れ。」と(396 時に、衆は、仏滅を以て実と為すが故に、種種に勧請す。)

爾の時に世尊、諸の比丘に告げたまわく、「汝等比丘よ、凡夫・諸の天人等の如く、愁憂啼哭すること莫れ。当に勤めて精進して心を正念に繋ぐべし」。時に諸の天人・阿修羅等、仏の所説を聞きて、止めて啼哭せず。猶お人有りて其の愛子を喪くし已て、殯送し訖りて抑止して啼かざるが如し。爾の時世尊は、諸の大衆が為に是の偈を説いて言わく「汝等当に意を開くべし 大いに愁苦すべからず 諸仏の法皆な爾り(402 感を盡くして真に帰すなり。)是れの故に当に默然すべし。不放逸行を樂い(403 持戒を教うるなり。)心を守りて正しく憶念し(404 定を修めしむるなり。)諸の非法を遠離し(404 慧の修するを勧むるなり。)意を慰めて歓樂を受けよ」「復次に比丘、若し疑惑有らば、今皆な当に問うべし。若しは空・不空(405 空は生死謂う。不空は是れ涅槃。)、若しくは常・無常(406 涅槃は是れ常、生死は是れ無常。)、若しは苦・非苦、(407 煩惱未だ盡さずを苦と為し、已に断ずるは非苦と為す。)若しは依・非依(407 如来藏とは、是れ一切法の所依¹²³。餘は、一切法の依りに非ざるが故に。)、若しは去・不去(408 正行は出離、之を名づけて去ると為す。邪行は沈没、名づけて去らずと為す。)若しは歸・非歸(408 三宝は是れ歸すべし。餘は、歸すべかざるが故に。)若しは恒・非恒(409 法報の二身に変易無しが故に、是れ恒なり。餘は、変易有るが故に、恒に非らず。)若しは断、若しは常(410 縁起を執するは、是れ無

¹²¹ 慍慍…ケンリン おしむ。けちけちする。

¹²² 洪難…陰難で歩みにくい。

¹²³ 唐・窺基撰『阿彌陀經疏』卷一「問、四土之中西方是何淨土。答、若法性土者、即是無垢真如、自性清淨第一義空、本來湛然不假修成、為一切法之所依止、無一佛出世間法不有、名性淨土。凡聖同有、凡夫尚隱、諸佛明顯。若自受用土、從三大阿僧祇所修善根萬行所感、其土淨與諸佛亦不可見、但可得聞、唯佛自受用。」
(『大正藏』三七卷、三二一頁b19…26)

為。有を執ずる自性を断じれば常と名づく。）、若しは衆生・非衆生（411未だ仏性を見ざるを、名づけて衆生と為す。已に見性すは、衆

生に非ざると名づく。）、若し有、若し無（411生滅は有と為し、不生不滅は、無と為す。）、若しは実・不実（412一乗は是れ実、二

乗は実に非らず。¹²⁴）、若しは真・不真、（412聖諦は真と為し、俗諦は真に非ず。）、若し滅・不滅（413化身に滅有り、法身に滅無

し。）、若し密・不密（413究竟説とは密為り。非究竟説は、非密為り。）、若し二不二、（414世諦に二有るも、真諦は不二なり。）、是く

の如く等種種の法の中、疑する所有者は、今応に諮問すべし。我れ当に隨順し汝が為に之を断ちて、亦た当に汝が為に先に甘露を説き

て、然後して乃ち当に涅槃に入らん。（416此れ疑を擧げ、以て問いを勧めるなり。若し疑有りて問わざれば、則ち仏の在ますは益無し。

若し疑問を決了すれば、則ち仏は是れ常と知る。）、諸の比丘、仏の世に出で難し、人身得難し、仏に値いて信生ず、是の事亦た難し、能く忍

び忍び難し、是れ亦復難し。禁戒を成就し、具足無缺にして、阿羅漢果を得は、是の事亦た難し、金沙や優曇鉢花を求むるが如し。（42

0前は、五難¹²⁵を喩うなり。）、汝諸の比丘、八難を離れ、人身得難し。（421八難とは、一、地獄。二、畜生。三、餓鬼。四、人中盲啞。

五、世智辯聰。六、生仏前後。七、生鬱單越。八、生長寿天。）、汝等我れ遇いて、応に空しく過ぎるべからず。我往昔に於いて種種の苦行を

し、今是くの如く無上の方便を得う。汝等が為が故に無量の劫中、身・手・足・頭・目・髓・腦を捨つ、是れの故に汝ら応に放逸すべから

ず。（425勤修を勧むるなり。）、汝ら比丘、云何が正法の宝城を莊嚴し種種の功德珍宝を具足せしむるや。戒・定・智慧を以て、牆・

塹・俾倪と為す。（427俾倪¹²⁶とは、孔の中に於いて非常の事を伺い望むことを謂う。戒、牆に沉うなり。以て非を防ぐが故に。定は、塹

を譬うなり。境の深¹²⁷しを取るが故に。慧は、俾倪を喩う。是れ見性の故に。）、汝今是の仏法宝城に遇て、応に此の虚偽の物を取るべから

ず。（428二を取らば、涅槃、虚偽と為すなり。）、譬えば商主の真の宝城に遇うが如し、諸の瓦礫を取りて、而便ち家に還る。汝亦た是

¹²⁴ 一乘は實、二乗非實 唐・窺基撰『妙法蓮華經玄贊』卷一〈序品〉に、「顯時機中有二、一、顯時、二、顯機。初顯時者、諸佛設教略有二種、一、頓、二、漸。頓即被彼大機、頓從凡夫以求佛果、如『勝鬘經』所說一乘、一乘是權、四乘實故。漸即被彼從小至大機、如此經中所說一乘、一乘是實、二乘權故。此經多被從彼二乘以求佛果、多是漸教大乘所攝。」（『大正藏』三四卷、六五五頁a2:8）

¹²⁵ 五難…謂三塗及鬱單越長壽天等。唐・李師政撰『法門名義集』卷一「生善處對治五難。謂三塗及鬱單越長壽天等。值善人對治佛後難。發宿心願治世智辯聰。值善根治盲聾暗啞。」（『大正藏』五四卷、二〇四頁b4:6）

¹²⁶ 俾倪…『一切經音義』卷25、「俾倪（上普米反）下五禮反玉篇又作隣塊埤蒼廣雅並云城小牆又釋名云於牆孔中伺候非常之事今詳此字有其二種一者伺候二者垣墻垣牆不合從人伺候豈宜從土若是垣墻應為埤塊若取伺候應作俾倪兩文二義不失諸宗故也。」（『大正藏』五四卷、四六六頁c4:6）

¹²⁷ 隋・古藏『法華義疏』卷六〈譬喻品三〉「『隣齧』者、六根起貪取境深重、如隣齧也。」（『大正藏』三四卷、五三五頁a2:3）

くの如し。宝城に値い遇て、虚偽の物を取る。汝諸の比丘、下心を以て而知足を生ずる勿れ（431小果に住むは、是れ下心なり。）。汝ら今は、出家を得ると雖も、此の大乗に於いて貪慕を生ぜざる（432出家とは、始学の初名。真に渉るの極路に非らず。）。汝諸の比丘、身に袈裟・染衣を服することを得と雖も、其の心猶未だ大乘の清浄の法に染まるを得ず。汝諸の比丘、乞食を行じて多处を経歴すと雖も、初より未だ曾て大乘の法食を乞わず。汝諸の比丘、鬚髪を除くと雖も、未だ正法の為に諸の結使を除かず。（436上自り皆な是れ其の昔の解を奪い捨てさせしめ、迷を封ずるなり。）。汝諸の比丘、今当に真実を汝等に教勅すべし（437新しい伊の涅槃を示さんと欲するが故に真実に教勅すと云う。）。我れ今見在、大衆和合し、如来の法性、真実に不倒なり（438三宝の縁具わるを明し、是れ学ぶべきの時なり。）。是れの故に、汝等、应当に精進して、摂心し勇猛にして諸の結使を摧くべし。十力の慧日、既に滅没し已らば、汝等当に無明の覆す所と為すべし。諸の比丘、譬えば大地諸山の藥草の如く（441山は法性を況い、草は万善を喩う。）。衆生の用と為し（442譬えば能く物の患を除くが如くなり。）。我れの法も亦た爾り。妙善甘露の法味を出生して、而して衆生の種種の煩惱病の良藥と為す。我今当に一切の衆生及び我が子、四部の衆をして（444四は道俗の男女を謂うなり。）。悉く皆な秘密蔵の中に安住せしむべし。（445涅槃の道、二乗の境に非らざるが故に秘蔵と云う。）。我れ亦復た当に是の中に安住し涅槃に入るべし。（446我れも亦た秘蔵に随住すと言うは、身智を化滅し、涅槃に入るなり。）。何等を名づけて秘密の蔵と為すや。猶お伊字の三点の如し。若し並びて則ち伊に成らず、縦も亦た成らず（448婆羅門の伊字三点は上に一つ下に二つの狀に合成し、鼎の足の如し。若し並び若し從、三点有ると雖も、皆な字に成らず。）。摩醯首羅の如く、面の上に三つの目、乃ち伊に成るを得ん。（449此の天の三目は、一は、額の中在りて、世の伊字の如く從に並ぶに非ざるなり。）。三点若し別つて、亦た成を得ざらん。（450三点処を異えば、則ち字と成らず。）。我れ亦た是くの如く解脱の法は、亦た涅槃に非ず。如来の身も亦た涅槃に非ず。摩訶般若も亦た涅槃に非ず。三法は各異なるも亦た涅槃に非ず。（453夫れ涅槃を証する者は、能証の身、智慧の用有ることを要す。又た須からく煩惱等を滅し三法を具足することを涅槃を証す名づく。此の三各別して、未だ断証有るは涅槃に非ずなり。）。我れ今是くの如くの三法に安住して（454応ぜざる感無くことを、名づけて法身と為す。照わざる境無くを称じて般若と為す。盡さざる累無くことを是れ解脱と名づく。三法円備して、即ち是れ涅槃。）。衆生が為の故、涅槃に入るを名づけて（455身智の滅するを示すなり。）。世の伊字の如し。（456三点を以て三法を喩う。）。)

爾の時、諸の比丘は仏世尊の定んで当に涅槃すを聞き、皆な悉く憂愁す（458捨して応に本に歸す。長らく物と與に隔くが故に憂が生ずるなり。）。身の毛豎と為し、涕淚は目に盈れ、仏足に稽首し、無量の匝を遶り、仏に白して言わく、「世尊、快いで無常、苦空、無我を説かん。（460無常の故に空、空の故に無我。）。世尊、譬えば一切の衆生の跡の中に象の跡の上と為すが如し（461象は常に喩い、迹は無

常を況うが故。象の迹を尋して、以て象の体を得る。無常の用を尋して、以て常に至る。是れ無常の想も亦復た是くの如し、諸想の中に於

いて、最も第一と爲す。(462能く三界の欲愛慢を除くを謂うなり。)¹²⁸若し精勤に之を修習する者有らば、能く一切の欲界の欲愛・色無

色の愛・無明・憍慢、及び無常の想を除く(464想は智を証すを謂うなり。)¹²⁹。世尊、如来若し無常の想を離るれば、今則ち心に涅槃

に入るべからず(465此れ昔の説を引き以て今を難するなり。若し世尊久しく無常の想を離るれば、何の故に今日方に般涅槃す。)¹³⁰。若

し離れずんば、云何ぞ説きて、「無常の想を修して、三界の愛・無明・憍慢、及び無常の想を離る」と言うか(468此で今の説を引き

以て昔を難するなり。若し無常の想を修して、無常の想を離ること能わず者、則ち昔能く是の虚妄を離るを言うなり。)¹³¹。世尊、譬えば農

夫の秋月の時に、深く其の地を耕し、能く穢草を除くが如し。(469此れ無常の勝用を歎ず。草穢は愛慢を況うなり。)¹³²是れ無常の想も、

亦復た是くの如し(470夫れ空解必ず有に因りて、不可得の空有り。何を以て空とす。空有既に除かば、二想俱に滅す。)¹³³能く一切の欲

界の欲愛、色無色の愛・無明・憍慢、及び無常の想を除く。世尊、譬えば田を耕すに、秋耕を勝と爲すが如く、諸跡中、象の跡を勝と爲す

が如し、諸想の中に於いて無常の想を勝と爲す。(474勝義、常を生ずるが故に。)¹³⁴世尊、譬えば帝王の命將に終えるを知りて、天下の

獄囚繋閉を恩赦し、悉く得脱せしめ、然後に捨命するが如し。如来今者、亦た応に是くの如く、諸の衆生の一切無知・無明繋閉を度して、

皆な解脱せしめ、然後に乃ち般涅槃に入る。我ら今は、皆な未だ得度せず、云何が如来便ち放捨することを欲し涅槃に入らんとす。(47

8若し衆生を棄て涅槃に入るは、是れ愛の心を兼ねること無し。云何が見捨て、將に涅槃に入らんとす。)¹³⁵世尊、譬えば人有りて鬼の所持と

爲すが如く、良い呪師に遇て、呪力を以ての故に、便ち除差を得ん。如来亦た爾り。諸の声聞が爲に無明の鬼を除き、摩訶般若・解脱等の

法に安住を得させしむ。世の伊字の如し。世尊、譬えば香象の人の縛する所と爲すが如く(482象、菩薩に喩う。)、¹³⁶良師有ると雖も

(483魔王を況うなり。)、禁制すること能わず、頓トに羈鎖ニを絶ちて自ら恣にして去らんが如し。(484此れ菩薩を喩う。煩惱を

絶ちて棄て、如来の於世に久住すること籍りず。)¹³⁷我ら未だに爾が爲に五十七の煩惱繋縛を。(485見惑に四十四諦有り、各十の故に。欲

愛に貪瞋・慢・無明・俱生・身辺見の六つ有り。上の二界各五、瞋・無明住地を除く。一に合わせて五十七なり。)¹³⁸云何ぞ如来、便ち放捨し

¹²⁸ 原文は頓。頓の異体字。

¹²⁹ 羈鎖…キサ。羈はおもがい、馬をつなぎとめるため、馬の頭部から頰にかけてつける組ひものこと。たづな。鎖はくさり。転じて自由を拘束する、束縛の意。

晉葛洪『神仙傳劉安』安以凡才、少好道德、羈鎖世務、沉淪流俗。宋・智円述『涅槃玄義發源機要』卷二「羈鎖者、革絡馬頭曰羈。釋名曰、羈檢也。所以檢持制之也。」(『大正藏』三八卷、二五頁a22-24)

て、涅槃に入りたまわんと欲する（486 声聞の人、菩薩に同じからず、能く煩惱を脱し、故に住を勧めるなり。）。世尊、人の瘡¹²⁶を病み（487 業起るも恒ならざるが故に、之を況えるに瘡疾を以す。）、良医に値遇して、苦む所除くことを得るが如し。我も亦た是くの如し。多くの諸の苦・邪命熱病を患い、如来に遇うと雖も、病未だ除愈せず、未だ無上の安隱常樂を得ず。云何ぞ如来、便ち欲放捨して涅槃に入りたまわんと欲する。世尊、譬えば如醉人の自ら覚知せずして（491 酒は煩惱を況い、人は比丘を喩う。其の覺了すること能わざるを言う。自体の実、此れ真を知らざるを譬うなり。）、親疎・母女・姉妹を識らず（492 妄と知らざるを況うなり。）、迷荒姪乱（492 倒想を起すを喩う。）、言語放逸（493 発する所の業を譬うなり。）、糞穢の中に臥するが如し（493 生死を喩うなり。）。時に良師有り、藥を與え服せしめ（494 良師は仏を譬い、藥は教法を況う。）、服し已りて酒を吐き（494 煩惱を断ずるを喩うなり。）、還りて自ら省識して（495 真を知り妄を識るなり。）心に慚愧を懷き、（495 迷荒¹²⁷を愧じるなり。）深く自ら剋責¹²⁸す（496 前の非を悔いるなり。）。酒は不善にして諸惡の根本為り（496 煩惱は衆惡の源と為すなり。）。若し能く除断せば、則ち衆罪を遠ざく（497 煩惱若し断ずれば、則ち衆惡咸く滅す。）。世尊、我れ亦た是くの如し。往昔より已来、生死を輪転して、五欲を貪嗜す（498 昔の過を明すなり。）。母に非ざるに母と想い、姉に非ざるに姉と想い、女に非ざるに女と想い、衆生に非ざるに於いて衆生の想を生じ、是れの故に輪転して生死の苦を受く、彼の醉人の糞穢の中に臥するが如し。如来、今当に我に法藥を施して、我をして煩惱の惡酒を還吐せしむべし（502 合せて服し已らば酒を吐くなり。）。而も我れ未だ醒寤の心を得ず（502 未だ煩惱断ぜざるを喩うなり。）。云何ぞ如来、便ち放捨して、涅槃に入りたまわんと欲す。

世尊、譬えば人有りて、芭蕉樹を歎じて、以て堅実と為すも、是の処り有ること無きが如し（504 芭蕉堅からず、亦た猶お身の無我の如し。）。世尊、衆生も亦爾り。若し我・人・衆生・壽命・養育・知見・作者・受者を、是れ真実と歎ぜんこと、亦た是の処り無し。我等

¹²⁶ 瘡…おこり。病氣の名前。一定の周期で高い発熱を伴う病氣。唐・道暹述『涅槃經疏私記』卷七「瘡譬疑者。或發不發。又或寒或熱。如疑。猶影疑自疑他等。」（『新纂大日本統藏經』三七卷、二五九頁b17-18）

¹²⁷ 迷荒…荒迷の倒置か。荒は慌に通ず。生活がすさみ、迷う。『大正蔵』では、兩方の用例がある。意味に大きな違いは見られない。『長阿含經』卷十「阿難、此十二因緣難見難知、諸天、魔、梵、沙門、婆羅門、未見緣者、若欲思量觀察分別其義者、則皆荒迷、無能見者。」（『大正蔵』一卷、六〇頁b10-12）『普曜經』

卷八「佛有沙門名曰安陸、遣行宣法開化未聞、五濁之世人心荒迷不達至真。」（『大正蔵』三卷、五三三頁c10-11）『大莊嚴論經』卷十五「心常耽五欲、迷荒不能覺、心既不調順、云何得寂靜」（T04 p.347a8-9）。

¹²⁸ 剋責…きびしく責めつける。「剋責」に同じ。

是くの如く無我の想を修す。世尊、譬えば漿滓の復用する所無きが如し（507無我的用なり）。是の身も亦た爾り。我無く、主無し。世尊、七葉花の香氣有ること無きが如し（509無我的体なり）。是の身も亦た爾り。無我無主なり。我等是くの如く心常に無我的想を修習す。仏の説く所の如く、一切諸法は、我・我所無し（511我、尚お心得るべからず。我所、何を心得るべし¹⁵⁴。所・我兼ねて忘れるが故に慢無しなり）。汝諸の比丘、応当に修習すべし。是くの如く修し已らば、則ち我慢を除き、我慢を離れ已りて、便ち涅槃に入る（512昔の教今の教俱に、世尊説きたまわる。昔の教既に非られば、今何を必ず是れなり。故に昔の教を執す。今に取決す）。世尊、譬えば鳥の跡の空中に現ずること、是の処り有ること無きが如し。能く無我的想を修習する有るものに、而も諸見有ること、亦た是の処り無し（515我想有るとは、則ち見取有り。無我的故に、無想は則ち無見なり）。

516爾の時、世尊諸の比丘を讃えて、「善哉、善哉、汝等善能く無我的想を修す。」（517其の所執を別つが故に、之れを称歎す。）時、諸の比丘即ち仏に白して言わく、「世尊、我等但だ無我的想を修するのみならず、亦た更に其の餘の諸想を修習す。所謂苦想・無常想・無我想なり。世尊、譬えば人の酔いて其の心を瞑眩¹⁵⁵して（520悶惑¹⁵⁶の状なり）。諸の山河・石壁・草木・宮殿・屋舎・日月・星辰の皆な悉く廻転するを見るが如し（521声聞の人、菩薩の非常の中に於いて妄りに常執を生ずを謂う。猶お醉人の転ぜざる中に於いて、而も転じる想を生ぜるが如し）。世尊、若し苦・無常の想・無我等の想を修せざる有れば是くの如き人を、名づけて聖と為さず。諸の放逸多くして、生死に流転す（524無常・苦・空・無我を修せざれば、則ち生死に流転し、聖人に非ざるなり）。世尊、是の因縁を以て、我等善く、是の如き諸想を修す。」（525能く生死を離れるを以ての故に修す。）

526爾の時、仏、諸の比丘に告ぐ、「諦かに聴け、諦かに聴け。汝向に引く所の醉人の喩えは、但だ文字を知りて、未だ達其の義達せず（527声聞の人、空無常を觀じて、以て実諦と為す。未だ真我は是れ仏と知らざるが故、達せずと云う）。何等をか義と為す。彼の醉人

¹⁵³ 我尚不可得、我所何可得…もとは、『維摩詰所説經』の中の一句ではないだろうか。『維摩詰所説經』卷二「普守菩薩曰、「我、無我為二。我尚不可得、非我何可得、見我實性者、不復起二、是為人不二法門。」」（『大正藏』十四卷、五五一頁a13-15）

¹⁵⁴ 瞑眩…「北本」惛眩。「北本註」惛||瞑【三】。「南本」眩亂。隋の慧遠撰『大般涅槃經義記』卷二に、「人喩凡夫及諸菩薩。癡惑亂心説之為醉。心志濁悶名為瞑眩。」（『大正藏』三七卷、六四七頁a37a）とある。慧遠の『義記』は、「北本」に依拠した注釈書である。そのためか、韋諡注と同じ瞑眩の字を使用している。あるいは、韋諡が慧遠を参照したからの可能性もある。特に、慧遠の「心志濁悶、名為瞑眩」の一句の中で、悶という表現を使用しているところが、韋諡が「瞑眩」を注して「悶惑の状」と記していることと何らかの関連があると思われる。

¹⁵⁵ 悶惑…未詳。

の、上の日月の、実は廻転に非ざるを見て、廻転の想を生ずるが如し（529 仏果は是常なるも、而して無常と計¹⁵⁶す。猶お醉人の非転処に於いて転想を生ずが如し）。衆生も亦爾り。諸の煩惱無明の為に覆はれ、顛倒心を生じて我を無我と計し、常を無常と計し、浄を不浄と計し、楽を計して苦と為し（531 妄りに計執を生じ、真我らに達せず）。此の想を生ずと雖も、其の義に達せず。如彼の酔人の、非転処に於いて転想を生ずるが如し。

我とは即ち是れ仏の義（533 報仏は是れ法なり。仏の妙用は能く一切の法を生ず。故に是れを仏の義と言う）。常とは、是れ法身の義（534 法身は寧¹⁵⁷然として恒住し、能く二身とともに所依と為すが故に常と云うなり。二身は機に随い、滅を起こし得ざるを、常と名づく）。楽とは、是れ涅槃の義（536 法身は生死の二つを離れ、無餘涅槃を証得するが故に楽と云うなり）。浄とは、是れ法の義（536 法は非法を離れるが故に名づけて浄と為す）。汝等比丘、云何ぞ而も、「我想有るは、憍慢貢高にして、生死に流転す」と言うや。汝等、若し我も亦た無常・苦無我等の想を修習すと言わば、是の三種の修は実義有ること無し（539 汝の三修、是れ昔の權教なり。昔を以て今に對するは、実義に非ざるなり）。我れ今当に勝の三修法を説くべし（540 勝者は、大乘の三修を謂うなり）。苦なる者を樂と計し、樂なる者を苦と計す、是れ顛倒の法なり。無常を常と計し、常を無常と計す。是れ顛倒の法なり。無我を我と計し、我を無我と計す。是れ顛倒の法なり。不浄を浄と計し、浄を不浄と計す。是れ顛倒の法なり。是の如き等の四顛倒の法有り。是の人正しく諸法を修することを知らず（544 正は、常・樂・我・浄を謂うなり）。汝諸の比丘、苦法の中に於いて樂想を生じ、無常の中に於いて常想を生じ、無我の中に於いて我想を生じ、不浄の中に於いて浄想を生ず（546 夫れ倒は必ず起と對う。若し樂中に苦想等を生ざれば、必ず苦中に樂想等を生ず）。世間にも亦た常・樂・我・浄有り（547 非我を我等に計うを謂う）。出世にも亦た常・樂・我・浄有り（548 眞の常、眞の樂等を謂う）。世間法とは、字有て義無く（549 苦中に樂等を見るを謂う）。出世間とは、字有り義有り（550 我れは是れ仏の義等を知

¹⁵⁶ 計：思い込むこと。まちがって考えること。執着。『大般涅槃經集解』卷十八「此下先明苦中生樂想之倒也。乃未應辨非苦中苦想。今顯其倒緣。有此計者。謂必得理。遂於生死之中。橫計樂想故也。」（『大正藏』三七卷、四四七頁210）
¹⁵⁷ 寧の異体字。『漢魏六朝碑刻異體字典』六四八頁。『高麗大藏經異體字典』二一六頁。

れりを謂う。）。何を以ての故に。世間の法に四顛倒有るが故に義を知らず。所以は何ん。想倒¹³⁸・心倒¹³⁹・見倒¹⁴⁰有り（551是非を分別すを、名づけて想倒と為す。謬りて理に縁ずるは、此れを心倒と為す。仏の無常を執すは、是れ見倒と為す。）三倒を以ての故に、世間の人は、樂の中に苦を見、常に無常を見、我に無我を見、淨に不淨を見る。是れを顛倒と名づく（553仏地の中に、四倒を起すを謂うなり。）。顛倒を以ての故、世間は字を知りて而も義を知らず。何等をか義と為す。無我とは、名づけて生死を為す（555生死は不自在なるが故に無我と知るなり。若し我有らば、応当に自在なるべし。）。我とは名づけて如来と為す（556如来に八自在有り、故に名づけて我れと為し得るなり。）。無常とは、声聞・縁覺なり（557二乘に生滅有るが故に無常なり。）。常とは、如来の法身なり（557法身に生滅無し。故に常と名づく。）。苦とは、一切の外道なり（558因苦果苦なり。）。樂とは、即ち是れ涅槃なり（558体は寧靜なる故に。）。不淨とは、即ち有為法なり（559一切有漏之法を謂うなり。）。淨とは、諸仏菩薩の有する所の正法なり（560一切の無漏道法を謂うなり。）。是れ不顛倒と名づく（560見正して無倒なり。）。不倒を以ての故に、字を知り義を知る（561言を体し旨を識るを、字義を知ると為す。）。若し四顛倒を遠離せんと欲せば、応に是くの如きの、常・樂・我・淨を知るべし（562能く四徳を知らば、則ち四倒復たび無し。）。

時に、諸の比丘、仏に白して言わく、「世尊、仏の所説の如く、四倒を離るれば、則ち常・樂・我・淨を了知することを得。如来は今者、永く四倒無ければ、則ち已に常・樂・我・淨を了知したまう。若已に常・樂・我・淨を了知せば、何が故ぞ住まること一劫半劫して、我等を教導して四倒を離れしめたまわずして、而も放捨せられて、涅槃に入らんと欲したまう。如来若し顧念教勅せられれば、我れ当に至心に頂受して修習すべし。如来若し於涅槃に入りたまわば、我等云何ぞ是の毒身と、同じく共に止住して梵行を修せん。我等も亦た当に仏世尊に隨いて涅槃に入るべし。」（570若し住世せざれば、則ち涅槃に入ること隨う。住まることを勧むるに誠は深し、敢えて死を以て請う。）

¹³⁸ 想倒…「北本」「南本」想顛倒。「南本註」顛＝傾【宋】【元】。『大般涅槃經集解』卷七「想倒者、想以取假為義。謬執不得法實。憶想推求。由此起倒也。」（『大正藏』三七卷、四〇五頁 a23-25）

¹³⁹ 心倒…『大般涅槃經集解』卷七「心倒者、第六意識。能緣於理。先由心緣。而後起倒也。」（『大正藏』三七卷、四〇五頁 a25-26）

¹⁴⁰ 見倒…『大般涅槃經集解』卷七「見倒者、見能審法。由審成倒。」（『大正藏』三七卷、四〇五頁 a26-27）

爾の時、仏諸に比丘に告げたまわく、「汝等、是くの如き語を作すべからず。我れ今有する所の無上正法を、悉く以て摩訶迦葉に付嘱す（572 独り迦葉に付すとは、彼も亦た有る一時能く匡化¹²¹するが故に。）」。是の迦葉は、当に汝等の為に大依止と作るべし。猶し如來の諸の衆生為に、依止処と作るが如し。摩訶迦葉も亦復た是くの如し、当に汝等が為に、依止処を作る。譬えば大王の統領する所多くが如し、若し遊巡の時、悉く国事を以て、大臣に付嘱す。如來も亦た爾り。所有正法を、亦た以て付嘱す。摩訶迦葉。汝等当に知るべし。先の修習する所の、無常、苦想は、是れ真実に非ざる。（578 前は権、後は実を知るを勧むるなり。）譬えば春の時の如く（579 行を起す時を喻うなり。）諸の人等有りて（579 聞衆を譬うなり。）大池にりて浴す（580 塵垢を洗うなり。）。船に乗りて遊戯し（580 權教に依るなり。）琉璃の宝を失いて、（580 常理は珍とすべしが故に之を況うるに宝を以てす。）深水の中に没す（581 無常の教に隠れるが故に水に没すと云う。）。是の時に諸人（581 權を求めて人に教えるなり。）悉く共に入水に入りて（582 俱に無常を觀するなり。）。是の宝を求覓し（582 常旨を求むるなり。）競いて瓦石・草木・沙礫を捉え、各各自ら「琉璃珠を得」と謂いて（583 妄を計りて以て真実と為すなり。）歎喜して持ち出して、乃ち真に非ざるを知る（584 龜重縛¹²²を離れるを、名づけて持ち出すと為す。猶お相染¹²³に拘わるを、是れ真に非らざると曰う。）。是の時宝珠猶お水中に在り（585 真常の旨は、昔教の中に隠れるを言う。）珠の力を以ての故に水皆な澄清なり。（586 珠の力は常性を況うなり。澄清は聞經して信を生むを謂う。）是ここに於いて大衆（586 大乘の人を謂

¹²¹ 匡化…匡化という言葉は、『大漢和辞典』『漢語大詞典』にも採録されておらず。しかしながら、『大正藏』では、用例がある。下記の用例に依れば、正して（教）化する意であろう。『大般涅槃經義記』卷二「問曰、下說一切聲聞及大迦葉悉常無常。應以大乘付諸菩薩令法久住不付聲聞。今云何言無上正法悉付迦葉。釋言、付法分別有三。一約時分別。時有二種。一始終常付。付諸菩薩。以諸菩薩常能受持流布不絕。所以偏付。聲聞弟子大迦葉等悉皆無常不能流通。所以不付。二隨時別付。通付聲聞及諸菩薩。如付法藏說。聲聞弟子雖復不能常流法化。亦能一時匡化益物。故通付之。今言正法悉付迦葉。義當後門。以彼迦葉佛滅度後二十年中弘通正法。所以付之。下言大乘付諸菩薩。義當前門。」（『大正藏』三七卷、六四八頁c1～六四九頁a4）

¹²² 龜重縛…そじゅうばく。唯識の用語である。二つの束縛（相縛・龜重縛）の一つ。深層心である阿賴耶識が煩惱の種子に束縛されたありようをいう。對比する相縛は、表層心が心の中に生じた相（觀念・表象）によって束縛されたありようをさす。この二つの束縛から解脱するためには、止觀の修行が必要とされる。

（『唯識 仏教辞典』六二七頁。）龜重という仏教用語があるが、ただ煩惱に束縛されていることを指しているのみである。相縛という言葉は出てこないが、そのあとに続く「拘相染」という言葉は、汚染された相にとらわれるという意味で理解できるのではないか。相縛の同義語とみなすことができるのではないだろうか。出典は、下記の文中の偈頌に見られる。『瑜伽師地論』卷五九「修奢摩他故。修毘鉢舍那故。能斷煩惱。若諸相縛已得解脫。諸龜重縛亦得解脫。當言已斷一切煩惱。如世尊言、相縛縛衆生 亦由龜重縛 善雙修止觀 方乃俱解脫」（『大正藏』三〇卷、六二八頁c37）

¹²³ 相染…相縛と同義で使用されているのではないだろうか。

うなり。）、乃ち宝珠の故水下に在るを見ること（587教に依りて聞見するも、未だ親しく証を得ざるが故に下に在ると云う。）、猶お仰ぎて虚空の月形を觀るが如し（588真理は円明にして、喩うるに空の月の如し。）。是の時衆の中に一りの智人有り（589教に依りて行を起す人を謂うなり。）、方便力を以て安徐として水に入り（589無常の中に於いて、常理を諦觀す。）、即便ち珠を得るが如し（590常理を証するなり。）。汝等比丘、是くの如く無常・苦・無我想・不淨想等を修習して、以て実義と為すこと、如彼の諸人の、各瓦石・草木・沙磧を以て、宝珠を為すが如くなるべからず。汝等、应当に善く方便を學して、在在処処に、常に我想、常・樂・淨の想を修すべし。復た应当に知、先より修習する所の四法の相貌、悉く是れ顛倒と知り、真實を得んと欲し、諸の想を修す者は、彼の智人の、巧に宝珠を出すが如くすべし。謂う所の我想、常・樂・淨の想なり。』

爾の時、諸の比丘仏に白して言わく、「世尊、如仏先に、諸法無我なり、汝当に修學すべし。是れを修學し已りて、則ち我想を離る。我想を離るれば、則ち憍慢を離る。憍慢を離るれば、涅槃に入ることを得と説きたまうが如き、是の義云何。』（600若し我有りて真と為さば、無我、実に非ず。世尊は昔時、何の故に言いて、我をして謬り取らせしまざるや。二説に相違あるが故に、斯の問いを起す。）仏、諸の比丘に告ぐ、善い哉善い哉。汝は今善能く是の義を諮問して、自らの為に疑を断ぜんとす。（602無私の理は、邪に於いては、藥と為し、真に於いては病と為す。故に須く昔は讚えも、今は毀るべきなり。）譬えば、国王の闇鈍少智なるが如しに、（603王は比丘を喩うなり。）一医師有り、性は復た頑固なり、（603医は、邪教を説く者を況うなり。心、正法を測らざるを頑と為す。口、中道を談せずを器と為す。）而して王は別れずして（605邪を正と混ぜるなり。）、厚く俸禄を賜まり（604供養を加えるなり。）、衆の病を療治するは、純ら乳藥を以す（605乳は、邪我を況うなり。）、亦復た病の起きる根原を知らずして、乳藥を知ると雖も、復た、善く解せず（606我に真偽有ると知らずなり。）。或は、風病・冷病・熱病有りも（607風は、瞋を喩い、冷は癡を況い、熱は貪を譬う。）一切の諸病（608八万四千の塵勞を喩うなり。）、悉く乳を服せるを教える。（608純ら邪我を説くなり。）是の王別たずして、是の医は、乳の好醜・善惡を知るとす（609邪我は、諸煩惱を増し、正我は、能く無明を滅す。）復た明医有り。（610仏を喩うなり。）八種の術エムを曉り（610一、病を識る。

ニ 八種術：『一切經音義』卷二五「八種術（一、治身、二、治眼、三、治瘡、四、治小兒、五、治鬼、六、治毒、七、治胎、八、占星。見注涅槃經）」（『大正藏』五四卷、四六六頁c18）。

隋・慧遠『大般涅槃經義記』卷二（壽命品）「曉八術者、喩佛如來明識根藥。何者八術。一、知病體。二、知病因。三、知病相。四、知病處。或在五臟或在支節。五、知病時。平旦發者是如此病。如是等也。六者、知藥。識其藥體。七者、知治。知如此藥治如是病。八者、知禁。知如是病、服如是藥、忌如是食、如是等也。善療知方、八中差別。」（『大正藏』三七卷、六四九頁c88～六五〇頁a5）。唐・道暹『涅槃經疏私記』卷二「依阿含經。一、知病體、喩佛能知煩惱輕重。二、知病

二、病因を知る。三、病相を知る。四、病処を知る。五、病時を知る。六、薬を知る。七、療を知る。八、禁を知る。）、善く衆病を療し（611衆生の根性を知るなり。）、諸の方薬を知り（611我・無我的教えを況うなり。）、遠方より来たる（612遠方は浄土を謂うなり。）。是の時に旧医の諮受を知らず。反って貢高輕慢の心を生ず（613邪見熾然し、仏の劣し已わりを謂う。）。彼の時、明医即便ち依附し請うて以て師と為し（權道¹⁴⁹を設くことを況うなり。鬱頭藍弗を以て師と為すの類の如きが是れなり。）、医方の秘奥の法を諮受す。旧医に語りて言わく、「我今仁を請じて以て師範と為す。唯だ願わくは我が為に宣暢解説せよ。」（616將に之を化すと欲すが故に先に之を誘う。）旧医答えて言わく、「卿、今若し能く我が為に給使すること四十八年¹⁵⁰ならば（617外道の多くは六行¹⁵¹を修す。八禪地中、各六行有り。六八四十八有り。）、然る後に乃ち当に汝に医法を教うべし。」時に彼の明医即ち其の教を受け、「我れ當に是の如くすべし¹⁵²。我が所能に隨いて、當に走使¹⁵³を給すべし。是に於いて旧医、即ち客医を將て共に入りて王に見ゆ。（620邪に因りて以て正に通ずるなり。）是の時客医、即ち王が為に種種の医方（621十善五戒等を謂う。）、及び餘の伎芸を説く（622神通解脱等を謂う。）、「大王當に知るべし。

因、喩佛能知煩惱起因。所謂種子及不正思惟是其正因色等境界。及外道耶教是因也。三、知病相、喩佛能知煩惱相也。如瑜伽說。貪心則下慢心則高。有如是等煩惱相也。四、知病處、喩佛能知煩惱處也。違則起瞋順則起貪不違不順。能起無明。五、知病時、喩佛能知起時。謂少時老時。貪時富時。或寒或熱。或飢或飽。隨其相應起種種煩惱。六、知藥、喩佛能知不淨觀治貪欲。修慈觀治多瞋等。八、知禁忘（忌の間違いか）、喩佛知不淨觀時。不應取彼順情貪相。修慈悲時。不應取彼違情瞋相也。」（『新纂大日本統藏經』三七卷、一六四頁a21-23）遼・鮮演『華嚴經談玄抉擇』卷四「言曉八種術者。一知病體。二知病因。三知病相。四知病處。五知病時。六知病藥。七知治者。八知禁者。」（『新纂大日本統藏經』八卷、四九頁c18-20）

¹⁵⁰ 權道…權實のこと。『大般涅槃經集解』卷六四「僧亮曰。智者見法。法理無二。謂佛說實不說權也。無智不見法故。佛說權道、謂道有權實、說不定也。謂我作不定說者、自不見法。謂佛說有二。所以起諍論也。」（『大正藏』三七卷、五七五頁c12-15）

¹⁵¹ 四十八年…隋・灌頂撰『大般涅槃經疏』卷六「四十八年者、『中阿含』云、就外道學、必先給使四十八年、然後與法。」（『大正藏』三八卷、七三頁a21-22）
¹⁵² 六行…仏の六行と外道の六行とある。仏の六行は、六度行である。外道の六行は、自餓外道、投淵外道、赴火外道、自坐外道、寂默外道、牛狗外道とある。

唐・道宣撰『毗尼作持續釋』卷五「涅槃經中、有六苦行外道。一、自餓。不進飲食。長忍饑虛。執此苦行。以為得果之因。二、投淵。寒投深淵。忍受凍苦。執此苦行。以為得果之因。三、赴火。常熱炙身。及熏鼻等。甘受熱苦。執此苦行。以為得果之因。四、自坐。常自裸形。不拘寒暑。露地而坐。執此苦行。以為得果之因。五、寂默。於屍林塚間。以為住處。寂然不語。執此苦行。以為得果之因。六、牛狗。自謂前世從牛狗中來。即持牛狗戒。食草噉汚。唯望生天。執此苦行。以為得果之因也。」（『新纂大日本統藏經』四一卷、四〇九頁a1-10）

¹⁵³ 我當如是…「北本」「南本」共に、「我れ當に是の如くすべし。我れ當に是の如くすべし。」と二回繰り返す。

¹⁵⁴ 走使…そうし。走介に同じ。走り使いをする召使。『止觀輔行傳弘決』卷九「若阿含中、外道必先四十八年、供給走使、然後與法。今文正當舊醫之法。新醫權同、舊醫之法、名隨走使。」（『大正藏』四六卷、四一一頁c24-26）

応に善く分別すべし。此の法は是の如し、以て国を治すべし。此の法は是の如し、以て病を療すべし。」（623定を以て乱を除くは、之を治国と謂う。慧を以て結を去るを、名づけて療病を為す。）爾の時国王、是の語を聞き已りて、（624正教を聞くを謂うなり。）方めて旧医の癡騃無智を知り、（625癡は邪見を喩う。騃の音、五騃の反なり。）即便ち驅逐して国界を出でしめ（626邪を棄すなり。）然る後に倍す復た客医を恭敬す（626正に帰すなり。）。是の時客医、是の念を作して言わく、「王を教えんと欲さば、今正に是の時なり。」即ち王に語りて言わく、「大王、我に於いて実に愛念せば、当に一つの願いを求むべし（628空理無二⁵⁶が故に一と云うなり。）。王、即ち答えて言わく、「此の右臂より（629右を以て便ち喩と為す。初学を況うなり。）餘の身分に及ぶまで（629常樂など信根を譬うなり。）、意の求むる所に隨いて、一切の相與えん。」（630無所執なり。）彼の客医言わく、「王、我に一切身分を許すと雖も、然もに我敢えて多く求むる所有らず。（631根未だ偏に熟し、故に敢えてせずと云う。）今求むる所は、王が一切国内に、今より已往、復た旧医の乳藥を服すことを得ずと宣令せんことを願う（633邪我を捨つることを勧めるなり。）。所以は何かん、是の藥の毒害、傷損多きが故なり。（634邪我を執著するが故に損多きなり。）若し服すと欲す者は、当に其の首を斬すべし。（635邪我は衆倒の源と為すが故に、之れを以て首と況うなり。今無常の教を説くは、以て其の惑を断じ、猶お斬するが如しなり。）乳藥を断じ已らば、終に更に横死の人有ること無く（636若し邪我を禁ずれば、則ち慧命は全とうを得、不横と為すなり。）、常に安樂を受くが故に是の願を求む。」（637樂は涅槃の道を謂うなり。）時に王答えて言わく、汝の求むる所は、蓋し言足らず（638教える所は信じ易しなり。）。尋いでに宣令を為す（638教を転ずるを況うなり。）一切国内病の有る人は、皆な悉く聴かずして、以て乳を藥と為す。（640邪我を禁ずるなり。）若し藥と為すは、当に其の首を斬す。（640終に無我を以て、彼の邪我を断ずるなり。）爾時、客医は種種の味を以て衆藥を和合し、辛苦鹹甜醋などの味を以て衆病を療すを謂う（642仏の小教の中に於いて、種種の法を説きて、衆生を化すを喩うなり。）、差を得ざること無し。（643執病は悉く除くなり。）其の後久しからずして王は復た病を得（643諸の比丘の無我を学ぶに因りて、遂に仏地に於いて、無我の倒を起すを況う。）、即ち是の医に命じて、我れ今病重し、困苦して死を欲す（644見を執して情深くは、病と為し、迷は重く、真に未だ返らずを死を欲すと為す。）、当に云何が治すや（645無我の執、何の法か除くべし。）。医は占い王の病は応に乳藥を用いるべし。（646無我の病は我に非ざれば除かれず。）尋いでに白して王に言わく、王の所患する所が如くは、应当に乳を服すべし。（647今の教を説くなり。）我れは先の時に於いて、断ずる

⁵⁶ 空理無二……もとは『大般若經』の中的一句であるが、ここでは、『集解』からの引用であると思われる。『大般涅槃經集解』卷七「當求一願者、惑從相起、觀空則滅、空理無二、故云一也。」（『大正藏』三七卷、四〇八頁b21-c3）『大般若波羅蜜多經』卷三八六「諸菩薩摩訶薩修行般若波羅蜜多時、方便善巧安立有情、令住諸法本性空理、雖令安住而無二想。所以者何、本性空理無二無二分、非無二法可於其中而作二想。」（『大正藏』六卷、九九八頁c14）

所の乳藥、是れ大妄語なり（648前は邪に著せるが為に、故に断ず。今の縁は執を破すが故に、須らく此れを方便の門を為し、是れ真實の語に非ざるなり）。今若し服さば、最も能く病を除く。（649今の教を讀めるなり。）王は今熱を患い、正応に乳を服すべし。（649執して無我を説くを熱病と為す。真我は能く除くを乳を服すと為す。）時に王は医に語るに、汝は今狂うや。熱病の為や（650昔は非、今は是、豈に狂わざらんや）。而して乳を服すと言うは、能く此の病を除く。汝が先毒と言ひ、今云何が服すや。我を欺かんと欲すや（652前に有毒と説き、復た良妙を言ひ、語を涉り相い誣るが故に、我を欺くと云う）。先医の讀ずる所を、汝は是れ毒と言ひ、我をして驅遣せしめ、今復た好くして、最も能く病を除くと言ふ。汝の言う所の如くんば、我が本の旧医、定んで汝に勝ると為ん（654先に毀して後に讃え、勝に非ざるも如何ん）。是の時客医、復た王に語りて言わく、「王は今、応に是くの如き語を作すべからず。虫の木を食して字を成す者有るが如し（656木、有漏を況い、虫、外道を喩う。一切の諸病、悉く乳を以て療すは、病の由を識らず。偶然中り有り、故に字を成すと云う）。此の虫、是の字、字に非ざるを知らず（657外道の我を説くは、我所の対除¹⁵を知らず。虫の木を食すも是の字、字に非らざる

二 對除：對治との同意であらう。『佛說寶雨經』卷十「復次、善男子。菩薩成就十種法、為所依止。何等為十、一者、能守護他、以諸有情怖煩惱故。二者、能得出離、以生死曠野多飢渴故。三者、善能拔濟、謂令有情出生死海故。四者、能作眷屬、以諸有情多惛獨故。五者、為大醫師、以能對除煩惱病故。六者、能作依怙、以諸有情無依恃故。七者、能作依止、以諸有情無依處故。八者、能作歸依、以諸有情無依託故。九者、能為智燈、以諸有情住無明故。十者、能作歸趣、以諸有情無趣向故。善男子。菩薩成就此十種法、得為所依。」（『大正藏』十六卷、三二六頁a27-b8）

『俱舍論疏』卷二八（分別定品八）に、「空行對除我所。現見世間。知物非我所有不貪求故。」（T41 p. 797b23-25）『大乘法苑義林章補闕』卷四「問五蘊何故諸色合為一。諸識合為一。受想分二蘊耶。自餘心所。合為行蘊耶。答為對除五種我故。一對我具故。立五色蘊。五根五塵是我作具故。所以合色為一蘊。是色而非我。二對除我受用故立受蘊。但是苦樂等受而非我。三對除我言說故立想蘊。但是想而非我。四對除我作用故立行蘊。但是思而非我。五對除我因故。是識而非我。問何故立十二處中。色開為十。識合為一。答為對除一合我故。」（『新纂大日本統藏經』五五卷、一三〇頁a7-14）『大乘義章』卷十八「於中略以五義建立。一對除四患。二翻四倒。三治四障。四斷四過。五酬四因。除四患者。生死法中有無常苦無我不淨四種大患。斷除彼故宣說涅槃常樂我淨。翻四倒者。聲聞之由觀生死是無常苦無我不淨。謂佛亦爾。遂起四倒。翻對彼故宣說涅槃常樂我淨。治四障者。如實性論說。障有四種。一者緣相。謂。無明地障佛真淨。對除彼故說佛真淨。二者因相。謂。無漏業障真我。對除彼故說佛真我。三者生相。謂。意生身。以是意生苦陰身故障佛真樂。除彼障故說佛真樂。四者壞相。謂。變易死障佛真常。對除彼故說佛真常。此等皆就變易因果而說其障。理實通障。隨相且分。斷四過者如實性說。一闡提謗法障佛真淨。對治彼故說佛真淨。二外道著我障佛真我。對除彼故說佛真我。三聲聞畏苦障佛真樂。對除彼說佛真樂。四辟支捨心捨諸眾生疾求取滅障佛真常。對除彼故說佛真常。翻四因者如實性論說。因有四種。信心般若三昧大悲。以修信心對除向前闡提謗法得佛真淨。以修般若破除向前外道著我得佛真我。以修三昧甚深空定破除聲聞畏苦之心得佛真樂。以修大悲常隨眾生對治向前辟支捨心得佛真常。因別無量。且據斯分。建立如是（此一門竟）。」（『大正藏』四四卷、八二三頁上段4-38）

を知らざるが如し。）。智人之を見て、終に是の虫は字を解すと唱言せず、亦た驚怪せざるが如し（659木を食す之の虫、偶然字を成じ、是の字を知らず。外道は我を説き、偶かに是の我を言う、我の義を知らず。是の故に智ある人は、驚かず怪しまず。）。大王、当に知るべし、旧医も亦た爾り。諸の病を別たずして悉く乳薬を與う。彼の虫道の偶字を成すが如し。是の先の旧医は、乳薬の好醜・善惡を解せず（662合わせて字を知らずなり。）。時に王問いて言わく、「云何が解せざる」。客医、王に答う、是の乳薬とは、亦た是れは毒害なり（663外道の説くところの我を喩う。）、亦た是れ甘露なり。（663仏の説く真我を況うなり。）。云何が是の乳を復た甘露と名づく。若し是の牝牛（664牛は、（阿）弥（陀）經を況う。菩薩は能く大慧を生むの子を謂うなり。）、酒糟（665糟は能く狂を生み、癡の業を起こすを譬う。）、滑草（665草の滑るは情に順し、悦意を貪るを喩う。）麥麩（666麩の¹²⁵渋さの情に違うは、瞋の志に逆うを況う。）を食せず、其の憤は善く調えられ（666此れ智慧の柔和なるを喩うなり。）放牧の処は（667諸の境を觀するを譬うなり。）、高原に在らず（667二乗に住まわざるを況うなり。）亦た湿に下らず（667世間に住まわざるを譬うなり。）、飲ますに清流を以て（668正教を受くを喩うなり。）、馳走せしめず（668戒の定を失わざるを況うなり。）、特牛と、同じく共に一群にならず（669惡知識（より）遠ざかるなり。）。飲飼¹²⁶調適し（669教うるに時を失わず。）、行住の所を得たり（699慧心の境に磨くは、行定心と名づく。移らずを住と称す。）。是の乳の如くは、能く諸の病を除き、是れ則ち名づけて甘露の妙薬を為す。（671此れ真我の解を喩う。能く生死の重苦を除く。）是の乳を除き已りて、其餘の一切は、皆な毒害と名づく。（672聖道と相違するものを謂う。）。爾の時、大王是の語を聞き已りて讚えて言わく、「大医よ、善い哉善い哉。我れ今日從り始めて乳薬の善惡・好醜を知る。」即便ち之を服して、病を除き愈えるを得たり（674教に依りて修行すは、所執を除くなり。）。尋時に、国内の一切に宣令す、「今より已往、当に乳薬を服すべし」と（676衆生を転化するなり。）。国人之を聞きて、皆な瞋恨を生じ、咸く相い謂いて言わく、「大王、今は鬼の為に持する所を、狂癡と為んや（677鬼は、無明を況い、狂は、四倒を喩う。）。我等を誑して、復た乳を服せしむ」。一切人民、皆な瞋恨を懷きて、悉く王の所に集る。王の言わく、「汝等応に我に於て、瞋恨を生ずべからず。此の乳薬を服すると服せざるとは、悉く是の医の教なり、是れ我が咎非ず。」。爾の時大王及び諸の

¹²⁵ 麩…麦。麦の碎けた殻。

¹²⁶ 飲飼…唐の懷素によると、乳のことを指す。「北本」では、飲餒、「南本」は飲食となっている。『四分律開宗記』卷一に、「次慈母喩。飲飼日乳。生身日母。拔苦稱慈。與樂名愛。養者長養。戒能長養諸妙功德。護者防護。戒能防護諸惡不善。母護其子。令有紹繼之能。戒護行人。便有成聖之義。一切水火難者。是所護事。三塗逼惱。猶如水火。戒護行人。不遭此難。故曰護使等。」（『新纂大日本統藏經』四二卷、三三三頁c48）

人民、踊躍歡喜して、倍す共に是の医を恭敬、供養す（681同じく我教を信じるなり）。一切病者、皆な乳藥を服して、病悉く除愈するが如し（683真我的教は、功德を生み出す。若し能く信行せば、煩惱は永く斷ず、故に悉除と曰う）。汝等比丘、当に知るべし。如来・応供・正遍知・明行足・善逝・世間解・無上士・調御丈夫・天人師・仏・世尊も亦復た是くの如し。大医王と為りて世に出現し、一切外道の邪医を降伏せんと、諸王¹⁵⁴衆中に、是くの如き言を唱う、「我医王と為り、外道を伏せんと欲す。」故に是の言を唱う、「我無く、人・衆生・寿命、養育知見、作者受者無し」と。比丘当に知るべし、是の諸の外道の言う所の我とは、虫の木を食して、偶字を成すが如くなるのみ。是の故に如来は、仏法の中に於いて、唱えて無我を言う。衆生を調へんが為の故に、時を知る為の故に、故に是の無我を説く。因縁が有るが故に、亦た有我与説く（691昔、無我と言ひ、今有我を説くは、是れ時を知るなり）。彼の良医の、善く乳の是れ藥、非藥に非ざるを知るが如し。凡夫の計かる所の吾我の如きに非ず（693外道の計かる所の邪我に同じからざるなり）。凡夫・愚人の我を計かる所の者は、或いは「拇指の如し」と、或いは「芥子の如し」、或いは「微塵の如し」と言う（695我相を執すなり）。如来の我を説くは、悉く是くの如くならず。是れの故に説きて、「諸法無我」と言うも（696我執を破すなり）。実は我無きに非ず（696真常の我の無きことに非ず）。何者か是れ我なるや。若し法が是れ実、是れ真、是れ常、是れ主、是れ性に依りて変わらざれば¹⁵⁵、是れ名づけて我と為す。彼の大医の善く乳藥を解す如くなり（698有を破すは、則ち無と言う。真を談ずるが故に有と説く。¹⁵⁶）。如来も亦た爾り。衆生の為の故に、諸法の中に、真実に我れ有りと説く。汝等四衆は、応に是くの如く、是の法を修習すべし。

注大般涅槃經卷第二

¹⁵⁴ 王…「南本」四。

¹⁵⁵ 是依性不變者…「北本」是依性不變易者（是れ性に依りて變易せざる者は）。「南本」是依性不變易（是れ性に依りて變易せざるは）。

¹⁵⁶ 破有則言無、談真故説有…この一句は、「有見」を破すために、「無」を説く。「真」を談ずるために、有を説く、としている。「談真故説有」について、隋の智顗説『妙法蓮華經玄義』卷三に、「今若約根緣利、鈍、内外事、理、開即成四、聲聞根鈍、緣四諦事、即生滅四諦智。緣覺根利、緣四諦理、即無生四諦智。菩薩智淺、緣不思議事、即無量四諦智。諸佛智深、緣不思議理、即無作四諦智也。此乃『大經』之一文。又云、「凡夫有苦無諦、聲聞有苦、有苦諦。」凡夫不見苦理、故言無諦。聲聞能見無常、苦、空、故言有諦。即是生滅四諦智也。又云、「菩薩之人解苦無苦、而有真諦。」即是體苦非苦、故言無苦。即事而真、故言有諦。乃是摩訶衍門無生四諦智也。」（『大正藏』三三卷、七一一頁下段5-15）

Extant Manuscripts of the *Zhu daban niepan jing* by Wei Shen

The *Zhu dabanniepan jing* 注大般涅槃經 by Wei Shen 韋諗 is a commentary on the Mahāyāna *Mahāparinirvāṇasūtra* 大般涅槃經. Little is known about Wei Shen other than the fact that he was a prefectural governor under the Tang Dynasty. In spite of his lay background, Wei Shen appears to have had extensive knowledge of Buddhism. He also authored the *Zhu Weimo jing* 註維摩經 or *Commentary on Vimalakīrtinirdeśasūtra*, the *Jinggang boruo zhu* 金剛般若註 or *Commentary on Vajracchedikāprajñāpāramitāsūtra* as well as perhaps the *Zhu Fa hua jing* 注法華經 or *Commentary of Saddharmapuṇḍarikāsūtra*.

The *Zhu dabanniepan jing* does not seem to have had a wide, if any, circulation in China. The only records about it are found in Japanese sources such as the *Tōiki dentō mokuroku* 東域伝灯目録 by Eichō 永超 (1014-1095) and the *Nara-chō issaikyō mokuroku* 奈良朝一切経目録. According to the *Tōiki dentō mokuroku*, the commentary had thirty scrolls 卷. Only six scrolls survive, however, to this day, i.e. Scrolls II, VIII, X, XII, XIV, and XIX. Most of them are nationally designated important cultural property in Japan, which makes direct access to them extremely difficult. The text can, nonetheless, be read thanks to the *Catalogues of Nationally Designated Important Cultural Property* 重要文化財 20 (書籍・典籍・古文書III・佛典I) published by the Mainichi Newspapers.

In July of 2017, I had the opportunity to examine scrolls II and XII at Kyoto National Museum, but the findings presented in this paper rely mainly on the above mentioned catalogues as well as on citations from other commentaries and documents stored in the *Shōsō-in Treasure Repository* 正倉院文書. My research is in progress, which makes my conclusions provisional, but given the paucity of information on the author and the text, I feel that sharing them with the wider academic community has its meaning.

Based on my investigation so far, I suggest that the *Zhu dabanniepan jing* may have been brought to Japan by Doji 道慈 (?-744) or Genbō 玄昉 (?-746) and copied by officials scribes in the Nara Period, to be precise, sometime between 713 and 753. It remains, however, a mystery why this commentary written by an unknown provincial governor was transmitted to Japan. This paper is intended to shed more light on Wei Shen's *Zhu daban niepan jing* and its textual history.